岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第548集

羽黒田（はぐろた）遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業関連遺跡発掘調査

2010

国土交通省東北地方整備局
岩手河川国道事務所

(財)岩手県文化振興事業団

羽黒田遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業関連遺跡発掘調査

序

岩手県では旧石器時代をはじめとする一万箇所以上の遺跡の所在が知られており、地中には貴重な埋蔵文化財が豊富にのこされています。地域の風土が生み出したこれらの遺産は、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料であるとともに、岩手県民のみならず国民的な財産といえます。現代に生きる私たちが、これらの埋蔵文化財を将来にわたって大切に保存し、その活用に力を注ぐべきであることは言うまでもありません。

一方、豊かな地域づくりのためには社会資本の整備・充実が必要不可欠であることもまた事実です。故郷の大地と共にある埋蔵文化財の保護と開発行為との調和は、現代社会に暮らしを営む私たちに与えられた大きな課題といえましょう。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を実施し、調査成果を記録化し保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業に伴い実施した花巻市東和町羽黒田遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。今回の調査により本遺跡が平安時代の集落跡であることが判明し、考古学的情報の宝庫である焼失住居跡が多数検出されるなど、当地域における該期の様相を明らかにする貴重な情報を記録することができました。

本書が学術研究や教育活動などに広く活用されることにより、埋蔵文化財への理解と関心が一層深められ、ひいては埋蔵文化財保護思想の涵養に資するものとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、花巻市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成22年２月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長　武田牧雄

例　　言

1　本書は、岩手県花巻市東和町安俵11区地内に所在する羽黒田遺跡の発掘調査成果を収録したものである。

2　岩手県遺跡台帳における本遺跡の登録番号は、ＭＥ38－0210、調査略号はHGD－08である。

3　本遺跡の発掘調査は、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業に伴い、岩手県教育委員会の調整を経て、国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所の委託を受けた(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存を目的として実施したものである。

4　野外調査を実施した期間／調査面積／調査担当者は、下記の通りである。

平成20年７月14日～平成20年12月５日／8,062㎡／村上　拓・濱田　宏・中村絵美・駒木野智寛・藤原大輔・小椋勇紀・藤田　祐

5　室内整理の期間／担当者は下記の通りである。

平成20年11月１日～平成21年３月31日／村上　拓・中村絵美・駒木野智寛

6　本文の執筆分担は、次の通りである。

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所…Ⅰ

村上…Ⅱの１・２・４、Ⅲ、Ⅳの１・２・３、Ⅴ

中村…Ⅱの３、Ⅳの２・３、Ⅴ

駒木野…Ⅱ及びⅢのうち、一部草稿と図表素案

7　本書中に示した平面座標値は、平面直角座標第Ｘ系（世界測地系）を用いたものである。

8　各種の分析・鑑定・保存処理は、下記の機関に委託した。

石質鑑定　花崗岩研究会

炭化材樹種同定　木工舎ゆい

保存処理（木・金属・繊維）　岩手県立博物館

9　基準点測量業務は慶長測量設計(株)に委託した。

10　野外調査では下記の機関・個人の協力を得た。（敬称略・順不同．所属は平成20年度）

国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所、岩手県教育委員会生涯学習文化課、花巻市教育委員会、花巻市博物館、東和ふるさと歴史資料館、中村良幸（花巻市教育委員会）、瀬川司男（東和ふるさと歴史資料館）、酒井宗孝（花巻市博物館）、赤坂　学（調査区旧地権者）

11　今次調査で得られた出土遺物および諸記録類の一切は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 …… 1

Ⅱ　立地と環境 …… 1
1　遺跡の位置 …… 1
2　周辺の地形と地質 …… 1
3　基本層序 …… 3
4　周辺の遺跡 …… 4

Ⅲ　野外調査と室内整理 …… 10
1　野外調査 …… 10
2　室内整理 …… 14

Ⅳ　検出遺構と出土遺物 …… 17
1　概　　要 …… 17
（1）検出遺構と出土遺物 …… 17
（2）成果の概要 …… 17
2　遺　　構 …… 18
（1）竪穴住居跡 …… 18
（2）竪穴状遺構 …… 32
（3）土　　坑 …… 33
（4）溝　　跡 …… 35
3　遺　　物 …… 73
（1）土師器・須恵器 …… 73
（2）鉄製品 …… 75
（3）木製品 …… 75
（4）石器・石製品 …… 75
（5）縄文晩期～弥生時代の土器 …… 75

Ⅴ　ま と め …… 125
1　竪穴住居跡について …… 125
（1）形態からみた竪穴住居跡の分類 …… 125
（2）土器からみた竪穴住居跡の年代観 …… 125
（3）住居跡分布状況の変遷 …… 126
2　特殊形態の土器について …… 127
（1）高台付皿と住居跡1 …… 127
（2）把手付き土器について …… 127

附編　自然科学分析
1　羽黒田遺跡の炭化材樹種同定 …… 128
2　羽黒田遺跡出土の布 …… 133
報告書抄録 …… 189

図版目次

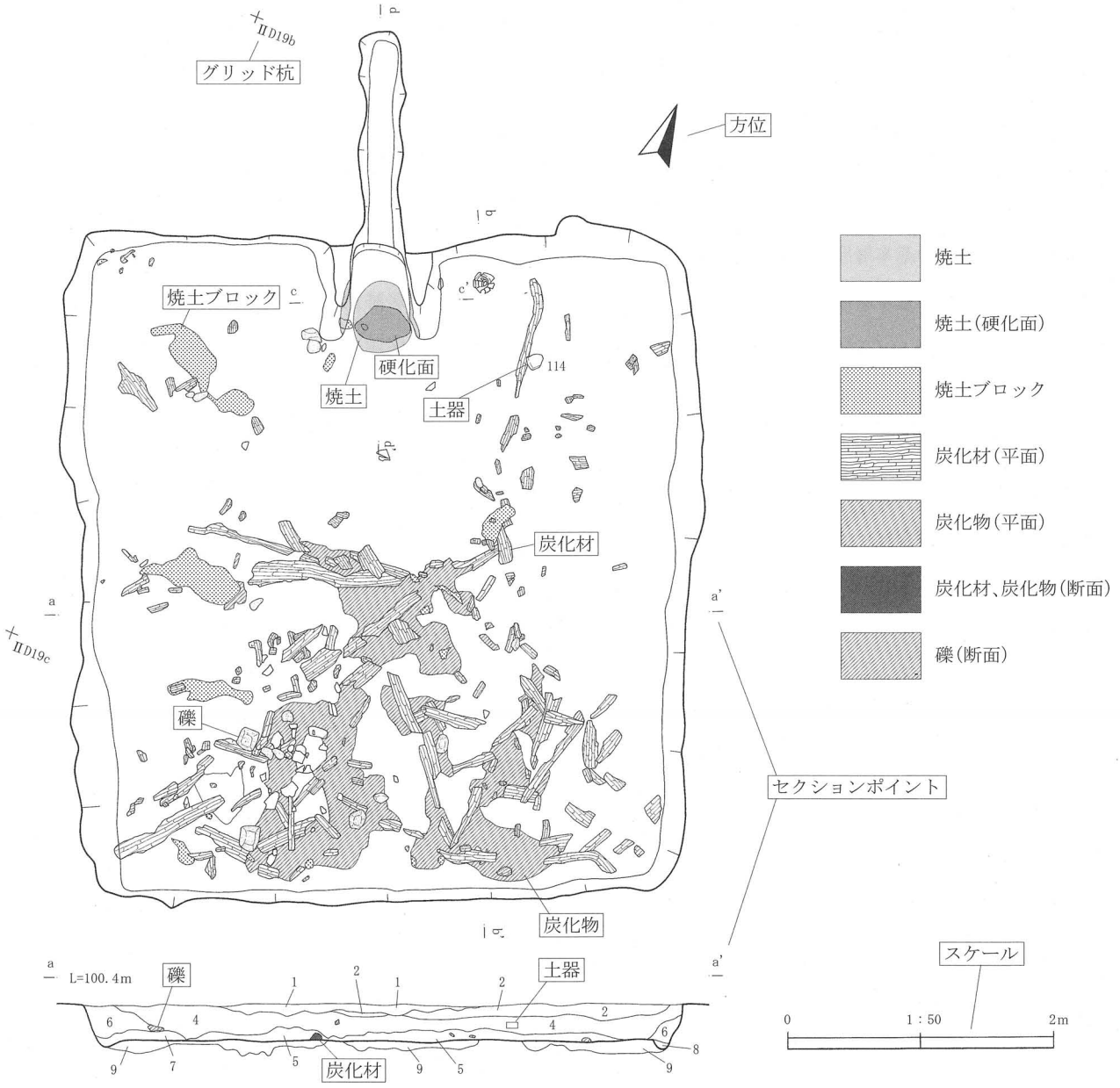
第１図　遺跡位置図 …… 2
第２図　基本層序 …… 2
第３図　調査遺跡周辺の遺跡分布 …… 6
第４図　花巻市市内の調査された主な平安時代の遺跡分布 …… 9
第５図　調査区と大グリッド配置図 …… 11
第６図　グリッド配置・トレンチ位置図 …… 12
第７図　Ａ１区遺構配置図 …… 16
第８図　住居跡１（１）…… 38
第９図　住居跡１（２）…… 39
第10図　住居跡２（１）…… 40
第11図　住居跡２（２）…… 41
第12図　住居跡３（１）…… 42
第13図　住居跡３（２）…… 43
第14図　住居跡４ …… 44
第15図　住居跡５ …… 45
第16図　住居跡６（１）…… 46
第17図　住居跡６（２）…… 47
第18図　住居跡７（１）…… 48
第19図　住居跡７（２）…… 49
第20図　住居跡８（１）…… 50
第21図　住居跡８（２）…… 51
第22図　住居跡９ …… 52
第23図　住居跡10 …… 53
第24図　住居跡11（１）…… 54
第25図　住居跡11（２）…… 55
第26図　住居跡12（１）…… 56
第27図　住居跡12（２）…… 57
第28図　住居跡13（１）…… 58
第29図　住居跡13（２）…… 59
第30図　住居跡14 …… 60
第31図　住居跡15・16 …… 61
第32図　住居跡17（１）…… 62
第33図　住居跡17（２）…… 63
第34図　住居跡18 …… 64
第35図　竪穴状遺構１ …… 65
第36図　土坑（１）…… 66
第37図　土坑（２）…… 67
第38図　溝跡（１）…… 68
第39図　溝跡（２）…… 69
第40図　溝跡（３）…… 70
第41図　溝跡（４）…… 71
第42図　溝跡（５）…… 72
第43～75図　出土遺物（１）～（33）…… 76
第76図　住居跡の分類と分布の変遷 …… 126
第77図　把手付き土器の類例 …… 127

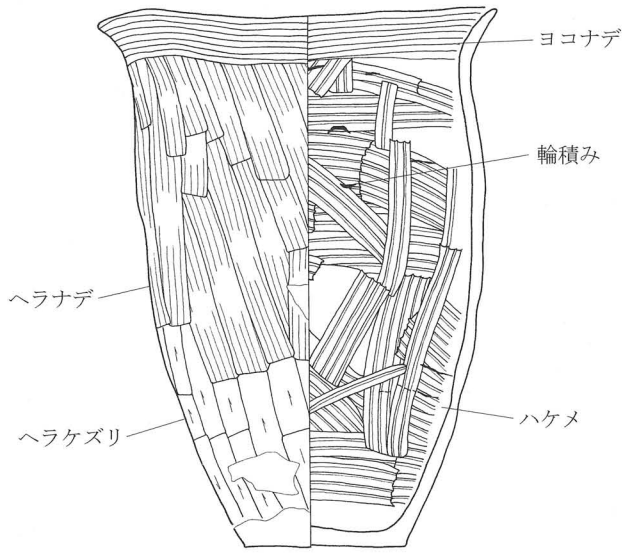
表目次

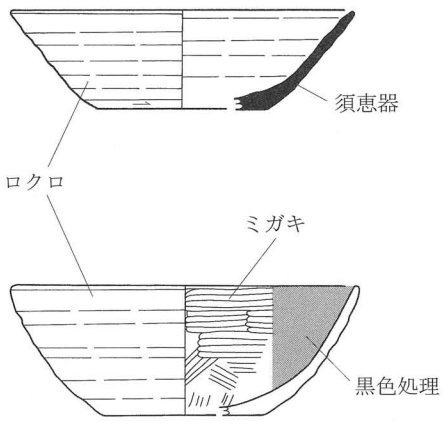
第１表　羽黒田遺跡周辺の遺跡 …… 7
第２表　花巻市内の調査された主な平安時代の遺跡 8
第３表　基準点一覧 …… 10
第４表　出土遺物一覧 …… 109

写真図版目次

写真図版 1　空中写真 …… 137
写真図版 2　調査開始時の状況 …… 138
写真図版 3　各区の基本層序（1） …… 139
写真図版 4　各区の基本層序（2） …… 140
写真図版 5　住居跡 1 （1） …… 141
写真図版 6　住居跡 1 （2） …… 142
写真図版 7　住居跡 2 …… 143
写真図版 8　住居跡 3 …… 144
写真図版 9　住居跡 4 …… 145
写真図版10　住居跡 5 …… 146
写真図版11　住居跡 6 …… 147
写真図版12　住居跡 7 …… 148
写真図版13　住居跡 8 （1） …… 149
写真図版14　住居跡 8 （2） …… 150
写真図版15　住居跡 9 …… 151
写真図版16　住居跡10 …… 152
写真図版17　住居跡11 …… 153
写真図版18　住居跡12 …… 154
写真図版19　住居跡13 …… 155
写真図版20　住居跡14 …… 156
写真図版21　住居跡15 …… 157
写真図版22　住居跡16 …… 158
写真図版23　住居跡17（1） …… 159
写真図版24　住居跡17（2） …… 160
写真図版25　住居跡18 …… 161
写真図版26　竪穴状遺構 1 …… 162
写真図版27　土坑（1） …… 163
写真図版28　土坑（2）、包含層 …… 164
写真図版29　溝跡 1 ・ 3 …… 165
写真図版30　溝跡 2 …… 166
写真図版31～52　出土遺物（1）～（22） …… 167


グリッド杭
方位
焼土ブロック
硬化面
焼土
土器
114
炭化材
礫
炭化物
セクションポイント
焼土
焼土(硬化面)
焼土ブロック
炭化材(平面)
炭化物(平面)
炭化材、炭化物(断面)
礫(断面)
L=100.4m
スケール
0
1:50
2m


ヨコナデ
輪積み
ヘラナデ
ヘラケズリ
ハケメ


須恵器
ロクロ
ミガキ
黒色処理

凡　例

Ⅰ　調査に至る経過

東北横断自動車道は、釜石市を起点とし、遠野市、奥州市を経由して花巻市で東北縦貫自動車道（東北道）に合流し、更に北上市で分岐して西和賀町、横手市、大仙市を経由し秋田市に至る総延長212㎞（内岩手県内113㎞で供用区間は45㎞）の高規格道路である。

本路線の建設は、釜石港・大船渡港等の重要港湾や陸中海岸国立公園など観光資源の豊富な三陸地方拠点都市地域と、先端技術産業の集積が著しく花巻空港を有する北上中部地方拠点都市地域を結び、さらには岩手県のこれらの地域と秋田県内とを結ぶことによって、周辺地域のみならず両県全域の産業・経済発展を担うことを目的として計画されたものである。遠野～東和間については、平成10年度の遠野～宮守間の整備計画、宮守～東和間の施工命令を経て、平成16年度には新直轄方式による整備が決定している。

「羽黒田遺跡」については、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）の事業計画を受けて岩手県教育委員会が実施した試掘調査において、路線事業地内から埋蔵文化財が確認されたことから、岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所が協議し、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることにした。平成20年７月10日付で岩手河川国道事務所長と岩手県文化振興事業団理事長との間で受託契約を締結し、発掘調査に着手した。

（国土交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所）

Ⅱ　立地と環境

1　遺跡の位置（第１図）

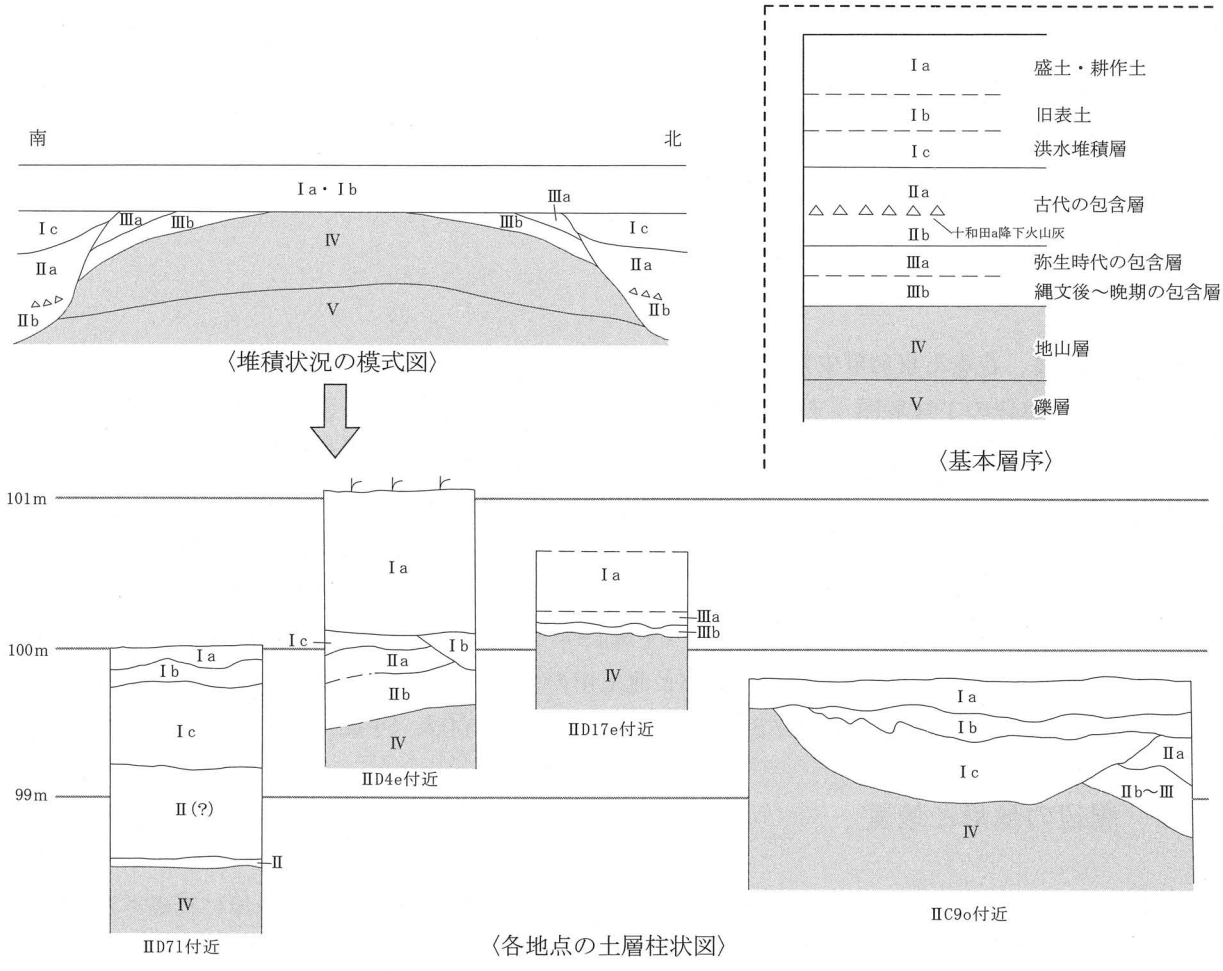
羽黒田遺跡は、花巻市東和町安俵11区地内、JR釜石線土沢駅の南西約1.1㎞に位置する。国土地理院発行の25,000分の１地形図「土沢」NJ－54－13－16－2（盛岡16号－２）の図幅に含まれ、北緯39度22分39秒～北緯39度22分48秒、東経141度13分19秒～38秒付近に相当し、猿ヶ石川右岸に形成された標高は100ｍ前後の沖積地上の微高地に立地する。

花巻市は平成18年１月１日に旧花巻市と稗貫郡石鳥谷町・大迫町、和賀郡東和町の１市３町が合併して誕生した。北は矢巾町、東は遠野市、南は北上市と接しており、総面積は908.320㎢（平成20年４月１日現在）、人口約104,800人である（平成19年９月30日現在）。遺跡の所在する同市東和町は市域の南東部に位置し、北上高地の南西部と北上川の東部に広がる地域である。面積は157.510㎢（平成20年４月１日現在）で市域の17.3％を占め、人口は約10,100人（平成19年9月30日現在）である。

2　周辺の地形と地質

花巻市は、東方の北上山地と西方の奥羽山脈の間を縦断して南流する北上川沿岸に形成された北上

第１図　遺跡位置図



第２図　基本層序

平野の中央部に位置している。遺跡の所在する東和町付近は、北上山地西辺の北上川支流、猿ヶ石川の流域に形成された平野と丘陵山地からなる。猿ヶ石川は、田瀬湖を満たし支流の毒沢川・小道川などを集めて流れ、北上川左岸に合流している。その流路において東和町内では、舘迫・町井・安俵・成島の各地区に小規模な河岸段丘を、安俵地区には比較的大きな沖積地を形成している。

遺跡の所在する安俵地区付近では、猿ヶ石川は同地域の南縁に沿って西流し、対岸の落合付近には毒沢川が合流している。沿岸に形成された河岸段丘上には現在多くの集落が分布している。

土地分類基本調査「花巻」によれば表層地質は新生代第四紀沖積世の砂礫で土壌は谷底平野および氾濫平野の多湿黒ボク土壌飯岡統を主体としており、遺跡の西端の一部が台地および低地の土壌である厚層黒ボク土壌下川端統に属している。

3　基　本　層　序（第２図、写真図版３･４）

野外調査では、遺跡内に堆積する土層の新旧関係及び各層の時期を把握するように努めた。羽黒田遺跡の基本層序は以下のとおりであり、その模式図及び土層柱状図を第２図に示した。

Ⅰａ　暗褐色土　現表土。（水田耕作土・盛土）
Ⅰｂ　灰黄褐色～黒褐色粘土質シルト　Ⅰａ層造成前の旧表土。
Ⅰｃ　黄褐色粘質土～黒褐色土　洪水堆積層。
Ⅱ　黒褐色土　平安時代の遺物包含層。十和田ａ降下火山灰が確認できた箇所で上下２層に分層可能（Ⅲａ層　降下後、Ⅲｂ層　降下前）
Ⅲａ　灰黄褐色～黒褐色土　弥生時代の遺物包含層。
Ⅲｂ　褐色粘土質土　縄文時代後晩期の遺物包含層。
Ⅳ　にぶい黄褐色～黄褐色土（砂質土・粘土質土）　地山層。
Ⅴ　礫層。

調査区周辺の現況は水田（Ａ１・Ｂ１・Ｂ２区）と宅地（Ａ２区）である。調査区内はⅠａ層によって平らに造成され、宅地であるＡ２区ではさらに盛土が施されていた。しかし旧地形は起伏を持っており、調査区北側（Ａ１区トレンチより北側）と南側（Ａ２区南端からＢ区）が一段低く、湿地状となっており、これに挟まれた高まりに平安時代の遺構が分布している。

湿地内は、淀んで土が堆積し洪水の際には河道ができ削平されるといった状況を何度も繰り返えし、徐々に埋没していった。この過程で高い範囲にもオーバーフローし、Ⅲ層が堆積している。Ⅲ層は調査区内の大半でⅠ層に削平されていたが、湿地への落ち際には残存しており、縄文時代後晩期～弥生時代の土器を包含していた（Ａ１区南西部）。平安時代の遺構検出面はこのⅢ層またはⅣ層地山上面となる。

湿地内の埋没土内には平安時代の遺物を包含している層があり（Ⅱ層）、北側の湿地では十和田ａ降下火山灰の上下で分層が可能であった。Ⅱ層は竪穴住居の埋土に相当するが、湿地以外では基本土層として確認できず、Ⅰ層により削平されたものと判断される。

以上のように、調査区内では、湿地やその落ち際で各層が観察できたものの、高い範囲の大半はⅠ層によってⅣ層（地山層）まで削平が及んでおり、遺構においても同様の状況が推測される。

4　周辺の遺跡（第1・2表、第3・4図）

平成17年度末の岩手県教育委員会のまとめでは、1市3町が合併して誕生した新制花巻市には、合計937ヵ所の遺跡が所在する。このうち古代の遺跡は385ヵ所、特に平安時代の遺跡が多い。東和地区における遺跡（埋蔵文化財包含地）は296ヵ所を数え、主に平安時代の遺跡（102ヵ所）と縄文時代の遺跡で占められている。これらの遺跡の多くは猿ヶ石川とその支流沿岸に集中して分布する。

第3図は、本遺跡を中心に周辺に分布する77遺跡（うち平安時代39ヵ所）を示したものである。また第4図には、花巻市内の主要な平安時代の遺跡を示した。以下、当埋蔵文化財センターによって調査された主な平安時代の遺跡について概要を述べる。

＜中嶋遺跡＞

花巻市東和町安俵11区に所在する。羽黒田遺跡の北に隣接している。平成19年度より調査が行われ、調査区南部の微高地で古代の集落、北側の湿地で平安時代の井戸跡と内部の坏、土坑（土器焼成）が検出されている。主な出土遺物は、墨書土器、刻書土器、赤彩土器、羽口・風字硯など。平成20年度も継続調査されている。

＜貝の淵Ⅰ遺跡＞

花巻市石鳥谷町関口の北上川左岸・低位段丘面上に立地する。昭和49年、東北新幹線建設に伴う発掘調査（岩手県教委）で弥生時代遺物包含層や平安時代竪穴住居跡が検出された大明神遺跡の南に隣接する。平成14年の調査では平安時代の竪穴住居跡13棟と住居状遺構、溝跡が検出された。主な出土遺物は、土師器坏・甕、小型甕、高坏、鉢、甑、灰釉陶器の長頸瓶、土師器繊維圧痕底部片、鉄製品で、このほか「寛」・「勝」（土師器坏）、「山」（須恵器坏）、「寛」（赤焼き土器坏）などの墨書土器や、耳皿、紡錘車が住居跡から出土している。

＜稲荷遺跡＞

花巻市石鳥谷町八重畑の北上川左岸・河谷平野の微高地上に立地する。平成13年に調査され、奈良の住居跡1棟、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）住居跡3棟が検出され、胴部に叩き目のある土師器や、「小田」の刻書をもつ坏が出土している。

＜大西遺跡＞

花巻市石鳥谷町八重畑の北上川左岸の沖積地に形成された段丘状の微高地上に立地する。平成16年の調査では平安時代の竪穴住居跡6棟が検出された。出土遺物は、土師器甕、坏、鉄製品（計26点．刀子、鉄製紡錘車、鉄製鈷、小刀、鉄斧、穂摘み具など）、灰釉陶器椀片、弥生時代（後期）甕形土器、アメリカ式石鏃、石鏃等である。鉄製品を多く出土する住居の床面にはカマドとは別に鍛冶炉の可能性をもつ小規模な炉を伴っている。また、灰釉陶器の出土がある一方で、該期遺跡に一般的な須恵器が全く出土しない点が特徴にあげられる。

以上のほか、花巻市内の平安時代の主な集落跡としては、北上川右岸・石鳥谷町中寺林の中位段丘面上に立地し、平安時代前半～中頃以後に集落が営まれ、叩き目のある甕が出土した花巻市石鳥谷町の白幡林遺跡、石鳥谷町八幡の北上川右岸・河谷平野部に立地し、平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）の集落跡で、住居跡7棟のほか、水路、溝、土坑が検出された花巻市石鳥谷町の島岡Ⅱ遺跡、土師器墨書坏「得」が出土した花巻市石鳥谷町の熊野神社遺跡、平安時代（9世紀代）の集落跡で住居状遺構の埋土から金粒が出土した花巻市の似内遺跡、平安時代前半の集落である花巻市の不動Ⅱ遺跡、

花巻市田力の北上川右岸・河谷平野内の自然堤防上に立地し、平安時代前半～中頃以後に集落が営まれ、水鳥線刻文土器片（置きカマド、９世紀後半）や、「和」・「福」の土師器墨書坏６点などが出土した庫理遺跡、花巻市宮野目の北上川右岸・河谷平野部に立地し、平安時代前半（９世紀中頃～後半）に集落が営まれた石持Ⅰ遺跡、花巻市上似内の北上川右岸・河谷平野部に立地し、平安時代（９世紀中頃～10世紀初頭）に集落が営まれた上似内遺跡、土師器墨書坏「山本」が出土した小袋遺跡、花巻市中根子の豊沢川左岸・沖積段丘面に立地し、土師器坏、壺、土師器赤彩壺、土師器頸部赤彩壺、土師器頸部沈線甕、土製品紡錘車が出土した古舘Ⅱ遺跡、万丁目遺跡、須恵器線刻坏が出土した鳥谷遺跡、平安時代前半～中頃以後に集落が営まれ、土師器線刻高台付坏が出土した花巻市東和町の高野畑遺跡、平ガマ跡が出土した花巻市東和町の清水屋敷Ⅱ遺跡などがあげられる。

Ⅱ章参考文献

岩手県農政部北上山系開発室　19『北上山系開発地域　土地分類基本調査　花巻』
岩埋文　2006『大西遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第479集
岩埋文　2002『上似内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第379集
岩埋文　2003『貝の淵Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第428集
岩埋文　2002『稲荷遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第408集
岩埋文　2003『島岡Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第407集
岩埋文　2000『似内遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第344集
東和ふるさと歴史資料館　2007『花巻の弥生～奈良・平安時代』
菊池　賢　2004「稗貫郡の古代集落と律令支配」『古代蝦夷と律令国家』蝦夷研究会　高志書院
小島俊一　1997『岩手のアイヌ語地名』岩手日報社
阿倍和夫、小島俊一、菊池強一、宍戸　敦、高橋一男、小池平和　2003『東北の地名　岩手』本の森

※岩埋文＝岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター刊行の花巻市内遺跡発掘調査報告書（旧石鳥谷町、旧大迫町分含む）、及び花巻市教育委員会刊行の発掘調査報告書（旧石鳥谷町教育委員会・旧東和町教育委員会・旧大迫町教育委員会刊行分を含む）を参考にした。

第３図　調査遺跡周辺の遺跡分布

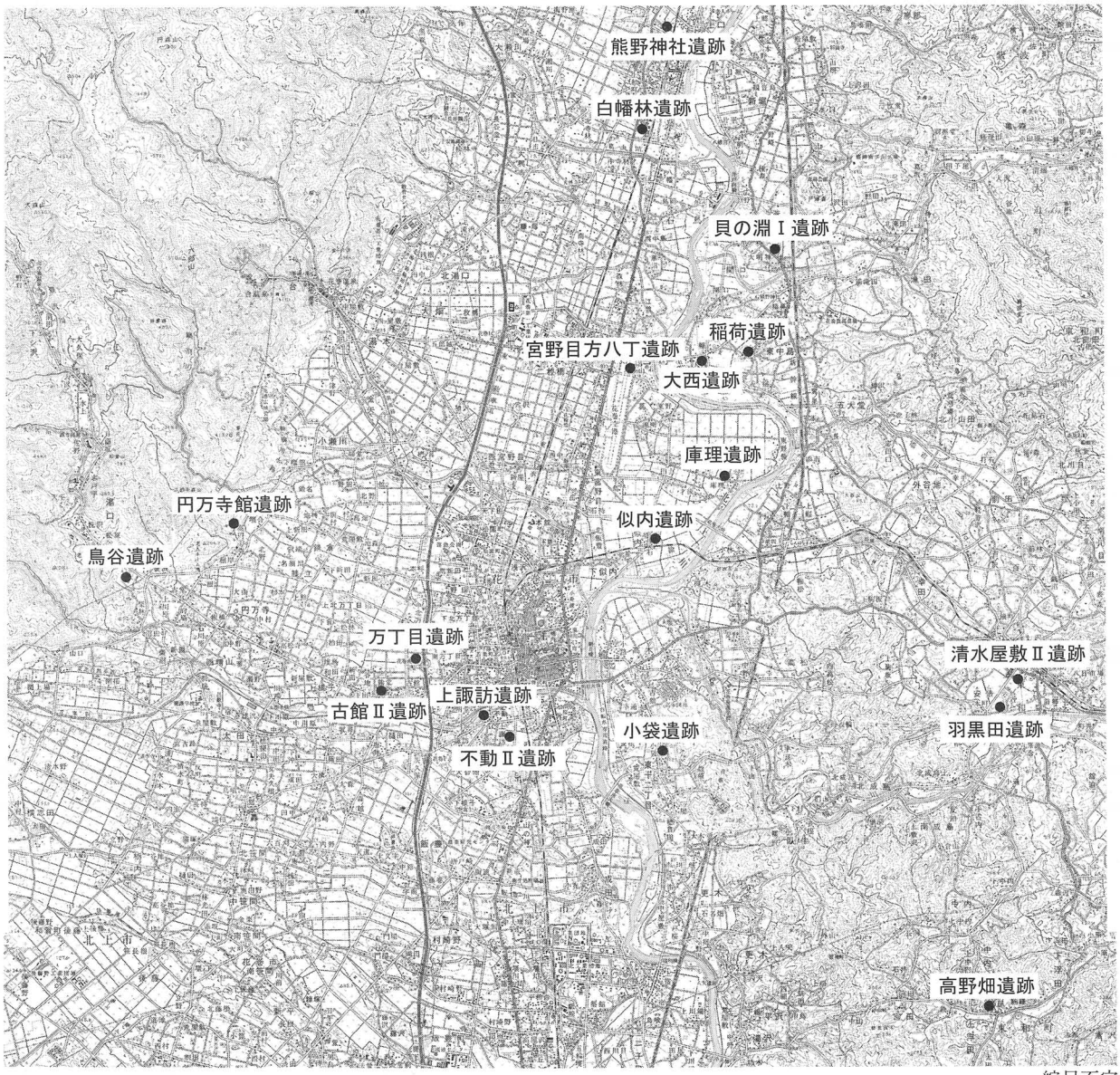
表１　羽黒田遺跡周辺の遺跡

No	遺跡名	種別	時代	所在地	遺構・遺物	調査歴・備考
1	愛宕神社下	散布地	縄文	東和町土沢１区	縄文土器・掻器	
2	愛宕	散布地	平安	東和町土沢１区	土師器、須恵器	
3	愛宕鏑町	散布地	平安	東和町土沢１区	土師器	
4	安俵３区Ⅱ	散布地	平安	東和町安俵３区	土師器	
5	安俵３区	散布地	平安	東和町安俵３区	土師器	
6	高八卦Ⅱ	散布地	縄文	東和町安俵２区	縄文土器	
7	安俵４区	散布地	縄文･平安	東和町安俵４区	石鏃、土器	
8	高八卦	散布地	縄文	東和町安俵３区	縄文土器、石鏃	
9	擬六本木館跡	城館跡	中世	東和町安俵５区		
10	津島屋	散布地	縄文･平安	東和町安俵４区	掻器・土師器	
11	擬釜糠館跡	城館跡	中世	東和町安俵３区	五輪石塔	
12	赤坂Ⅰ	散布地	縄文	東和町安俵３区	縄文土器	
13	赤坂Ⅱ	散布地	縄文	東和町安俵３区	縄文土器	
14	赤坂Ⅲ	散布地	縄文	東和町安俵４区	縄文土器	
15	土沢城跡	城館跡	近世	東和町土沢５区	堀跡、建物跡、門跡、柵跡	
16	館山東	散布地	縄文	東和町土沢４区	縄文土器、石器	
17	安俵６区	集落跡	縄文･近世	東和町安俵６区	環状配石住居跡、土器廃棄場	
18	擬押蕪館跡	城館跡	中世	東和町安俵７区		
19	押蕪墳墓跡	墳墓跡	江戸初期	東和町安俵７区	墳墓２基、人骨、永楽通宝、寛永通宝、キセル、数珠	旧愛宕神社裏塚
20	押蕪	散布地	縄文	東和町安俵７区	縄文土器、石斧、掻器	
21	安俵城跡	城館跡	中世	東和町安俵10区	堀跡、建物跡、古銭	
22	中嶋	散布地	平安	東和町安俵11区	土師器	
23	**羽黒田**	散布地	平安	東和町安俵11区	須恵器	
24	清水屋敷Ⅱ	祭祀跡･集落跡	縄文･平安	東和町安俵11区	環状配石、弧状配石、住居跡	Ｈ14東和町
25	清水屋敷	散布地	縄文･平安	東和町土沢６区	縄文土器、土師器、須恵器	
26	新丁	散布地	平安	東和町土沢６区	土師器	
27	熊谷	散布地	平安	東和町土沢９区	土師器	
28	清水ヶ丘	散布地	縄文	東和町土沢10区	縄文土器	
29	前郷	散布地	平安	東和町土沢６区	土師器	
30	中屋敷	散布地	平安	東和町土沢７区	土師器	
31	河敷山	散布地	平安	東和町土沢10区	土師器	
32	大石	散布地	縄文(後期)、平安	東和町安俵７区	縄文土器（後期）、ロクロ使用土師器	
33	駒場日向	散布地	縄文(?)、平安	東和町安俵７区	縄文土器、石器、ロクロ使用土師器	
34	擬安俵高館跡	城館跡	中世	東和町安俵９区	空堀	
35	安俵９区	散布地	縄文	東和町安俵９区	縄文土器	
36	中久田	散布地	縄文･平安	東和町安俵９区	縄文土器、掻器、土師器	
37	矢崎Ⅱ	散布地	縄文	東和町安俵10区	縄文土器、磨石	
38	矢崎	散布地	縄文･平安	東和町安俵10区	縄文土器、土師器	
39	成嶋寺跡	散布地･寺院	縄文(中期)、近世	東和町北成島５区	縄文土器	
40	毘沙門ドームⅡ	散布地	縄文(晩期)	東和町北成島５区	縄文土器（晩期）	
41	毘沙門ドームⅠ	散布地	縄文(晩期)	東和町北成島５区	縄文土器（晩期）	
42	成嶋寺Ⅱ	散布地	縄文(後期)、平安	東和町北成島５区	縄文土器(後期)、ロクロ使用土師器	
43	北成島上	散布地	縄文(?)、平安	東和町北成島５区	縄文土器、ロクロ使用土師器	
44	北成島Ａ	散布地	縄文(晩期)	東和町北成島５区	縄文土器（晩期）	
45	北成島Ｂ	散布地	縄文･平安	東和町安俵９区	縄文土器、土師器	
46	行人塚	塚	中世、近世	東和町安俵９区		
47	田光	散布地	縄文	東和町落合２区	住居跡、貯蔵穴跡、縄文土器、石棒、石斧	
48	西上町Ⅳ	集落跡	縄文･平安	東和町落合１区	住居跡、縄文土器、石鏃、土師器、須恵器	
49	西上町Ⅰ	散布地	縄文	東和町町井１区	石篦、磨石	
50	和田Ⅰ	散布地	平安	東和町町井３区	土師器	
51	畑内	集落跡	縄文･平安･中世･近世	東和町町井２区	陥し穴跡、集石遺構、掘立柱建物跡、縄文土器、土師器	
52	下屋敷	集落跡	縄文･平安･中世	東和町町井２区	住居跡、焼土遺構、縄文土器、土師器	
53	落合熊野神社	散布地	縄文	東和町落合１区	縄文土器	
54	落合２区Ⅰ	散布地	縄文･平安	東和町落合２区	縄文土器、土師器	

No	遺跡名	種別	時代	所在地	遺構・遺物	調査歴・備考
55	落合２区Ⅱ	散布地	縄文･平安	東和町落合２区	縄文土器・土師器	
56	中野	散布地	縄文	東和町町井１区	縄文土器	
57	田手野	散布地	縄文･平安	東和町町井１区	縄文土器・土師器	
58	西上町Ⅱ	散布地	平安	東和町町井１区	土師器	
59	西上町Ⅲ	散布地	縄文	東和町町井１区	縄文土器、石鏃	
60	和田Ⅱ	散布地	平安	東和町町井１区	土師器	
61	町井Ⅱ	散布地	平安	東和町町井３区		
62	潤野	散布地	縄文	東和町舘迫２区	縄文土器	
63	新田Ⅱ	散布地	平安	東和町舘迫２区	土師器	
64	新田Ⅰ	散布地	平安	東和町舘迫２区	土師器	
65	新田Ⅲ	散布地	縄文	東和町舘迫２区	縄文土器	
66	矢崎橋下	散布地	平安	東和町小通１区	土師器	
67	黄金山	散布地	平安	東和町小通１区	土師器	
68	成島中田	散布地	平安	東和町南成島2･7区	ロクロ使用土師器	
69	奈良野	散布地	縄文(?)、平安	東和町南成島７区	縄文土器、ロクロ使用土師器	
70	一反田	散布地	平安	東和町南成島８区	ロクロ使用土師器	
71	長根	散布地	縄文	東和町南成島8区･小通2区	縄文土器	
72	小通高屋敷	散布地	縄文	東和町小通２区	縄文土器	
73	土樋	散布地	縄文	東和町落合２区	縄文土器	
74	芦田橋	散布地	縄文	東和町落合２区	縄文土器	
75	高屋敷	散布地	縄文	東和町南成島７区	縄文土器	
76	小通中田	散布地	縄文	東和町小通２区	縄文土器	
77	外山	散布地	縄文	東和町毒沢２区	縄文土器	

表２　花巻市内の調査された主な平安時代の遺跡

遺跡名	種別	時代	所在地	遺構・遺物	調査歴・備考
熊野神社			石鳥谷町		
白幡林	古墳	古墳	石鳥谷町字中寺林		
貝の淵Ⅰ	散布地	縄文･古代	石鳥谷町関口	竪穴住居跡、縄文土器、土師器、鉄製品	H14岩埋文
稲荷	集落跡	縄文･平安	石鳥谷町字八重畑	竪穴住居跡、土坑、土師器、須恵器、鉄製品	H13岩埋文
大西	集落跡	縄文･弥生･平安	石鳥谷町字八重畑15地割	竪穴住居跡、溝跡、方形周溝、土坑、土師器、灰釉陶器、鉄製品、青磁小碗	H16岩埋文
宮野目方八丁	不明	平安	花巻市葛第1地割68番1	堀、溝跡、柱穴、土師器、須恵器	S31,S41岩大.S42県教。H15花教。旧宮野目八丁
庫理	集落跡	縄文･古代	花巻市田力第7地割	土師器、縄文土器、竪穴住居跡	H8県教.H9岩埋文.H10花教
似内	集落跡	縄文･古代	花巻市上似内第10地割	竪穴住居跡、土坑、須恵器埋設遺構、土師器、須恵器、鉄製品	H10,H11岩埋文
小袋	集落跡	古代･中世	花巻市東十二丁目第12地割	土師器、竪穴住居、半地下式建物跡	
上諏訪	集落跡	縄文･古代	花巻市上諏訪	土師器、須恵器、竪穴住居跡、土坑、縄文土器片、鉄製品	
不動Ⅱ	集落跡、城館跡	縄文･古代･中世	花巻市不動町一･二丁目、諏訪町、二丁目	土師器、須恵器、寛永通宝、竪穴住居跡、堀、土錘	
万丁目	集落跡	縄文、古代～中世	花巻市南万丁目	竪穴住居跡、炉、掘立柱建物跡、縄文土器、土師器、須恵器	
古館Ⅱ	集落跡	古代～近世	花巻市中根子字古館	竪穴住居跡、柱穴群、井戸跡、土坑、土師器、須恵器	
円万寺館	城館跡	縄文～中世	花巻市膝立字観音山	堀、土塁、帯郭、陥し穴、竪穴住居、塚、土師器	
鳥谷	集落跡	縄文･古代	花巻市湯口字鳥谷	竪穴住居跡、縄文土器、土師器	
清水屋敷Ⅱ	祭祀跡･集落跡	縄文･平安	東和町安俵11区	環状配石、弧状配石、住居跡	H14東和町
羽黒田	散布地	平安	東和町安俵11区	須恵器	
高野畑	集落跡	縄文･平安	東和町上浮田	縄文土器、住居跡、掘立柱建物跡、平ガマ跡、土師器	
上似内	集落跡	縄文･平安･中世	花巻市上似内第12地割	竪穴住居跡、土坑、土師器、須恵器、鉄製品	H12岩埋文
石持Ⅰ	集落跡	縄文･平安	花巻市東宮野目	竪穴住居跡、土師器、須恵器、鉄製品	H10,H11岩埋文
島岡Ⅱ	集落跡	平安･近世	石鳥谷町八幡第22地割	竪穴住居跡、水路、溝、土坑、土師器、須恵器	H12岩埋文



縮尺不定

第４図　花巻市市内の調査された主な平安時代の遺跡分布

Ⅲ　野外調査と室内整理

1　野　外　調　査

（1）調　査　区（第5図）

羽黒田遺跡は、猿ヶ石川右岸にほぼ平行して東西にのびる微高地上にあり、長さ約470m、幅170mの範囲に広がっている。この遺跡範囲と、東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業用地が重複する部分について、平成18年、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課が試掘調査を実施し、その結果から7,822㎡が本調査を要すると判断された。今回の調査では当初この範囲（Ａ１区、Ｂ１区、Ｂ２区）を対象としたが、その後、240㎡（Ａ２区）が追加となり、合計8,062㎡が調査対象面積となった。調査区を分断する道路を境界に4地点に別れていることから、調査では北西の区域をＡ１区、北東をＡ２区、南西をＢ１区、南東をＢ２区と便宜的に命名した。

（2）グリッド設定と基準点（第3表、第6図）

検出される各種遺構・遺物の詳細な座標値を記録するため、調査区を覆う碁盤目状のグリッドを設定した。まず、調査対象区域の北西側に原点（世界測地系、平面直角座標Ｘ系、Ｘ＝－68,700、Ｙ＝－33,300）を設け、ここから南及び東にのびる軸線を等分して100×100の大グリッドを設定した。さらに大グリッドの一辺を20等分して小グリッド（５×５m）とした。

大グリッドは北から南に向って英大文字Ａ～Ｄ、西から東に向ってローマ数字Ⅰ～Ⅲとして「ＩＡ」または「ⅡＢ」のように表し、さらに小グリッドも同様に北側から順に英小文字ａ～ｔ、西側から順に算用数字１～20として「１ａ」または「２ｂ」のように表した。特定の小グリッドを指し示すのには、これらを組み合わせて「ＩＡ1a」のように表記した。現地では、各小グリッドの北西隅に位置する杭点にグリッド名を記し用いた。

上記のグリッドを実際に調査区に割り付けるため、現地には基準杭及び区画割付杭を打設した。基準点測量業務は慶長測量設計株式会社に委託した。基準杭及び区画割付杭の第Ｘ系座標値・標高値、及び対応するグリッド杭名は表３の通りである。

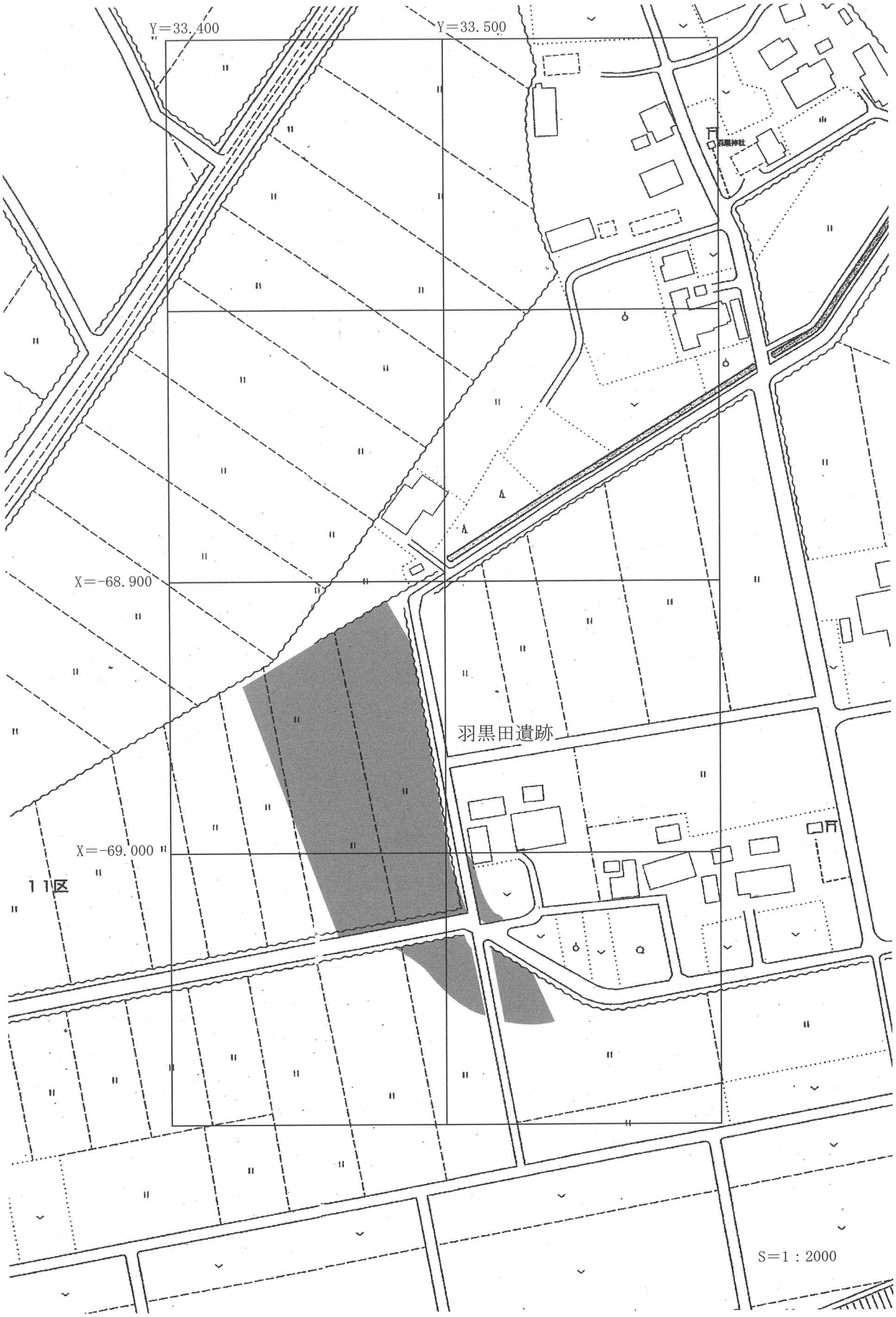
点名	グリッド杭名	Ｘ座標	Ｙ座標	標高(m)
基本-1	Ⅱ C18h	-68935	33485	99.873
基本-2	Ⅱ D18g	-69030	33485	101.039
補-1	Ⅱ C18r	-68985	33485	100.322
補-2	Ⅱ C13r	-68985	33460	100.196
補-3	Ⅱ D18c	-69010	33485	100.312
補-4	Ⅱ D13c	-69010	33460	100.316
補-5	Ⅲ D5n	-69065	33520	100.403
補-6	Ⅲ D10n	-69065	33545	100.977

（世界測地系）

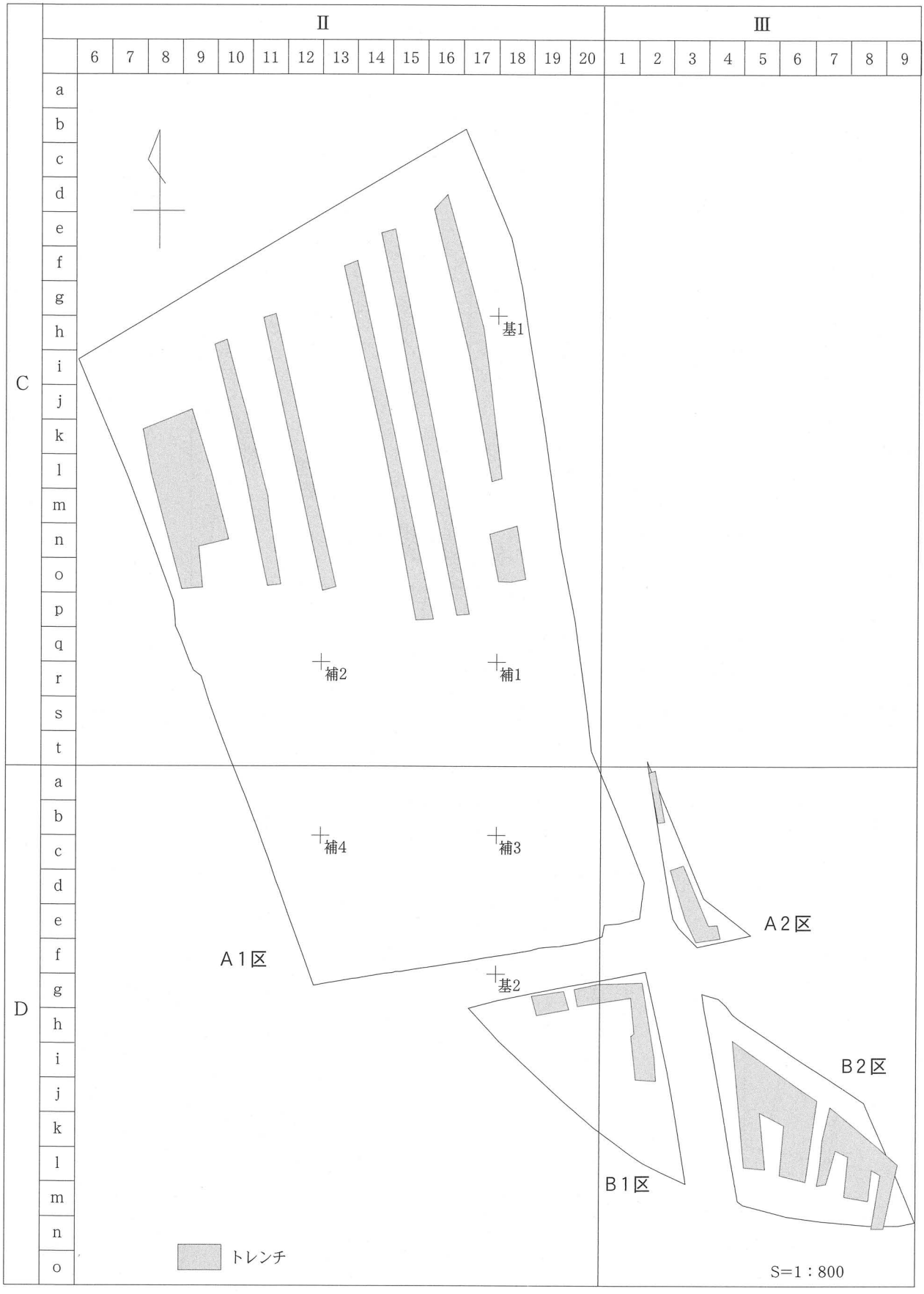
第３表　基準点一覧

（3）試掘・表土除去

調査では、まず岩手県教育委員会による事前の試掘トレンチ等で基本層序の確認を行い、これと平行して任意に試掘トレンチを設定し、重機・人力を併用して土層の堆積状況と遺構の存否を把握した。試掘により遺構・遺物が存在しないことを確認した範囲はこれをもって調査終了とし、一方、遺物包含層および遺構が確認された場合は、その上面を面的に広げるように土層を除去した。この際、バックホー・キャリアダンプ等の重機を積極的に用いたが、検出面までの土層が薄い場合や遺物が集中的に出土する場合など、重機の使用が適当でないと判断した区域では人力による掘削を行った。



第５図　調査区と大グリッド配置図



第6図　グリッド配置・トレンチ位置図

（4）遺構の検出と精査

表土除去の後、鋤簾・両刃草削り・移植ベラを用いて遺構検出を行い、必要に応じてスプレー塗料による白線で遺構プランにマーキングを施した。

精査では遺構の規模に応じて２分法・４分法を使い分け、土層断面を観察しながら、埋土を除去した。検出時に遺構の重複が認められた場合、なるべく平面観察で新旧関係を把握するように努め、原則として新規のものから順に埋土の掘削を行った。この場合、両者を縦断する断面を設定し土層の堆積状況からも併せて新旧関係を検討した。また、平面プランの確定や埋土の解釈が困難な場合には、積極的にサブトレンチを活用して、これらの確認に努めた。これにより、完掘段階には平面プランの一部がサブトレンチで壊された状態になったものも含まれる。出土した遺物は、遺構名やグリッド名及び出土層位を記録して取り上げ、必要に応じて出土状況記録として実測・撮影を行った。

（5）遺 構 の 名 称

①野外調査中の仮名称

遺構の種類毎に定めた略号と連番数字を組み合わせて用いた。

ＳＩ－01、ＳＩ－02、ＳＩ－03～：竪穴住居

SK－01、SK－02、SK－03～：土坑（土器焼成遺構を含む）

SD－01、SD－02、SD－03～：溝

これらの仮名称は、室内整理段階でも作業用遺構名としてそのまま使用した。

（6）実　　測

遺構・出土状況等の平面実測は、小グリッドを再細分した１ｍ方眼を基準に実測・作図する「簡易遣り方測量」で行った。縮尺は1/20を基本とし、必要に応じて、1/10図を作成した。この他、平板・光波トランシットを用いて、トレンチ位置図・遺構配置図・現況地形図等の作成を行った。

断面図は水平に設定した水糸を基準にして実測・作図した。縮尺は1/20を基本とし、細部表現を要する場合には、1/10図も作成した。

（7）土層断面の分層と注記

遺構断面やトレンチなどの土層断面は慎重に観察し堆積状況を把握するように努めた。分層は堆積過程を表現するのに必要と思われた場合は細部にも配慮したが、薄層が連続的に互層をなす部分や、偶然の結果と思われる混入物の偏りなどは徒らに細分せず、有意と思われるまとまりの境界を表現した。

この分層の根拠を示すため、各層の性状を記録した。土層は主体土と混入土（物）によって構成されるものと考え、色調・土性・混入物・粘性・締まりの程度等を記載した。また解釈可能な場合は、その層の持つ性格を想定し付記した。

遺構埋土等の堆積層の「主体土」には、認識可能な場合、その層が堆積した時点で周辺の表土を形成していたと思われる土（埋没開始時点における最新期の土）をあてた。例えば地山土のブロックが大半を占める遺構の壁の崩落層であっても、当時の表土と思われる黒色土が僅かに含まれている場合は、後者を主体土とし、「地山土が大量に混入している状態」と解釈している。主体土と基本土層の対比から、その層の堆積時期を推定することが可能だと考えたからである。ただし今回の調査では土

層の識別が困難な場合が多く、必ずしも徹底できたとはいいがたい。

土色の表記は新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局）に準じたが、調査員が受ける層間の印象の差が土色名の違いとして反映されない場合も多くあった。このため、各層の記録には調査員個人の主観による相対的な層全体の印象（明暗や色味の差）も併記した。例えば、「○層よりも明るい」・「焼土含み全体に赤味」・「炭化物多く黒味強」・「地山土含み黄味がかる」などの表現がこれにあたる。また混入物の量について「極微」・「やや多」等の表記を行っているが、調査員の主観的基準を土色帖に示されているパーセント表記に置き換えれば、概ね、極微（１～２％）・微（３～５％）・少（５～10％）・やや多（15～20％）・多（30～50％）・大量（50％以上）となる。

（８）写　真　撮　影

野外撮影では６×７㎝判カメラ（モノクロ）、35㎜判カメラ（カラーリバーサル）、デジタルカメラを用い、各種遺構の全景・土層断面・遺物出土状況等を撮影した。撮影に際しては、撮影状況を記したカードをその都度写し込み、現像後これを元に整理した。なお、一部の遺構ではいずれかのカットを省略した場合がある。またこれらとは別に、平成20年11月12日に小型飛行機による遺跡の空中写真の撮影を行った。

（９）広　報　活　動

現地では、主に周辺住民の方々を対象として随時見学を受け入れた。また調査成果の概要を広く一般に公開することを目的として、平成20年10月18日に現地説明会を開催した（参加者数101名）。このほか、花巻市博物館において博物館実習を受講している大学生の見学に対応するなどした（平成20年８月11日９名）。

２　室　内　整　理

（１）作　業　手　順

出土遺物の洗浄と地点別の仕分け作業、土器を除く各遺物の分類は、野外調査と並行して現地で行った。野外調査終了の後、室内において土器の接合・復元作業を開始し、随時掲載資料の選別・登録を行った。その後、写真撮影、実測図作成・拓影作成・トレースの順に作業を進めた。調査員はこれらの作業の統括と並行して図面合成・遺物観察表作成・原稿執筆を行った。

（２）遺　　構

各遺構は必要に応じて第２原図を作成し、これをもとにトレースの後図版を作成した。図中には縮尺を示すスケールを付し、また、方位マークにより座標北を示した。

（３）遺　　物

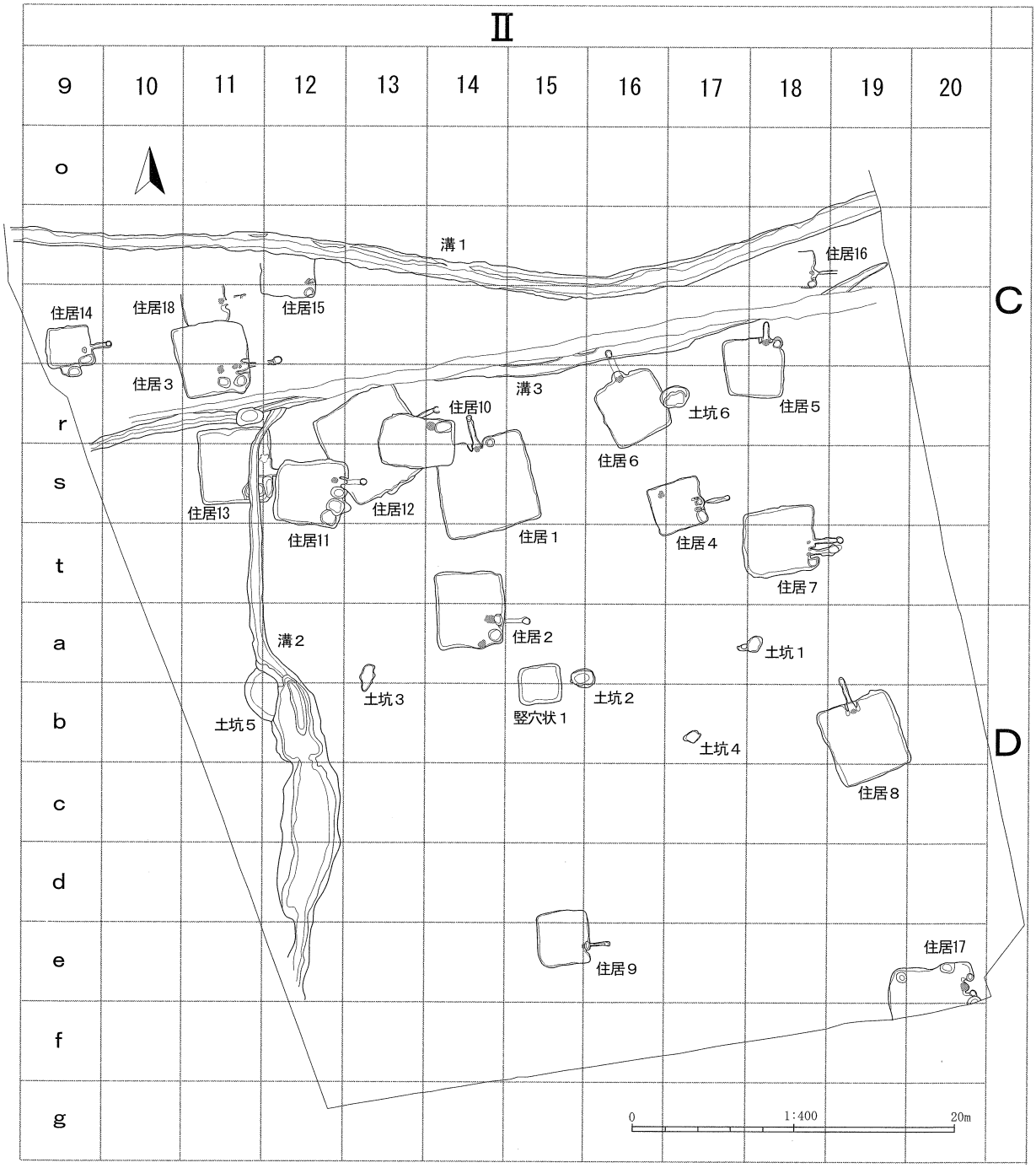
土器は出土地点・遺構別に重量を計測し、その後接合・復元作業を行った。掲載遺物は、口縁部から底部まで残存しているもので、口径または底径が算出できるものを優先的に選んでいった。その後、口縁部または底部破片で径を算出できるもの、胴部破片で径が算出できるもの、小片で径の算出が不可能なものの順で選び、各遺構内で出土した器種・器形などを把握することに努めた。

土製品、石器・石製品、金属製品は全点登録し、図化するものと写真・表掲載のみ（粘土塊・剥片）

とに選別した。

遺物は登録時に土器・石器など、遺物の種類ごとに仮番号を付した。室内整理中は仮番号のまま作業を行い、その後編集段階で全ての遺物に改めて掲載順の番号を付し、これを掲載番号とした。

遺物の縮尺は、土器・陶磁器・礫石器・石製品・木製品１/３、金属製品１/２、剥片石器２/３を原則として、図版ごとにスケールを付した。写真図版も、これに準じている。



第７図　Ａ１区　遺構配置図

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

1　概　　要

（1）検出遺構と出土遺物

平安時代（9～10世紀）

遺構：竪穴住居跡18棟。竪穴状遺構1棟、土坑（土器焼成遺構含む）4基。

遺物：土師器・須恵器（大コンテナ10箱・147,801.8ｇ）。刀子ほか鉄製品（小1袋）。
木椀・曲物部材片（小1箱）。布片（約5㎝四方）。

縄文時代後晩期～弥生時代

遺構：遺物包含層。

遺物：土器片大2箱、剥片小1袋。

時期不明

遺構：土坑2基。溝跡3条。

（2）成 果 の 概 要（第7図）

調査区のうち、A1区南半部およびA2区は、猿ヶ石川右岸に沿って延びる自然堤防の頂部に相当する。この範囲の北辺および南辺から外側は、それぞれ低湿地であるA1区北半部とB1・B2区へ向かって傾斜している。

今次調査で検出した遺構は、すべてA1区南半部に分布するものである。主体となるのは平安時代（9世紀後半～10世紀）の住居跡群で、これらの大半が焼失の痕跡を持ち、うち数棟では炭化した木材が良好な状態で残存していた。

また、住居跡の分布がやや希薄なA1区南半中央部からは、土器焼成遺構とみられる浅い皿状の土坑が4基確認された（土坑1～4）。内部からは火熱によりはじけ飛んだと思われる剥片状の土器片が、多量の炭化物・焼土ブロックとともに出土している。近接する住居跡8の床面からは精製され鏡餅のように形を整えられた粘土塊が出土しており、集落内における土器製作を強く示唆している。

出土遺物では、該期住居跡に一般的に伴う土師器甕・坏類に加え、高台を持つ浅い坏（皿）形土器や内外面に入念なミガキが施された把手付きの土器、大振りの鉢形土器など特殊な器形を有する一群の出土が注目される。集落内で最大の住居跡1からはこの種の土器がまとまって出土している。

また、A1区南半中央部から検出された竪穴状遺構1から麻布片（附編2）が見つかった。大きさは5㎝四方ほどで、出土時には蛇腹状に折り畳んだようなひだが認められた。この遺構には廃棄土によって半分ほど埋まった段階で、火熱を受けた大きな礫と多量の土器片が投げ込まれており、布片は廃棄された須恵器大甕片の下から出土した。

このほか、A1区南半南部には縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層が確認された。平安時代の集落と同様に自然堤防上に居住した際の痕跡と思われるが、遺構は検出されなかった。

2　遺　　構

（1）竪穴住居跡

住居跡1（第8・9図、写真図版5・6）

〔位置・検出状況〕Ａ1区南半中央部、ⅡＣ14ｓグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土の方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は6.4×6.3ｍの隅丸方形である。検出面から床面までの残存深度は20㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面から上の堆積土のうち最も古いのは壁際にみられる黒褐色土層（4層）である。検出時には遺構の輪郭を縁取るように壁際を一周する様子が観察された。続く3層の堆積も4層同様に壁際に限定され、これらは壁の崩落と流入による自然堆積層とみられる。3・4層の堆積範囲である壁際よりさらに内側の床面上には、上屋構築材と思われる炭化材が多量に集積していた。この炭化物集積面は3・4層の堆積後に形成されたものであることから、当住居は廃絶から一定期間放置された後、上屋が倒壊・焼失した可能性が高いと考えられる。炭化材のうち、幅（太さ）10㎝を超えるものは中央～西部に集中している。長尺の材は破断しながらも概ね西側から内部に向かって倒れ込んだような状況を呈し、中央部付近ではこれと直交する材も認められる。残存状況の良い大形の炭化材同士の間には、繊維方向が揃わない粒状の炭化物やさらに細かい粉状の炭化物が広がり、西半部の床面は大半がこれらに覆われている。炭化物の広がる範囲には多量の焼土も認められる。粉砕した焼土ブロックの集積ではなく、床面上に堆積した土壌の一部がその場で被熱赤変したものとみられ、焼土の生成は特に大形炭化材の周囲に顕著である。床面直上の炭化材の上を覆う土壌が焼土化し、さらにその上に別の炭化材がのる状況が観察されることから、材と土壌の堆積と、これらの炭化・焼土化がほぼ同時的に生じたと考えることができる。炭化物集積面の上位は再び周囲からの流入土（2層）によって漸次堆積が進み埋没を終えている。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は住居跡10と重複する北西隅部で上部が失われているが全体的に良好に残存し、やや外傾して直線的に立ち上がる。壁溝および柱穴は床面レベルでは認識できなかった。竪穴の掘り方は、壁直下から内側に向かって幅約1ｍほどの範囲が床面中央部よりも一段深くなっている。床面の中央部では地山砂質土層を削って平坦面が設けられ、壁際の掘り方の低みはこれに連続するよう埋め均されている。床の上面は全体に平坦に整えられしっかりと締まっている。

〔カマド〕北壁ほぼ中央部に位置し、煙道方位はＮ－13°－Ｗである。袖は地山土を掘り残し、これに土師器甕（17・18）を貼りつけて構築している。燃焼部底面には46×33㎝の焼土が形成され、袖内側まで連続してよく被熱する。焼成面の上には粘性のある粘土層（2層・灰層？）が堆積している。煙道は全長1.75ｍ、住居壁際でわずかに立ち上がってから水平に伸び、煙出し部で一段下がる。煙道内の埋土は天井崩落土のみで、埋没の早い段階で天井部が崩落したようである。煙出し部には土器や礫が詰め込まれており、人為的にカマドを破壊した可能性も考えられる。

〔重複〕北西隅部で住居跡10に切られる。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕1～29・364・365。（第43～46図、写真図版31～34）土師器17,966ｇ、須恵器1523.6ｇと、今回検出した住居跡の内で最も遺物量が多い。土師器坏4点（うち刻書1点）・高台付皿3点・甕11点・鉢3点、須恵器坏2点・瓶4点・大甕1点、粘土塊2点、計31点を掲載した。器形の復元

可能な個体は床面から多く出土している。土師器坏類は、ロクロ成形後底部を再調整、内面黒色処理するもの１と、ロクロ成形のみのもの２、３は非ロクロ成形の可能性がある。５～７の高台付皿はすべて非ロクロ成形で、外面をヘラケズリもしくはヘラナデ、内面にはミガキを施し黒色処理される。甕類は21を除きすべて非ロクロ成形、16・18は球胴状の器形をもつ。体部にタタキ目の残る土師器甕片も出土しているが、小片のため図化していない。掲載遺物は甕類が多く、坏類が少ないが、不掲載もこれに準じており、坏は破片もほとんど含まれていなかった。土師器鉢は３点（22～24）掲載しており、他の遺構では器形の復元できるものはなかった。

住居跡２（第10・11図、写真図版７）

〔位置・検出状況〕A1区南半中央部、ⅡD14ａグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土の方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は4.8×4.2ｍの隅丸方形である。検出面から床面までの残存深度は36㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕床の上面は全体的に黒褐色の粘土質土（４層）に覆われている。廃絶当初の流入土か。その上位に堆積する黒褐色土（２・３層）も同様に周囲からの流れこみと見られ、地山の黄褐色土ブロックを全体に含み検出面近くまでを埋めている。なお、埋土下部から床面付近にかけて顕著なグライ化が見られる。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は全体的に良好に残存し、ほぼ直立している。壁溝は床面レベルでは認識できなかった。竪穴の掘り方は、中央部から壁際に向かって傾斜し壁直下で最も深くなっている。床面の中央部は地山砂質土層を削って平坦面が設けられ、これに連続するように壁際の掘り方の低みが埋め均されている。床の上面は概ね平坦だが、壁際に向かってやや傾斜している。表面は全体的に締まっており、中央部からカマド付近がより堅緻である。柱穴は、壁溝同様、床面上では認識できない。竪穴の掘り方底面では12個の小ピットが確認されているが、上屋構造を支持する柱穴の特定には至らなかった。

〔カマド〕東壁やや南寄りに設置され、煙道方向はＮ－92°－Ｅである。袖は地山土を主体として構築されている（Ｅ－Ｅ’３層）。燃焼部底面には63×52㎝の焼成面が形成される（18～20層）。焼成は非常に良く、中央部には硬化した範囲も認められた。焼土範囲の奥、煙道側には開口部径60×48㎝、深さ５㎝程度の楕円形の窪みがある。この窪みには炭・焼土ブロックを多く含む黒褐色土が、焼土層を切るように堆積している。支脚の抜き取りなどの行為が行われた可能性がある。煙道は全長1.62ｍ、住居壁際からわずかに下って、開口部径50×38㎝、深さ60㎝の煙出し部へ刳り抜かれる。煙道の天井部は良く被熱する。埋土は、黒褐色土を主体としており、壁や天井の崩落土を混入して堆積している。

また、住居南側のやや東寄りにも48×43㎝の焼土が形成されていた。焼土をほぼ２分するように東西方向に細長く暗渠が延びており、これによって煙道部と推定される範囲が攪乱され、その存在を確認することができなかったが、おそらく東側のカマドよりも古いカマドが南側に設置されていたものと思われる。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕30～52・366・367・378。（第46～48・73図、写真図版34・35・51）土師器8849.4ｇ、須恵器1471.4ｇ出土しており、土師器坏12点（うち墨書１点・刻書４点）・甕４点、須恵器瓶７

点、粘土塊２点、刀子１点、計26点を掲載した。カマド付近と貯蔵穴内からの出土が多い。貯蔵穴内には坏がまとまっており（32～35・39～41）、特に埋土下半に集中する。また、煙出し部15層下面から出土した須恵器大甕片は竪穴状遺構１の252と接合している。土師器坏は黒色処理されるものが９点、このうち４点が再調整される。甕類は、破片で非ロクロ成形の甕も出土するが、器形を復元できた個体は、ロクロ成形のものに限られた。須恵器は、坏類が小片のみ、瓶類片が目立った。

住居跡３（第12・13図、写真図版８）

〔位置・検出状況〕A1区南半北西部、ⅡC11qグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土の方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は4.5×4.4ｍの方形。検出面から床面までの残存深度は24㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕壁直下は壁の崩落に伴うとみられる地山ブロックを多く含んだ３層が埋め、その上を灰黄褐色土・黒褐色土を主体とする土層が覆っている。これらの層中にも地山ブロックを多く含む部分が見られることから、周囲からの土壌の流入と壁の崩落を繰り返しながら、漸次埋没したものとみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は全体的に良好に残存し、やや外傾して直線的に立ち上がる。床面は全体に平坦に整っており、堅く締まっている。壁溝・柱穴は床面レベルでは認識できなかった。掘り方には、南・北・西壁直下に深い部分が認められ、また底面からは６個の小ピットが見つかっているが、上屋構造を支持する柱穴の特定には至らなかった。カマドの右脇にあたる竪穴の南東隅部には、貯蔵穴と思われる円形の土坑をもつ。

〔カマド〕東壁やや南寄りに設置され、煙道方向はＮ－81°－Ｅである。袖は地山土を主体として構築されており、南側は土師器甕片を貼り付け、北側は礫を芯材として利用していたようである。燃焼部底面には焼土が形成される。範囲が２か所に分かれるが、奥（煙道側）の焼土の焼成が弱いことから本来は一つで焼成の弱いところが削れ、消失したものと判断した。その範囲は52×34㎝、深さは６㎝である。焼成面の上部には灰層（５層）が堆積している。煙道は全長2.0ｍ、中央をかく乱されてしまっているが、ほぼ水平にのび、開口部径50×40㎝の煙出し部で一段深くなる（深さ30㎝）。埋土は炭化物や焼土ブロックを混入する黒褐色土を主体としているが、一部層下面が被熱する地山ブロックが堆積していることから（２層）、煙道部の構造はくり抜き式と推定される。

またこのカマドの西側、住居中央寄りに44×36㎝の焼成範囲が検出された。前述のカマド燃焼部面や、周囲の床面よりこの焼土の形成面が低いこと、焼土南隣に貯蔵穴状の土坑があることから、東側のカマドより古いカマドが存在していたと考えられる。しかし、これに伴う煙道部や、住居プランなどは確認されなかった。

〔重複〕北壁に重複する住居跡18を切っている。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕53～69・368。（第48～50図、写真図版35・36）土師器11147.736ｇ、須恵器248.4ｇ出土しており、土師器坏７点（うち２点刻書）・甕８点、須恵器瓶２点、粘土塊１点、計18点掲載した。カマド周辺と住居南側に遺物が集中する。前者には甕類、後者は坏類が多い。煙道部とカマド燃焼部内から出土した甕・瓶が接合しており、住居埋没過程で、割れた状態で両方へ投げ入れられた可能性が考えられる。土師器坏は内面黒色処理されているものが多い。59はてづくねの小形坏で、カマド袖を断ち割っている際にみつかり、袖内もしくは袖付近、どちらからの出土かは確認できていない。甕類はロクロ成形され、61は胴部下端から底部にかけてタタキ目が残る。

住居跡４（第14図、写真図版９）

〔位置・検出状況〕A1区南半中央部、ⅡC17ｓグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土の方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は3.1×3.0ｍの方形。検出面から床面までの残存深度は８㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕細かい地山ブロックを混入する黒褐色土が堆積する。床面から埋土中にかけて炭化物片も含まれており、中央ほどその量・粒径が大きい。一方壁際は炭化物が含まれず、地山ブロックの量が多く明るくなる。他の住居に比べ炭化物の出土量が少ないもの、上屋は焼失した可能性がある。

〔壁・床面・柱穴など〕上部を大きく削平されており、四方の壁は下端部のみが残存する。壁溝および柱穴は床面レベルでは認識できない。竪穴の掘り方は壁直下に不連続の深い部分を持つが、床面の大半は地山から削り出された面がそのまま用いられている。床の上面は締まってはいるが顕著な硬化面はなく若干波打っている。カマドの右脇にあたる竪穴の南東隅部には、貯蔵穴と思われる楕円形の浅い土坑をもつ。また北西部の床面には径40㎝ほどの円形焼土の生成が認められた。屋内炉か。

〔カマド〕西壁ほぼ中央に位置し、煙道方位はＮ－77°－Ｅである。袖は、わずかに黒褐色土を含むが地山土で構築されており、内側（燃焼部側）が被熱し赤味を帯びる。燃焼部底面には28×14㎝の焼土が形成され、この奥（煙道部側）には42×33㎝の楕円形の掘り込みがある。焼土範囲を切るように窪むことから、支脚などが取り除かれている可能性が考えられる。煙道は全長1.55ｍ、住居壁際は浅く削平され途切れるが、煙出し部へ向って低くなる。埋土は煙出し部に黒味の強い層や地山ブロック層などがたまってから、煙道部に堆積する。煙道部埋土には焼土ブロックが含まれるものの、天井崩落の地山層や被熱したブロックなどは確認できず、煙道の構築方法は不明である。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕70～77・369。（第50・51図、写真図版36・37）遺物出土量は少なく、土師器1202.8ｇ、須恵器246.6ｇ、土師器坏２点・甕３点、須恵器坏１点・大甕２点、粘土塊１点、計９点掲載した。器形を復元できた土器はカマド周辺から貯蔵穴内に集中する。坏類は、土師器で内面黒色処理されているもの、非黒色処理のもの、須恵器と、各一点ずつの器形が復元できた。甕類は、球胴状のものが非ロクロで、小形の個体はロクロ成形される。

住居跡５（第15図、写真図版10）

〔位置・検出状況〕A1区南半北東部、ⅡC18ｒグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土の方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は北壁より南壁がやや短い隅丸方形（3.8×3.7ｍ）である。検出面から床面までの残存深度は18㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕地山ブロックを多く含む層（４・７層）が南～西壁際に、その後黒褐色土が住居全体に堆積する。下部ほど地山ブロックが多い。量は少ないものの住居床面と２層中に炭片が混入することから、上屋は焼失・倒壊した可能性がある。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は四方で比較的良好に残存し、やや外傾して立ち上がる。壁溝および柱穴は床面レベルでは認識できなかった。竪穴の掘り方は、壁際が床面中央部よりも一段深くなっている。中央部では地山砂質土層を削った平坦面が床とされ、壁際の掘り方の低みはこれに連続するよう埋め均されている。床の上面は全体に平坦に整えられしっかりと締まっているがガリガリの硬化面は認め

られない。掘り方底面からも柱穴等は検出されなかった。このほか、カマドの右脇にあたる竪穴の北東隅部には浅い土坑をもつ。埋土からカマド崩壊時には開口していたとみられる。貯蔵穴か。

〔カマド〕北壁の東寄りに位置し、煙道方位はN－1°－E、ほぼ真北を向く。わずかに黒褐色土を含むが地山土で構築されており、燃焼部底面から袖内側まで連続して被熱し赤味を帯びる。底面の焼成範囲は42×48cm、深さ4cm、良く焼けている中心部が硬化している。焼土の奥（住居壁側）には片側のみ被熱した礫が、一部焼成面（燃焼部底面）より深く埋めこまれていた。出土状況は斜めに倒れていたものの、支脚として利用されていた可能性が高い。煙道は全長0.97m、煙出し部まで燃焼部底面からわずかに低くなる程度である。埋土中に下面が被熱した地山ブロック層（6層）が堆積していることから、煙道部の構造はくり抜き式と推定される。またこの層は、燃焼部・煙道部とも底面直上に位置し、その後住居埋土が堆積していることから、住居の埋没過程の早い段階で、天井部が崩落していると考えられる。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕78～83。（第51・52図、写真図版37）土師器3607.3g、須恵器15.4g出土しており、土師器甕4点、須恵器坏2点、計6点を掲載した。カマド周辺から貯蔵穴内に集中する。土師器坏は内面黒色処理されたものはなく、内外面ロクロ成形のみの小片が含まれるだけで図化していない。78・79は須恵器に坏で、底部から丸みを帯びず直線的に外傾する。79は体部下端を再調整している。80と81はそれぞれカマド東側袖と貯蔵穴内に、並ぶように横たわり出土している。両者とも非ロクロ成形で、これらより小形のものはロクロ（82・83）成形でつくられる。掲載遺物以外、器形復元のできない破片類も、非ロクロ製品が多い。

住居跡6（第16・17図、写真図版11）

〔位置・検出状況〕A1区南半北部、ⅡC16rグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土の方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は4.1×4.0mの隅丸方形である。検出面から床面までの残存深度は40cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面の直上全体に、長さ10数cm、径10～15mm程度の小枝状の炭化物が広がっていた。柔らかく、形状が不明瞭でもやもやしている部分も多い。また、東・西の壁直下からは壁に平行した状態で炭化した板状材が出土した。床面に密着しており、敷き置かれていたものとみられる。壁直下には崩落土とみられる地山ブロック層（6層）が堆積し、砂質土ブロックを多く含む土層（4・5層）がさらにこの上を覆う。これより上位も同様に周囲からの流入土によって埋没している。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は四方で良好に残存し、やや外傾して直線的に立ち上がる。壁溝および柱穴は床面レベルでは認識できなかった。竪穴の掘り方は、壁際が床面中央部よりも一段深くなっている。中央部では地山砂質土層を削った平坦面が床とされ、壁際の掘り方の低みはこれに連続するよう埋め均されている。床の上面は全体に平坦に整えられ締まっているがガリガリの硬化面は認められない。掘り方の底面からはPP1～PP10の小ピットを検出したが、上屋構造を支持する主柱穴の特定には至らなかった。

〔カマド〕北壁ほぼ中央に位置し、煙道方位はN－24°－Wである。袖は住居壁を利用しており、燃焼部が住居壁より奥に設置される。住居壁より内側（住居内側）に袖が延びていたかどうかは確認できなかった。燃焼部底面には40×50cm、深さ4cmの焼土が形成されており、袖内側まで被熱が及ぶ。

焼土の奥（煙道側）には長胴甕（86）が倒位で埋め込まれ、支脚として利用されていたようである。煙道は全長1.4ｍ、煙出し部へ向って徐々に低くなり刳り抜かれる。カマド内の埋土は、燃焼部で黒褐色土が堆積した後、被熱した天井や袖の一部が落下、そして煙道部が埋没後再び燃焼部の天井が崩落しており、ある程度時間をかけ堆積したようである。

〔重複〕北壁上部が土坑６に切られている。また、カマド煙道北端部が溝跡３に切られている。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕84～95。（第52・53図、写真図版38）土師器7323ｇ、須恵器572ｇ出土しており、土師器坏２点・甕５点、須恵器瓶３点・大甕２点、計12点掲載した。支脚（86）と燃焼部上部（88）など、器形が復元できる個体はカマド内から周辺にかけて多いが、破片は埋土上部に目立った。土師器坏（84・85）は、内面黒色処理で体部下端～底部にかけ再調整される。甕（86～88）はすべて非ロクロ成形で、87は胴部にタタキ目が残る。

住居跡７（第18・19図、写真図版12）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半東部、ⅡＣ18ｔグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において比較的明瞭な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は4.5×4.2ｍの隅丸方形である。検出面から床面までの残存深度は28㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面はグライ化し、周囲からの流入土とみられる黒褐色土に広く覆われている。上面に目立った炭化材はみられない。壁際には部分的に壁崩落土層（５層）が観察される。この上位には地山土のブロックを多量に含む２層が厚く堆積し、その上に再び黒褐色土（１層）が流入して埋没を終えている。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は四方とも残存するが、堆積過程の崩落により開口部が広がった状態となっている。壁溝および柱穴は床面レベルでは認識できない。竪穴の掘り方は不規則な凹凸をもつがこれを平坦に埋め均して床面が設けられている。掘り方の底面からはPP1～PP7・PP9～PP12の小ピットを検出したが、上屋構造を支持する主柱穴の特定には至らなかった。このほか、カマドの右脇にあたる竪穴の南東部には浅い土坑をもつ。上位に新期カマドの袖部に覆われていることから、旧期カマドに並行するものであろう。類例から貯蔵穴とおもわれる。

〔カマド〕東壁南側に２基併設される。煙道方位は南側がＮ－82°－Ｅ、北側はＮ－87°－Ｅ、残存状態から南側の方が新しいものと判断した。

南側のカマド袖は、黒褐色土を少量混入する地山土で構築され、内側（燃焼部側）が被熱する。燃焼部底面には、26×19㎝の焼土が生成されており、その上には灰層、さらに天井崩落土が堆積する。煙道は全長1.52ｍ、住居壁からわずかに下り、開口部径60×54㎝の煙出し部でさらに一段低くなる。煙道部底面の埋土は地山ブロック層（８層・側面などの崩落か）堆積後、天井部が崩落して（７層）おり、煙出し部では地山ブロックと焼土ブロックが互層になって、壁も大きくオーバーハングしていることから、壁や天井部の崩落を伴いながらある程度時間をかけ徐々に埋没していったものと考えられる。

北側のカマドは、北側の袖は残っておらず、南側には新期カマドの袖がある。古いカマドでもこれを利用していた可能性があるが、壁内側（北側カマドの燃焼部側）に被熱範囲は認められなかった。燃焼部底面には22×14㎝の焼成面が残存していた。煙道は、全長1.76ｍ、燃焼部底面からほぼ水平に伸び、開口部直径38㎝の煙出し部で一段下がる。埋土は煙道部底面に黒色土（６・７層）が堆積

したのち、燃焼部側・煙出し部側から焼土ブロックと炭化物を多く含む層（３・５層）が入りこんでおり、これは新期カマドに作り替える際に人為的に埋めたものと考えられる。その後、煙道中央部に残った空洞部分に天井が崩落（１・２層）し埋没したものと推定される。
〔重複〕なし。
〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。
〔出土遺物〕96～108・407。（第53・54図、写真図版38・39・52）土師器4673.4ｇ、須恵器1805.4ｇ、竪穴住居跡のうち最も須恵器の出土重量が多い。土師器坏４点・甕２点、須恵器瓶６点・大甕１点、砥石１点、計14点を掲載した。カマド周辺からの出土が多い。96～98は土師器坏でロクロ成形後内面黒色処理されており、99は内外面とも磨かれ非ロクロ成形の可能性がある。これ以外図化していない土師器坏片も黒色処理されたものが大半を占める。100は胴下半、内外面にタタキ目のはいる北陸型の甕である。103～107は須恵器瓶類で105は口縁部が大きく歪んでいる。

住居跡８（第20・21図、写真図版13・14）
〔位置・検出状況〕A1区南半東部、ⅡＤ19ｂグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土の方形範囲として検出された。
〔規模・形状〕平面形は5.0×4.6ｍの方形である。検出面から床面までの残存深度は28㎝前後である。
〔埋土・堆積状況〕床面直上には上屋構築材と思われる大量の炭化材とそれに伴う焼土が広がっていた。炭化材分布は特に南半部に多く、幅（太さ）10㎝を超える長尺の材が壁側、あるいは四隅から住居の内部に向かって求心状に倒れ込んだ様子が良好に観察される。材は床に直に接しており、すぐ上を褐色土（５層）が覆う。この土層は炭化材の分布と同様南半部で厚く北側に向かって層厚を減じている。炭化材の周囲に生成した焼土はこの褐色土が被熱したものであり、上屋の倒壊・焼失と褐色土の堆積はほぼ時間差無く生じたものと見てよい。褐色土は、当時の表土に想定される黒褐色土と異なり、地山由来と考えられることから、木質材とともに上屋構造材の一部として人為的に用いられたものである可能性がある。この褐色土層を覆う２～４層にも多量の地山ブロックが含まれており、人為的に一度掘削された土が、埋没段階に周囲から流入したような堆積状況を呈している。埋土最上部の暗褐色土層は、埋没過程の終盤に凹地となった本住居跡内部に自然流入したものと思われる。
〔壁・床面・柱穴など〕壁は全体的に良好に残存し、やや外傾して直線的に立ち上がる。竪穴の掘り方は不規則な浅い凹凸を持ち、特に壁際が床面中央部よりも一段深くなっている。これらの低部を埋め均して、平坦に整った床面が設けられている。壁溝は平面的には確認できなかったが、断面ａ－ａ’には東西壁直下に小溝上の落ち込みが観察される。柱穴は床面レベルでは認識できず、掘り方底面からも検出されなかった。
〔カマド〕北壁のほぼ中央に位置し、煙道方向はＮ－22°－Ｗである。袖は暗褐色土と地山土で構築しており、内側（燃焼部側）が被熱する。燃焼部底面には40×28㎝の焼土が形成される。焼成面の直上には白色粘土層（７層・灰？）、天井～壁面の被熱土崩落層（６層）が堆積する。煙道部の全長は1.60ｍ、ほんのわずかな傾斜で下り、煙出し部で一段下がる。煙出し部の埋土には、多くの被熱ブロック・炭化物が混入していることから、上屋焼失後に堆積した可能性がある。煙道部内は、煙出し内に土がある程度たまった後に天井崩落などに伴い埋没している。埋土の主体土は黒褐色土で、地山層などは確認できず天井の構築方法は不明である。
〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀）と思われる。
〔出土遺物〕109～116・408。（第54・55・74図、写真図版39・40・52）土師器2171.3ｇ、須恵器275.9ｇ、土師器坏３点・甕２点・高台付皿１点、須恵器瓶２点、砥石１点、計９点を掲載した。焼失した上屋の部材は多く残存するものの、遺物量は少ない。とくに他の住居跡と異なり、カマド周辺からの出土がほとんどない。また坏類が少なく図化したものでも（109～111）全形（口縁～底部）を復元できた個体はなかった。土師器甕は２点とも非ロクロ成形（112・113）で、116は高台付皿の皿部分である。

住居跡９（第22図、写真図版15）
〔位置・検出状況〕Ａ１区南半南部、ⅡＤ15ｅグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において、土器片・焼土粒・炭化物を含む暗褐色土の不整形な範囲として検出された。
〔規模・形状〕平面形は3.4×3.2ｍの隅丸方形である。検出面から床面までの残存深度は８㎝前後である。
〔埋土・堆積状況〕上部を大きく削平され残存状況は良くない。埋土は黒褐色シルト主体で南～西壁際には壁の崩落層と思われる地山土のブロック層の堆積が認められる。主に北半部では床面からわずかに浮いたところで炭化材と焼土の広がりが認められた。上屋焼失の痕跡の可能性がある。
〔壁・床面・柱穴など〕検出時には明瞭にプランを把握できたが、上部を著しく削平されており壁は下端部をごく一部に残すのみである。壁溝は確認できない。床面は全体に平坦に整っており目立った硬化部はない。柱穴は床面レベルで認識できず、掘り方底面からも検出されなかった。
〔カマド〕東壁やや南寄りに位置し、煙道方位はＮ－77°－Ｅである。南側の袖のみ残存するが、地山土を掘り残して利用したようである。燃焼部底面には28×18㎝の焼土が形成され、これを切るように、58×34㎝楕円形範囲が窪んでおり、支脚などの抜き取りが行われた可能性がある。煙道は全長1.2ｍ、比較的急な角度で下り、開口部径31×28㎝の煙出し部でさらに一段低くなる。埋土は、煙出し部底面に炭化物層が堆積後、煙道内に黒褐色土がたまり、さらに煙出し部を塞ぐように天井部の地山ブロック層が崩落している。堆積状況から、煙道部構築方法はくり抜き式と考えられる。
〔重複〕なし。
〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。
〔出土遺物〕117～122・409。（第55・56図、写真図版40）遺物量は少なく、土師器1645ｇ、須恵器367ｇ出土し、土師器坏１点・甕２点、須恵器坏２点・瓶１点、砥石１点、計７点を掲載した。住居北側からの出土が多い。117～119は、非黒色処理の土師器坏で、内面を磨き黒色処理したものは、小片も出土していない。甕は２点とも非ロクロ成形である（120・121）。

住居跡10（第23図、写真図版16）
〔位置・検出状況〕Ａ１区南半北部、ⅡＣ14ｓグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において、住居跡１の北西隅に重複する不整形な暗褐色土の広がりとして認識。おおむね長方形の範囲であることが把握されたことから住居跡に類する遺構と判断し精査に着手した。
〔規模・形状〕平面形は4.7×3.3ｍの隅丸長方形である。検出面から床面までの残存深度は26㎝前後である。
〔埋土・堆積状況〕床面を覆っているのは木炭片を比較的多く含む黒褐色土である。この上位には周

囲から流入したと思われる黒褐色土が堆積し埋没を終えている。埋土の上半は地山土のブロックを多く含み黄味を帯びる。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は本来四辺で良好に残存していたと見られる。だが、重複している本遺構の存在に気がつかないまま住居跡１の精査を行い、南東隅部の壁を壊してしまった。平面図に示した推定線（破線）は土層断面の観察から復元したものである。壁面は下端が内湾して床面へと連続し、それ以上ではほぼ直線的にやや外傾して立ち上がっている。床面上では壁溝は認められない。住居掘り方は北・西・南壁の下が深く掘られている。床面は、カマド手前の北東部から中央部にかけての範囲が、周囲に比してやや高く硬く締まっている。柱穴は床面レベルで認識できず、掘り方底面からも検出されなかった。

〔カマド〕北壁、やや東寄りに直径56㎝の焼土が形成される。焼土の焼成はよく、中心部に硬化した範囲が認められた。煙道部は確認できなかったが、住居床面付近まで削平をうけているため、これも消失した可能性がありカマドと判断した。袖土も残っていなかったが、焼土の西側には礫が埋め込まれており、袖の構築材と考えられる。さらに焼土上面には被熱した礫が散在していたため、カマド袖と天井部は、礫を構築材として利用していたことが推測される。

〔重複〕南東隅部で住居跡１を、西半部で住居跡12を切っている。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（10世紀）と思われる。

〔出土遺物〕123～130。（第56図、写真図版40・41）本遺構単独で土師器1885.9ｇ、須恵器35.1ｇ、住居12との重複範囲で土師器2943.6ｇ、須恵器507ｇ出土しており、土師器坏５点・甕１点、須恵器瓶２点、計８点を掲載した。遺物が集中する範囲は認められず、住居内に散在する。重複する住居１と住居12の遺物も埋土中に混入していると考えられ、本遺構に伴うものかはっきりしない遺物が多い。その中でも出土位置が明確で遺構の時期を判断することのできる遺物は、住居壁際と貯蔵穴内から出土した土師器坏（124・126）で、これらは他の住居跡のものと比べ底径４㎝台と小さく、器高も２㎝台と低い。

住居跡11（第24・25図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半西部、ⅡＣ12ｓグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において不整形な暗褐色土の広がりとして検出、精査を進める過程で複数の住居跡が重複している地点であることが確認された。本住居跡はそのうちの一つである。

〔規模・形状〕平面形は4.4×4.2ｍの隅丸方形である。検出面から床面までの残存深度は40㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面からは上屋構築材とみられる炭化材が出土した。東半部に特に多く、南東隅部から内側に向かって倒れこんだような状態の棒状の炭化材も認められた。壁直下には流入した黒褐色土層（３層）が堆積し、その後、地山土ブロックを多く含む土（２層）が床一面を覆っている。その後再び黒褐色土が流入し埋没を終えている。

〔壁・床面・柱穴など〕直線的に外傾する壁が四辺で良好に残存する。壁溝は床面レベルでは認識できなかった。竪穴の掘り方は、壁直下から内側に向かって幅約１ｍほどの範囲が床面中央部よりも一段深くなっている。床面の中央部では地山土層を削って平坦面が設けられ、壁際の掘り方の低みはこれに連続するよう埋め均されている。床面は全体にやや小起伏が目立つ。カマド手前の北東部から中央部がやや高く硬く締まっているのに対し、南・北・西壁際は低くやわらかい。カマドの右脇（東壁中央）には貯蔵穴とみられる円筒形の土坑を伴っている。この土坑の右側に

はさらに２つの落ち込みが連続して認められるが、埋土の様相から上屋倒壊時に床面がえぐれた痕跡とおもわれ、本来は北東隅（カマド左脇）に検出された小土坑と対になって上屋を支持した柱穴であった可能性が高い。

〔カマド〕東壁の北寄りに設置され、煙道方位はＮ－90°－Ｅ、真東を向く。袖は地山土を使用して構築されており、礫を立てた状態で並べ芯材として利用している。燃焼部底面には36×40㎝の焼土が形成され、焼成が良く硬化する範囲も認められる。焼成面の上には灰層・炭化物がのる。また焼土を切るように奥壁側に10㎝程度の小穴があり、支脚の抜き取り痕の可能性がある。煙道は全長1.12ｍ、住居壁際から開口部径33×32㎝の煙出し部へ向って緩やかに立ち上がる。煙道の構築方法はくり抜き式で、天井・底面とも地山が被熱している。埋土は焼土ブロック・炭化物を混入する黒褐色土が、煙出し側から流入する。

〔重複〕北東隅およびカマド煙道部が住居跡12を切り、また、北西隅部が住居跡13のカマド煙道部を切っている。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀）と思われる。

〔出土遺物〕131～162・379。（第57～59・73図、写真図版41・42・51）土師器16177.4ｇ、須恵器172.9ｇ出土し、土師器坏21点（うち刻書２点・墨書１点）・高台付坏２点・甕７点、須恵器瓶２点、鉄製品１点、計33点掲載した。カマド周辺と貯蔵穴内、とくにこれらの埋土上部に遺物が多い。カマド煙出し部には倒位で甕（159）が出土している。土師器坏類は、ミガキ後黒色処理されるもの（131～135）と、ロクロ成形のみのもの（136～150）とがあるが、後者が多く、図化していない小片もこれの破片が非常に目立った。ロクロ成形のみの坏は、比較的湾曲しているものが多く、143の様に器面にキズがある個体もあり、全体的に粗雑な成形に感じられた。152と153は高台付坏であるが、両者とも高台部分が剥がれ欠損している。甕類（154～160）はロクロ成形のものが大半を占め、156は胴部下半、内外面にタタキ目がはいり北陸型の甕である。

住居跡12（第26・27図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半中央部、ⅡＣ13ｓグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において不整形な暗褐色土範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は6.3×5.8ｍの方形である。検出面から床面までの残存深度は22㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕壁際には崩落土と見られる地山ブロックが堆積し、その上に自然の流入土が覆い漸次埋没した様子が観察される。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は四辺とも一部を失っており部分的な残存である。やや内湾しながら外傾して立ち上がる。壁溝は床面レベルでは認識できなかった。竪穴の掘り方は、カマドのある東壁中央部を除き、壁直下から内側に向かって幅約１ｍほどの範囲が床面中央部よりも一段深くなっている。床面の中央部では地山砂質土層を削って平坦面が設けられ、壁際の掘り方の低みはこれに連続するよう埋め均され、上面は全体に平坦に整えられている。南壁および北壁際からは複数の小土坑が見つかっており、このうちPP１～４が上屋を支持した柱穴とみられる。また、カマドの右脇（東壁中央付近）には貯蔵穴とみられる土坑をもつ。

〔カマド〕東壁、ほぼ中央に位置し、煙道方位はＮ－62°－Ｅである。袖は残存しておらず、燃焼部底面には66×52㎝の焼土が形成される。その周りを囲むように、直径10～30㎝程度の小穴が検出された。焚き口と想定される部分にも小穴が巡るので、疑問は残るがカマド袖の芯材・支脚などの抜き取り痕と考えたい。煙道は、煙出し部の端が攪乱によって壊されており、残存長1.62ｍ、住居壁から

煙出し部へ徐々に下って刳り抜かれる。煙出し部は開口部直径40㎝程度、煙道部より一段さがる。埋土は炭・焼土を含む黒褐色土が堆積しており、煙道部底面と天井の間は数㎝程度しかないため、天井部は崩落しているものと推定される。

〔重複〕南東部を住居跡10に、南西部を住居跡11に切られている。また南東隅がわずかに住居跡１と重複するが、新旧関係の把握はできなかった。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕163～175。（第59・60図、写真図版42・43）土師器6843.7ｇ、須恵器149.1ｇ出土しており坏５点・甕５点、須恵器坏１点・瓶２点、計13点掲載した。これらの大半が煙出し部と貯蔵穴内から出土している。163～167は内面に黒色処理される土師器坏で、外面体部下端～底部にかけて再調整される。甕は、171～172が非ロクロ成形、173はロクロ成形だが内面が磨かれ黒色処理される。170の須恵器坏は小片で器形を復元できなかった。

住居跡13（第28・29図、写真図版19）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半西部、ⅡＣ11ｓグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において不整形な暗褐色土の広がりとして検出、精査を進める過程で複数の住居跡が重複している地点であることが確認された。本住居跡はそのうちの一つである。

〔規模・形状〕平面形は4.7×4.5ｍの方形である。検出面から床面までの残存深度は26㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面上には上屋構築材の一部である可能性を持つ炭化材が少量ながら点在する。炭化材の周囲には焼土の生成も認められ、廃絶時に焼失・倒壊したものである可能性が高い。埋土の主体は黒褐色シルトで、床面の上位は地山土のブロックを多く含む土層とあまり含まない層に交互に覆われ、漸次堆積が進んで埋没を終えたものとみられる。

〔壁・床面・柱穴など〕やや外傾して直線的に立ち上がる壁面が四辺で良好に残存する。柱穴および壁溝は、床面レベルでは確認されなかった。掘り方は北東・南東隅部と西辺南部壁際などが中央部より深く掘られている。中央部では床面は地山を平坦に削り出して設けられており、掘り方が埋め均して設けた壁際のそれに比して硬く締まっている。床面上面は全体的に平坦に整っているが、わずかに西側に向かって傾斜している。掘り方の精査で柱穴状の小ピットが複数検出されているが、上屋を支持する主柱穴の特定には至らなかった。

〔カマド〕東壁やや南寄りに位置し、煙道方位はＮ－90°－Ｅ、真東を向く。カマド袖は残存していないが、カマド周辺に橙～白色の粘土が焼土ブロック炭化物を混入し散在しており、カマドを燃焼部袖・天井部を構築するために使用された可能性がある。燃焼部底面には50×40㎝の焼土が形成され、焼土面の上には灰層がのる。煙道は、その大半を重複する11号住居跡によって壊されており、残存長0.43ｍである。埋土は黒褐色土を主体としており、天井や壁が被熱したブロックも崩落する（11層）。その上位層に甕が横たわって出土しており、煙道部埋土中に地山ブロック層が含まれないことも合わせて考えると、煙道部の構造はくり抜き式ではなく、甕を利用して天井部を構築していた可能性がある。

〔重複〕カマド煙道部が住居跡11に切られている。また東部の埋土上部が溝跡２に切られている。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕177～191・370～372・410。（第30・61・75図、写真図版43・44・51・52）土師器3913.1ｇ、須恵器39.2ｇ出土し、土師器坏４点・高台付１点・甕７点、須恵器坏２点・瓶２点、粘土塊３点、砥石１点、計20点を掲載した。カマド周辺から南側に遺物が多く出土する。土

師器坏は内面が黒色処理されるものが１点でその他はロクロ成形のみ、甕類は非ロクロ成形が２点、残り４点がロクロ成形されている。182は上述のとおりカマド煙道部より出土し、本遺構煙道を切る住居跡11内の破片と接合している。

住居跡14（第30図、写真図版20）

〔位置・検出状況〕A1区南半北西部、ⅡＣ９ｑグリッドに位置する。調査開始当初に設定したトレンチ内において、地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面に広がる暗褐色土の広がりとして検出した。直線的なプランの一部が認められ、炭化物や土器細片などが出土したことから住居跡と推定し精査着手した。

〔規模・形状〕住居の本体は2.9×2.5ｍの方形。南壁中央に方形の張り出し部を持ち、全体が「凸」の字状を呈する。検出面から床面までの残存深度は16㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面は焼土ブロックと炭化物を多量に含む黒褐色シルトに広く覆われている。炭化物は中央部ほど多く壁際に少ない。中央部の炭化物には上屋構築材の一部と思われる大き目の炭化材が散見されることから、焼失した住居跡である可能性が高い。この上位に周囲から漸次流入した暗褐色土が堆積し埋没を終えている。

〔壁・床面・柱穴など〕壁はやや外傾して直線的に立ち上がる。四辺が残存するが上部は削平を受けているものと思われる。南壁の張出し部は1.2×0.7ｍの概ね方形を呈し、底面は住居床面より10㎝ほど高く、東側が皿状にくぼむ。張出し部底面から住居床面を連続して覆う土層（a－a'の３層）が認められることから、廃絶直前まで開口した状態で本体に付属していた施設とみられる。床面は平滑でよく整っている。壁直下が浅い小溝状に低くなる箇所もみられるが明瞭ではない。柱穴も床面上では認められなかった。掘り方の精査では北壁・東壁の直下に溝状の掘り込みが確認され、四隅に主柱穴とみられるピットが検出された（PP１～５）。

〔カマド〕東壁やや南寄りに位置し、煙道方位はＮ－78°－Ｅである。袖・焼土範囲は確認できず、燃焼部内には35×29㎝楕円形の窪みがある。この窪み内に一部に被熱した部分が断面で認められたが（10層）、平面ではその範囲を確認できなかった。埋土中には炭化物や焼土ブロックが含んでいることから、焼成範囲を壊して掘られた窪みと推定される。煙道は全長1.26ｍ、住居壁際から徐々に下がり、煙出し部でさらに一段低くなる。煙出し部底面には、黒褐色土と地山土が互層になって堆積しており（９層）、半裁時には底面まで掘りきれていなかった。これより上の層にも地山ブロック層（７層）など、層中に地山土を多く含むことから、煙道部の構築方法はくり抜き式で、天井部が崩落している可能性がある。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕192～203。（第61・62図、写真図版44）土師器5064.3ｇ出土し、坏６点、甕６点（うち刻書１点）を掲載した。須恵器は出土していない。住居床面、カマド周辺、貯蔵穴内と器形をとどめたままの出土が目立つ。とくに貯蔵穴内底面には、土師器甕（203）と坏３点（192～194）が正位で置かれていた。203の土師器甕はロクロ成形後、内面を磨き黒色処理され、胴部外面には「×」と刻書されている（４ヵ所？）。この他195の坏がカマド北側で倒位、197の坏が住居床面に正位、200の土師器甕は同じく住居床面に、横位で出土している。土師器坏はいずれもミガキ後、内面黒色処理されており、195は外面の口縁部以外、体部～底部にかけてヘラケズリが施されている。甕類はロクロ成形のものが多く、非ロクロの甕は２点、小形のものと、球胴状の器形である。

住居跡15（第31図、写真図版21）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半北西部、ⅡＣ12ｐグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において炭化材と焼土ブロックが広がる方形範囲として検出された。

〔規模・形状〕北壁側を失っているが平面形は方形を呈するものとみられる。計測可能な東西長は3.3ｍ、検出面から床面までの残存深度は10㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面はほぼ全面にわたり多量の炭化材片と焼土ブロックに覆われている。複数の棒状材が西壁・南壁側から内側に向かって倒れこんだように出土しており、廃絶時に焼失した住居とみられる。全体がほぼ床面近く削平を受けており、これより上位の堆積状況は観察できなかった。

〔壁・床面・柱穴など〕壁は南・西辺でわずかに残るのみであり、立ち上がりの様子は観察できなかった。床面は全体に平滑に整い、中央部のみわずかに高く硬化が認められる。床面レベルでは壁溝・はみられなかった。南東・北西隅部には柱穴状の小ピットを持っている。

〔カマド〕東壁南寄りに33×32㎝の焼土が形成される。周囲に袖および煙道は確認できなかったが、住居本体も壁の立ち上がりが残っていないため、これらも消失した可能性が高い。焼成面の奥（住居壁際）には、これを切るように30×23㎝の楕円形の窪みがある。窪み内には炭化物・焼土ブロックが多く含まれていることから、支脚などを抜き取った痕跡と推定される。

〔重複〕北壁側を溝跡１に切られている。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕204～208。（第63図、写真図版45）土師器976.6ｇ、須恵器30.6ｇ出土し、土師器坏３点・甕１点、須恵器瓶１点を掲載した。床面付近まで削平されているためか遺物量は少ない。土師器坏204は倒位で炭化材の上に乗った状態で出土している。これを含み、器形を復元できた坏類はいずれもミガキ後内面黒色処理されており、ロクロ成形のみの土師器坏は小片であった。甕はロクロ成形である。

住居跡16（第31図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半北東部、ⅡＣ18ｐグリッドに位置する。地山黄褐色砂質シルト（Ⅳ層）上面において、礫を伴う焼土範囲として検出。住居跡のカマドである可能性が高いと判断し精査着手した。

〔規模・形状〕削平によって西半部が失われているが概ね方形を呈するものと思われる。計測可能な東壁長は2.4ｍ、検出面から床面までの残存深度は４㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕全体的に削平が著しく埋土の残存は不良である。堆積土が残るのはカマドの前部付近のみで、主体は黒褐色土だが地山ブロックを比較的多く含み黄味を帯びている。

〔壁・床面・柱穴など〕南壁東部と東壁北部で下端部が残存するのみで、壁の大半が削平により失われている。床面はカマド前部が浅くくぼむほかは平坦に整っている。土層断面の観察によれば、カマド前のくぼみは住居内の堆積土が上からの圧力（耕作機械等）によって下方に押し下げられた結果生じた可能性が高く、本遺構が本来的に持つ属性ではないとおもわれる。壁溝・柱穴は検出されなかった。カマド右脇の南東隅部には貯蔵穴の可能性を持つ土坑を持っている。

〔カマド〕東壁やや南寄りに位置し、煙道方位はＮ－88°－Ｅ、真東に近い。袖は地山土で構築されており、手前（焚口側）には芯材として礫を埋め込んでいる。天井部にも礫が使用されており、燃焼部上面にはこれが崩落して３層上面を覆っていた。天井部の礫はよく被熱し、もろくボロボ

ロであった。燃焼部底面には、24×22cmの焼土が形成されており、その奥（住居壁側）には支脚として土師器甕（213）が倒位で置かれていた。煙道は端部を攪乱により消失するが、残存長1.24m、煙出し部へ向って徐々に下る。煙道部天井・底面ともよく焼けていたようで、埋土中には被熱ブロックを多く含む（11～14層）。地山ブロック層も崩落しており、煙道部の構築方法はくり抜き式である。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕209～214。（第63図、写真図版45）土師器737ｇ出土し、坏２点、甕３点、須恵器鉢？１点、計６点と掲載した。遺物量は少なく、カマド周辺から出土するのみである。坏類は内面黒色処理１点、ロクロ成形のみ１点、甕はすべてロクロ成形される。213の土師器甕は倒位で支脚として利用されていた。

住居跡17（第32・33図、写真図版23・24）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半南東部、ⅢＤ20ｅグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において炭化材と焼土ブロックが分布する不整形な範囲として検出された。

〔規模・形状〕南壁側が調査区外に隠れているが平面形は概ね方形を呈するものとみられる。計測可能な東西長は5.4m、検出面から床面までの残存深度は６cm前後である。

〔埋土・堆積状況〕床面はほぼ全面が多量の炭化材と焼土に覆われており、廃絶時に焼失・倒壊した住居跡とみられる。炭化材は特に西半部で良好に残存しており、壁に対して直交あるいは平行方向に並ぶ様子が観察できる。全体がほぼ床面近く削平を受けており、これより上位の堆積状況は観察できなかった。

〔壁・床面・柱穴など〕削平が著しいため壁の立ち上がりはほとんど確認できない。特に図示した北壁のラインは炭化材の広がりと傾斜の変換点から判断したものであり、精査でも判然としなかった。壁溝も検出されい。床面は全体に平滑であり、壁際に比べて中央部がわずかに高く硬化が認められる。内部からは複数の小ピットが見つかっているが、主柱穴の特定はできなかった。このほか壁際には直径約70cm、床面からの深さ約20cmの土坑が３基見つかっている（ｐｐ１～３）。このうち北西隅に位置するｐｐ１では、床面直上に並列する板状材がそのまま土坑底面に連続して落ち込んでいる様子が認められた。板状材の下位に土壌の堆積はなく土坑内面に沿って密着するように出土していることから、これらの板材は開口した空間であった土坑の上を覆って床面に敷かれていたものである可能性が高い。

〔カマド〕東壁に設置されており、住居跡をほぼ正方形と推定すると北寄りに位置する。煙道部の位置は確認できなかった。住居自体が床面付近まで削平されているため、消失してしまった可能性がある。袖は地山土を掘りのこし構築している。燃焼部底面は周囲の床面より緩やかに窪み、60×50cmの焼土が形成される。焼成面の上には天井部が崩落した地山ブロック層、炭化物・焼土ブロックを含む黒褐色土が堆積する。燃焼部内の埋土と似た土が住居外側でも確認でき（６層）ており、残存した煙道の一部の可能性がある。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀）と思われる。

〔出土遺物〕215～229・380・381。（第64図、写真図版45）土師器3350ｇ、須恵器57.4ｇ出土し、土師器坏８点・高台付坏３点・甕３点、須恵器瓶１点、鉄製品２点、計17点を掲載した。床面付近

まで削平されているが遺物量は比較的多く住居跡全体から出土する。甕類が少なく、坏類が目立った。215～217は内外面ともミガキまたはヘラケズリ調整後、黒色処理されており、他の住居の坏と様相が異なる。また、土師器坏218・219・221・225は器高が３～４㎝程度とこれらも他の住居跡に比べ低めである。高台付坏は223・224共に高台部分が高い器形を持つ。甕は非ロクロ成形１点とロクロ成形２点である。

住居跡18（第34図、写真図版25）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半北西部、ⅡＣ11ｑグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において土器と焼土・炭化材が分布する不整形な範囲として検出された。

〔規模・形状〕平面形は概ね方形を呈するものと思われる。計測可能な東西長は約2.8ｍ、検出面から床面までの残存深度は５㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕ほぼ床面あるいはそれ以下まで削平を受けており、埋土の残存は断片的である。床面上には上屋構築材の一部である可能性を持つ炭化材が少量ながら点在する。炭化材の周囲には焼土の生成も認められ、廃絶時に焼失・倒壊したものと思われる。

〔壁・床面・柱穴など〕南壁は住居跡３に切られ、北壁も攪乱によって失われている。全体に削平が著しく、残存する壁も対上がりは不明瞭である。床面は平滑で目立った硬化部はみられない。壁溝・柱穴は検出されなかった。

〔カマド〕東壁に設置されており、住居跡を正方形と推定するとほぼ中央に位置する。煙道方位はＮ－79°－Ｅである。袖は地山土で構築され南側のみ残存する。芯材として甕（232）が利用されていた。燃焼部底面には、37×32㎝の焼土が形成され、これを切るように直径20㎝程度の小穴が掘られている。支脚の抜き取り痕と推定される。煙道は全長1.2ｍ以上、煙出し部端部と、住居壁付近が後世のかく乱により消失するが、煙道部から煙出し部へ向って徐々に下っているようである。埋土は黒褐色土、地山ブロック層が堆積している。残存部が少ないため煙道の構築方法は判断できかった。

〔重複〕南壁を住居跡３に切られている。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀初頭）と思われる。

〔出土遺物〕230～233・373。（第65図、写真図版45・46）土師器3200.7ｇ出土し、土師器坏？１点・甕３点、粘土塊１点、計５点掲載した。須恵器は出土していない。カマド周辺部に土師器甕類が集中する。321・232ともに非ロクロの甕で、231底部は床面に接し置かれた状態で、胴部～口縁部は周囲につぶれて散っていた。232はカマドの芯材として利用されていたものと推定される。30は内外面にナデが施されているものの輪積痕の残る口辺部破片で、器種がはっきりしなかった。

（２）竪穴状遺構

竪穴状遺構１（第35図、写真図版26）

〔位置・検出状況〕Ａ１区南半中央部、ⅡＤ15ｂグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土の方形範囲として検出された。住居跡に類する遺構と判断し精査に着手した。

〔規模・形状〕平面形は2.7×2.4ｍの隅丸方形である。検出面から床面までの残存深度は50㎝前後である。

〔埋土・堆積状況〕底面には炭化材が広がり部分的に焼土の生成が認められる。壁際には杭状の炭化材もみられる。これらの上を覆うのは地山ブロックを多量に含んだ層（５・12層）で、北西側から流し込まれたように堆積している。おそらく人為的に投げ入れられたものであろう。この時点で遺構内は南東側が深い凹地となっている。その後凹地内には、被熱赤変した大型礫（径30～40cm）と多量の土器片が西側から投げ込まれ、その上位は焼土ブロックと炭化物を多く含む赤みの強い層に覆われる。その後も周囲からの流入土により漸次堆積が進み埋没を終えたものとみられる。
〔壁・床面・柱穴など〕壁は四辺で良好に残存しており、わずかに外傾してほぼ直線的に立ち上がる。底面には地山下部の水分の多いグライ化した砂質土が露出しており、精査時には足が沈むほど軟弱であった。とはいえ断面観察によれば埋土の下面はほぼ水平に整っており、廃絶以前は安定した硬度を保っていたと推測される。壁溝や柱穴は確認されなかった。掘り方は北壁東部と南・西壁の直下が深くなっている。
〔カマド〕カマドおよびそれに類する施設は伴わない。
〔重複〕なし。
〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９世紀後半～10世紀）と思われる。
〔出土遺物〕234～253・411。（第65～67・75図、写真図版46・47・52・附編２）土師器13298.7ｇ、須恵器9808.5ｇ出土し、土師器坏８点（墨書１点・刻書３点含む）・把手付き土器１点・甕７点・ナベ１点、須恵器瓶１点・大甕２点、砥石１点、布片１点、計22点を掲載した。今回の調査において遺構別出土重量が最も多い。上述のとおり土層の堆積状況に沿うようにレンズ状に遺物も出土しており、礫とともに投げ込まれた可能性が高い。東半部中央付近で４層下面にのるように出土した破損した須恵器大甕（252）の取り上げを行ったところ、大型の胴部破片の下から５cm四方ほどの布片が出土した。蛇腹様のひだを持っている。周囲の土壌には採集不能な細片が散見され、本来はさらに大きいものであったと思われる。坏類（234～241）は、内面黒色処理されるものが多く、図化していない小片もこれに準ずる。竪穴住居跡から出土している遺物に比べ、内面の磨滅が少なくミガキがはっきりと確認できた。242は、内外面ミガキが施されており、欠損しているが体部に棒状の把手が付く器形と推定される。甕類はすべてロクロ成形で、248は内面が磨かれ黒色処理される。図化していない小片には非ロクロの甕も存在した。

（３）土　　坑

土坑１（第36図、写真図版27）
〔位置・検出状況〕Ａ１区中央部、ⅡＤ18ａグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な黒褐色土の不正形範囲として検出された。焼土・土器片も散在していた。
〔規模・形状〕平面形は不正形で、東側の113×78cmの楕円形に、57×38cmの小さい楕円形プランが西側に付属する。両者を合わせると133×113cmである。検出面から底面までの残存深度は10cm程度である。
〔埋土・堆積状況〕底面には部分的に焼土が形成されており、土器片・炭化物が密集する。その上に炭化物・焼土ブロックを混入した黒褐色土が堆積する。底面が被熱していることから土坑内で焼成が行われたと考えるが、被熱範囲は部分的で炭も粉々に砕け散在していることから、焼成後に土坑内のものを掻きだすような作業が行われたものと推定される。
〔重複〕なし。
〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９～10世紀）と思われる。

〔遺物〕254～262。（第254図、写真図版47・48）土師器1132ｇ出土し、甕類８点を掲載した。土器片が剥片のように剥がれた状態で密集する（260・写真図版17）。甕類が多く、小片ではっきりしないものも多いが、非ロクロ製品がほとんどである。254～258は甕の口縁部で、形状・色調・胎土などから、すべて別個体と判断した。器形を復元できた個体は258のみである。259は甕胴部片で、竪穴住居跡出土の遺物に比べ調整がはっきりとしており、磨滅が少ない印象を受けた。261・262は甕底部片で、いずれも内面が剥落している。

土坑２（第36図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕Ａ１区中央部東寄り、ⅡＤ15ａグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な黒褐色土の楕円形範囲として検出された。焼土・土器片も散在していた。

〔規模・形状〕平面形は150×67㎝の東西に長い楕円形である。検出面から底面までの残存深度は10㎝程度である。

〔埋土・堆積状況〕底面の直上には地山土を多く含んだ黒褐色土が堆積しこの上面に被熱した面が確認される。被熱が弱く掘りすぎてしまった箇所も多く、平面でその範囲を記録することができなかったが、おそらく、遺物が出土する範囲を一回り大きくする程度に焼土が形成されており、土坑内で焼成が行われたものと考える。この面には炭化物・土器片も散在し、その上に炭化物・焼土ブロックを混入する黒褐色土が堆積する。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９～10世紀）と思われる。

〔遺物〕263～267・374。（第254図、写真図版48）土師器391.4ｇ出土し、坏１点、高台付皿１点、甕３点、粘土塊１点、計６点を掲載した。土坑１同様、遺構内に剥片のように剥がれた状態の土器片が散在していた。263は土師器坏で、内面が磨かれ黒色処理される。264の高台付皿は、住居１や８で出土しているものと類似する。265～267の甕底部はいずれも内面が剥落している。

土坑３（第37図、写真図版27）

〔位置・検出状況〕Ａ１区中央部西寄り、ⅡＤ13ａグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な黒褐色土の不正形範囲として検出された。焼土・炭化物も散在していた。

〔規模・形状〕平面形は165×80㎝の南北に長い不正な楕円形である。検出面から底面までの残存深度は５～10㎝程度である。

〔埋土・堆積状況〕炭化物・焼土ブロック、カマドの煙道内にあるような被熱した土片、粘土ブロックなどが、全部が混ざった状態で堆積する。底面に被熱した痕跡が確認できなかったが、形状、埋土の状況など土坑１と似ており、土坑内で焼成が行われた後、焼成面もろとも中身を掻きだされたのではないかと推定する。

〔重複〕なし。

〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９～10世紀）と思われる。

〔遺物〕268。（第254図、写真図版48）土師器が68.9ｇ出土しており、内面黒色処理された土師器坏１点を掲載した。遺物量は少なく、器面がハクラクした土器片は確認できなかった。

土坑４（第37図、写真図版28）

〔位置・検出状況〕Ａ１区中央部、ⅡＤ17ｂグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面

において明瞭な黒褐色土の不正形範囲として検出された。
〔規模・形状〕平面形は106×70cm、東西に長い不正楕円形である。検出面から底面までの残存深度は10cm程度である。
〔埋土・堆積状況〕底面、２層上面に断片的な焼土範囲が認められ、その上に炭化物・焼土ブロックを混入する黒褐色土が堆積する。土坑内で焼成が行われたと判断するが、断片的に焼土が形成されるとは考え難く、おそらく被熱が弱くその他の範囲では確認できなかったものと推定される。また１・３号土坑同様、焼土は掻きだされてしまった可能性も考えられる。
〔重複〕なし。
〔遺構の時期〕出土遺物から平安時代（９～10世紀）と思われる。
〔遺物〕269～271。（第254図、写真図版48）土師器が65.2ｇ出土し、甕３点を掲載した。遺物量は少ないが、１層下面に器面が剥がれた土器片が散在する。掲載した３点も、内面や割れ口が大きく剥落している。

土坑５（第37図、写真図版28）
〔位置・検出状況〕A1区南半西部、ⅡＤ12ｂグリッドに位置する。地山黄褐色シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な暗褐色土範囲として検出された。住居跡の可能性があるものとして精査着手した。
〔規模・形状〕開口部は3.5×2.4ｍの楕円形で、底面までの残存深度は52cmである。
〔埋土と堆積状況〕底面には長軸方向に沿って芝状の細い枝が敷かれている。この上には黒褐色粘土と地山砂がラミナを形成しており（４層）、一定の期間、開口した状態で水性堆積が進んだことを示している。この上位は地山ブロックを多量に含む土が投げ入れられ（３層）、凹地となった後は周囲からの流入土によって埋没が進んだものと思われる。
〔重複遺構〕溝跡２に切られる。
〔遺構の時期〕不明である。
〔出土遺物〕土師器・土製品54.6ｇ出土し、土製品１点（375）のみ表掲載した。土師器は、ロクロ成形の坏が出土しているが、小片のため図化していない。

土坑６（第37図、写真図版28）
〔位置・検出状況〕Ａ１区南半北部、ⅡＣ17ｒグリッドに位置する。地山黄褐色砂質シルト（Ⅳ層）上面において明瞭な楕円形範囲として検出された。
〔規模・形状〕開口部は182×135cmの楕円形で、底面までの残存深度は14cmである。南寄りの底面が一段深くなっている。
〔埋土と堆積状況〕黄褐色土・黒褐色土・地山砂質土のブロックによる混土層で、人為的に埋められたものとみられる。
〔重複遺構〕西部が住居跡６に重複しこれを切っている。
〔遺構の時期〕不明である。
〔出土遺物〕なし。

（４）溝　　跡

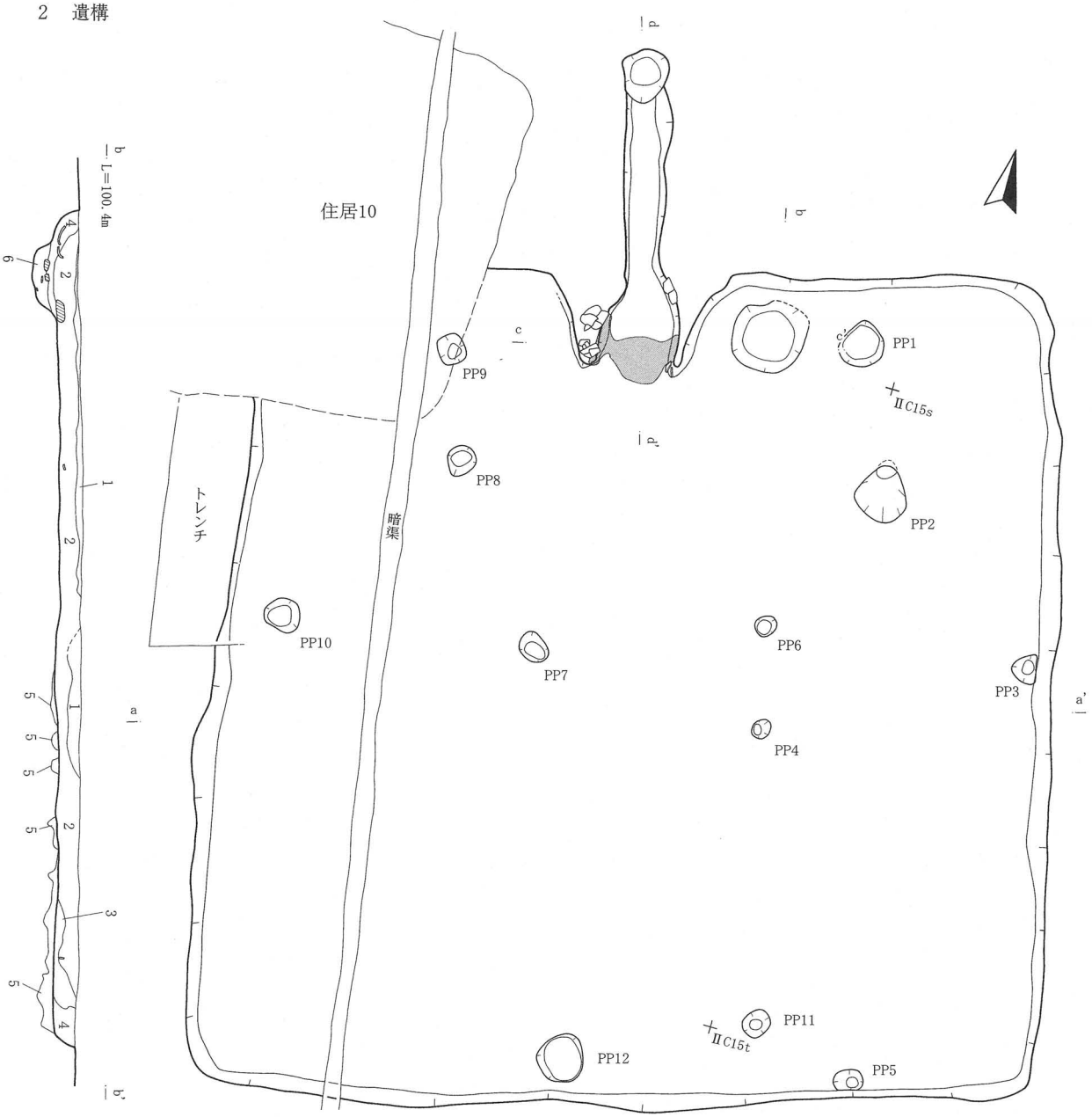
溝跡１（第７・38・39・41図、写真図版29）
〔位置・検出状況〕Ａ１区南半部の北縁、ⅡＣ８ｐ～ⅡＣ19ｏグリッドに位置する。地山黄褐色砂

質シルト（Ⅳ層）においてやや不明瞭な帯状の範囲として検出された。
〔規模・形状〕検出した全長は55.0ｍ、幅は90～170㎝、深さは50㎝前後である。ⅡＣ16ｑグリッド付近で緩く屈曲しており、西半部がＮ－85°－Ｗ、東半部がＮ－72°－Ｅの向きに走行する。断面観察から本来は直立に近い壁面を有していた可能性が高い。
〔埋土と堆積状況〕黒褐色土を主体とする。通水に伴う水性堆積と周囲からの流入土により埋没したものとみられる。
〔重複遺構〕住居跡15を切っている。
〔遺構の時期〕住居跡との重複関係と出土遺物から10世紀以降といえる。
〔出土遺物〕272・273・274。（第68図、写真図版48）土師器1218.3ｇ、須恵器233.7ｇ出土して、土師器坏１点・甕１点、須恵器坏１点、計３点を掲載した。いずれもロクロ成形されている。住居15を切っていることから、住居内の遺物が流れ込んだ可能性が考えられる。

溝跡２（第38～40・42図、写真図版30）
〔位置・検出状況〕Ａ１区南半西部、ⅡＣ12ｒ～ⅡＤ12ｅグリッドに位置する。地山黄褐色砂質シルト（Ⅳ層）においてほぼ明瞭な帯状の範囲として検出された。
〔規模・形状〕ほぼ南北方向に走行し、北端が溝跡３に合流する。北半部は幅約50～100㎝程で直線的に走行するが、中央～南部はやや湾曲し水溜状の長楕円形の掘り込みが２つ連結して幅と深さともに拡大している。北側の掘り込みの規模は平面5.5×3.1ｍ・深さ80㎝、南側は10.2×3.5ｍ・深さ60㎝である。南側の掘り込みより先では再び縮小し北半部と同規模となっている。
〔埋土と堆積状況〕黒褐色土を主体とする。通水に伴う水性堆積と周囲からの流入土により埋没したものとみられる。北半及び南端部の溝と南部の掘り込み部の埋土は連続することから、これらが同時存在したものとみてよい。北側の水溜状掘込み部の底面には部分的に杭状の材やその痕跡が並ぶ様子が観察された。隣接の土坑５底面からは柴状の材が敷かれたように出土していることから、柵状遺構に類するものの可能性がある。底面からはクルミ・モモ種子等も出土している。
〔重複遺構〕北端が溝跡３に合流するが新旧関係は不明。北部で住居跡13を切り、中央部で土坑５を切る。
〔遺構の時期〕住居跡との重複関係から10世紀以降といえる。おおむね中～近世か。
〔出土遺物〕275・276・277・361・362・382。（第68図、写真図版48）土師器936.2ｇ、須恵器126ｇ出土し、土師器坏２点・甕１点を掲載した。土師器坏はロクロ成形のみものものと、内面黒色処理されたものがあり、甕は非ロクロ成形である。

溝跡３（第38・39・41図、写真図版29）
〔位置・検出状況〕Ａ１区南半部の北縁、ⅡＣ９ｒ～ⅡＣ19ｐグリッドに位置する。地山黄褐色砂質シルト（Ⅳ層）においてやや不明瞭な帯状の範囲として検出された。
〔規模・形状〕検出した全長は52.0ｍ、幅は30～50㎝、深さは30㎝前後である。ⅡＣ15ｒグリッド付近でごく緩く屈曲しており、西半部がＮ－81°－Ｅ、東半部がＮ－73°－Ｅの向きに走行する。全体にわたり新期の暗渠が重複しており、壁上部の多くが壊されているが、下部は良好に残存している。断面観察から本来は直立に近い壁面を有していた可能性が高い。
〔埋土と堆積状況〕黒褐色土を主体とする。通水に伴う水性堆積と周囲からの流入土により埋没したものとみられる。

〔重複遺構〕住居跡６を切っている。
〔遺構の時期〕住居跡との重複関係と出土遺物から10世紀以降といえる。
〔出土遺物〕278。（第68図、写真図版48）土師器335.2ｇ、須恵器38.3ｇ出土し、土師器坏の口縁部片を１点掲載した。ロクロ成形後内面を磨かれ黒色処理されている。

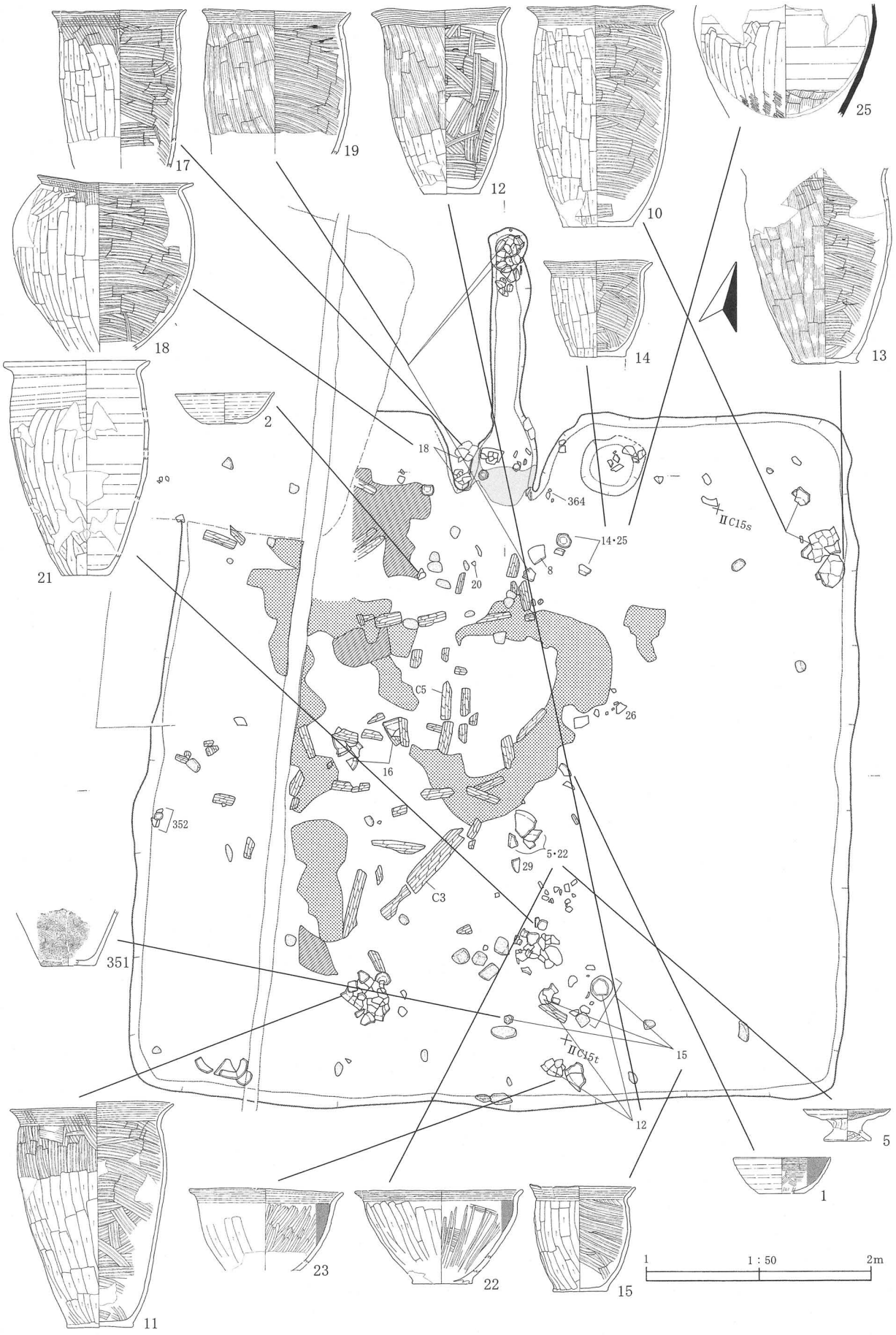


住居1　(a-a')、(b-b')
1　10YR3/2黒褐色粘土質シルト. 10YR5/2粘土ブロックやや多量含む. 上から押しつぶされたような層.　カク乱層か？粘性・締まり共にやや有.
2　10YR3/2～10YR2/3黒褐色シルト. 下半分黒味強く地山ブロックやや多く含む. 粘性・締まり共にやや有.
3　10YR3/2黒褐色シルト. 粘性・締まり共にやや有.
4　10YR2/2黒褐色粘土質シルト. 地山ブロック少量含む. 粘性有.
5　10YR3/2黒褐色砂質シルト. 締まり・粘性やや有. 地山ブロック大. 10YR3/2黒褐色シルト 細かくごく微量に混入(掘り方).
6. 地山ブロック砂質シルトに炭・焼土ブロック(粒径～1㎜)斑状に少量混じる. 骨片多く含む.

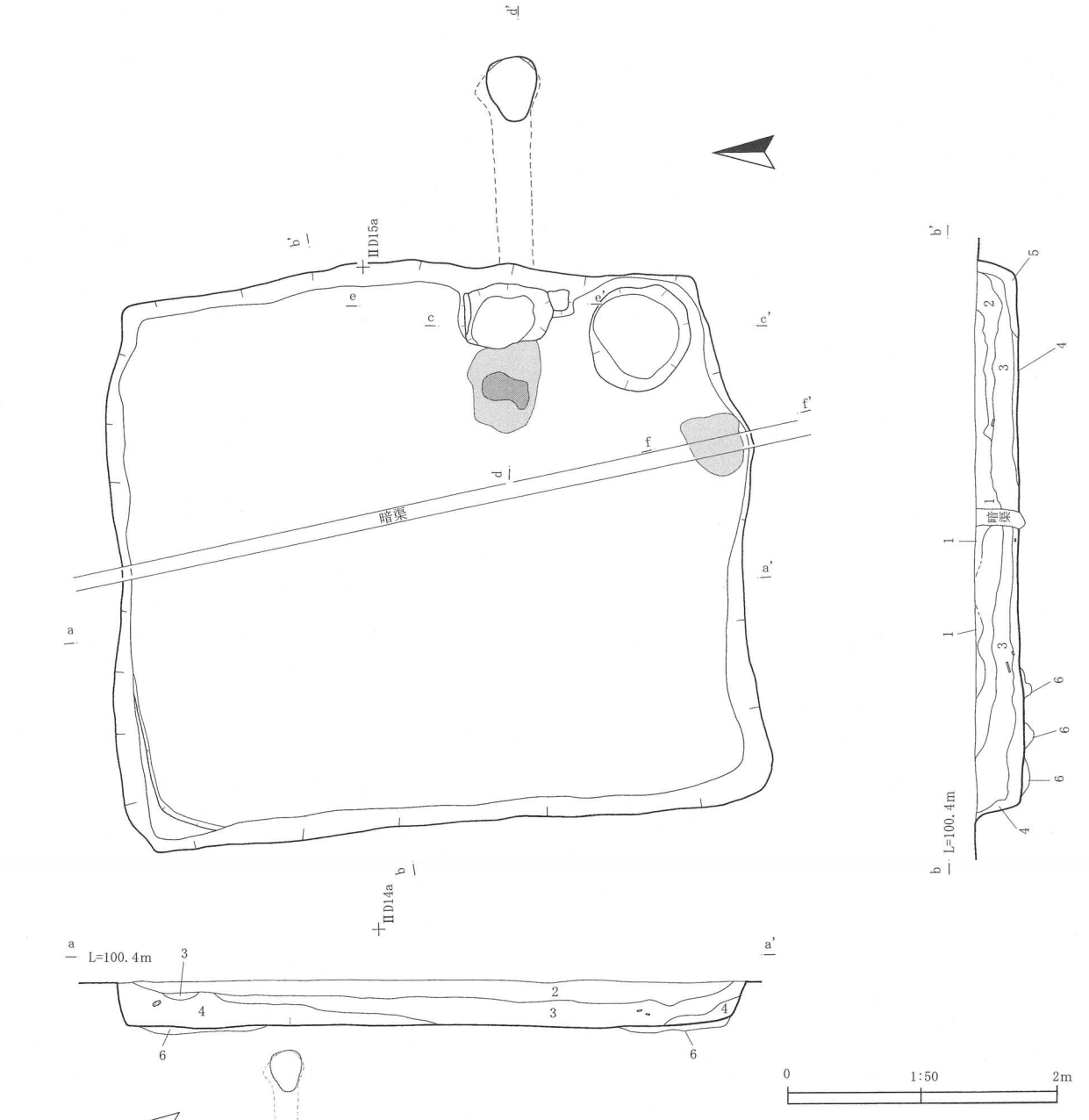
住居1　(c-c')、(d-d')
1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト. 10YR2/2黒褐色シルトブロックごく微量混入. 締まり密. 粘性やや有,
2　10YR6/3にぶい黄橙～10YR5/4にぶい黄褐色粘土. 白色に近い部分含む. 灰？粘性有. ネチョネチョ.
3　10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルト. ガッチリ締まっている. ソデ構築土. ※被熱部10YR5/8黄褐色-10YR4/8
4　10YR2/2黒褐色粘土質シルト. 10YR5/3にぶい黄褐色粘土質シルトブロック多量. 炭粒ごく微量混入.
5　10YR4/2灰黄褐色粘土質シルトブロック層. (煙道部天井崩落土),
6　10YR4/3にぶい黄褐色シルト. 焼土ブロック(赤褐色及び黒っぽいススけた土塊)やや多量含む. (煙道天井崩落土).
7　10YR5/8黄褐色シルト. 粘性やや有. 締まりやや密. ガッチリとはしていない. (燃焼部焼土).
8　10YR2/3黒褐色シルト. 地山ブロック大混入. 10YR2/2黒褐色シルト 細かく微量混入. (掘り方？).

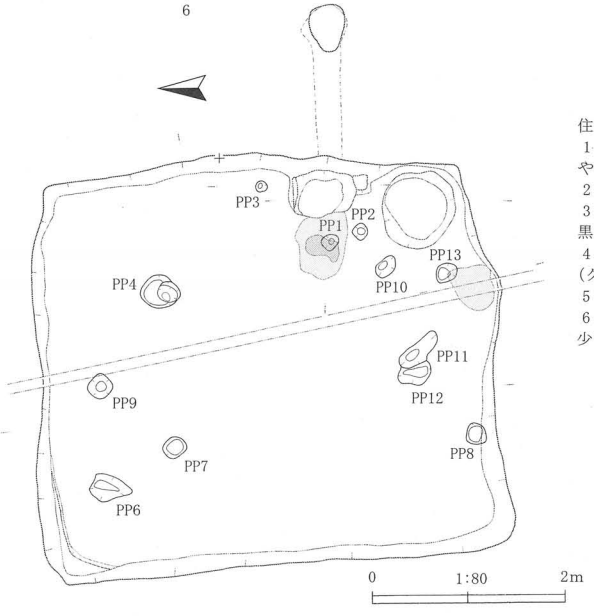
0　1：50　2m

第8図　住居跡1（1）


17
19
12
10
25
18
14
13
2
21
18
364
ⅡC15s
14・25
8
20
C5
26
16
352
5・22
29
C3
351
ⅡC15t
15
12
5
1
23
22
15
11
1
1：50
2m

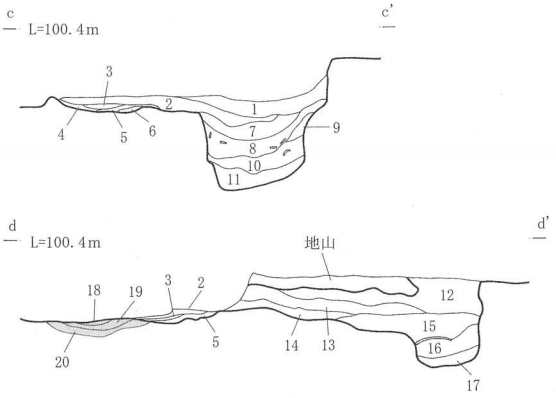
第９図　住居跡１（2）





住居２　(a-a')、(b-b')
1　10YR4/3にぶい黄褐色～10YR3/3暗褐色シルト．締まり密．粘性弱．全体に灰白火山灰を含みやや砂質．乾きやすい．1aは火山灰ブロック(粒径～10㎜)がレンズ状に入る．(畝間状？)．
2　10YR3/2黒褐色シルト．締まり密．3層に比べ黄味．(酸化のため)．
3　10YR3/2～10YR2/3黒褐色シルト．締まり密．2層類似土ブロック．地山ブロックを多量に含む．黒っぽい．
4　10YR3/2～10YR2/3黒褐色粘土質シルト．粘性やや強．地山ブロック少量含む．床直付近青味．(グライ化)．
5　10YR3/4暗褐色砂質シルト．
6　10YR3/2黒褐色砂質シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック大．10YR3/2黒褐色シルト少量混入．(住居１より多い、中央は、ほとんど掘り方なし)．

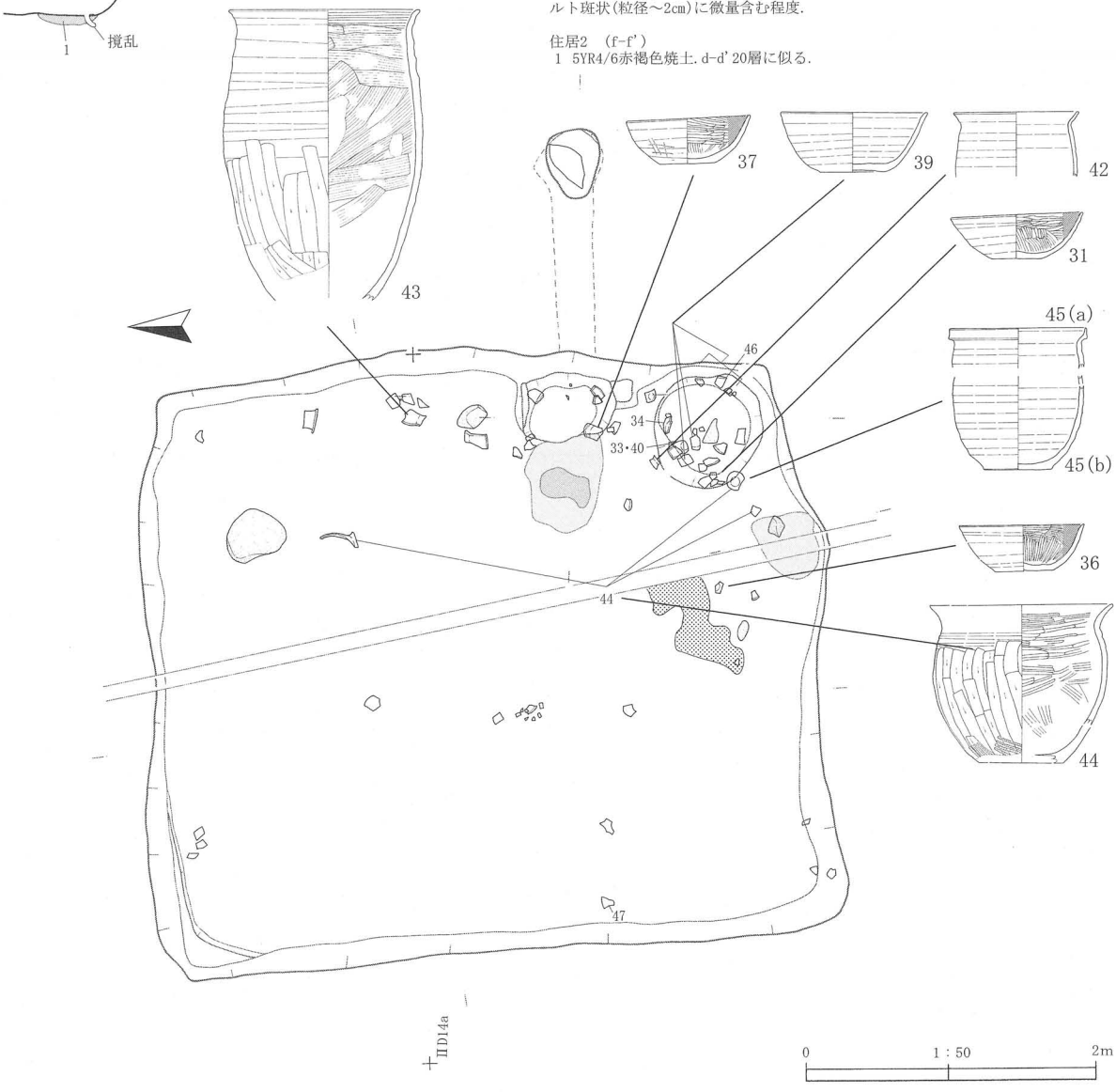
第10図　住居跡２（1）



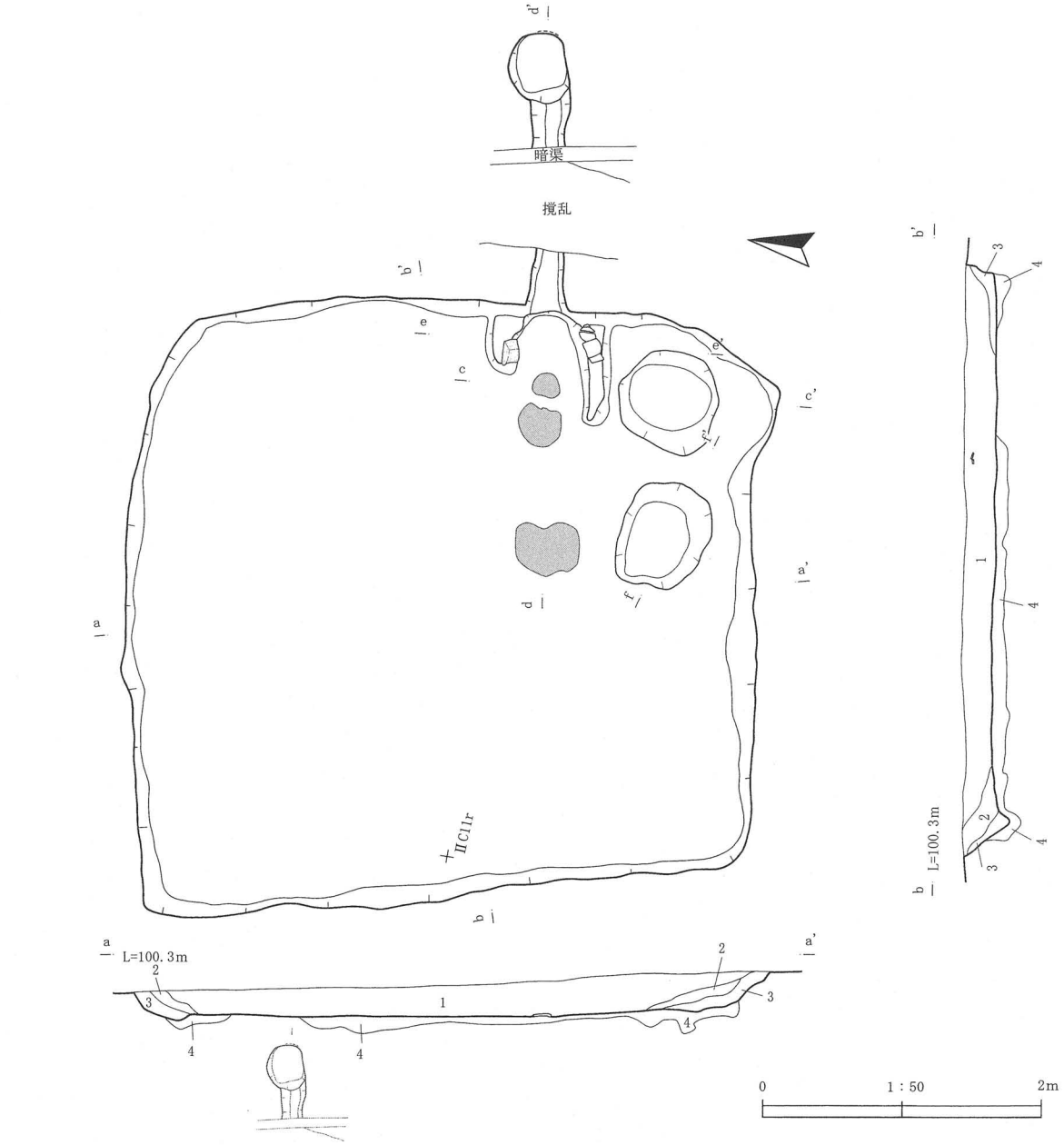
住居2　(c-c')、(d-d')　カマド・貯蔵穴
1　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック少量．炭ごく微量含む．やや黒め．
2　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック細かく微量．炭(粒径1cm)少量．焼土ブロック(粒径～1cm)含む．やや黒め．グライ化．
3　10YR2/3黒褐色シルト．(黄灰色粘土大混入)．粘性やや有．締まり弱．
4　10YR2/3黒褐色シルト．粘性・締まり共にやや弱．地山ブロック多量．炭・焼土ブロック混入．
5　5YR5/6明赤褐色砂質シルト．締まり粘性共にやや弱．焼土？もしくは天井崩落．3層の粘土少し混じるか．5層焼土微それ以前の炭か？
6　7.5YR2/3極暗褐色シルト．締まり粘性共にやや弱．炭・焼土ブロック細かく含む．
7　10YR2/2黒褐色シルト．やや10YR2/3黒褐色シルトより．締まりやや弱．粘性やや有，炭微量．地山ブロック微量含む．
8　10YR4/3にぶい黄褐色シルト．締まりやや弱．粘性やや有．(地山崩落層)．
9　10YR2/3黒褐色砂質シルト．締まり粘性共にやや弱．炭ごく微量．地山ブロックごく微量．
10　10YR3/1黒褐色粘土質シルト．締まりやや弱．粘性やや有．大きい炭層(径3cm弱)混入．グライ化．
11　10YR3/1黒褐色砂質シルト．締まりやや弱．粘性やや有．炭層なし．グライ化．
12　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック細かく少量(粒径5mm)．炭ごく微量含む．上面に被熱土部分的に残る．
13　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック大きく斑状に(粒径3cm)やや多量に混入．天井被熱土が部分的に崩落して層下面に堆積．
14　12層に似る．
15　10YR2/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．ややグライ化した地山多量．10YR2/2黒褐色シルト細かく微量．炭ごく微量含む．
16　地山グライ砂層．
17　地山粘土質シルト．焼土．炭．大きく斑状に入る．
18　10YR4/2灰黄褐色焼土．かたく焼ける．地山被熱．
19　5YR4/8赤褐色焼土．焼成よい．締まり．粘性やや弱い．地山被熱．
20　5YR4/6赤褐色焼土．19層より被熱弱くまだらに焼けている．

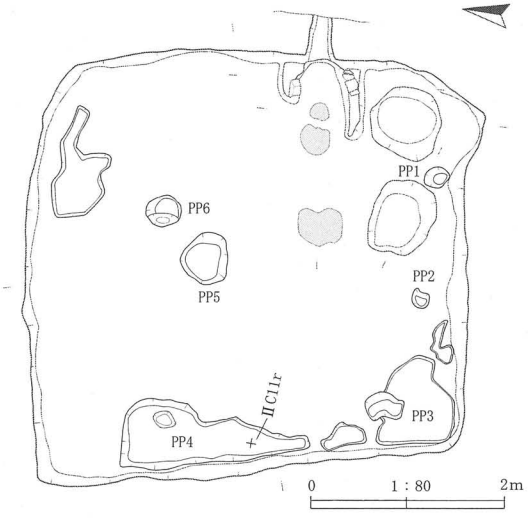
住居2　(e-e')　カマド
1　10YR3/4暗褐色砂質シルト．(砂に近い)．混入物なし．
2　10YR3/4暗褐色砂質シルト．地山ブロックやや多量．炭・焼土微量含む．
3　10YR2/3黒褐色砂質シルト．粘性・締まり共にやや弱．地山大量．10YR2/3黒褐色シルト斑状(粒径～2cm)に微量含む程度．

住居2　(f-f')
1　5YR4/6赤褐色焼土．d-d'20層に似る．



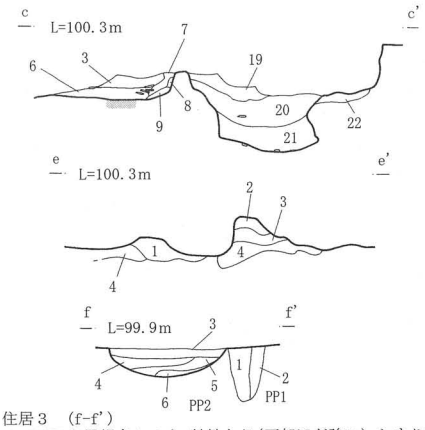
第11図　住居跡２（2）



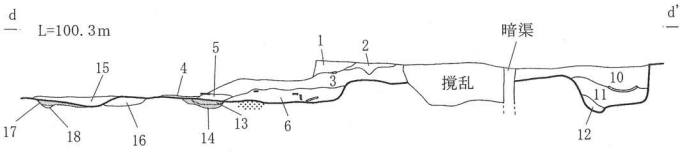


住居３　(a-a')、(b-b')
1 10YR3/2～10YR2/3黒褐色シルト．10YR5/3～10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト(地山)ブロック(粒径10-20㎜)やや多量含む．上部にやや多い．下部は地山ブロック多く暗い(2層に似る)．
粘性やや有．締まり密．
2 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト～10YR3/2黒褐色粘土質シルト．地山ブロック(粒径～5㎜)ごく微量．粘性有．締まりやや有．
3 10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト～10YR3/2黒褐色粘土質シルト．地山ブロック(粒径5～20㎜)やや多量．粘性・締まり共にやや密．(壁際の堆積層)．
4 10YR5/4にぶい黄褐色砂質ブロックと10YR2/2黒褐色シルトブロックの混土層．上下方向に圧縮され、薄層の重なりとなっている．上面が床面．締まり密．

第12図　住居跡３（1）

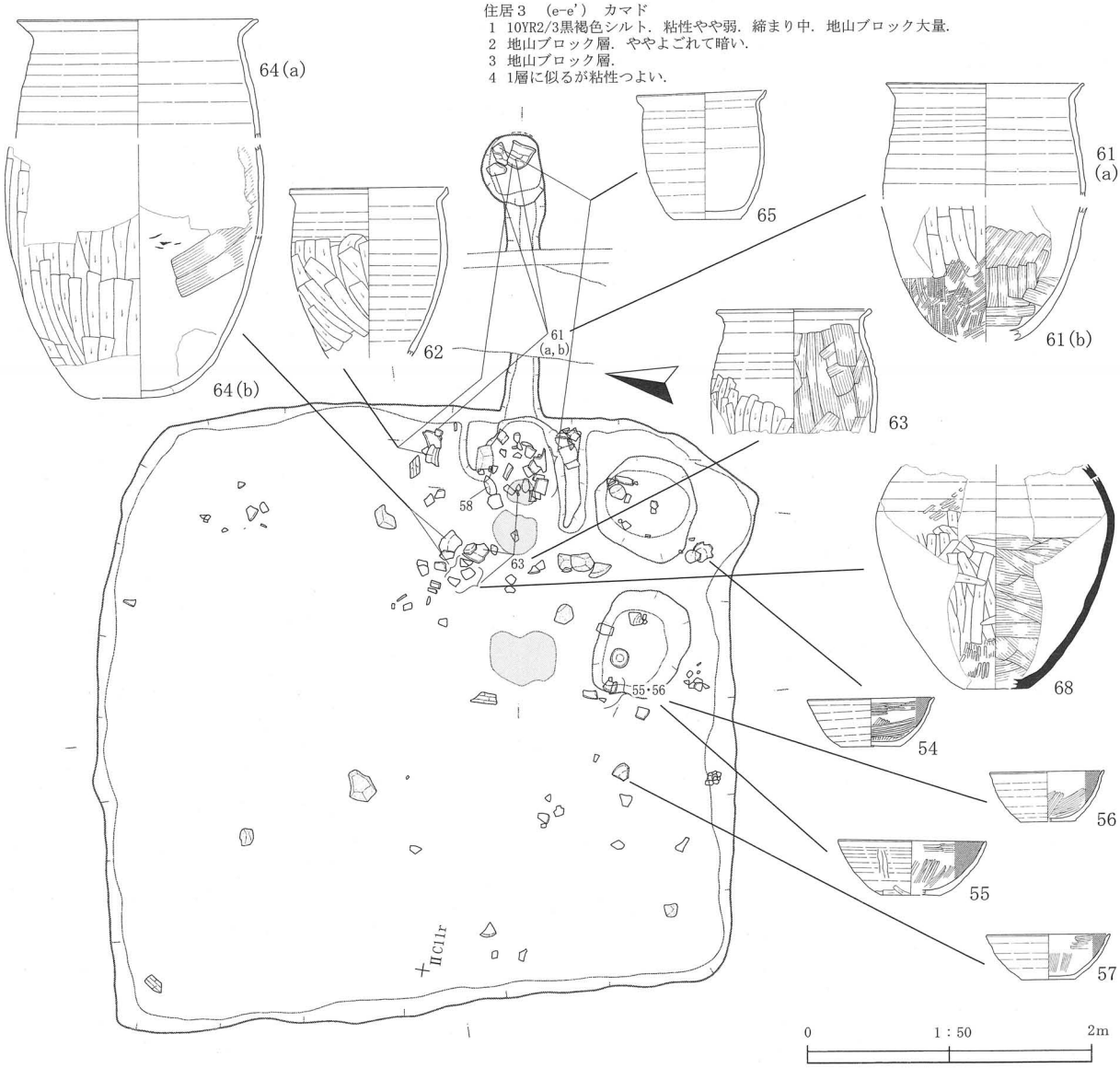


住居３　(f-f')
1　10YR3/2黒褐色シルト．粘性あり(下部ほど強い)．しまり弱い．地山ブロック少量細かく入る．柱痕．
2　10YR3/2黒褐色シルト．極微量に地山ブロック大量．粘性やや弱い．しまり中．掘方．
3　10YR2/3黒褐色シルト．粘性中．しまりやや弱い．焼土ブロック少量(粒径～2cm)．炭化物微量．地山ブロック少量斑状に含む．下部には黒味の強い層(10YR2/2 黒褐色)が薄く入る．
4　3層と似るが炭化物３層より多い．
5　地山砂質シルトブロック層に10YR2/3 黒褐色シルト極微量．被熱したブロックも微量含む．粘性弱い、しまり中．
6　5層に似るが被熱ブロック入らない．

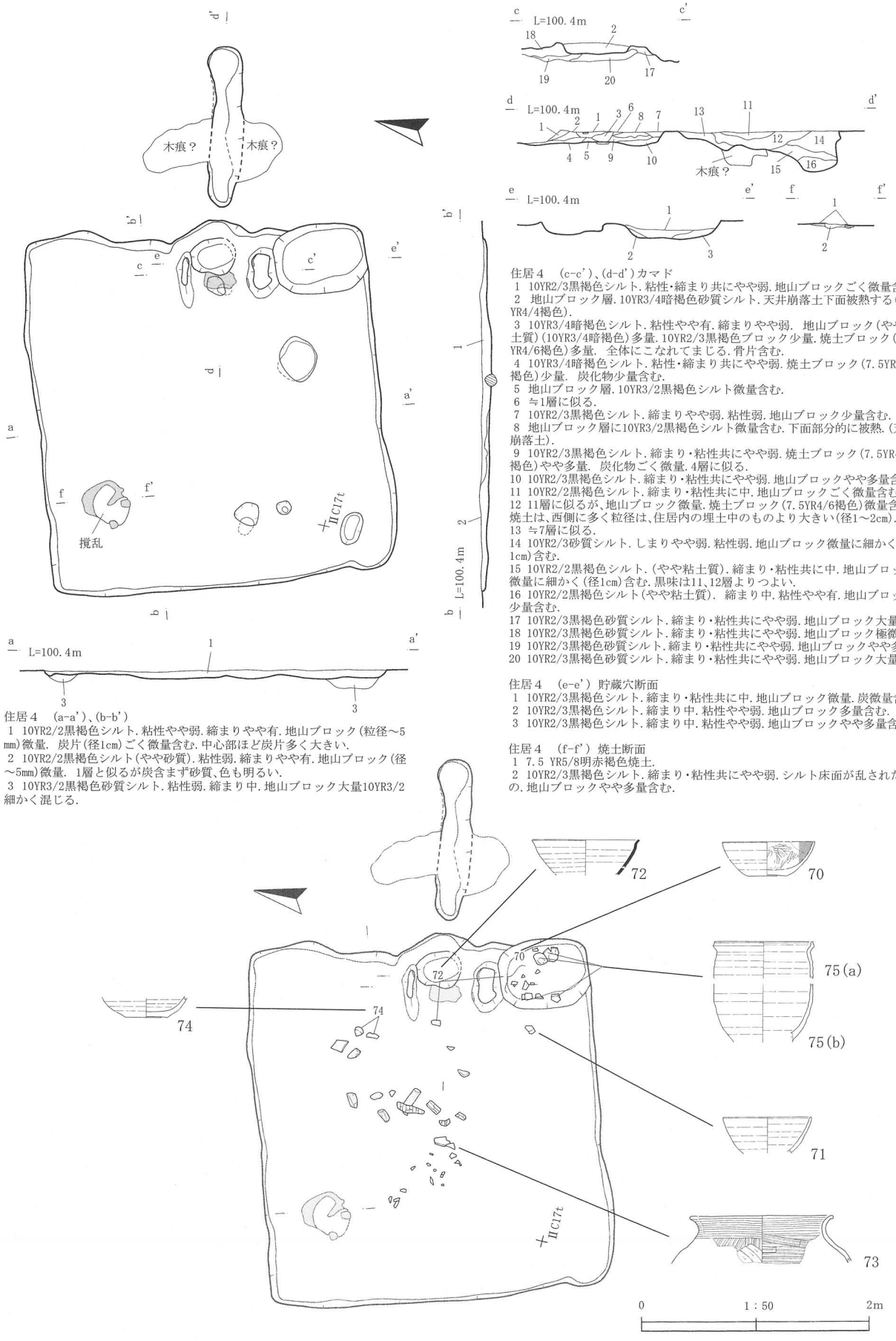


住居３　(c-c')、(d-d')カマド
1　10YR2/3黒褐色シルト．粘性やや弱．　締まり中．　地山ブロック微量含む．
2　地山ブロック層．下面被熱．10YR2/3黒褐色シルト含む．
3　10YR2/3黒褐色シルト．粘性やや弱．締まり中．地山ブロック．5YR4/8赤褐色焼土ブロック大量に含む．
4　6層に似るが、締まり弱く粘性あり．
5　10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト．粘性やや有．　締まり弱．灰層ネチョネチョ．
6　10YR2/3黒褐色シルト．粘性やや有．締まり中．地山ブロック大量．焼土ブロック．炭化物全体に少量まじる．
7　10YR2/3黒褐色シルト．粘性やや有．締まり中．5YR4/8赤褐色焼土ブロック大量に含む．
8　5YR5/8明赤褐色焼土ブロック層．(壁被熱土崩落層)．
9　地山ブロック層に10YR2/3黒褐色シルト微量入る．
10　≒3層に似る．
11　10YR2/2黒褐色シルト．粘性やや弱．締まり中．焼土ブロック少量．炭少量．4･6層より粒径大きい．
12　10YR4/3にぶい黄褐色地山砂質シルト(崩落)．炭ごく微量含む．地山よりやや粘性ある感じ．
13　7.5YR3/2黒褐色焼土．よく焼け硬い．
14　5YR5/8明赤褐色焼土層．地山被熱．
15　10YR2/3黒褐色シルト．粘性･締まりやや弱．炭･焼土微量含む．
16　10YR2/3黒褐色シルト．粘性･締まりやや弱．炭･焼土全体に細かく多く入る．
17　5YR4/8赤褐色焼土．
18　10YR2/3黒褐色シルト．粘性･締まりやや弱．炭･焼土ブロック微量含む．
19　3層に似る．
20　19層に地山ブロック少量．　炭微量(径1cm)．
21　10YR3/1黒褐色．20層に似るがグライ化して青味．炭多い．
22　10YR2/3黒褐色シルト．粘性やや弱．締まり中．地山ブロック斑状にやや多量に混入

住居３　(e-e')　カマド
1　10YR2/3黒褐色シルト．粘性やや弱．締まり中．地山ブロック大量．
2　地山ブロック層．ややよごれて暗い．
3　地山ブロック層．
4　1層に似るが粘性つよい．



第13図　住居跡３（2）



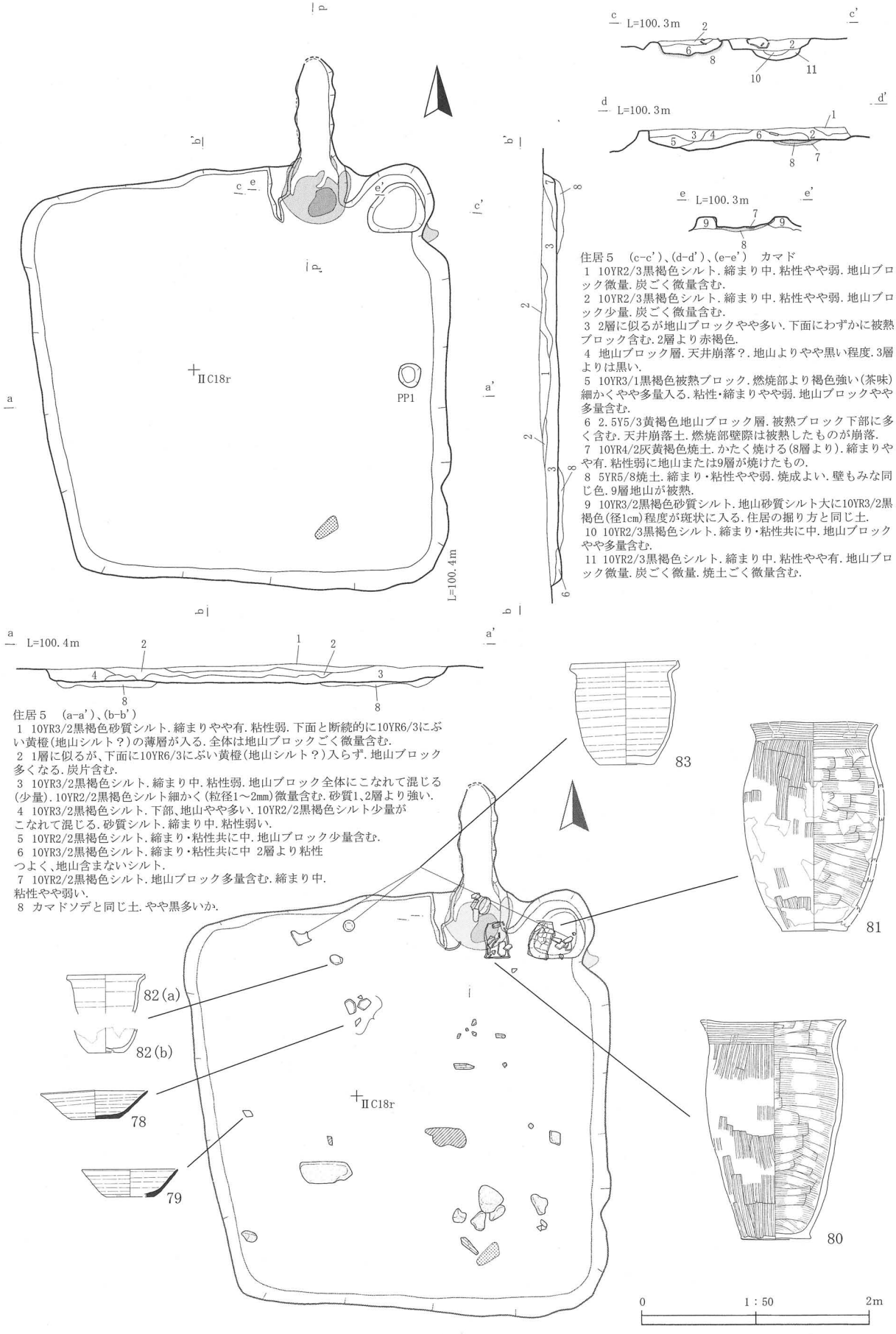
住居４　(a-a')、(b-b')
1　10YR2/2黒褐色シルト．粘性やや弱．締まりやや有．地山ブロック（粒径～5mm）微量．炭片（径1cm）ごく微量含む．中心部ほど炭片多く大きい．
2　10YR2/2黒褐色シルト（やや砂質）．粘性弱．締まりやや有．地山ブロック（径～5mm）微量．1層と似るが炭含まず砂質、色も明るい．
3　10YR3/2黒褐色砂質シルト．粘性弱．締まり中．地山ブロック大量10YR3/2細かく混じる．

住居４　(c-c')、(d-d')カマド
1　10YR2/3黒褐色シルト．粘性・締まり共にやや弱．地山ブロックごく微量含む．
2　地山ブロック層．10YR3/4暗褐色砂質シルト．天井崩落土下面被熱する（7.5YR4/4褐色）．
3　10YR3/4暗褐色シルト．粘性やや有．締まりやや弱．地山ブロック（やや粘土質）（10YR3/4暗褐色）多量．10YR2/3黒褐色ブロック少量．焼土ブロック（7.5YR4/6褐色）多量．全体にこなれてまじる．骨片含む．
4　10YR3/4暗褐色シルト．粘性・締まり共にやや弱．焼土ブロック（7.5YR4/6褐色）少量．炭化物少量含む．
5　地山ブロック層．10YR3/2黒褐色シルト微量含む．
6　≒1層に似る．
7　10YR2/3黒褐色シルト．締まりやや弱．粘性弱．地山ブロック少量含む．
8　地山ブロック層に10YR3/2黒褐色シルト微量含む．下面部分的に被熱．（天井崩落土）．
9　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共にやや弱．焼土ブロック（7.5YR4/6褐色）やや多量．炭化物ごく微量．4層に似る．
10　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共にやや弱．地山ブロックやや多量含む．
11　10YR2/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロックごく微量含む．
12　11層に似るが、地山ブロック微量．焼土ブロック（7.5YR4/6褐色）微量含む．焼土は、西側に多く粒径は、住居内の埋土中のものより大きい（径1～2cm）．
13　≒7層に似る．
14　10YR2/3砂質シルト．しまりやや弱．粘性弱．地山ブロック微量に細かく（径1cm）含む．
15　10YR2/2黒褐色シルト．（やや粘土質）．締まり・粘性共に中．地山ブロック微量に細かく（径1cm）含む．黒味は11、12層よりつよい．
16　10YR2/2黒褐色シルト（やや粘土質）．締まり中．粘性やや有．地山ブロック少量含む．
17　10YR2/3黒褐色砂質シルト．締まり・粘性共にやや弱．地山ブロック大量．
18　10YR2/3黒褐色砂質シルト．締まり・粘性共にやや弱．地山ブロック極微量．
19　10YR2/3黒褐色砂質シルト．締まり・粘性共にやや弱．地山ブロックやや多量．
20　10YR2/3黒褐色砂質シルト．締まり・粘性共にやや弱．地山ブロック大量．

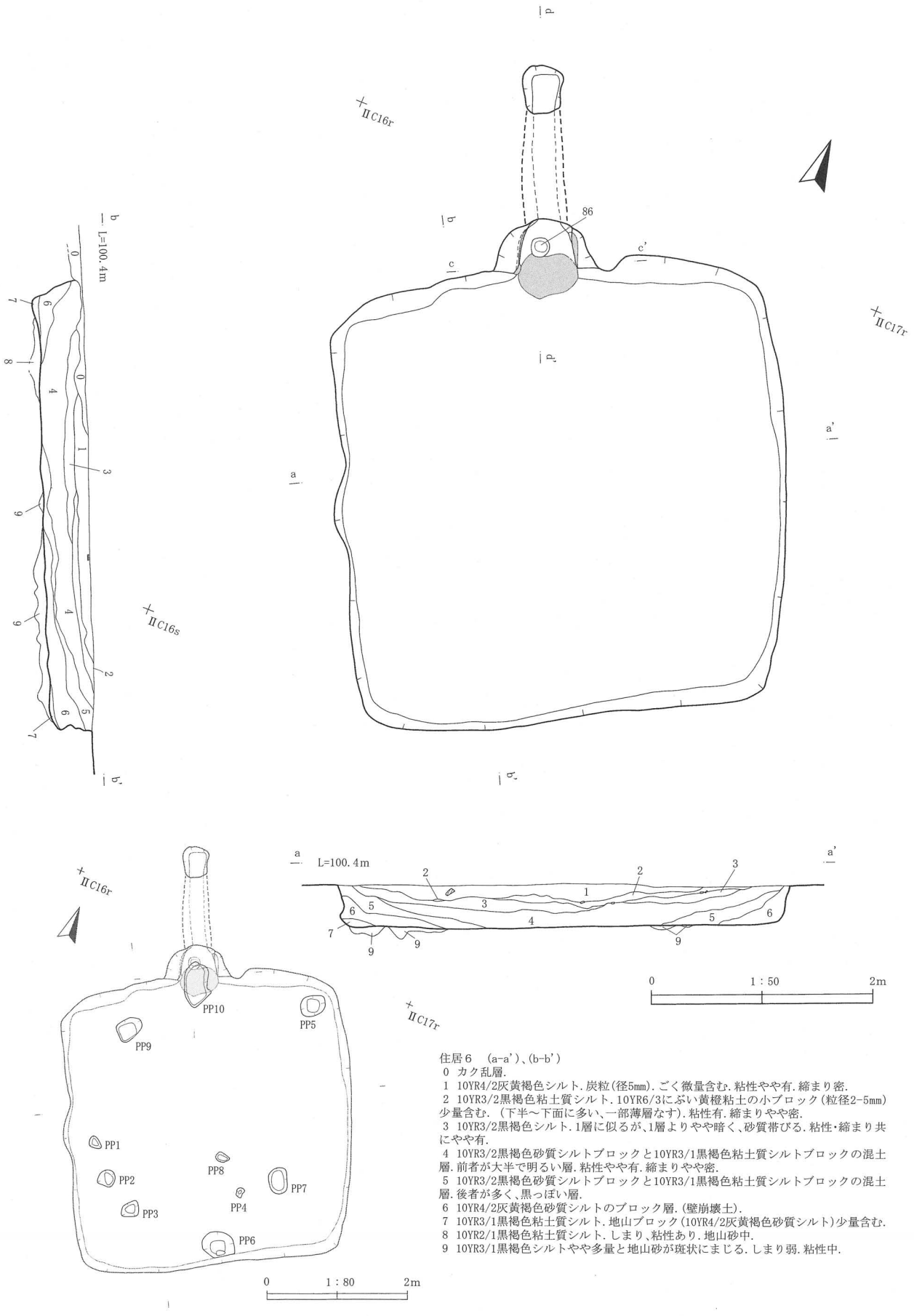
住居４　(e-e')貯蔵穴断面
1　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック微量．炭微量含む．
2　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック多量含む．
3　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロックやや多量含む．

住居４　(f-f')焼土断面
1　7.5 YR5/8明赤褐色焼土．
2　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共にやや弱．シルト床面が乱されたもの．地山ブロックやや多量含む．

第14図　住居跡４

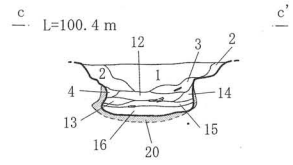

c L=100.3m c'
d L=100.3m d'
e L=100.3m e'
住居５　(c-c')、(d-d')、(e-e')　カマド
1 10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック微量．炭ごく微量含む．
2 10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック少量．炭ごく微量含む．
3 2層に似るが地山ブロックやや多い．下面にわずかに被熱ブロック含む．2層より赤褐色．
4 地山ブロック層．天井崩落？．地山よりやや黒い程度．3層よりは黒い．
5 10YR3/1黒褐色被熱ブロック．燃焼部より褐色強い(茶味)細かくやや多量入る．粘性・締まりやや弱．地山ブロックやや多量含む．
6 2.5Y5/3黄褐色地山ブロック層．被熱ブロック下部に多く含む．天井崩落土．燃焼部壁際は被熱したものが崩落．
7 10YR4/2灰黄褐色焼土．かたく焼ける(8層より)．締まりやや有．粘性弱に地山または9層が焼けたもの．
8 5YR5/8焼土．締まり・粘性やや弱．焼成よい．壁もみな同じ色．9層地山が被熱．
9 10YR3/2黒褐色砂質シルト．地山砂質シルト大に10YR3/2黒褐色(径1cm)程度が斑状に入る．住居の掘り方と同じ土．
10 10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロックやや多量含む．
11 10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや有．地山ブロック微量．炭ごく微量．焼土ごく微量含む．
II C18r
PP1
L=100.4m
住居５　(a-a')、(b-b')
1 10YR3/2黒褐色砂質シルト．締まりやや有．粘性弱．下面と断続的に10YR6/3にぶい黄橙(地山シルト？)の薄層が入る．全体は地山ブロックごく微量含む．
2 1層に似るが、下面に10YR6/3にぶい黄橙(地山シルト？)入らず．地山ブロック多くなる．炭片含む．
3 10YR3/2黒褐色シルト．締まり中．粘性弱．地山ブロック全体にこなれて混じる(少量)．10YR2/2黒褐色シルト細かく(粒径1～2mm)微量含む．砂質1、2層より強い．
4 10YR3/2黒褐色シルト．下部、地山やや多い．10YR2/2黒褐色シルト少量がこなれて混じる．砂質シルト．締まり中．粘性弱い．
5 10YR2/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック少量含む．
6 10YR3/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中 2層より粘性つよく、地山含まないシルト．
7 10YR2/2黒褐色シルト．地山ブロック多量含む．締まり中．粘性やや弱い．
8 カマドソデと同じ土．やや黒多いか．
83
81
82(a)
82(b)
78
79
80
0　1：50　2m

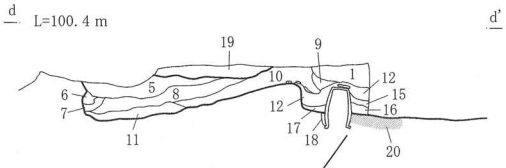
第15図　住居跡５



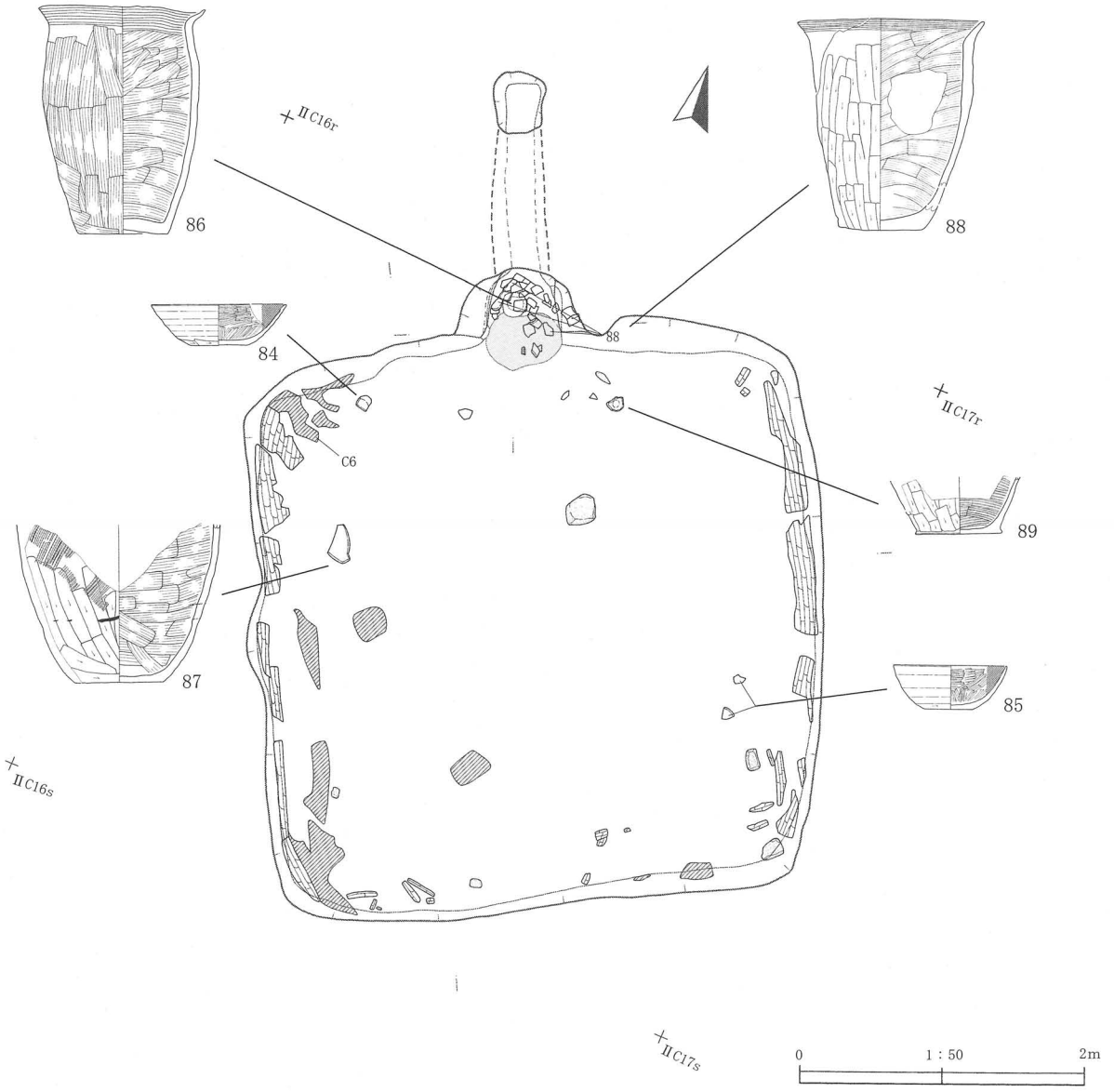
住居６　(a-a')、(b-b')
0　カク乱層.
1　10YR4/2灰黄褐色シルト.炭粒(径5mm).ごく微量含む.粘性やや有.締まり密.
2　10YR3/2黒褐色粘土質シルト.10YR6/3にぶい黄橙粘土の小ブロック(粒径2-5mm)少量含む.（下半～下面に多い、一部薄層なす).粘性有.締まりやや密.
3　10YR3/2黒褐色シルト.1層に似るが、1層よりやや暗く、砂質帯びる.粘性・締まり共にやや有.
4　10YR3/2黒褐色砂質シルトブロックと10YR3/1黒褐色粘土質シルトブロックの混土層.前者が大半で明るい層.粘性やや有.締まりやや密.
5　10YR3/2黒褐色砂質シルトブロックと10YR3/1黒褐色粘土質シルトブロックの混土層.後者が多く、黒っぽい層.
6　10YR4/2灰黄褐色砂質シルトのブロック層.(壁崩壊土).
7　10YR3/1黒褐色粘土質シルト.地山ブロック(10YR4/2灰黄褐色砂質シルト)少量含む.
8　10YR2/1黒褐色粘土質シルト.しまり、粘性あり.地山砂中.
9　10YR3/1黒褐色シルトやや多量と地山砂が斑状にまじる.しまり弱.粘性中.

第16図　住居跡６（1）

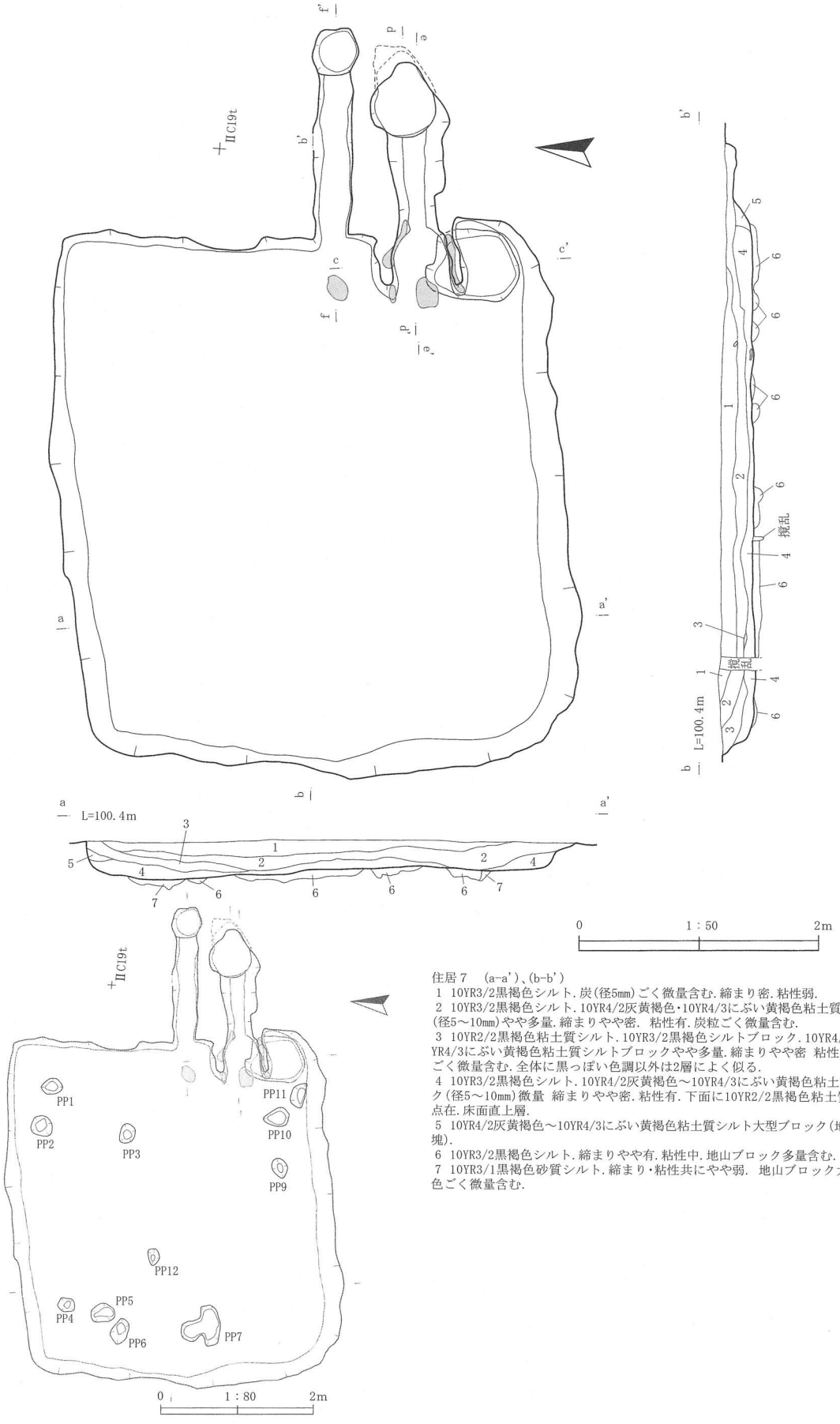




住居６　(c-c')、(d-d')　カマド　全体にグライ化
1　10YR2/3黒褐色砂質シルト．締まり中．粘性やや弱い．地山砂質シルト全体にやや多量混じる．下面低くなるところに10YR2/2黒褐色シルトブロック少量入る．
2　地山砂質シルト大量に10YR2/3黒褐色シルトが混じり暗くなる．10YR3/4暗赤褐色炭ごく微量含む．締まり中．粘性弱．
3　2層に似るが、10YR2/3の量多く、暗い．
4　地山崩落層下面が被熱．側面と同じ色のため、おそらく壁崩落．
5　10YR3/3暗褐色シルト．締まり・粘性共にやや弱．地山ブロック(粒径2cm)少量．炭ごく微量(2mm)含む．
6　グライ化した地山砂質シルト層．崩落．
7　グライ化した地山砂層．崩落．
8　5Y3/1オリーブ黒砂質シルト．締まり・粘性共にやや弱．グライ化した地山大に10YR2/3黒褐色シルトが細長いブロックで入る．被熱ブロックも少量含む．炭ごく微量含むが5層より少ない．
9　2層と似る．
10　地山砂質シルトブロックの崩落層．下面被熱する所あり．
11　15層に似るが10YR2/3黒褐色の量多く、焼土ブロック、炭も多くなる．下面に10YR2/3黒褐色が薄く層状に入る
12　10YR3/1黒褐色砂質シルト．締まり・粘性共にやや弱．炭ごく微量(径2mm)．地山ブロック(グライ化)．やや多全体に含む．
13　グライ地山崩落層．
14　地山グライ土多量に10YR2/3黒褐色シルト少量が全体に混じる．下面やや被熱．壁崩落．
15　5YR3/2暗赤褐色焼土ブロック層．天井崩落？．地山が被熱したもの．
16　10YR3/2黒褐色粘土質シルト．締まりやや弱．粘性やや有．炭細かく(径1cm)ごく微量含む．
17　10YR3/1黒褐色シルト．地山ブロック少量．締まり・粘性共に中．
18　10YR3/1黒褐色砂質シルト．グライ化する．地山より粘性あり．
19　地山砂質ブロック層．地山よりややよごれ，10YR3/3暗褐色シルトを含む．
20　7.5YR3/3暗褐色焼土(カマド側面)．5YR3/3暗赤褐色焼土(燃焼部底面)．

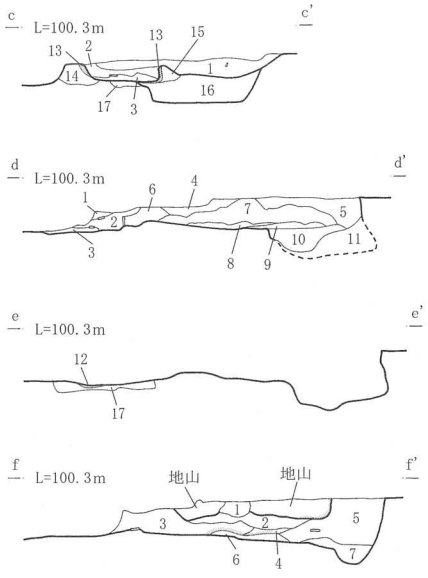


第17図　住居跡６（2）



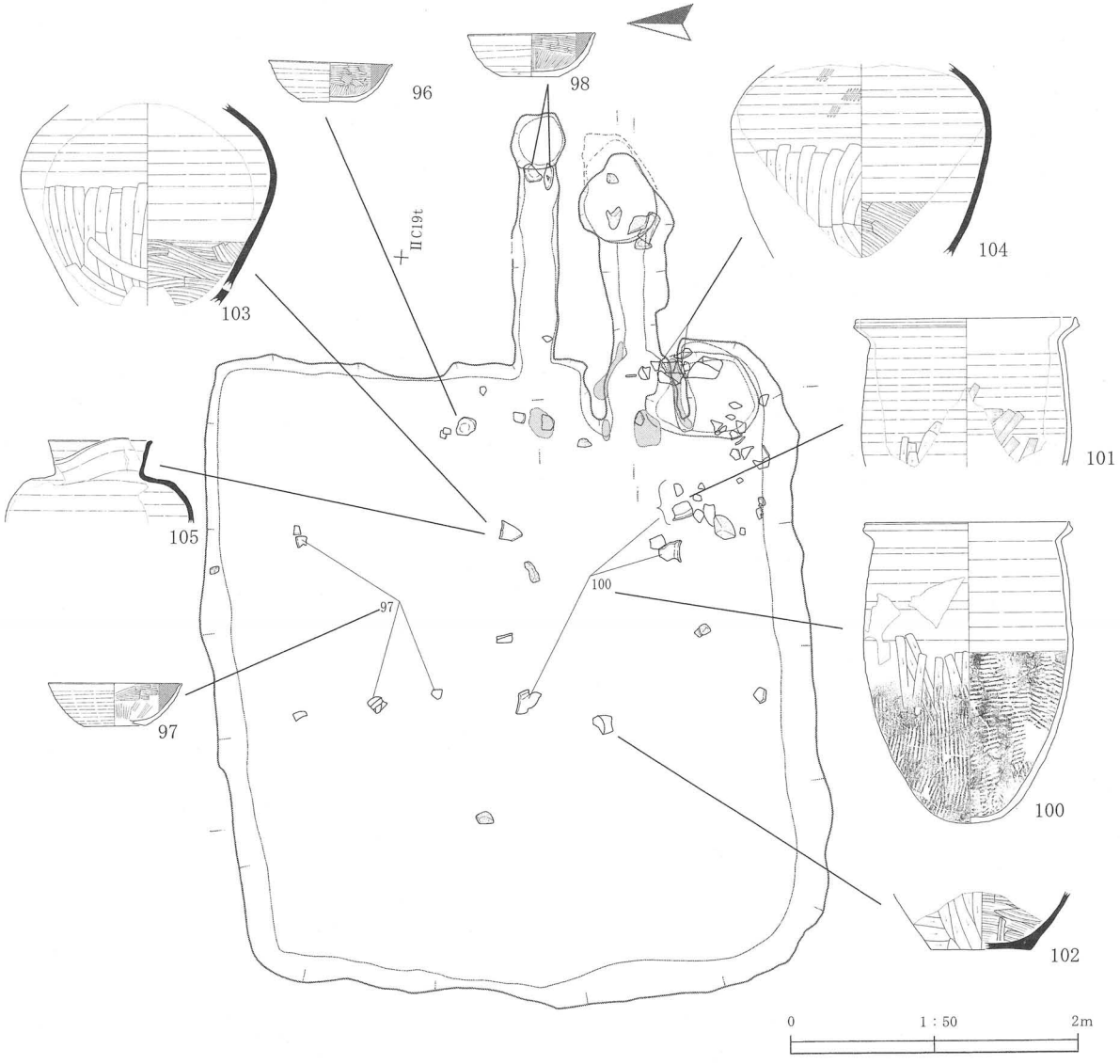
住居７　(a-a')、(b-b')
1　10YR3/2黒褐色シルト．炭(径5mm)ごく微量含む．締まり密．粘性弱．
2　10YR3/2黒褐色シルト．10YR4/2灰黄褐色・10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトブロック(径5～10mm)やや多量．締まりやや密．粘性有．炭粒ごく微量含む．
3　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．10YR3/2黒褐色シルトブロック．10YR4/2灰黄褐色～10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトブロックやや多量．締まりやや密　粘性有．炭粒(径5mm)ごく微量含む．全体に黒っぽい色調以外は2層によく似る．
4　10YR3/2黒褐色シルト．10YR4/2灰黄褐色～10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルトブロック(径5～10mm)微量　締まりやや密．粘性有．下面に10YR2/2黒褐色粘土質シルトの薄層点在．床面直上層．
5　10YR4/2灰黄褐色～10YR4/3にぶい黄褐色粘土質シルト大型ブロック(地山土、壁崩落土塊)．
6　10YR3/2黒褐色シルト．締まりやや有．粘性中．地山ブロック多量含む．
7　10YR3/1黒褐色砂質シルト．締まり・粘性共にやや弱．　地山ブロック大．10YR3/1黒褐色ごく微量含む．

第18図　住居跡７（1）

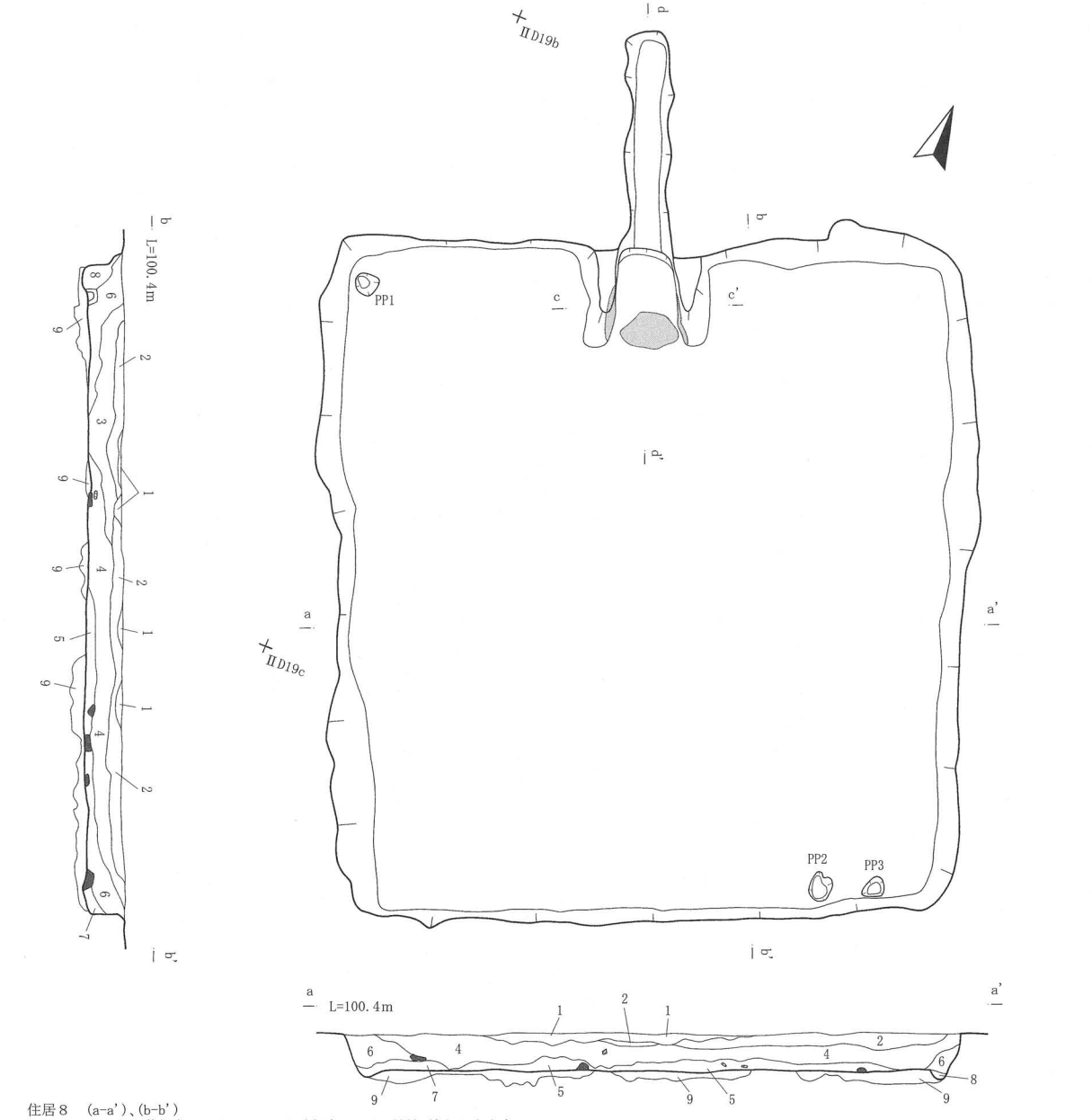


住居７　(c-c')、(d-d')、(e-e')　カマド(南側)
1　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロックごく微量．炭・焼土ブロックごく微量含む．
2　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック多量．焼土ブロック(5YR4/6赤褐色)多量．斑状に混じる．炭ごく微量含む．
3　10YR2/3黒褐色シルト．2．5YR6/2灰赤色粘土(灰層？)．全体に大含む．
4　10YR2/3黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性共にやや有．地山ブロックごく微量．焼土ごく微量含む．
5　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロックやや多量．下部にとくに多い．
6　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性中．焼土ブロック全体にボヤーと混じ．地山ブロック微量．
7　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性中．下面に天井崩落か、被熱層入る．その上に地山ブロック粘土が斑状に少量．4・5層の間は焼土ブロック(7．5YR5/8明褐色)大きくブロック入る．
8　グライ化した地山ブロック層．
9　7層の下半(地山ブロック層より下)に入る．
10　10YR3/1黒褐色粘土質シルト　地山砂、焼土ブロック層が交互に入る．締まりやや弱．粘性やや有．
11　10層に似る．
12　5YR5/8明赤褐色焼土．17層被熱．
13　5YR5/8明赤褐色焼土．
14　10YR2/3黒褐色砂質シルト．細かく少量、地山ブロック大．締まり・粘性共にわるい　14・15層カマドソデ．
15　14層より10YR2/3 黒褐色砂質シルト少ない．
16　10YR2/3黒褐色シルト．締まりやや弱．粘性中．グライ化した地山多く細かく10YR3/2黒褐色シルトが入る，(やや多く)→貯蔵穴ソデ下へもぐる．
17　14層に似る．

住居７　(f-f')　カマド(北側)
1　10YR2/3黒褐色シルト．地山ブロック微量．締まりやや有．粘性やや有．
2　1層に似るがやや砂質．炭・焼土ブロックごく微量含む．
3　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性弱．焼土ブロック大きく斑状(径3cm)に多量入る．地山やや多量．下面被熱箇所あり．天井崩落．炭ごく微量含む．
4　地山ブロック層．下面被熱．天井崩落．
5　10YR2/3黒褐色砂質シルト．締まり中．粘性やや弱．炭・焼土ブロック細かく入る 炭(径1～2cm)．焼土ブロック(径1cm)少量．　地山ブロック細かく少量含む．
6　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性やや弱．地山ブロック少量．被熱なし．
7　6層に似る．

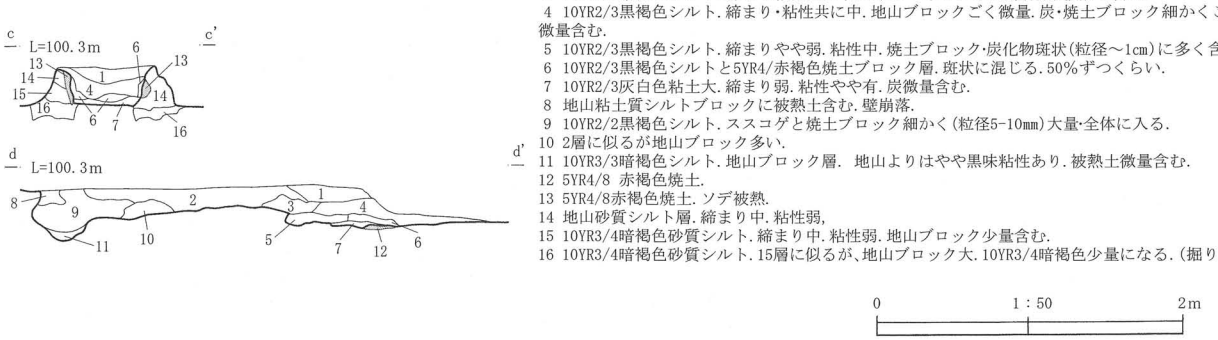


第19図　住居跡７（2）

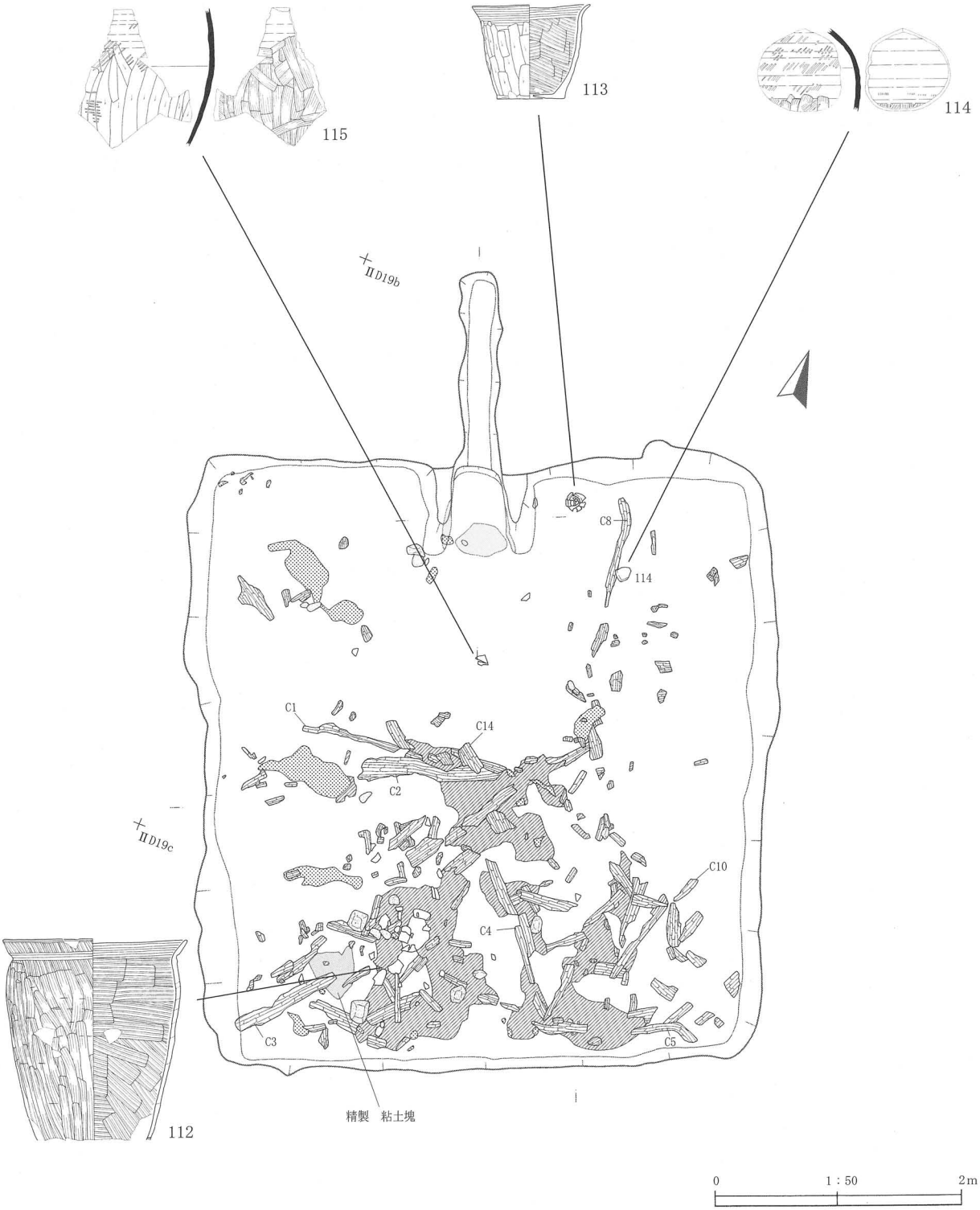


住居８　(a-a')、(b-b')
1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト．粘性・締まりやや有．
2　10YR3/2黒褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト．地山ブロック(粒径5～20mm)やや多量．粘性・締まり共にやや有．
3　10YR3/2黒褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト．地山ブロック(粒径5～10mm)多量．2層よりブロック細かく多い．カマド側(北壁寄り)に堆積．粘性・しまり共にやや有．
4　10YR2/2黒褐色シルト．10YR3/2黒褐色・10YR3/3暗褐色シルトは地山ブロックの混土層．2層に似ているが黒っぽい．炭粒微．粘性・締まりやや有．
5　10YR4/3にぶい黄褐色～10YR4/4褐色砂質ブロック層．多量の炭化材と被覆．一部焼土化．6層よりはやや暗い．
6　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト(地山土)ブロック層．
7　10YR3/2黒褐色～10YR3/3暗褐色粘土質シルト．炭粒やや多．
8　10YR3/2黒褐色粘土質シルト．
9　地山砂質シルトブロックに10YR2/3黒褐色シルト極微量含む．

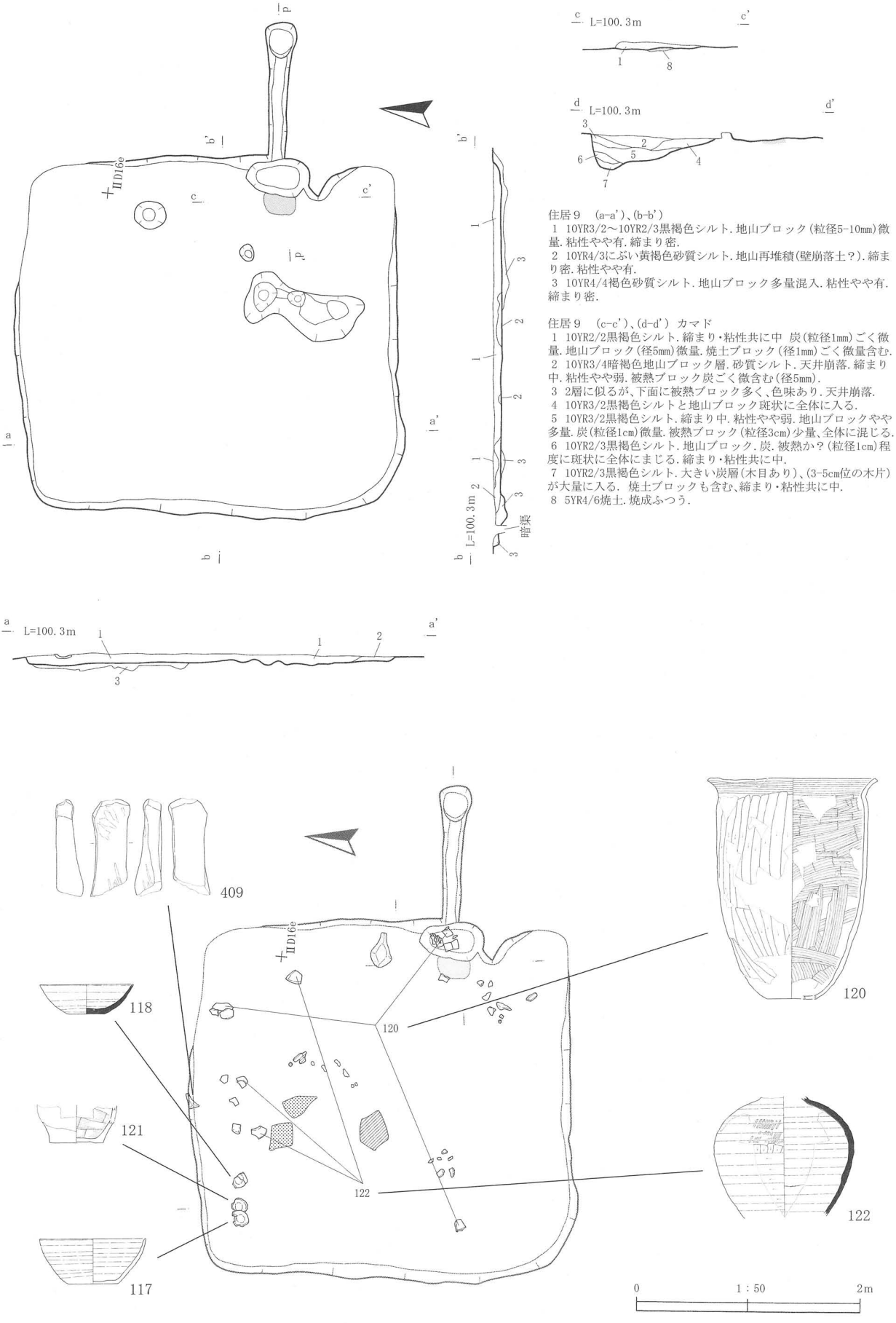
住居８　(c-c')、(d-d')　カマド
1　10YR3/4暗褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック少量含む．
2　10YR2/3黒褐色粘土質シルト．締まり粘性共にややあり．地山ブロック斑状に微量．天井被熱土含む．
3　10YR3/4暗褐色シルト．締まり粘性共に中．地山ブロック少量．天井崩落被熱土含む．
4　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロックごく微量．炭・焼土ブロック細かくごく微量含む．
5　10YR2/3黒褐色シルト．締まりやや弱．粘性中．焼土ブロック・炭化物斑状(粒径～1cm)に多く含む．
6　10YR2/3黒褐色シルトと5YR4/赤褐色焼土ブロック層．斑状に混じる．50%ずつくらい．
7　10YR2/3灰白色粘土大．締まり弱．粘性やや有．炭微量含む．
8　地山粘土質シルトブロックに被熱土含む．壁崩落．
9　10YR2/2黒褐色シルト．ススコゲと焼土ブロック細かく(粒径5-10mm)大量・全体に入る．
10　2層に似るが地山ブロック多い．
11　10YR3/3暗褐色シルト．地山ブロック層．　地山よりはやや黒味粘性あり．被熱土微量含む．
12　5YR4/8　赤褐色焼土．
13　5YR4/8赤褐色焼土．ソデ被熱．
14　地山砂質シルト層．締まり中．粘性弱，
15　10YR3/4暗褐色砂質シルト．締まり中．粘性弱．地山ブロック少量含む．
16　10YR3/4暗褐色砂質シルト．15層に似るが、地山ブロック大．10YR3/4暗褐色少量になる．(掘り方)．



第20図　住居跡８（1）


115
113
114
IID19b
IID19c
C8
114
C1
C14
C2
C10
C4
C3
C5
112
精製　粘土塊
0
1：50
2m

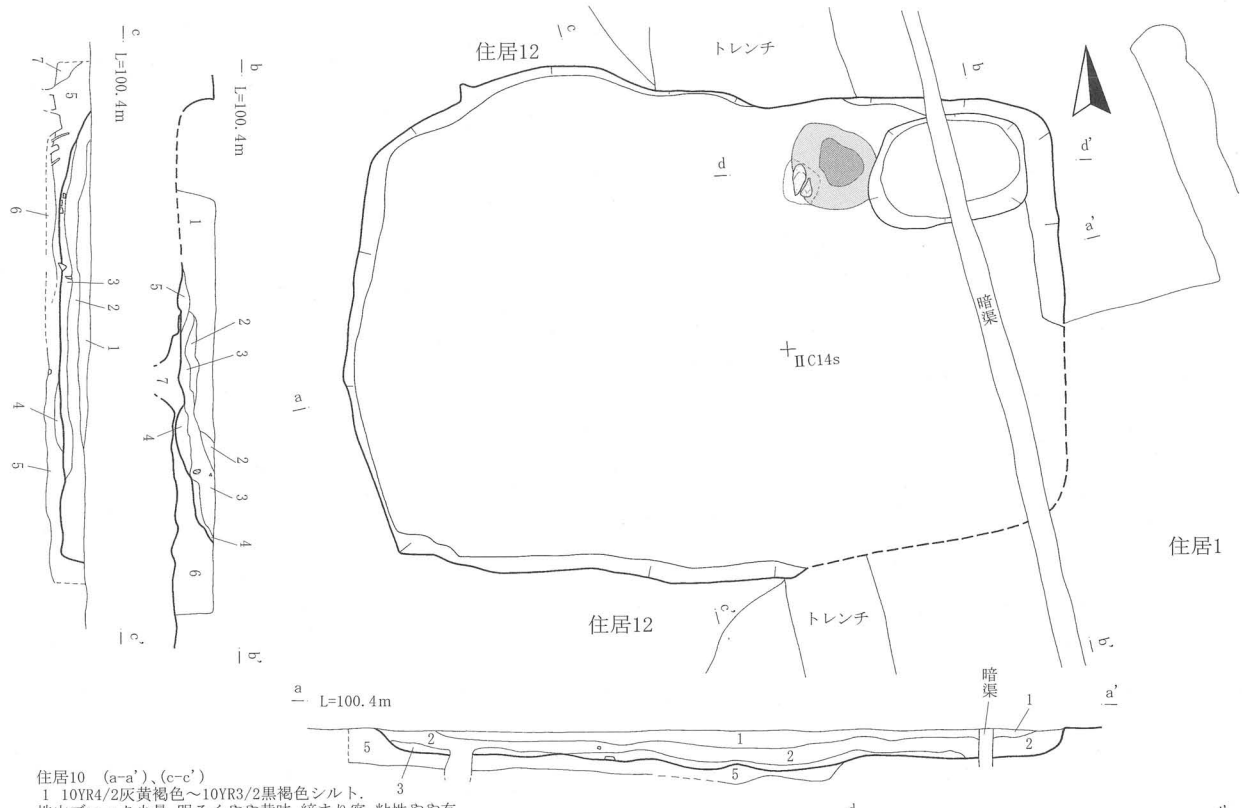
第21図　住居跡８（２）



住居９　(a-a')、(b-b')
1　10YR3/2～10YR2/3黒褐色シルト．地山ブロック（粒径5-10mm）微量．粘性やや有．締まり密．
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト．地山再堆積（壁崩落土？）．締まり密．粘性やや有．
3　10YR4/4褐色砂質シルト．地山ブロック多量混入．粘性やや有．締まり密．

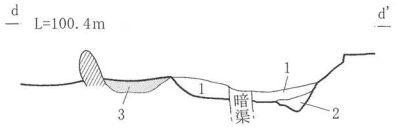
住居９　(c-c')、(d-d')　カマド
1　10YR2/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中　炭（粒径1mm）ごく微量．地山ブロック（径5mm）微量．焼土ブロック（径1mm）ごく微量含む．
2　10YR3/4暗褐色地山ブロック層．砂質シルト．天井崩落．締まり中．粘性やや弱．被熱ブロック炭ごく微含む（径5mm）．
3　2層に似るが、下面に被熱ブロック多く、色味あり．天井崩落．
4　10YR3/2黒褐色シルトと地山ブロック斑状に全体に入る．
5　10YR3/2黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロックやや多量．炭（粒径1cm）微量．被熱ブロック（粒径3cm）少量、全体に混じる．
6　10YR2/3黒褐色シルト．地山ブロック．炭．被熱か？（粒径1cm）程度に斑状に全体にまじる．締まり・粘性共に中．
7　10YR2/3黒褐色シルト．大きい炭層（木目あり）、（3-5cm位の木片）が大量に入る．焼土ブロックも含む、締まり・粘性共に中．
8　5YR4/6焼土．焼成ふつう．

第22図　住居跡９



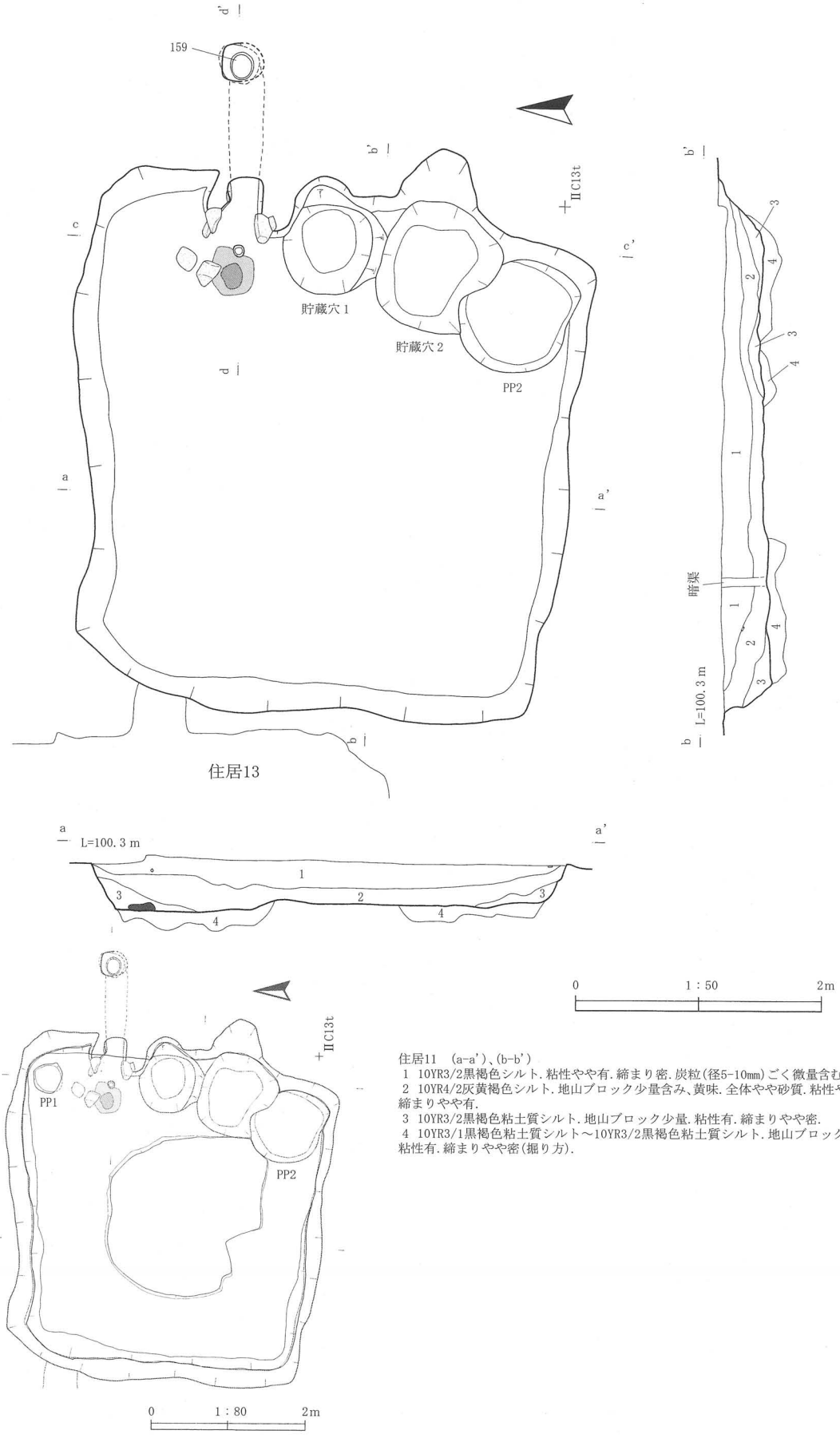
住居10　(a-a')、(c-c')
1　10YR4/2灰黄褐色～10YR3/2黒褐色シルト.
地山ブロック少量.明るくやや黄味.締まり密.粘性やや有.
2　10YR3/2黒褐色～10YR2/3黒褐色シルト.炭粒(径5～10mm)微量.締まり密.粘性やや有.
3　10YR2/2黒褐色シルト.炭粒･炭片少量.黒っぽい.粘性有.締まりやや有.
4　10YR2/2黒褐色シルト.地山ブロック(径10-20mm)少量.掘り方埋土か？
5　10YR3/2～10YR2/3黒褐色シルト.炭(径5mm)ごく微量 2層に酷似.3層はさまない箇所は層界不明瞭.3層より炭少ない.
6　10YR2/2～10YR2/3黒褐色粘土質シルト.粘性有.締まりやや密.土器(カメ片)含む.
7　10YR2/2～10YR2/3黒褐色粘土質シルト.地山ブロックやや多量含む.

住居10　(b-b')
1　10YR3/2黒褐色シルト.締まり密.粘性やや有.
2　10YR2/3黒褐色シルト.締まり密.粘性やや有.1層･3層より黒っぽい.　炭粒(粒径2-5mm)ごく微量含む.
3　10YR3/2黒褐色シルト.締まり密.粘性やや有.地山ブロック(粒径10-20mm)微量含む.
4　10YR3/2黒褐色シルト.締まり密.粘性やや有.地山ブロック(粒径10-20mm)多量含む.
5　10YR3/2黒褐色シルト.締まり密.粘性やや有.地山ブロック(粒径10-20mm)大､貼床土？
6　10YR3/2黒褐色シルト.締まり密.粘性やや有.地山ブロック(粒径5-10mm)少量.下面に炭化材.焼土ブロック含む.住居1床直上層.
7　10YR3/2黒褐色シルト.締まり密.粘性やや有.地山ブロック(粒径5-10mm)多量含む.(壁溝埋土？).



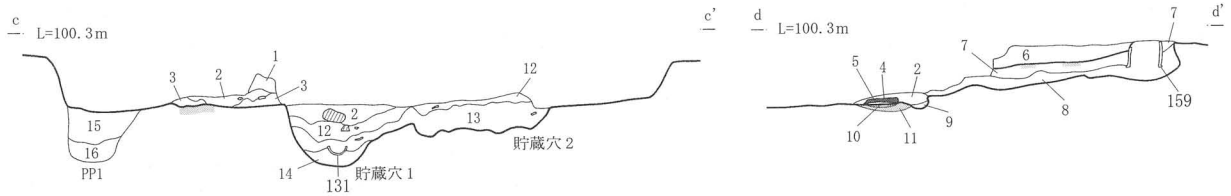
住居10　(d-d')　カマド･貯蔵穴
1　10YR3/2黒褐色シルト.地山粘土ブロック少量.粘性有 締まりやや密.(カマドわき土坑状落ちこみ､土師器小型坏出土)
2　10YR3/2黒褐色シルト.地山砂質ブロックやや多量.粘性やや有.締まりやや密.(掘り方埋土).
3　5YR4/4にぶい赤褐色焼土.粘性強.締まり密.5YR3/4暗赤褐色焼土が上面に1cm堆積し､硬化面を形成する.

第23図　住居跡10

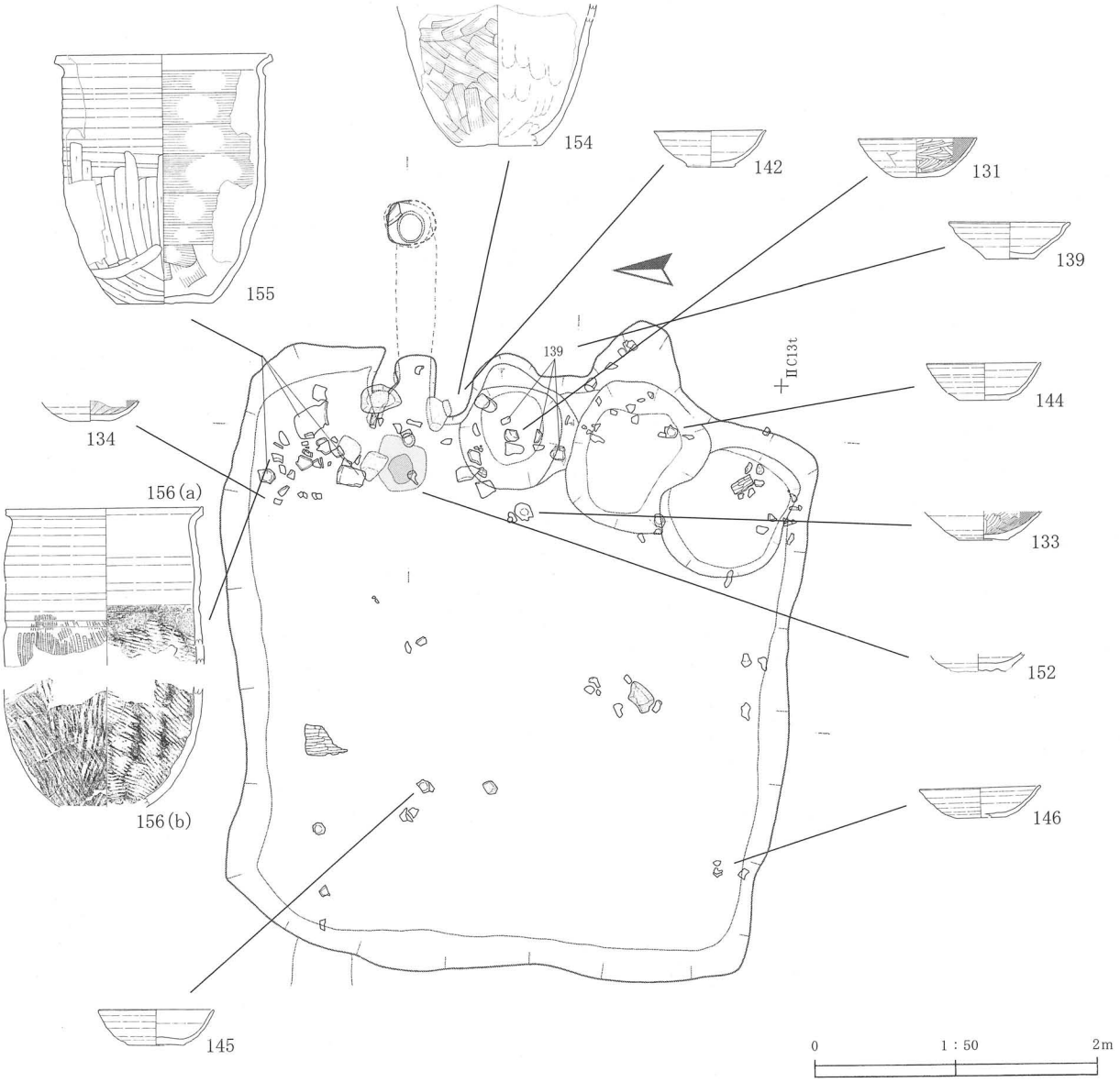


住居11　(a-a')、(b-b')
1　10YR3/2黒褐色シルト．粘性やや有．締まり密．炭粒(径5-10mm)ごく微量含む．
2　10YR4/2灰黄褐色シルト．地山ブロック少量含み、黄味．全体やや砂質．粘性やや有．締まりやや有．
3　10YR3/2黒褐色粘土質シルト．地山ブロック少量．粘性有．締まりやや密．
4　10YR3/1黒褐色粘土質シルト～10YR3/2黒褐色粘土質シルト．地山ブロック微量．粘性有．締まりやや密(掘り方)．

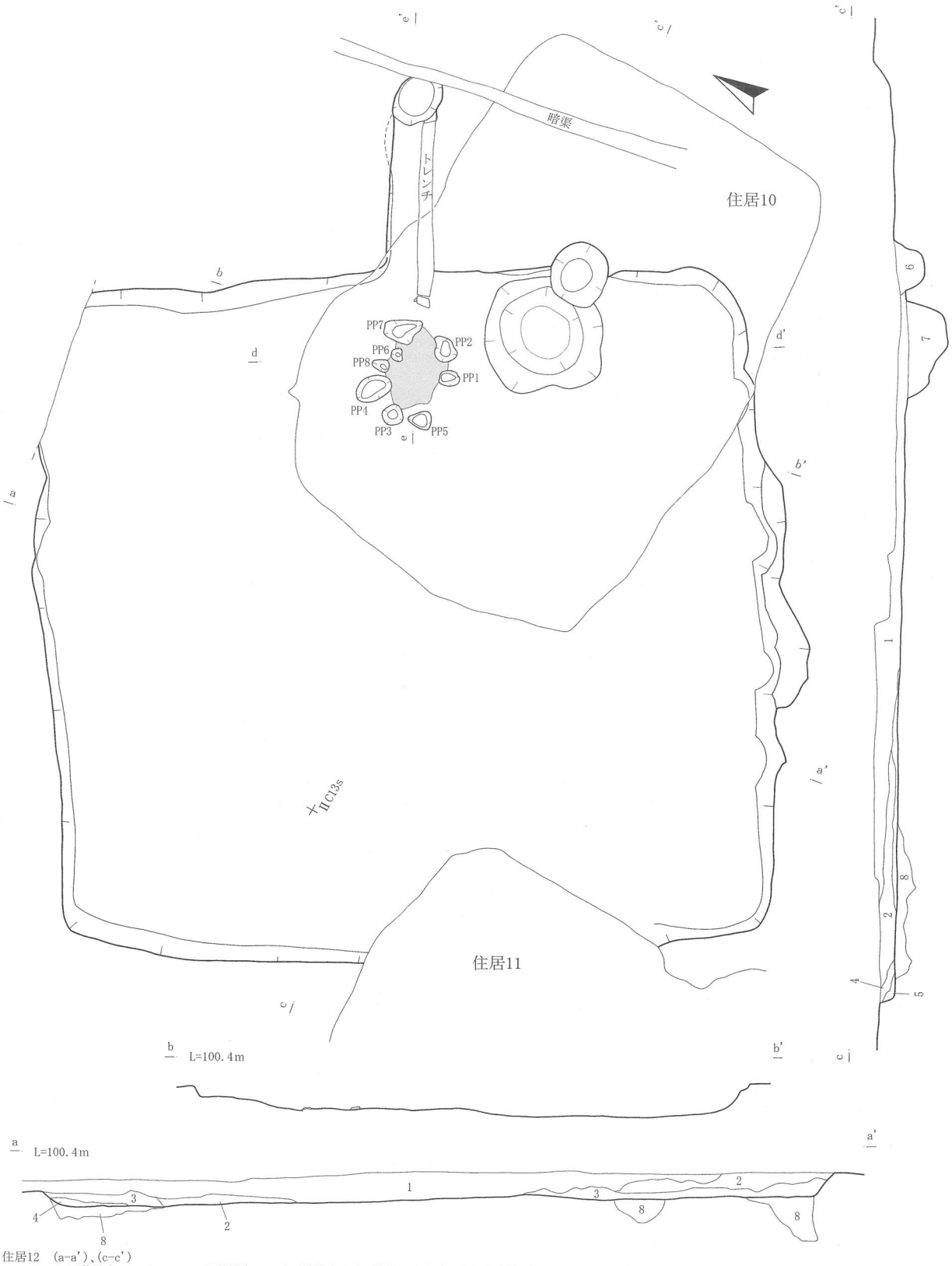
第24図　住居跡11（1）



住居11　(c-c')、(d-d')　カマド・貯蔵穴
1　10YR3/2黒褐色砂質シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック全体に粒で混じる．キラキラ白っぽい．
2　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．炭(粒径1cm)．焼土(粒径1cm)．全体に斑状にまじりやや多量．
3　10YR3/2黒褐色シルト．1層に焼土ブロック．炭ごく微量混じる．
4　炭化物層．
5　黄白色粘土層．ベチャベチャ．
6　10YR3/2黒褐色シルト．粘性中．　地山ブロック微量．大きく混じる．住居12埋土．天井部．
7　10YR2/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック微量．細かく入る．上面被熱する．
8　10YR2/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロックごく微量．大きい(粒径2cm)焼土ブロックやや多量全体に混じる．下面が被熱するが上部よりは弱く、赤褐色天井崩落と下面の被熱あり．7層より黒味強い．
9　10YR2/3黒褐色シルト．締まりやや弱．粘性やや有．炭・焼土ブロックやや多量．地山ブロック微量．
10　5YR3/1黒褐色砂質シルト．締まり有．粘性やや弱．焼土グレ味強く硬い．
11　5YR3/6暗赤褐色砂質シルト．グライ地山砂質シルトが被熱．焼成よい．
12　10YR3/1黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．焼土ブロック(粒径2cm)．炭(粒径1cm)全体に少量混じる．
13　10YR3/1黒褐色砂質シルト．グライ化した地山砂質シルトやや多量．10YR3/1黒褐色シルト少量．炭細かく微量(粒径2-3mm)境界はっきりしない．
14　2層に似るが炭多く、黒味強い．
15　10YR3/1黒褐色シルト．締まり・粘性共にやや有．グライ地山細かく微量．炭微(粒径1mm)．焼土ごく微量(遺物含む)．
16　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性有．地山ブロックごく微量．炭ごく微量(粒径1mm)含む．



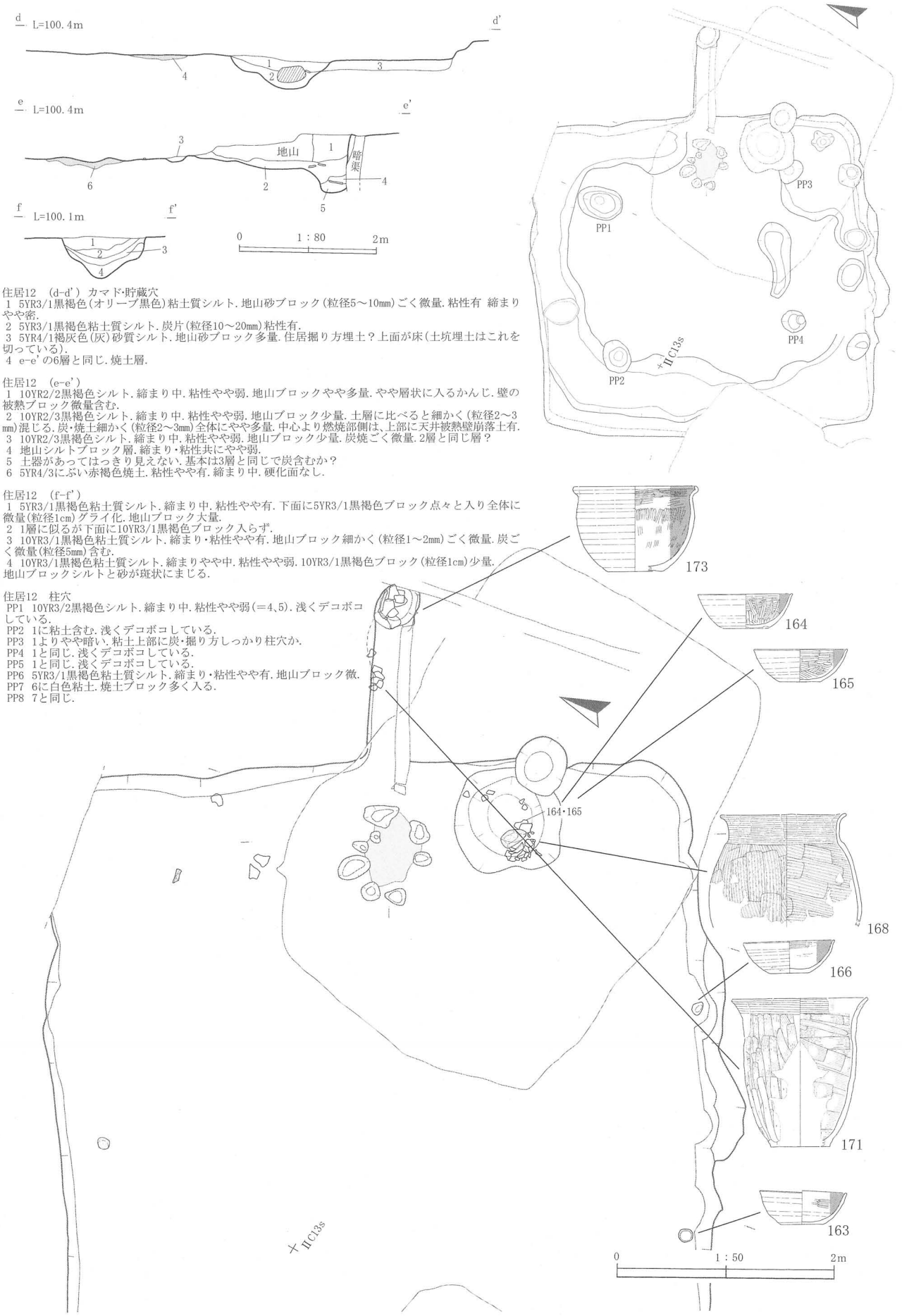
第25図　住居跡11（2）



住居12　(a-a')、(c-c')
1　10YR4/2灰黄褐色シルト～10YR3/2黒褐色シルト．粘性やや有．締まりやや有．酸化斑全体、(混入物ほとんど無い層)．
2　10YR4/2灰黄褐色シルト～10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック(粒径5～20mm)多量、全体やや砂質．粘性・締まり共にやや有．黄色っぽい．
3　10YR4/2灰黄褐色シルト～10YR3/2黒褐色シルト．10YR2/2黒褐色粘土質シルト・地山ブロックの混土層(10YR2/2黒褐色シルトが入るため他より黒っぽい、但し4層よりこの黒色土少ないので全体は黄味、明るい)．
4　3層に似るが、10YR2/2黒褐色粘土質シルト多く黒っぽい．
5　10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック多量(ほぼブロック層)．壁際崩落土．
6　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．炭微量(粒径2-5mm)．粘性有．締まりやや有．(1層を上から切る層、上位の住居10埋土の一部か？)
7　5YR3/1黒褐色粘土質シルト
8　10YR3/2黒褐色粘土質シルト～10YR3/3暗褐色粘土質シルト．粘性やや有．締まりやや密．
(粒径5mmの10YR4/4褐色地山ブロック少量混入)．(掘り方)．

0　1：50　2m

第26図　住居跡12（1）



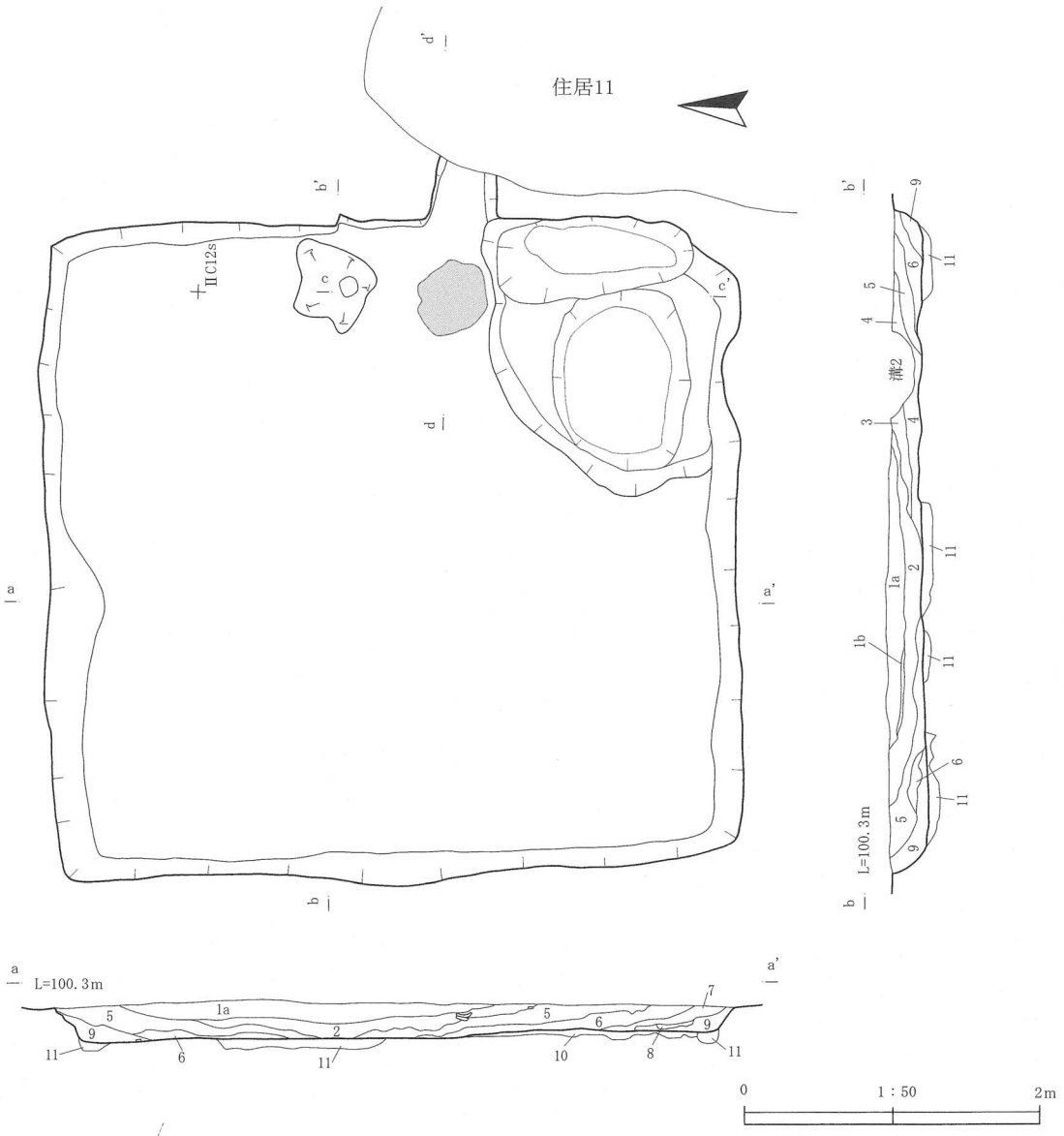
住居12　(d-d')　カマド・貯蔵穴
1　5YR3/1黒褐色(オリーブ黒色)粘土質シルト．地山砂ブロック(粒径5～10mm)ごく微量．粘性有　締まりやや密．
2　5YR3/1黒褐色粘土質シルト．炭片(粒径10～20mm)粘性有．
3　5YR4/1褐灰色(灰)砂質シルト．地山砂ブロック多量．住居掘り方埋土？上面が床(土坑埋土はこれを切っている)．
4　e-e'の6層と同じ．焼土層．

住居12　(e-e')
1　10YR2/2黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロックやや多量．やや層状に入るかんじ．壁の被熱ブロック微量含む．
2　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック少量．土層に比べると細かく(粒径2～3mm)混じる．炭・焼土細かく(粒径2～3mm)全体にやや多量．中心より燃焼部側は，上部に天井被熱壁崩落土有．
3　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック少量．炭焼ごく微量．2層と同じ層？
4　地山シルトブロック層．締まり・粘性共にやや弱．
5　土器があってはっきり見えない．基本は3層と同じで炭含むか？
6　5YR4/3にぶい赤褐色焼土．粘性やや有．締まり中．硬化面なし．

住居12　(f-f')
1　5YR3/1黒褐色粘土質シルト．締まり中．粘性やや有．下面に5YR3/1黒褐色ブロック点々と入り全体に微量(粒径1cm)グライ化．地山ブロック大量．
2　1層に似るが下面に10YR3/1黒褐色ブロック入らず．
3　10YR3/1黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性やや有．地山ブロック細かく(粒径1～2mm)ごく微量．炭ごく微量(粒径5mm)含む．
4　10YR3/1黒褐色粘土質シルト．締まりやや中．粘性やや弱．10YR3/1黒褐色ブロック(粒径1cm)少量．地山ブロックシルトと砂が斑状にまじる．

住居12　柱穴
PP1　10YR3/2黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱(＝4,5)．浅くデコボコしている．
PP2　1に粘土含む．浅くデコボコしている．
PP3　1よりやや暗い．粘土上部に炭・掘り方しっかり柱穴か．
PP4　1と同じ．浅くデコボコしている．
PP5　1と同じ．浅くデコボコしている．
PP6　5YR3/1黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性やや有．地山ブロック微．
PP7　6に白色粘土．焼土ブロック多く入る．
PP8　7と同じ．

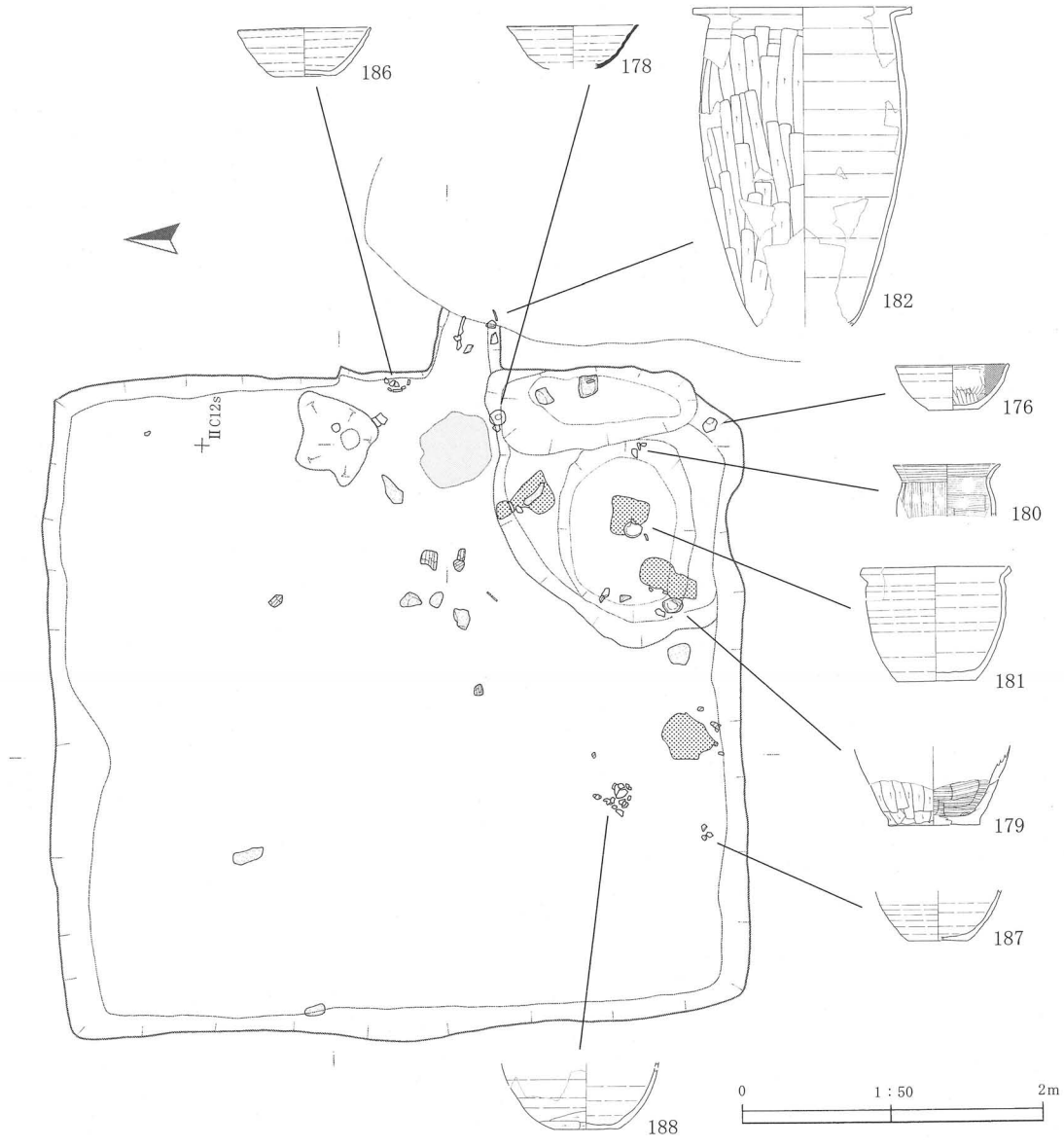
第27図　住居跡12（2）



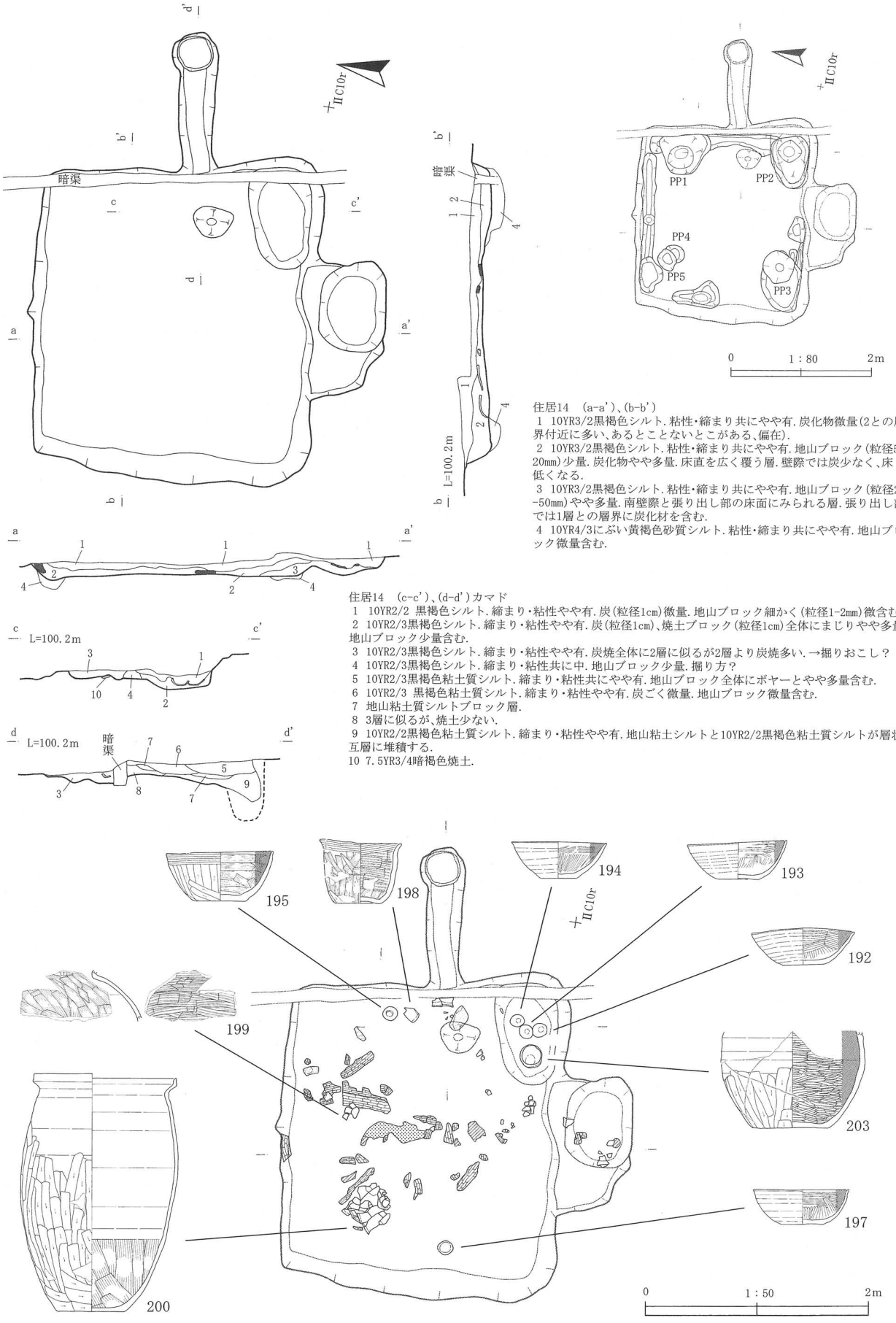
住居13　(a-a')、(b-b')
1a 10YR4/2灰黄褐色シルト．地山ブロック少量．粘性やや有．締まり密．全体やや黄味炭粒(径5-10㎜)ごく微量．　地山ブロック(粒径5-20㎜)含む．
1b 7.5YR6/4にぶい橙シルト(灰？)ブロック層．被熱によりピンク色．地山ブロック(粒径5-20㎜)含む．
2 10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック微量．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径5-20㎜)含む．
3 10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック少量．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径5-20㎜)全体黄色味含む．
4 10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック微量．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径5-20㎜)．2によく似る．
5 10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック少量．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径5-20㎜)．3によく似る．
6 10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック微量．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径5-20㎜)．2・4に似る．
7 10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック少量．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径5-20㎜)．3・5に似る．
8 5YR5/6明赤褐色焼土ブロック層．
9 10YR2/2黒褐色シルト．地山ブロック微量(粒径2-5㎜)．粘性有．締まりやや密．
10 10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック(粒径5-20㎜)多量(上から押されたようにつぶれている)．掘り方埋土？．
11 10YR3/3暗褐色粘土質シルト．地山ブロック微量．粘性やや有．締まり密．

第28図　住居跡13（1）

住居13　(c-c')、(d-d')、カマド
1　10YR3/2黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山粒全体にまじりキラキラする．
2　1層に地山ブロック少量含む．
3　10YR2/2黒褐色シルト．締まり・粘性中．10YR3/2黒褐色シルト大量．地山ブロック少量含む(カマド6層崩落)．
1～3層住居11カマド埋土土より暗み強い
4　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．
5　10YR3/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山シルトブロックごく微量含む．
6　10YR3/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．焼土ブロック炭(粒径1cm)やや多量全体に含む．
7　5層に似るが焼土ブロック、炭含む．
8　灰黄褐色粘土層．ベチャベチャに焼土ブロック入る．
9　10YR3/2黒褐色シルト　2.5Y7/4　明黄色粘土ブロック(粒径～1cm)大量．焼土ブロック少量．
10　10YR3/2黒褐色シルト．締まり・粘性共にややあり．炭化物微量．焼土ブロックやや多量．
11　10YR3/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．下面に被熱ブロック．層中に焼土ブロック(径1.5cm)少斑状に含む→天井崩落．
12　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性やや有．地山シルトブロック斑状に入る．(粒径1-2cm)．
13　6層に似る．
14　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック少量(粒径2cm)．焼土(粒径1cm)微量．　5YR6/3にぶい橙粘土ブロック微量含む(径3cm)．
15　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．焼土ブロック(粒径3cm)全体に含む．炭微量(粒径1mm)含む．
16　5YR4/8赤褐色焼土．焼成ひじょうに良い．灰色部分あるくらい良い．
17　10YR3/2黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック少量．2.5YR6/4にぶい橙粘土ブロック少量．下面に多い．



第29図　住居跡13（2）

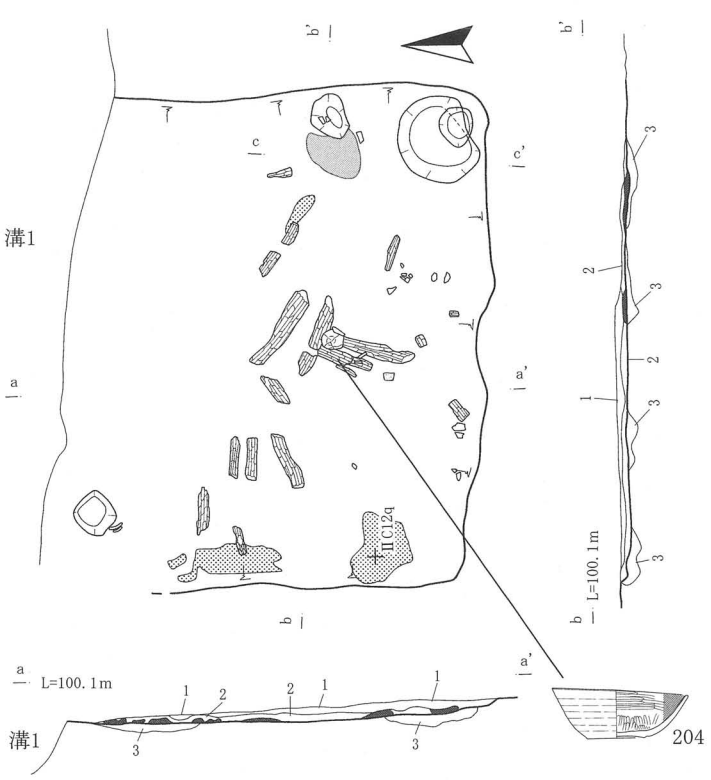


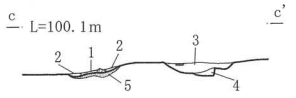
住居14　(a-a')、(b-b')
1　10YR3/2黒褐色シルト．粘性・締まり共にやや有．炭化物微量(2との層界付近に多い、あるとことないとこがある、偏在)．
2　10YR3/2黒褐色シルト．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径5-20mm)少量．炭化物やや多量．床直を広く覆う層．壁際では炭少なく、床低くなる．
3　10YR3/2黒褐色シルト．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径20-50mm)やや多量．南壁際と張り出し部の床面にみられる層．張り出し部では1層との層界に炭化材を含む．
4　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック微量含む．

住居14　(c-c')、(d-d')カマド
1　10YR2/2 黒褐色シルト．締まり・粘性やや有．炭(粒径1cm)微量．地山ブロック細かく(粒径1-2mm)微含む．
2　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性やや有．炭(粒径1cm)、焼土ブロック(粒径1cm)全体にまじりやや多量．地山ブロック少量含む．
3　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性やや有．炭焼全体に2層に似るが2層より炭焼多い．→掘りおこし？
4　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック少量．掘り方？
5　10YR2/3黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性共にやや有．地山ブロック全体にボヤーとやや多量含む．
6　10YR2/3 黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性やや有．炭ごく微量．地山ブロック微量含む．
7　地山粘土質シルトブロック層．
8　3層に似るが、焼土少ない．
9　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性やや有．地山粘土シルトと10YR2/2黒褐色粘土質シルトが層状、互層に堆積する．
10　7.5YR3/4暗褐色焼土．

第30図　住居跡14

住居跡15

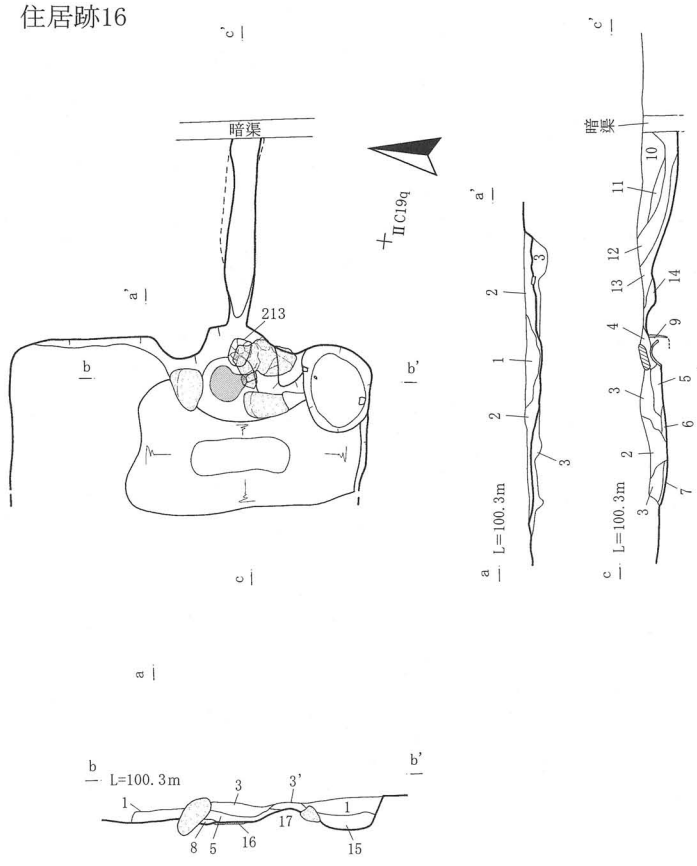




住居15　(a-a')、(b-b')、
1　10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック(粒径5-10mm)ごく微量．炭粒(粒径5-10mm)ごく微量．粘性・締まり共にやや有．
2　10YR3/2黒褐色シルト．炭化材・焼土ブロック多量．全体やや赤黒い．粘性有．　締まりやや有．
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト．粘性・締まり共にやや有．地山ブロック(粒径1-2mm)ごく微量(掘り方)．

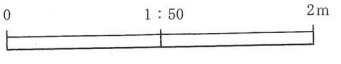
住居15　(c-c')　カマド
1　10YR3/2やや赤味の黒褐色粘土質シルト．締まり弱．粘性やや有．10YR6/3にぶい橙粘土多く含む．
2　10YR3/2やや赤味の黒褐色粘土質シルト．締まり弱．粘性やや有．焼土ブロック全体に多く含む．
3　10YR3/2黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性共に中．地山ブロック細かく(粒径2mm)全体にやや多量含む．
4　3層に似るが黒味が強く、地山ブロック少ない．炭ごく微量含む．
5　5YR5/8明赤褐色焼土．焼成良い．

住居跡16

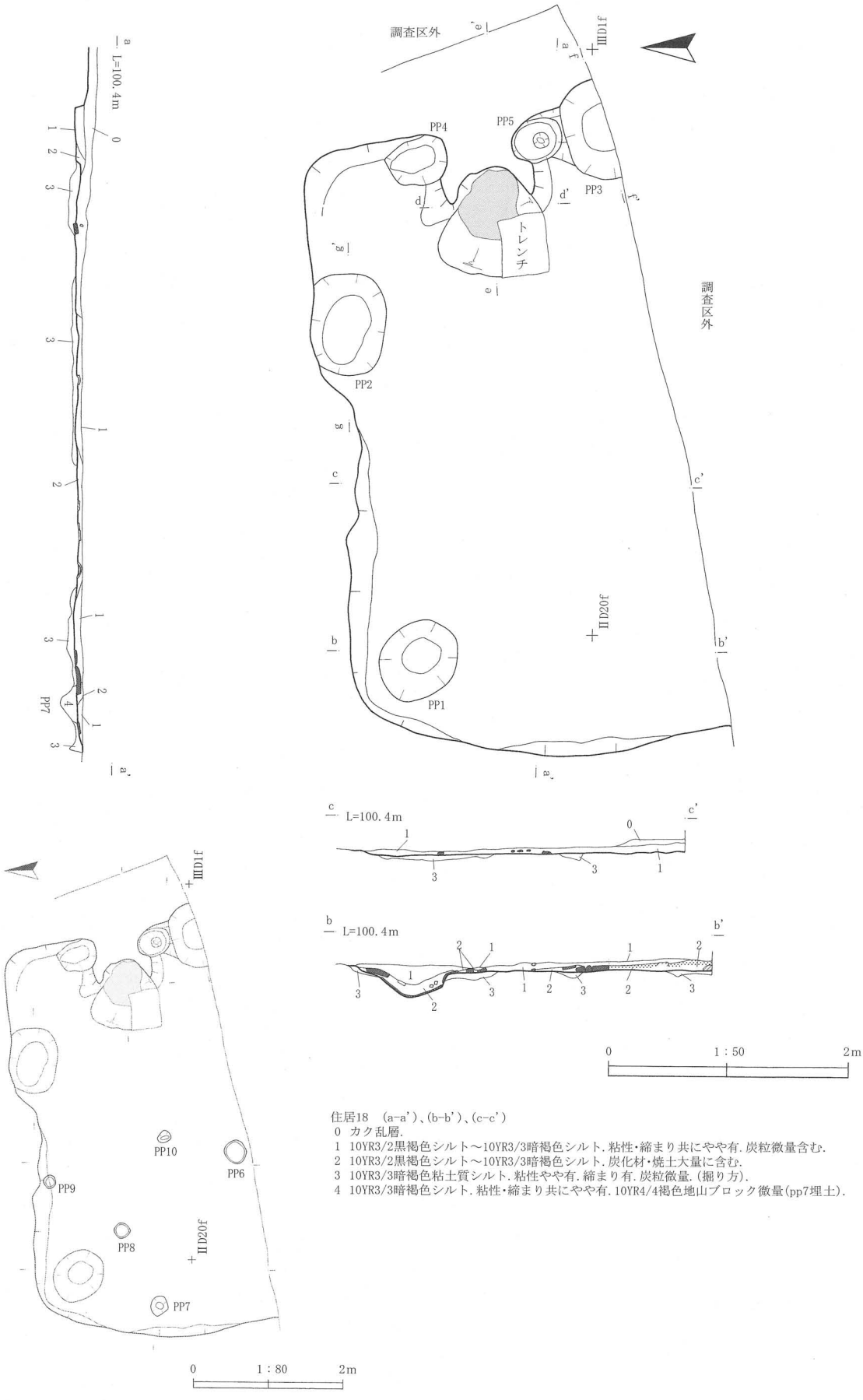


住居16　(a-a')
1　10YR2/3黒褐色砂質シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック少量．下面に沿って波状．
2　10YR3/2黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック少量(粒径1cm)．
3　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト．締まり・粘性共にやや有．粒径1-2mmの地山ブロックごく微量含む．

住居16　(b-b')、(c-c')　カマド
1　a-a'2層．
2　10YR2/3黒褐色シルト．地山ブロック微量．住居1層に似る．
3　a-a'2層に似る．
3'　地山ブロック少量に10YR3/2黒褐色シルトやや多量．締まり中．粘性やや弱．　ソデ崩落？
4　10YR3/1黒褐色砂質シルト．地山ブロックグライ層．炭下部に含む．焼土ブロックごく微量．
5　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性中．地山ブロック．焼土少量を全体に斑状に含む．
6　10YR2/3黒褐色シルト．締まり弱．粘性やや有．白色粘土ブロック・炭少量含む．
7　10YR2/3黒褐色シルト．締まり弱．粘性やや有．白色粘土ブロックごく微量．炭少量含む．
8　5層より地山ブロック多く．焼土多い．
9　4層に似るが炭焼含まない．
10　5YR3/1黒褐色地山ブロック層．天井崩落土．下面被熱．
11　5YR3/1黒褐色砂質シルト地山ブロック層．下面にやや粗い砂入る．被熱ブロック細かく少量入る(粒径1cm)．
12　5YR3/1黒褐色砂質シルト．同じ下面に被熱層入る．層中には被熱ブロック全体に少量含む．
13　12層と同じ．12層は天井．13層は下面の被熱か？
14　5YR3/1黒褐色地山ブロック層．下面に10YR3/2黒褐色地山ブロックの少し暗い層入る．
煙道部、締まり中．粘性弱．
15　10YR2/3黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．グライ化しグレー味強い．
16　5YR4/6赤褐色焼土．地山被熱．焼成弱く硬化面なし．
17　地山層

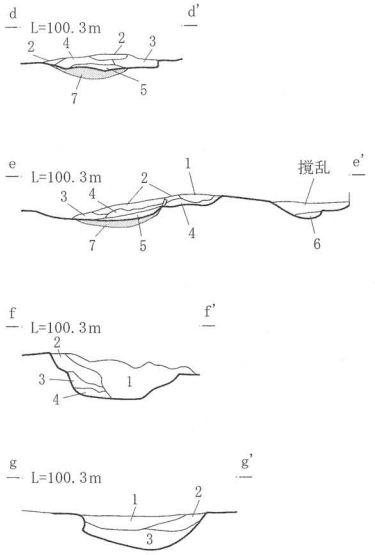


第31図　住居跡15・16



住居18　(a-a')、(b-b')、(c-c')
0　カク乱層.
1　10YR3/2黒褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト.粘性・締まり共にやや有.炭粒微量含む.
2　10YR3/2黒褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト.炭化材・焼土大量に含む.
3　10YR3/3暗褐色粘土質シルト.粘性やや有.締まり有.炭粒微量.(掘り方).
4　10YR3/3暗褐色シルト.粘性・締まり共にやや有.10YR4/4褐色地山ブロック微量(pp7埋土).

第32図　住居跡17（1）



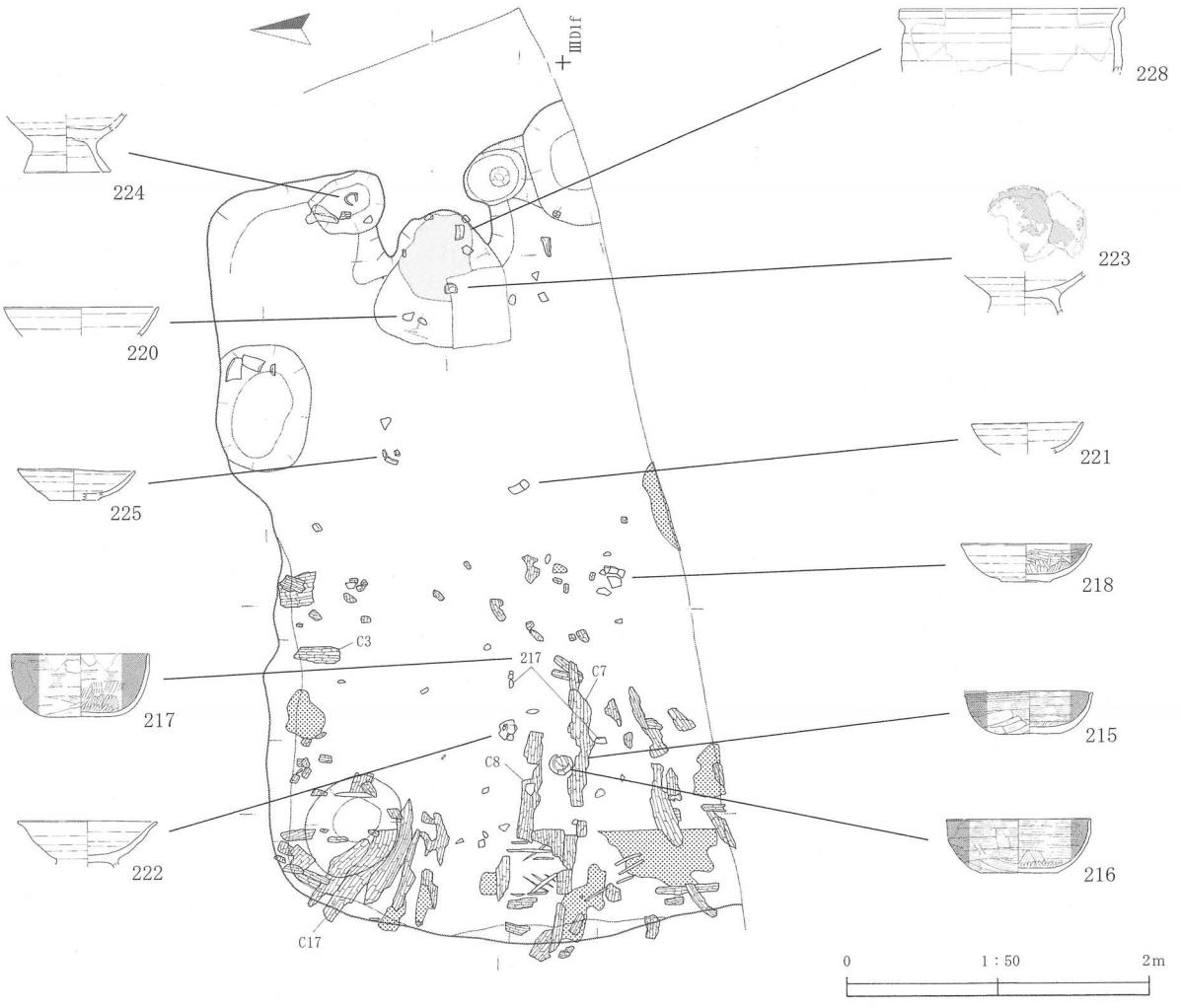
住居18　(d-d')、(e-e')　カマド
1　10YR3/2黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性やや有．地山ブロック・炭・焼土ブロック(粒径1mm)細かくごく微量含む．
2　10YR4/4褐色地山砂質シルト層．締まり中．粘性やや弱．
3　10YR3/2黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山粒全体に混じる．炭焼細かく(粒径1mm)少量含む．
4　10YR3/2黒褐色シルト．締まり中．粘性やや弱．地山ブロックごく微量．炭・焼土ブロック(粒径2-3mm)やや多量，全体に斑状に入る．燃焼部付近焼土ブロック多くなる．
5　7.5YR4/4褐色(うすいオレンジ褐色)砂質シルト．締まり有かたい．粘性弱．焼土の上に堆積．他のカマドみたいにペチャペチャせず砂っぽい．かたい．
6　1層と似る．地山ブロック少し多い．
7　5YR4/8赤褐色焼土．焼成良い．厚さ8cm(下部硬化)．

住居18　(g-g')　PP2
1　10YR3/2黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性やや有．地山ブロックごく微量．炭ごく微量(粒径1mm)．
2　地山ブロック粘土質シルト層に10YR3/2黒褐色ブロック少量含む．
3　10YR3/2黒褐色シルト．1層に似るが，炭少量(粒径2-3mm)全体に入る．地山ブロックも少し多い．下半グライ化する．

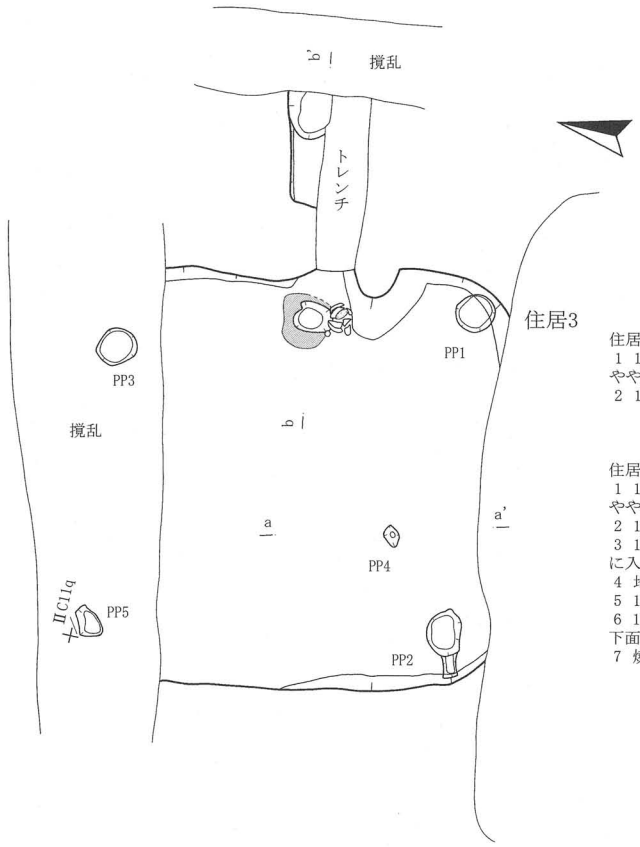
住居18　(f-f')　PP3
1　10YR2/3黒褐色シルト．締まり・粘性やや有．地山ブロック大きくごく微量．炭も同じ大きさ(粒径1-2cm)でやや多量．焼土(粒径2-3mm)微量．
2　10YR3/2黒褐色シルト．締まり・粘性やや有．地山ブロック細かく微量．炭(粒径2-3mm)ごく微量含む．
3　10YR3/3暗褐色砂質シルト．地山ブロック大量．10YR3/2黒褐色シルト少量．炭ごく微量．締まり中．粘性やや弱．
4　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．締まり・粘性共にやや有．炭ごく微量．

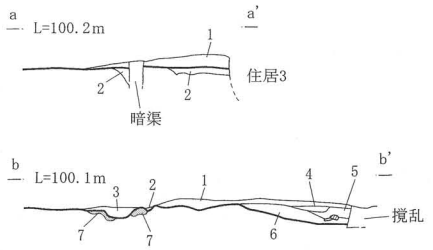
住居18　PP4
10YR3/2黒褐色粘土質シルト．締まり中．粘性やや有．炭ごく微量(1mm)．地山ブロックごく微量(粒径2-3mm)含む．

住居18　PP5
PP4と同じだが，上部に焼土ブロックごく微含む．



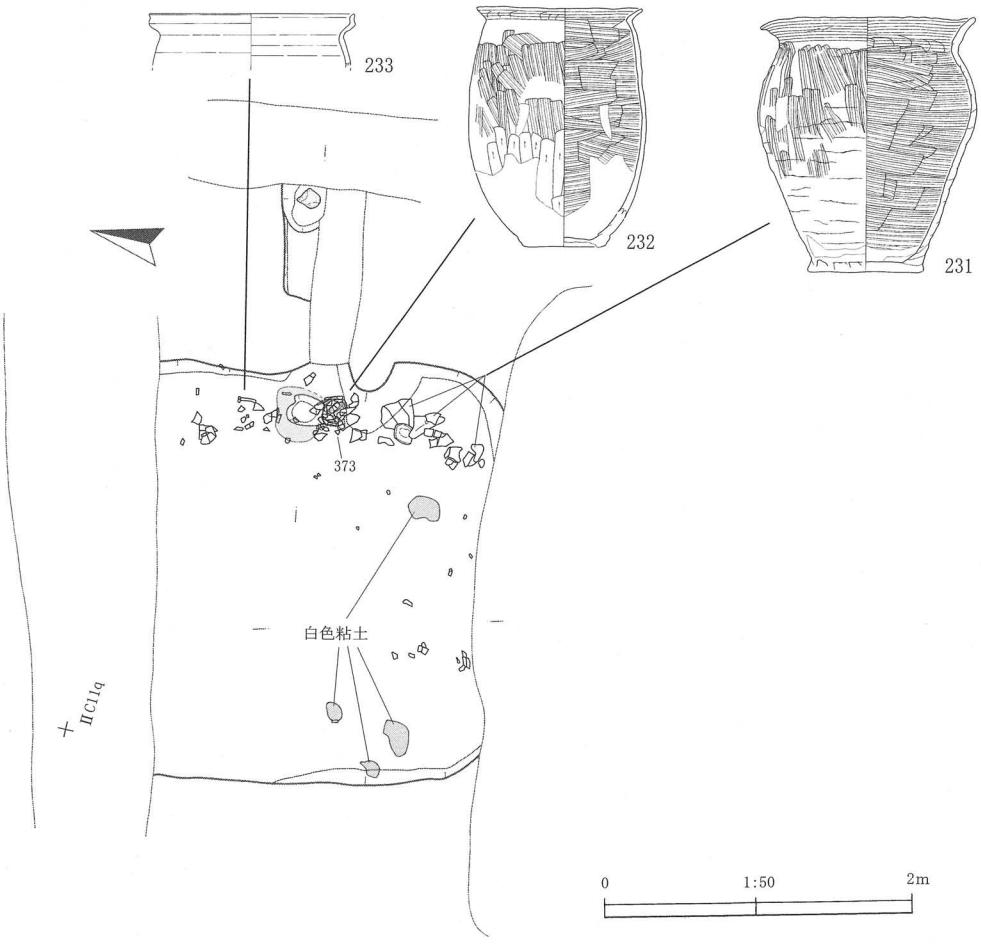
第33図　住居跡17（2）



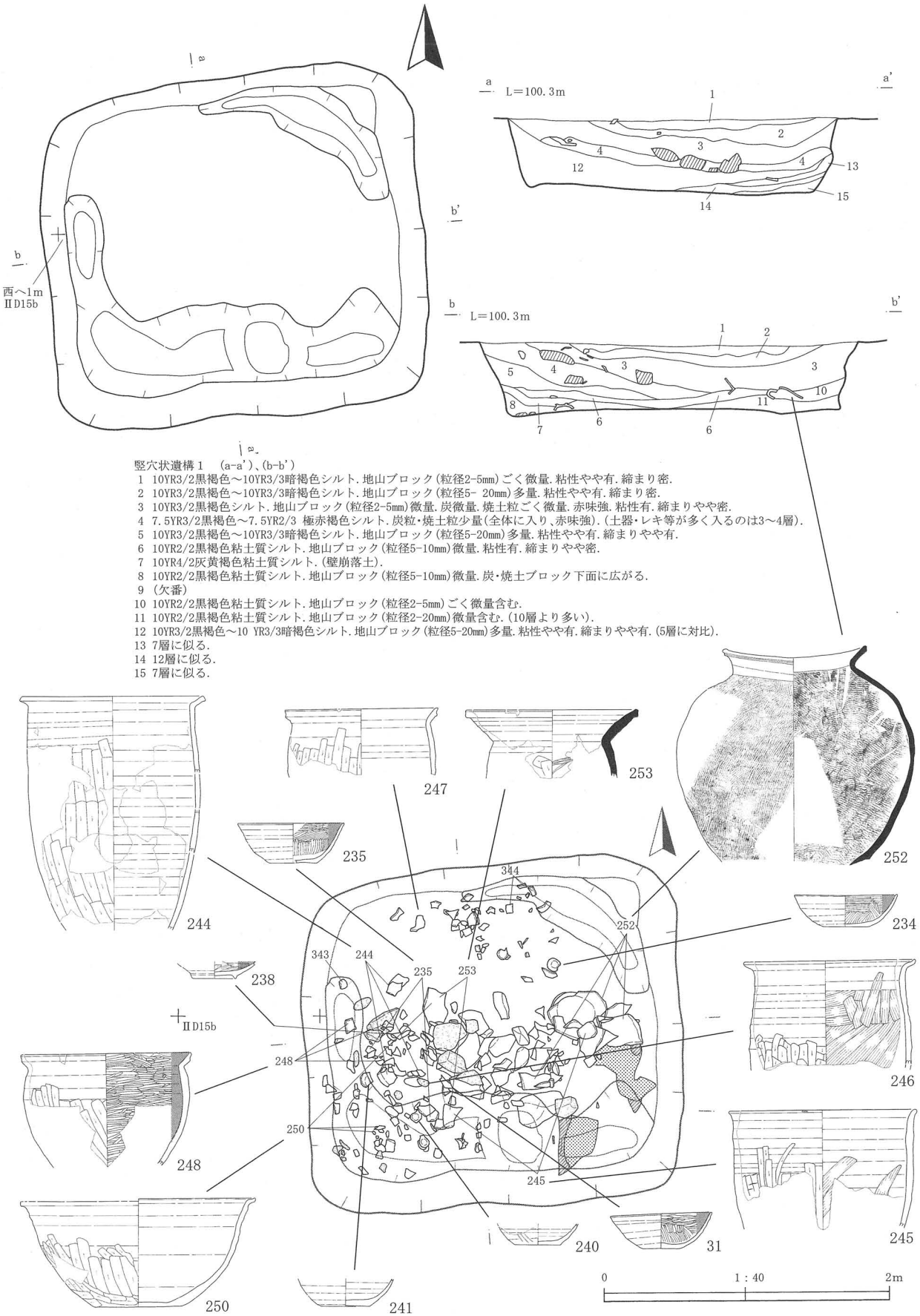


住居18　(a-a')
1　10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック(粒径5-20㎜)微量含む．粘性・締まり共にやや有．
2　10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト．地山ブロック微量．粘性・締まり共にやや有．

住居18　(b-b')　カマド
1　10YR3/1黒褐色シルト(やや砂質)．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック斑状にやや多量．東西に帯状にあるのでカク乱か？
2　10YR3/2黒褐色シルト．締まりやや弱．粘性中．白色粘土ごく微量含む．
3　10YR3/2黒褐色シルト．締まりやや弱．粘性やや中．焼土ブロック(粒径5㎜)全体に入る．掘り返し？
4　地山砂質シルト層．
5　10YR3/1黒褐色シルト(やや砂質)．締まり中．粘性やや弱．地山ブロック少量含む．
6　10YR3/1黒褐色シルト(やや砂質)．締まり中．粘性やや弱．地山ブロックやや多量．下面及び下部に層状に10YR2/2黒褐色シルト入る．
7　焼土．5YR4/6赤褐色シルト．被熱弱め．

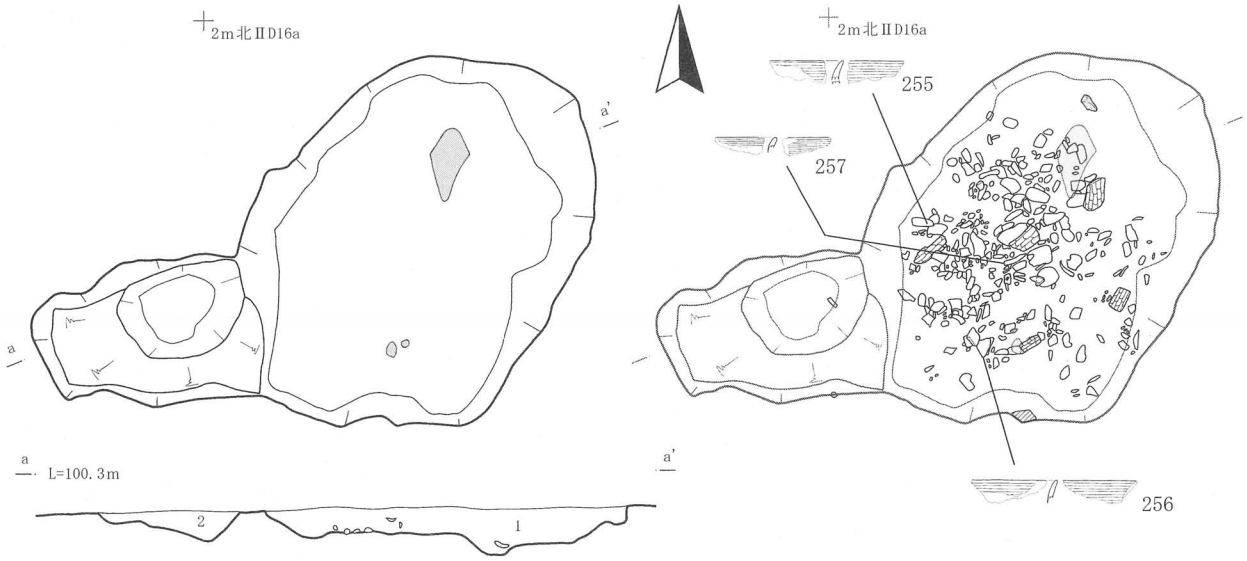


第34図　住居跡18


a
a'
L＝100.3m
b
b'
L＝100.3m
西へ1m
ⅡD15b
竪穴状遺構１　(a-a')、(b-b')
1　10YR3/2黒褐色～10YR3/3暗褐色シルト．地山ブロック（粒径2-5mm）ごく微量．粘性やや有．締まり密．
2　10YR3/2黒褐色～10YR3/3暗褐色シルト．地山ブロック（粒径5- 20mm）多量．粘性やや有．締まり密．
3　10YR3/2黒褐色シルト．地山ブロック（粒径2-5mm）微量．炭微量．焼土粒ごく微量．赤味強．粘性有．締まりやや密．
4　7.5YR3/2黒褐色～7.5YR2/3 極赤褐色シルト．炭粒・焼土粒少量（全体に入り、赤味強）．（土器・レキ等が多く入るのは3～4層）．
5　10YR3/2黒褐色～10YR3/3暗褐色シルト．地山ブロック（粒径5-20mm）多量．粘性やや有．締まりやや有．
6　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．地山ブロック（粒径5-10mm）微量．粘性有．締まりやや密．
7　10YR4/2灰黄褐色粘土質シルト．（壁崩落土）．
8　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．地山ブロック（粒径5-10mm）微量．炭・焼土ブロック下面に広がる．
9　（欠番）
10　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．地山ブロック（粒径2-5mm）ごく微量含む．
11　10YR2/2黒褐色粘土質シルト．地山ブロック（粒径2-20mm）微量含む．（10層より多い）．
12　10YR3/2黒褐色～10 YR3/3暗褐色シルト．地山ブロック（粒径5-20mm）多量．粘性やや有．締まりやや有．（5層に対比）．
13　7層に似る．
14　12層に似る．
15　7層に似る．
244
247
253
252
235
234
344
343
238
246
ⅡD15b
248
250
245
240
31
241
0
1：40
2m

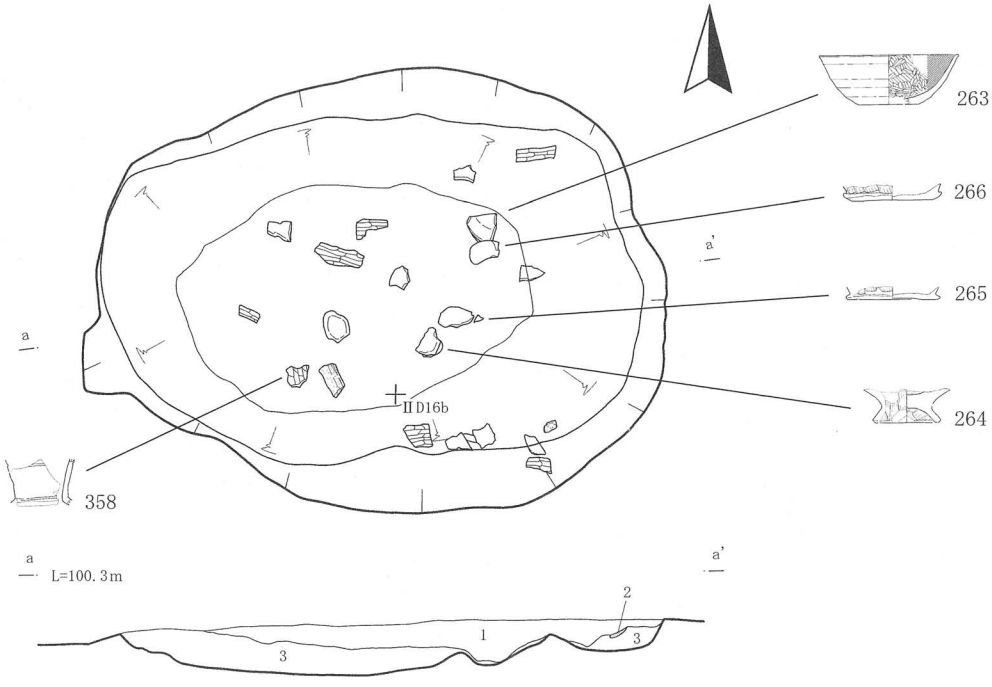
第35図　竪穴状遺構１

土坑１



土坑１　(a-a')
1　10YR2/3黒褐色粘土質シルト.締まり・粘性共に中.炭ごく微量.　焼土ブロックごく微量.下面に多く入る.下面に土器ハク片.炭片散らばる.
2　1層に似るが焼土ブロック.炭全体に混じる.1層より多い.しかし下面には炭、土器なし.

土坑２

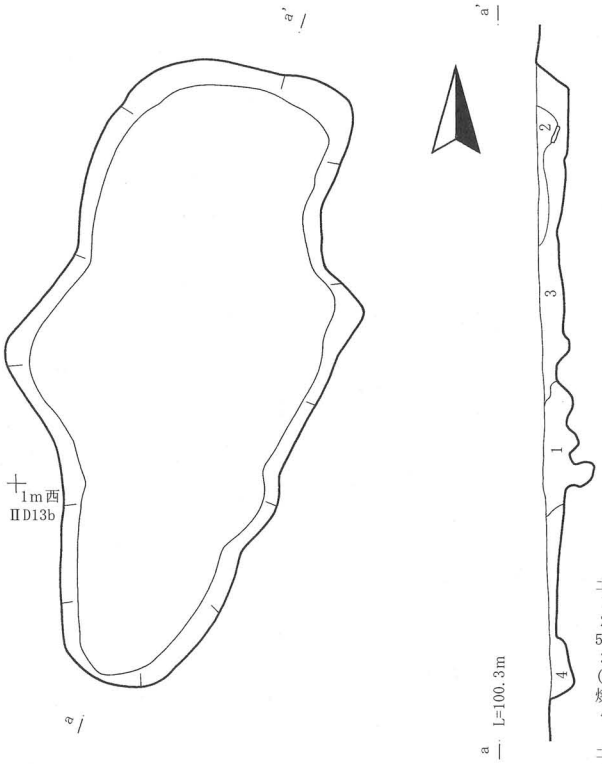


土坑２　(a-a')
1　10YR2/3黒褐色シルト.締まり・粘性共に中.炭化物・焼土ブロック少量含む(粒径～1cm).
2　5YR4/6赤褐色焼土.
3　10YR2/3黒褐色シルトと地山粘土質シルトの混土.大きく斑状に混じる.

0　1：20　1m

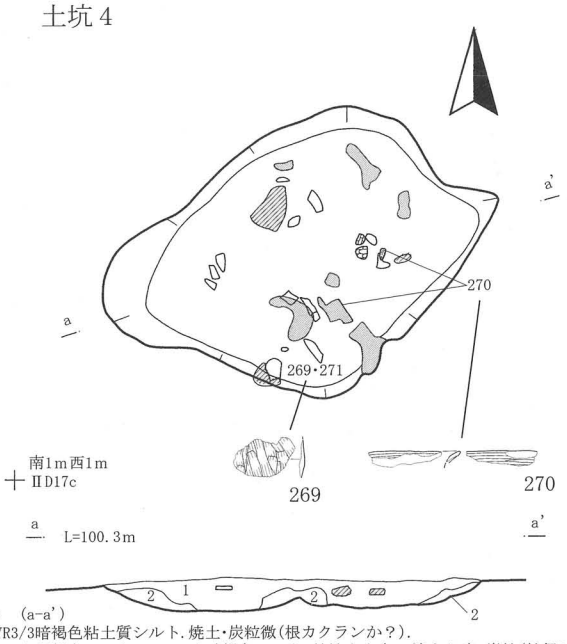
第36図　土坑（1）

土坑３



土坑３　(a-a')
1　10YR3/3暗褐色粘土質シルト.焼土・炭粒微(根カクランか？).
2　10YR3/2黒褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト.粘性やや有.　締まり密.炭粒(粒径2-5mm)ごく微量含む.
3　10YR3/2黒褐色シルト～10YR3/3暗褐色シルト.炭粒(粒径5-20)多量.焼土ブロック(5-10mm)多量.その他.カマドの煙道にあるような黒っぽくススけた土片.ガリガリの焼土塊など多量.白色粘土ブロック(粒径20-50mm)も少量含む.ゴチャまぜ.
4　10YR3/3暗褐色粘土質シルト.

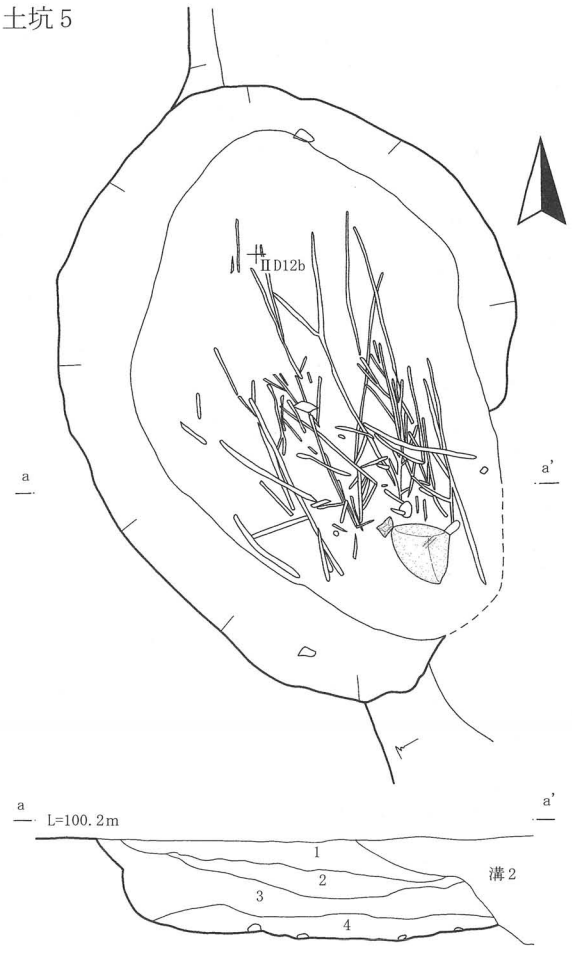
土坑４



土坑４　(a-a')
1　10YR2/3黒褐色粘土質シルト.締まり・粘性共に中.炭・焼土ブロックごく微.地山ブロック細かくごく微.他の土坑と同じ土だが炭・焼土ブロック少ない.
2　10YR2/3黒褐色粘土質シルト.締まり・粘性共に中.地山ブロック多量含む.

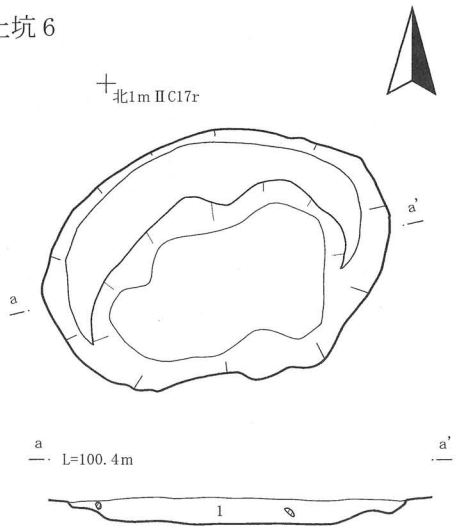
0　1：20　2m

土坑５



土坑５　SI-18　(a-a')
1　10YR3/2黒褐色粘土質シルト～10YR2/2黒褐色粘土質シルト.地山ブロック(粒径5-20mm)全体に微量.炭粒ごく微量含む
2　10YR2/2黒褐色シルト.地山ブロック(粒径5-20mm)ごく微量.炭粒少量(目立つ).炭化材南半部に集中.
3　10YR2/2黒褐色シルト.地山ブロック(粒径5-20mm)多量含む.
4　10YR2/2黒褐色粘土質シルト.地山砂ラミナ状(水性堆積).底面の柴状の材を覆っている(モモ種子、クルミ出土).

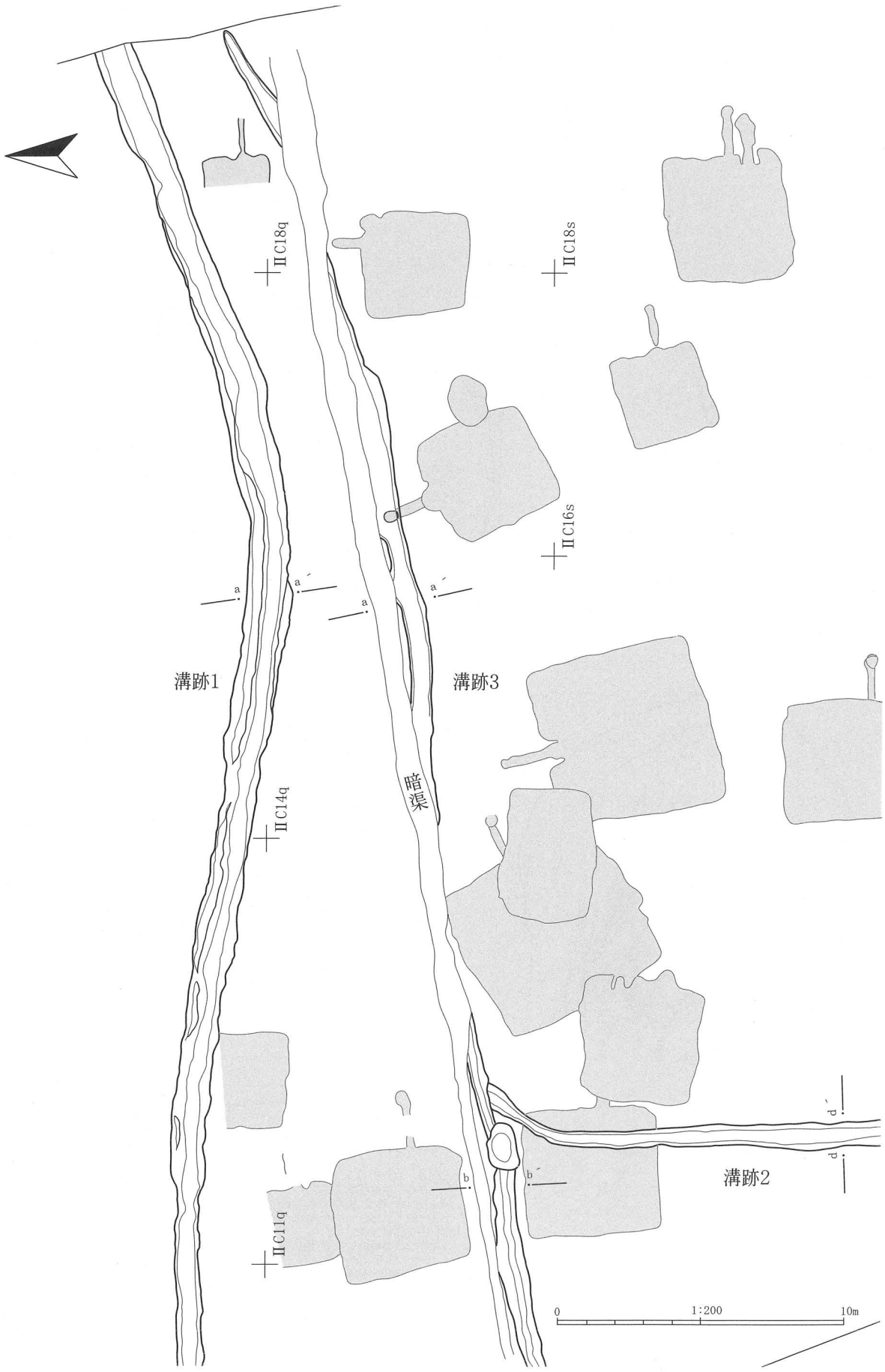
土坑６



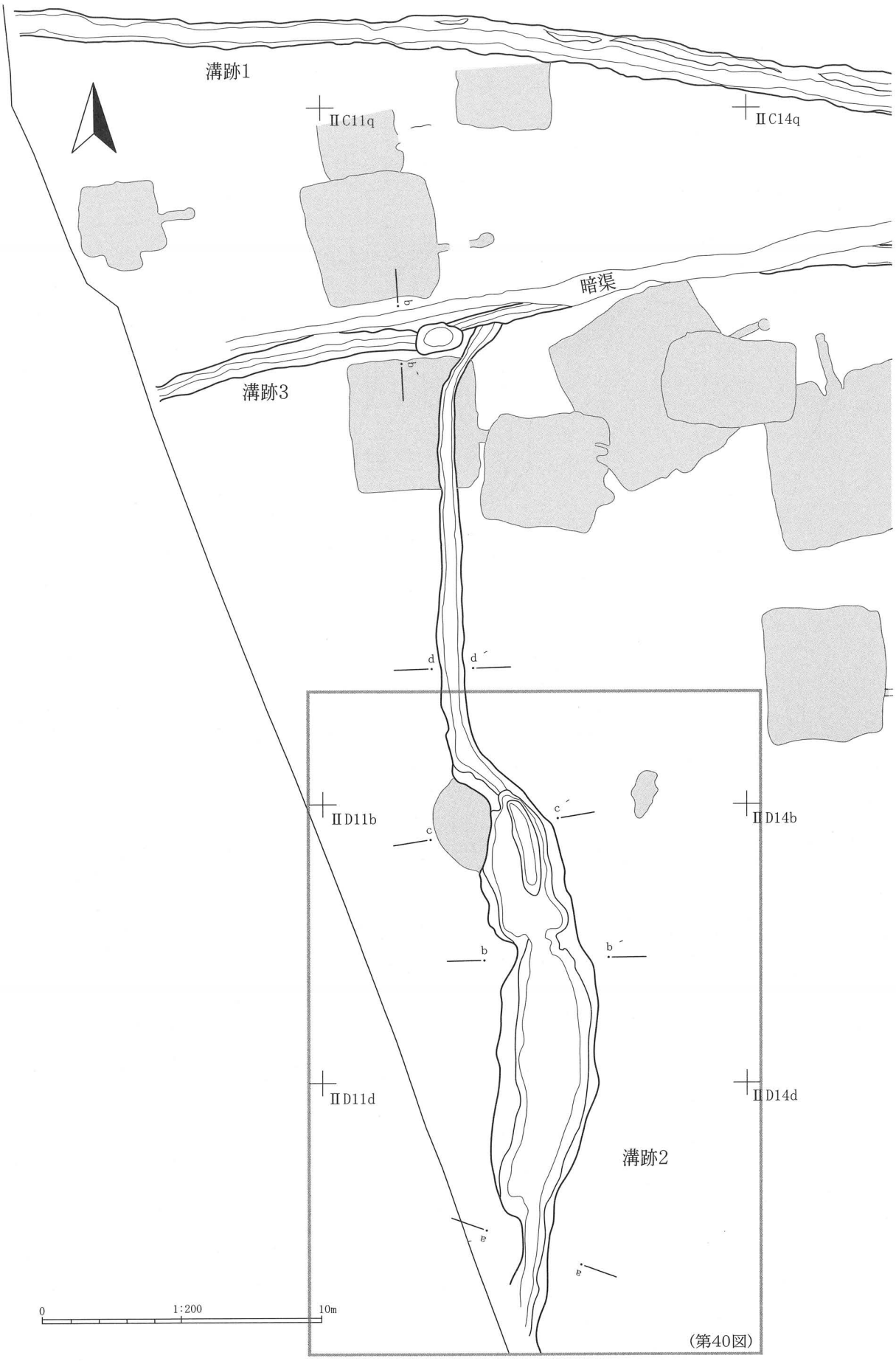
土坑６　(a-a')
1　10YR4/3にぶい黄褐色シルト大量.10YR3/2黒褐色シルトやや多量.10YR5/3にぶい黄褐色砂質シルト(地山)　微量の混土層.締まりやや有.粘性弱.

0　1：40　2m

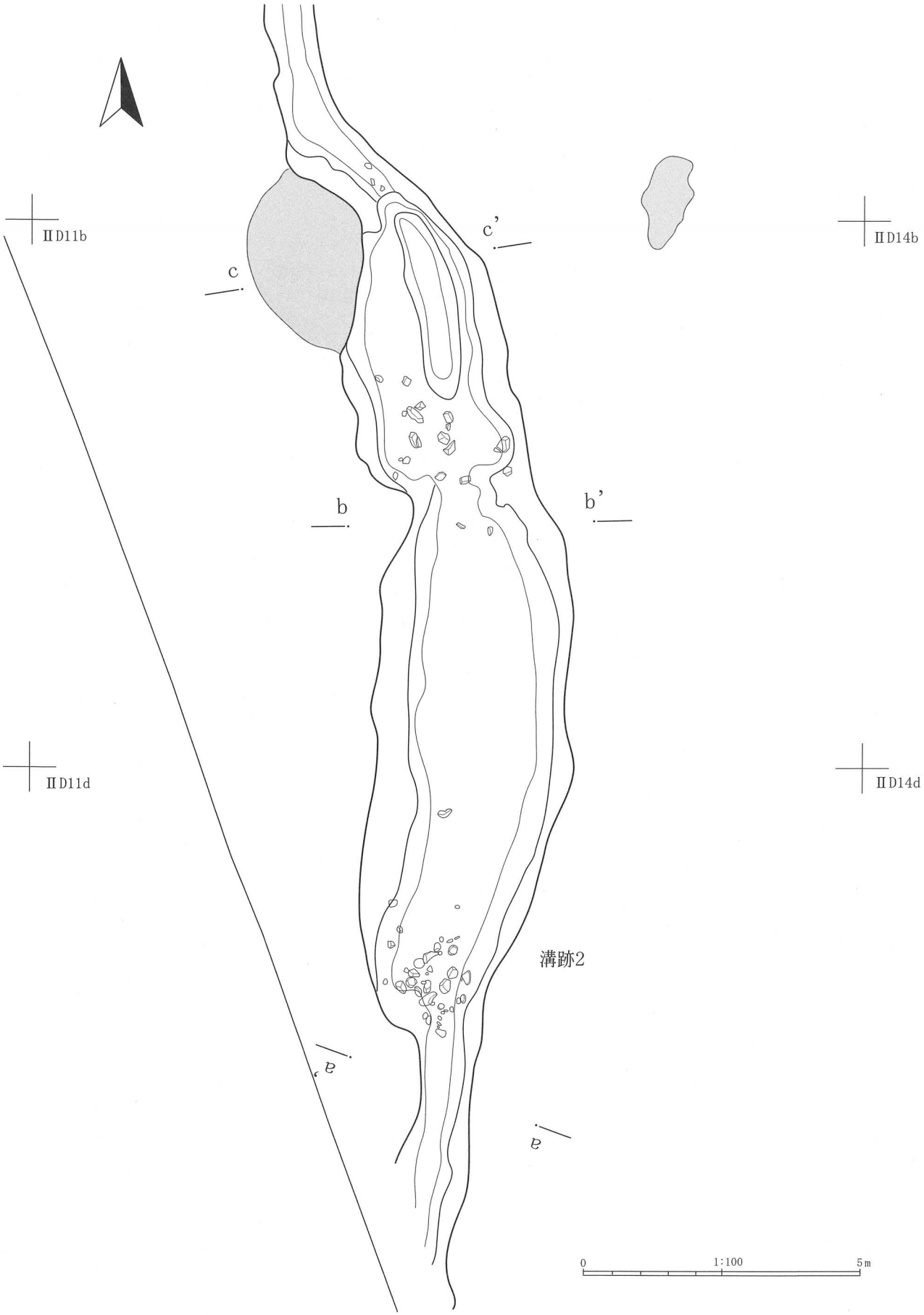
第37図　土坑（2）


ⅡC18q
ⅡC18s
ⅡC16s
ⅡC14q
ⅡC11q
溝跡1
溝跡3
溝跡2
暗渠
a
a´
b
b´
d
d´
0
1:200
10m

第38図　溝跡（1）

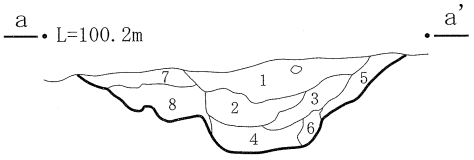

溝跡1
ⅡC11q
ⅡC14q
暗渠
溝跡3
d
d´
ⅡD11b
ⅡD14b
c
c´
b
b´
ⅡD11d
ⅡD14d
溝跡2
a
a´
0
1:200
10m
（第40図）

第39図　溝跡（2）



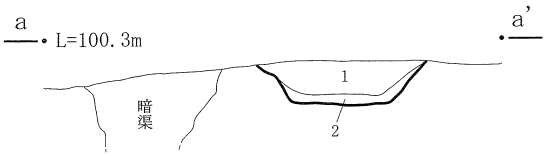
第40図　溝跡（3）

溝跡１

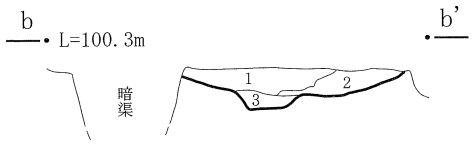


溝跡１　(a-a')
1 10YR2/2黒褐色シルト.締まり中.粘性やや有.炭ごく微量含む.
2 10YR2/2黒褐色粘土.締まり・粘性共に有.10YR2/2黒褐色シルトが全体に混じる.炭微量含む.
3 10YR2/2黒褐色シルト.締まり中.粘性やや有.色は4層と似る.
4 2層に似るがシルトの量多く、色茎味強い.腐食木片細かくごく微量含む.
5 10YR3/1黒褐色地山砂質シルト大量に10YR2/2黒褐色シルトブロックやや多量含む,締まり中.粘性やや弱.
6 2.5YR3/1暗赤灰色地山砂.崩落層.
7 10YR2/2黒褐色シルト主体土.1層に似るが地山ブロック少量含む.
8 10YR2/2黒褐色シルトと10YR3/1黒褐色砂質シルト.地山.砂地山の互層.
※全体にグライ化.グレー味つよい.10YR3/1黒褐色に近く10YR2/2黒褐色.

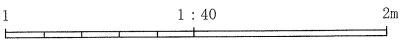
溝跡３



溝跡３　(a-a')
1 10YR3/2黒褐色シルト.粘性有.締まりやや密.酸化斑多(Bベルトの1･2層).
2 10YR3/2黒褐色シルト.地山砂多量含む.

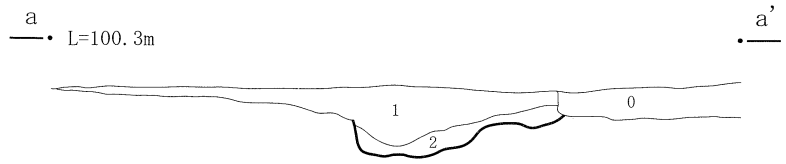


溝跡３　(b-b')
1 10YR3/2黒褐色シルト.粘性有.締まりやや密.酸化斑全体に弱.
2 1層に地山粘土ブロック微量.酸化斑全体に弱,
3 10YR3/1黒褐色粘土質シルト.地山粘土ブロック(粒径2-10mm)微量.ややグライ化.粘性有.締まりやや密.

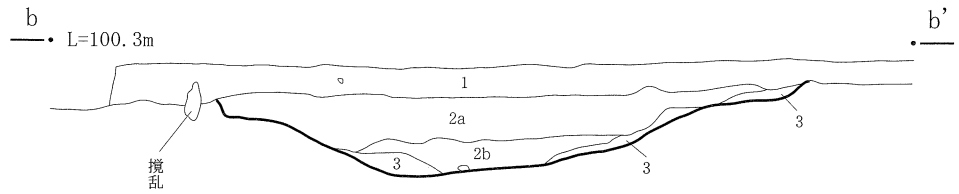


第41図　溝跡（4）

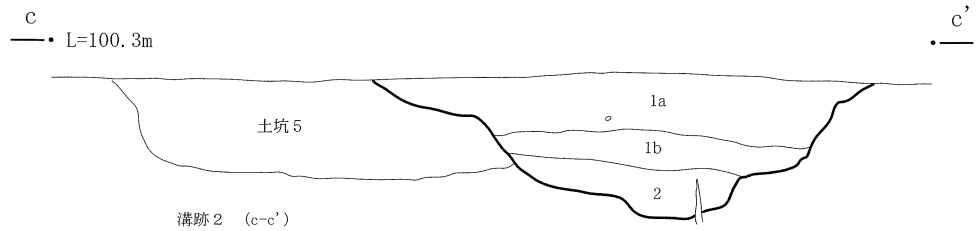
溝跡２



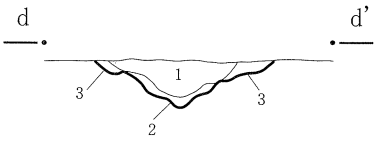
溝跡２　(a-a')
0 カク乱.(トレンチ)
1 10YR3/2黒褐色シルト.粘性有.締まりやや有.
2 10YR3/2黒褐色粘土質シルト.粘性有.締まりやや有.地山ブロック(粒径10-20mm)微量含む.



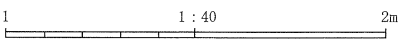
溝跡２　SD-02　(b-b')
1 10YR4/3にぶい黄褐色シルト～10YR4/4褐色シルト.旧耕作土(現状？).締まりやや密.粘性やや有.
2a 10YR3/2黒褐色シルト.酸化斑発達.粘性やや有.締まりやや密.全体赤味.
2b 10YR3/2黒褐色シルト.粘性有.締まりやや有.グライ化によりやや青味.
3 2b層に地山ブロック少含む.



溝跡２　(c-c')
1a bベルト.2aに同じ.
1b bベルト.2bに同じ.
2 10YR3/2黒褐色粘土質シルト.粘性有.締まりやや有.底面に杭並ぶ.オニグルミなど出土.



溝跡２　(d-d')
1 10YR3/2黒褐色シルト.粘性有.締まり密.全体にややグライ化.青味.
2 1層に地山ブロック(粒径2-10mm)微量.粘性やや有.締まりやや密.
3 2層に似る.地山ブロック2層よりやや多量.粘性やや有.締まりやや密.



第42図　溝跡（5）

3　遺　　物（第34～45図、写真図版28～34）

今回の調査では、土器（土師器・須恵器・縄文～弥生土器）・土製品・鉄製品・木製品・石器・石製品が出土した。以下種類ごとに記載する。

（1）土師器・須恵器

遺物の大半を占めており、出土量は大コンテナ（40×30×40cm）10箱程度、重量は土師器127,543.4ｇ、須恵器20,258.4ｇ、合計147,801.8ｇである。

①土師器

器種は坏・高台付坏・高台付皿・鉢・甕・把手付き土器である。計234点を掲載した。

〈坏〉

坏は108点掲載した。大半がロクロ成形によるものだが、一部に非ロクロ成形の可能性を持つものも見られる。

ロクロ成形の坏（103点）は、器面を磨いた後に黒色処理されたもの（62点）と、ロクロ成形のみのもの（41点）とに分かれる。

内面が黒色処理された土器は59点である。法量は口径11.7～16.4cm、器高3.7～6.7cm、底径4.2～7.6cmで、大半が口径13～14cm台、器高４～５cm台、底部６cm前後に収まる。法量がこれよりも小さい坏は住居跡17の218・219のみである。器形は、体部が丸みを帯びて立ち上がるものが多いが、直線的に立ち上がるものが若干含まれる。内面はミガキが施され（297除く）、外面はロクロ成形のみの場合が多い。再調整されている個体は全体のうち18点のみで、体部下半～底部にかけて手持ちまたは回転台を用いたヘラケズリが施されている。再調整されたものは住居跡２（４点）と住居跡12（５点）からの出土が目立つ。

内外面ともに黒色処理された土器も３点出土した。いずれも住居跡17より出土したものである（215～217）。内面のみ黒色処理される土器とは器形・調整が異なっている。器形は口径に対して底径が大きく、底部と胴部の境界が不明瞭で内湾して立ち上がる。また、ロクロ成形後に内外面のほぼ全体に再調整が施されている。内面のミガキはやや幅の広い工具が用いられ、ナデ状の痕跡として観察される。

黒色処理されないロクロ成形の坏は、基本的に底部切り離し後の再調整が施されない。法量は口径10.5～16.1cm、器高2.6～6.8cm、底径3.8～7.0cmである。口径は13cm台、底径は５cm台に集中がみられる。器高は３～５cmの間とややばらつきがある。口径13cm未満の小さいものは住居跡11・12・17から出土している（124・126・136・139・142・144・221・225）。体部が丸みを帯びて立ち上がる器形のものが大半だが、大きい個体には体部の丸みが若干弱くやや直線的に立ち上がるものが認められる。また器高が低い個体には、口縁端部がわずかに外反するものや、厚い底部が体部下端からやや突出するもの、器壁の立ち上がりが直線的なものなど、器形に多様性が認められる。

非ロクロ成形の可能性があるもの（ロクロ成形の痕跡が確認できないもの）は５点のみである（３・59・99・195・230）。このうち59は手捏ねによる小形の坏で、通常の坏とは形態が異なる。230は輪積み痕が明瞭に観察されることから非ロクロ成形と判断した。３・99・195はミガキ・ケズリ・ナデなどの調整が内外面に入念に施されているため、ロクロ成形の痕跡の有無を確認できなかった。器形からみれば３・195は本来ロクロ成形によるものである可能性がある。

〈高台付坏〉

黒色処理される個体３点（内外面１点・内面１点）、ロクロ成形のみの個体６点、計９点を掲載した。口縁部から底部まで残存しているものは１点（189）のみで、高台部の高さ１㎝程度、器形は丸みを帯びて立ち上がる。238と294の高台は、189と同様に高さ１㎝以下と低いが、224は３㎝程度と高く、223も高い台を持つと推測される。222は台部が欠損するが底部から口縁部まで残っており、器形は189に比べ開いて、直線的に立ち上がる。

〈高台付皿〉

５点出土し全て掲載した。うち３点が住居跡１からまとまって出土している。全体形状をのこす個体は１点のみ（５）で、口径は13.2㎝、底部は6.0㎝である。残存部から復元される他の個体の法量も同程度と考えられる。非ロクロ成形で、外面はヘラナデまたはヘラケズリ、内面はミガキまたはナデが施される。116を除き内面が黒色処理されている。

〈鉢・ナベ〉

鉢は３点（22～24）掲載した。すべて住居跡１から出土した。法量・器形には個体差があるが、成形・調整方法は共通している。非ロクロ成形後、外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキののちに黒色処理される。250のナベは24の鉢と器形が似るが、ロクロ成形によるものであり、黒色処理はなされない。

〈甕〉

非ロクロ成形のもの51点、ロクロ成形のもの55点、計106点を掲載した。

非ロクロ成形の甕は、口径が11～15㎝程度、器高15㎝以下の小形のもの（14・15・113・118・198他）と、口径17㎝以上、器高20㎝以上のいわゆる長胴甕（10～12・80・81・86・120他）とに分けられる。器面調整は両者類似しており、内面がハケメ（一部にヘラナデ含む）、外面はハケメまたはヘラナデ、ヘラケズリが施される。16・18・199は頚部～胴部が膨らむ球胴状の器形をもつが、同様の調整が認められる。

ロクロ成形の甕は、口径16.5㎝以下、器高15㎝以下の小形のもの（65・83・181他）と、口径17.6～25.5㎝、器高28～34㎝程のもの（計測可能個体21・155・200の数値）とに分かれる。前者は、内外面全体にロクロ成形の痕跡をよく残し、ケズリ等の調整が見られない（66除く）。底部の切り離しは回転糸切りによる。一方後者の大半は下半部にヘラケズリが施され、上半部がロクロ成形となっている。胴部下半にタタキ目をのこす個体もある（61・249）。

100と156はいわゆる北陸型の甕で、底部が丸底、内外面とも胴部下半～底部にかけてタタキ目が施されている。173・203・248はロクロ成形後内面が磨かれ黒色処理されている。通常のロクロ成形の甕に比べ口径の広さに対して器高が低く、鉢に近い形態を持つ。44も黒色処理は確認できなかったが、これらと器形・調整ともに似る。

〈把手付き土器〉

１点のみ出土した（242）。底部から垂直に立ちあがり、口縁部付近で屈曲して開き、鍔が付いたような器形を持つ。内外面とも磨かれたのち黒色処理されている。体部には把手が欠損したような痕跡がある。

①須恵器

器種は坏・瓶類・大甕がある。計68点を掲載した。

〈坏〉

16点掲載した。法量は口径13.0～15.2㎝、器高3.9～5.5㎝、底径5.1～7.0㎝である。法量の個体差

は土師器に比して小さい。口縁～底部まで残存している個体は6点のみで、底部から直線的立ち上がるもの（78・79）、やや丸みを帯びて立ち上がるもの（118・178・273・300）に分かれる。器高は前者が低く、後者が高い。79・111・118は底部が再調整されている。

〈瓶類・大甕〉

瓶類は43点掲載した。いずれも口縁部から底部まで器形を復元できる個体はない。大甕は9点掲載したが、252を除きすべて破片で器形の復元には至っていない。

（2）鉄　製　品

8点を掲載した（378～385）。このうち378～381は住居跡の埋土から出土したものである。378は刀子、379は鉄鏃の一部とみられる。380は住居跡17の床面付近から出土したもので、錆が進んで細部の観察が不可能であるが、全体形状から雁又鏃の可能性が高い。381も同じく住居跡17の埋土から出土した、長さ8.3cm、幅0.9cmの板状の金具である。裏面は平坦、表面は肥厚して、断面形が薄い凸レンズ状を呈する。中央と両端寄りに計3個の鋲があしらわれ、鋲の周囲は下地板の輪郭も丸いふくらみを持つ。両端部に直径2mm強の孔、中央の鋲の両脇に径1mmほどの孔が穿たれている。裏面中央付近には赤色顔料の付着が認められる。

（3）木　製　品

386は木椀の底部である。体部以上が失われ全体形状が不明である。387は曲物の側板で、同一個体の破片8点（a～h）を掲載した。幅10cm前後、厚さ5mmほどの柾目材で、木目と直交する方向に概ね1cm強の間隔で刻目が入れられている（内面側を図示）。綴じ穴は上端から2cm程の所に並列するものに加え、387aの図左端には縦方向に列ぶものもみられる。これらの木製品はいずれも、土師器坏など平安時代遺物とともに、B2区（南側低湿地）のトレンチ最下部から出土したものである。

（4）石器・石製品

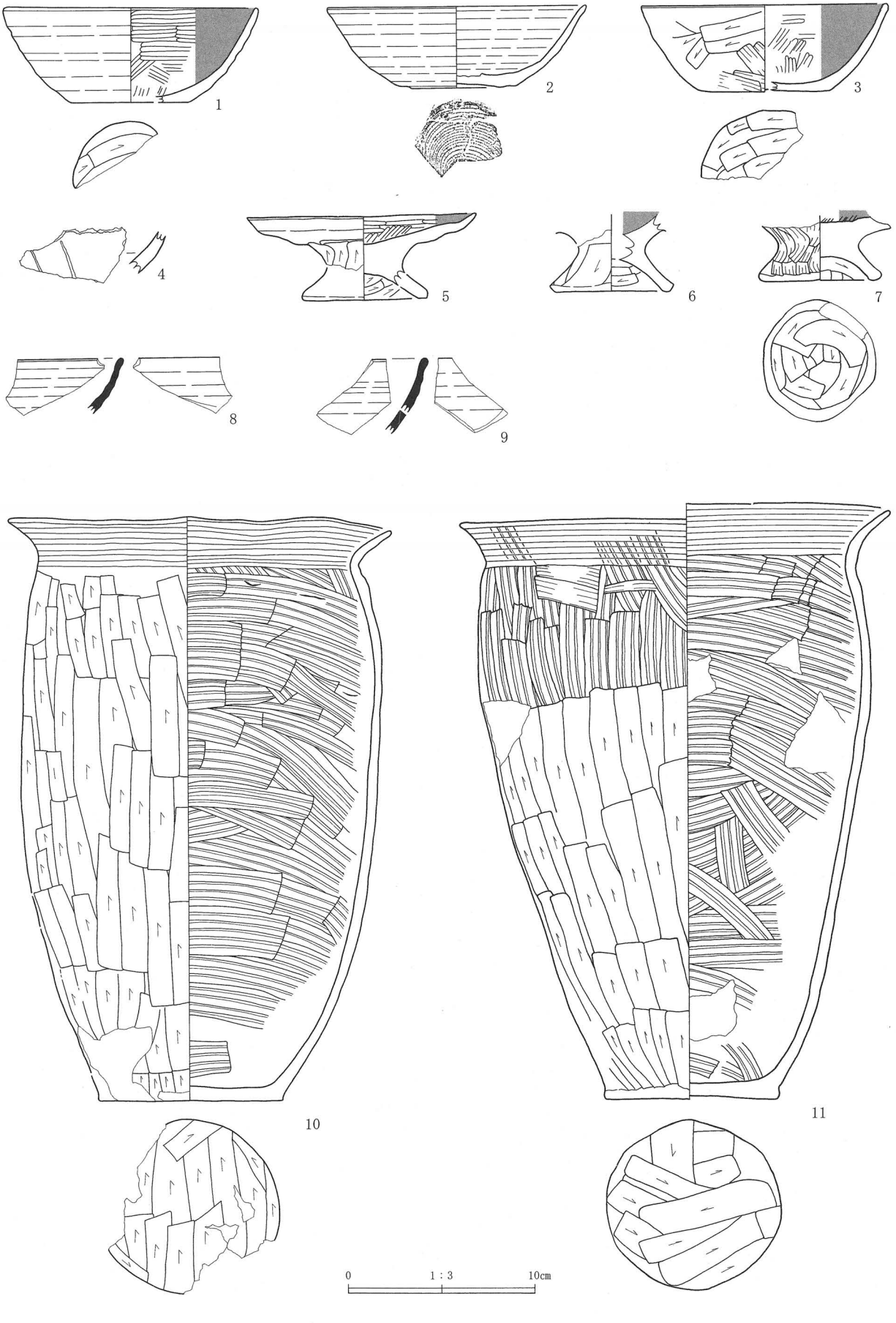
388～390は石鏃である。いずれも有茎。406は石核で3点の剥片（393・395・396）が接合する。404は表面に擦痕が観察される棒状の石製品である。405・410は凹石である。これらは後述の縄文時代晩期～弥生時代の土器に伴うものだろう。

407～409・411・412は砥石である。細目の凝灰岩が主だが、粗目の安山岩（409）も含まれる。平安時代住居跡からの出土が目立つ。

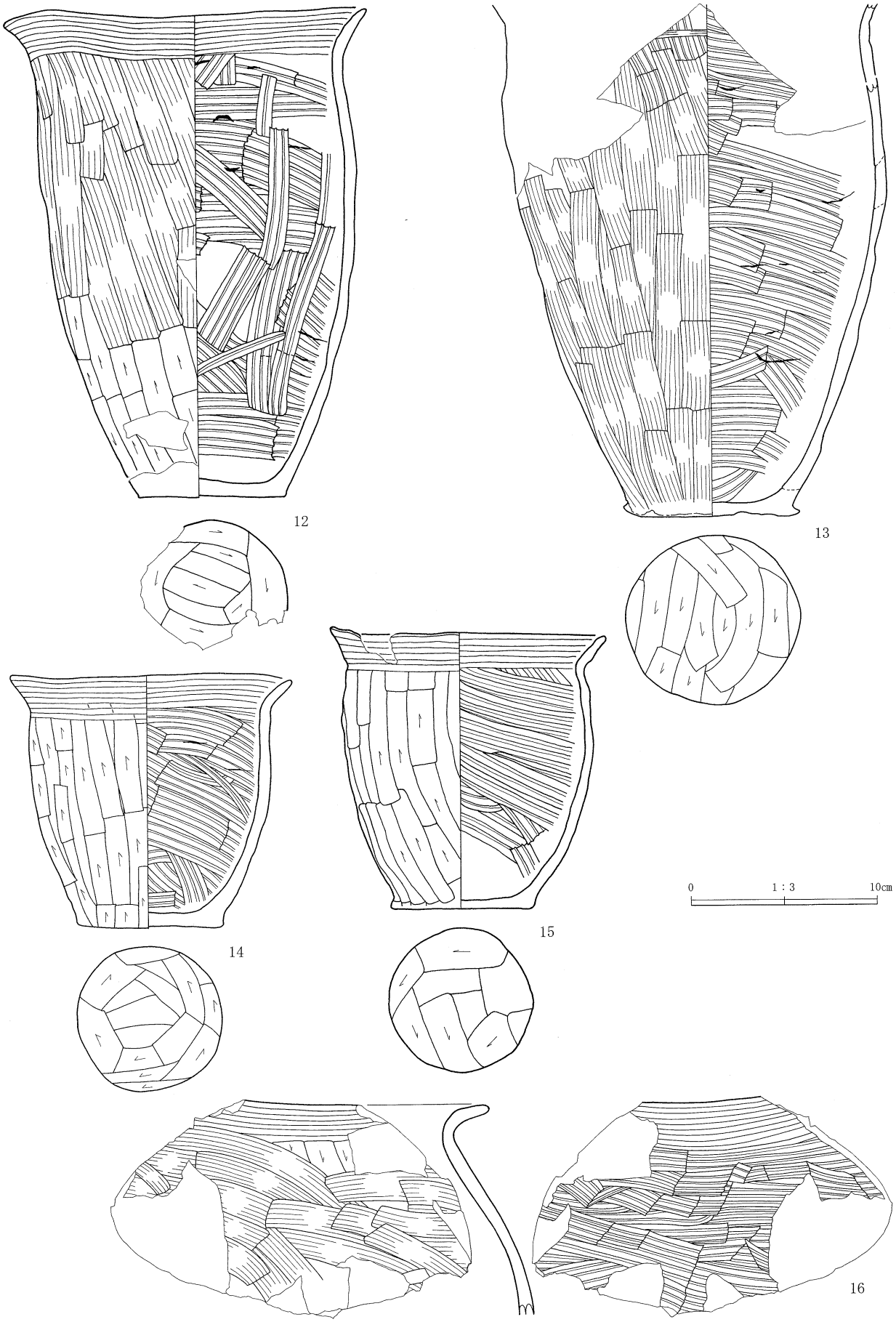
（5）縄文晩期～弥生時代の土器

主にA1区南半南西部の暗褐色土層から出土したものである。縄文時代晩期中葉～弥生時代の土器（305～360）が出土し、特に縄文時代晩期終末期～弥生時代前期が主体となっている。器種には、浅鉢・鉢・深鉢（甕形）・台付鉢（高坏形）・壺などみられる。下半部が暗褐色土層（Ⅲb層）に埋まった晩期中葉の土器（346）の上半を、弥生時代前期遺物を包含する洪水堆積層（Ⅲa層）が覆う様子が確認されている。

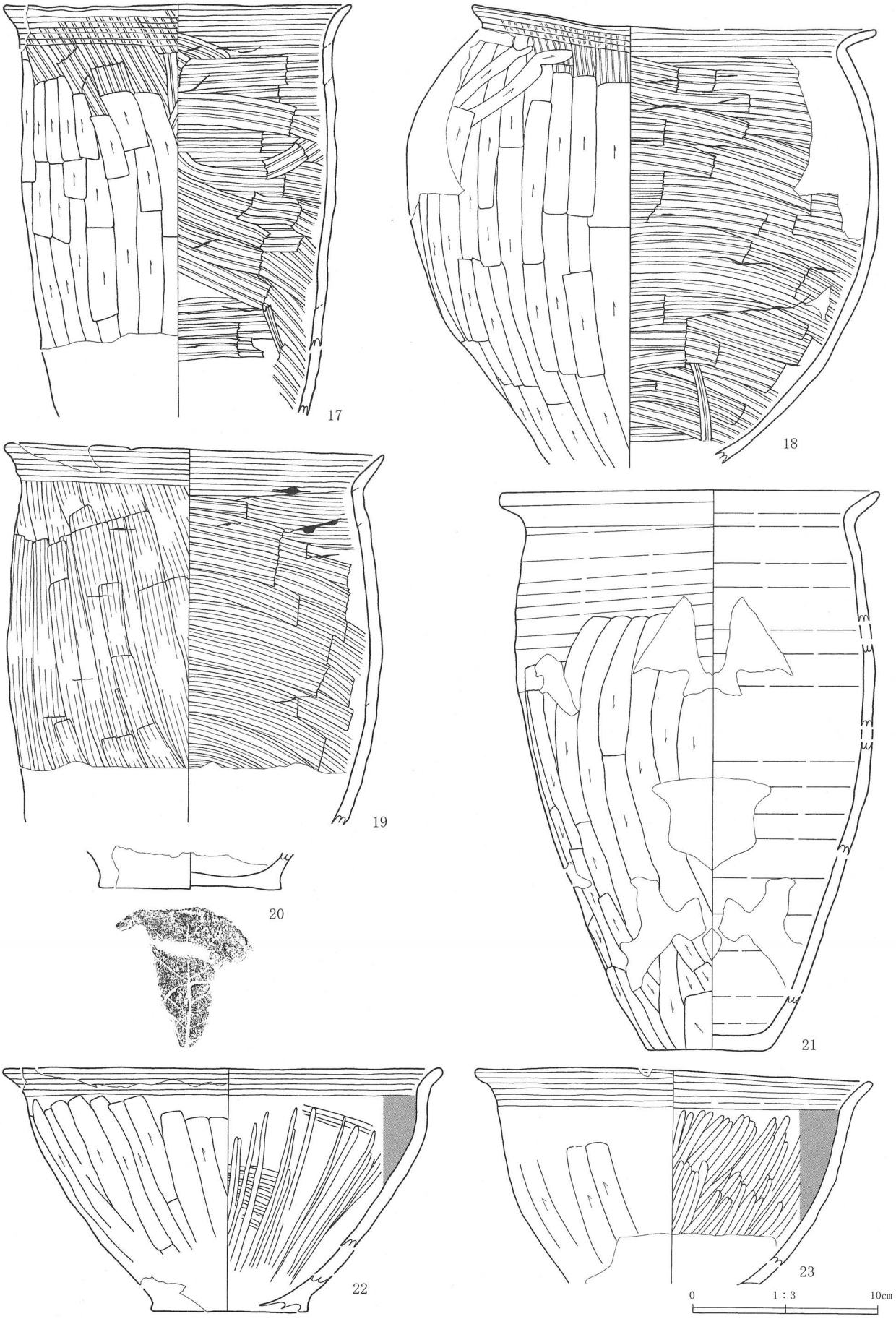
住居跡１



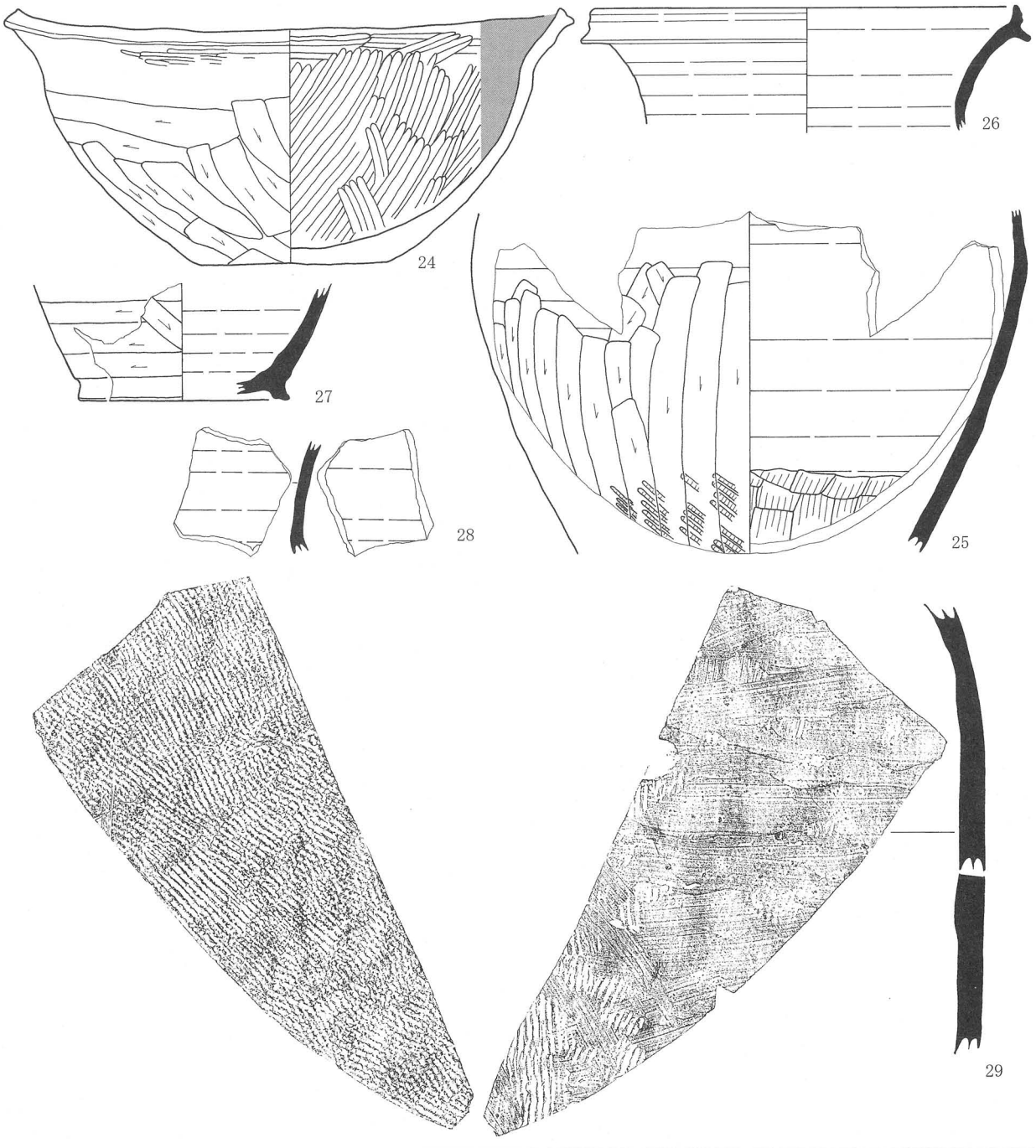
第43図　出土遺物（1）



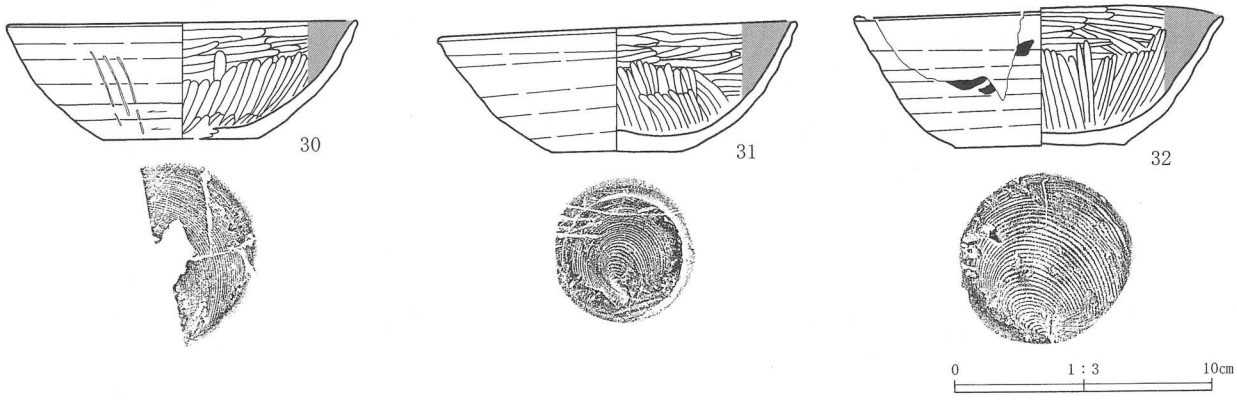
第44図　出土遺物（2）



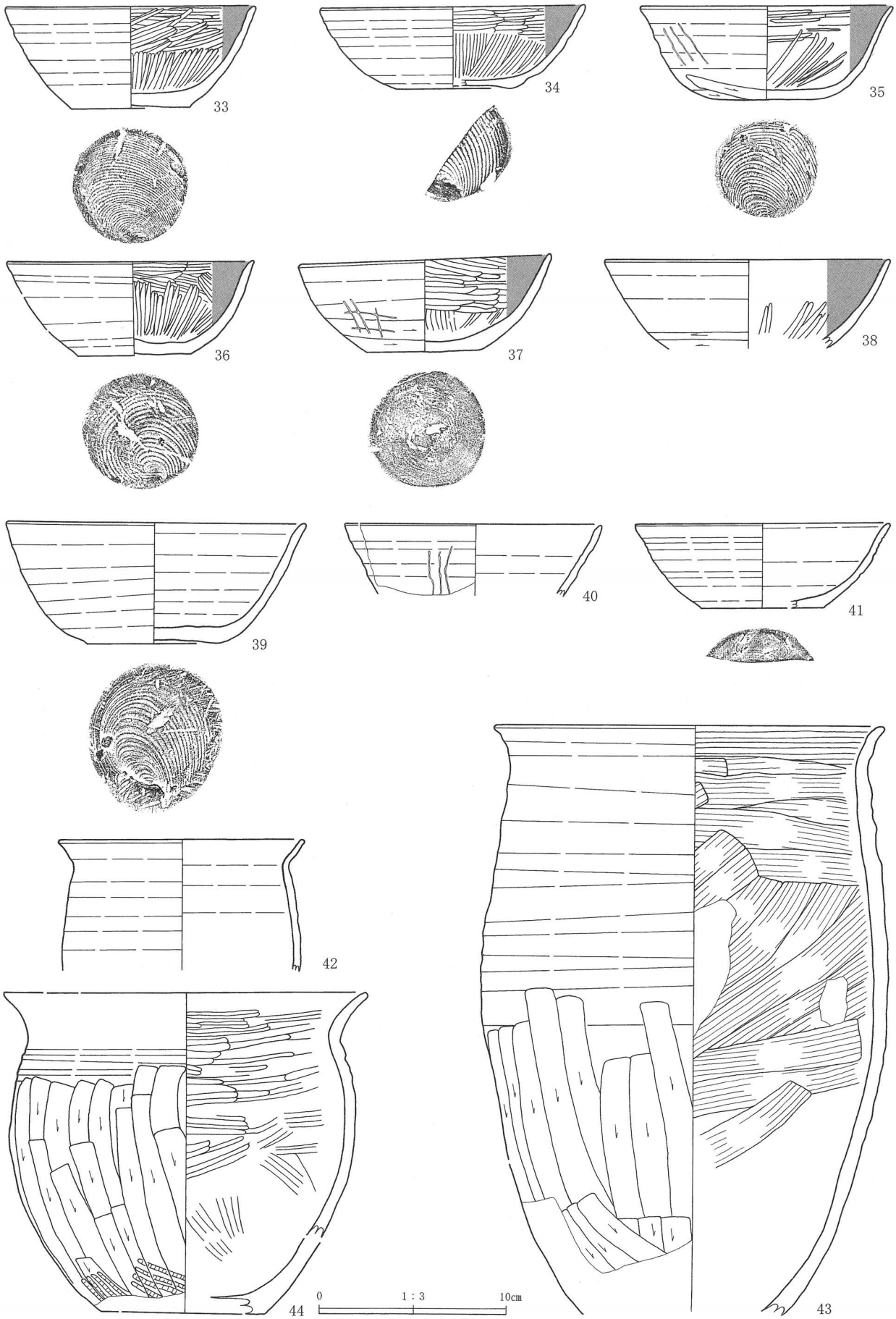
第45図　出土遺物（3）



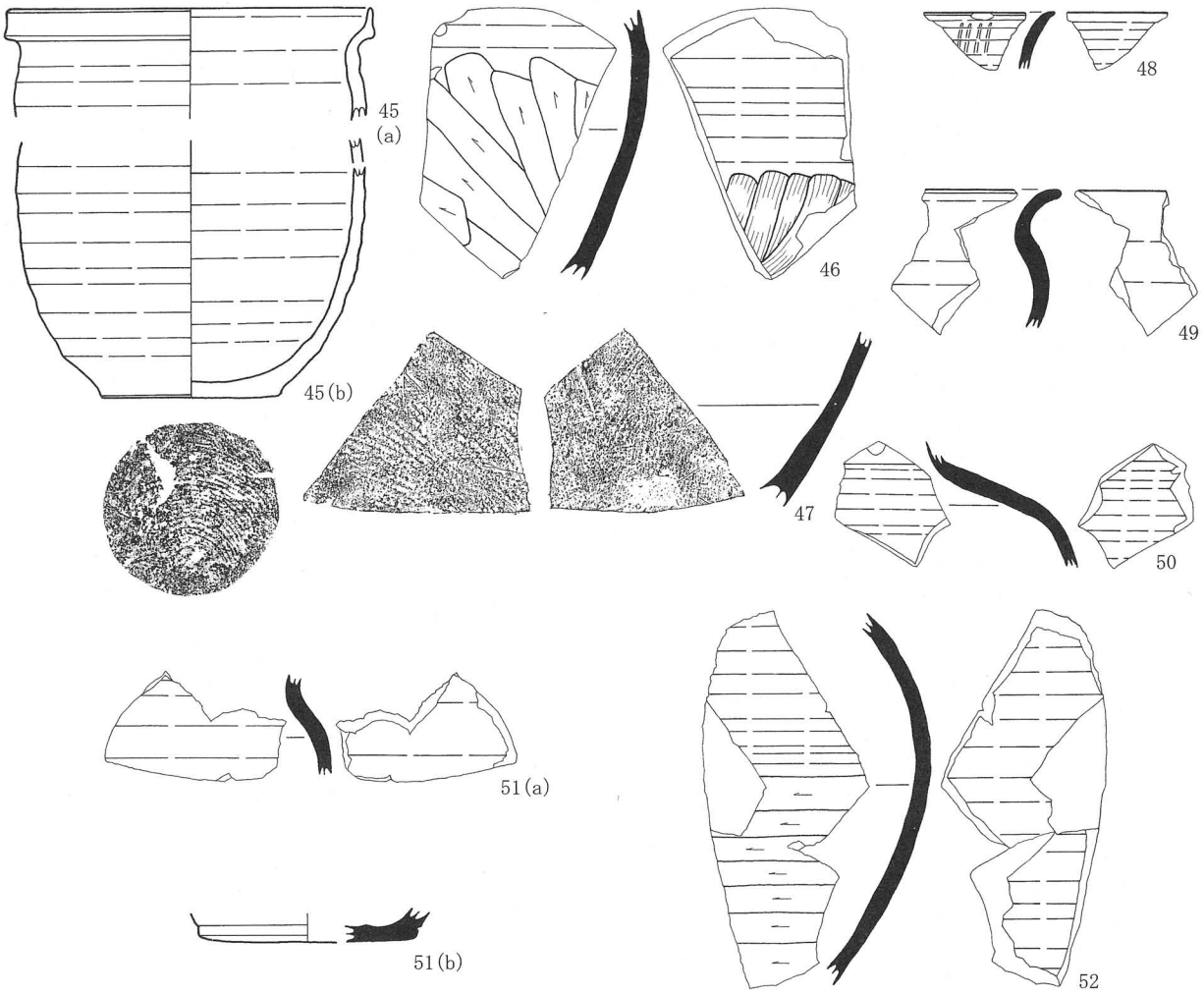
住居跡２



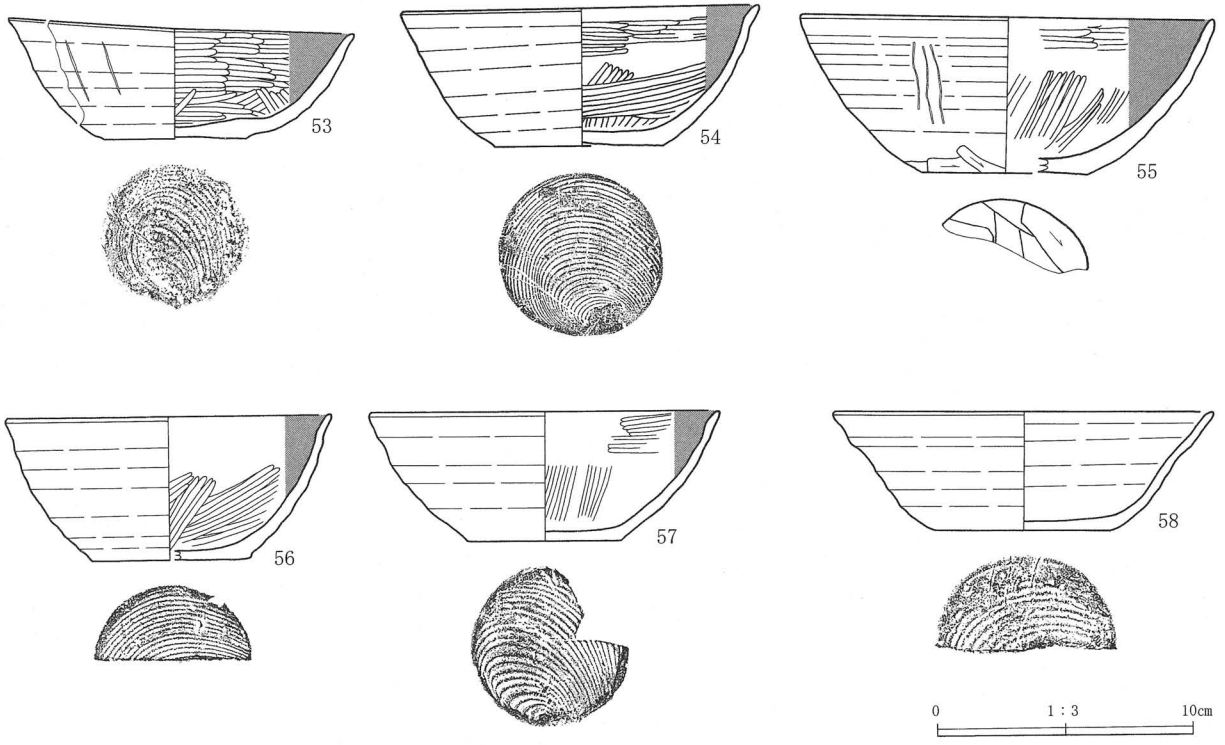
第46図　出土遺物（4）



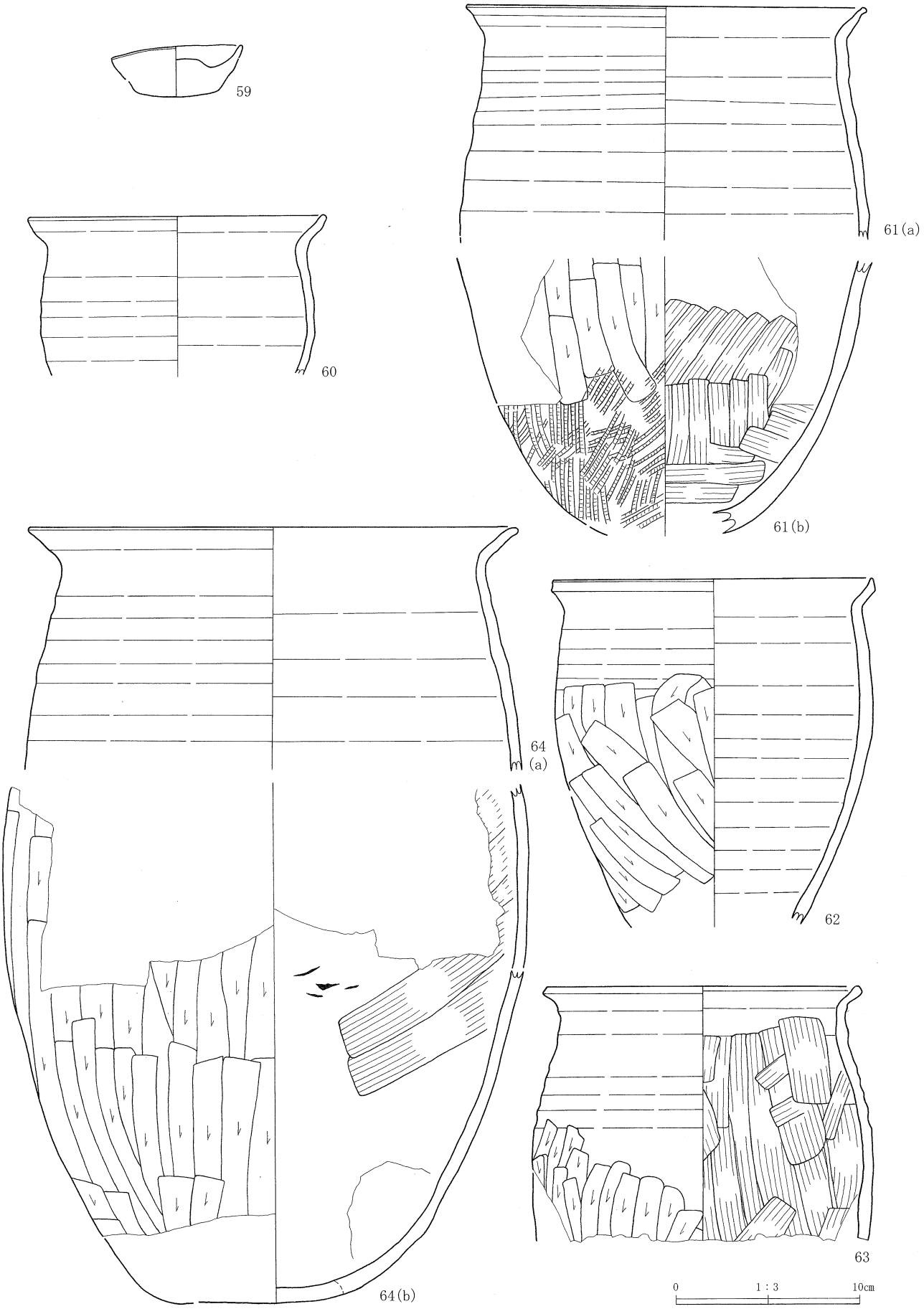
第47図　出土遺物（5）



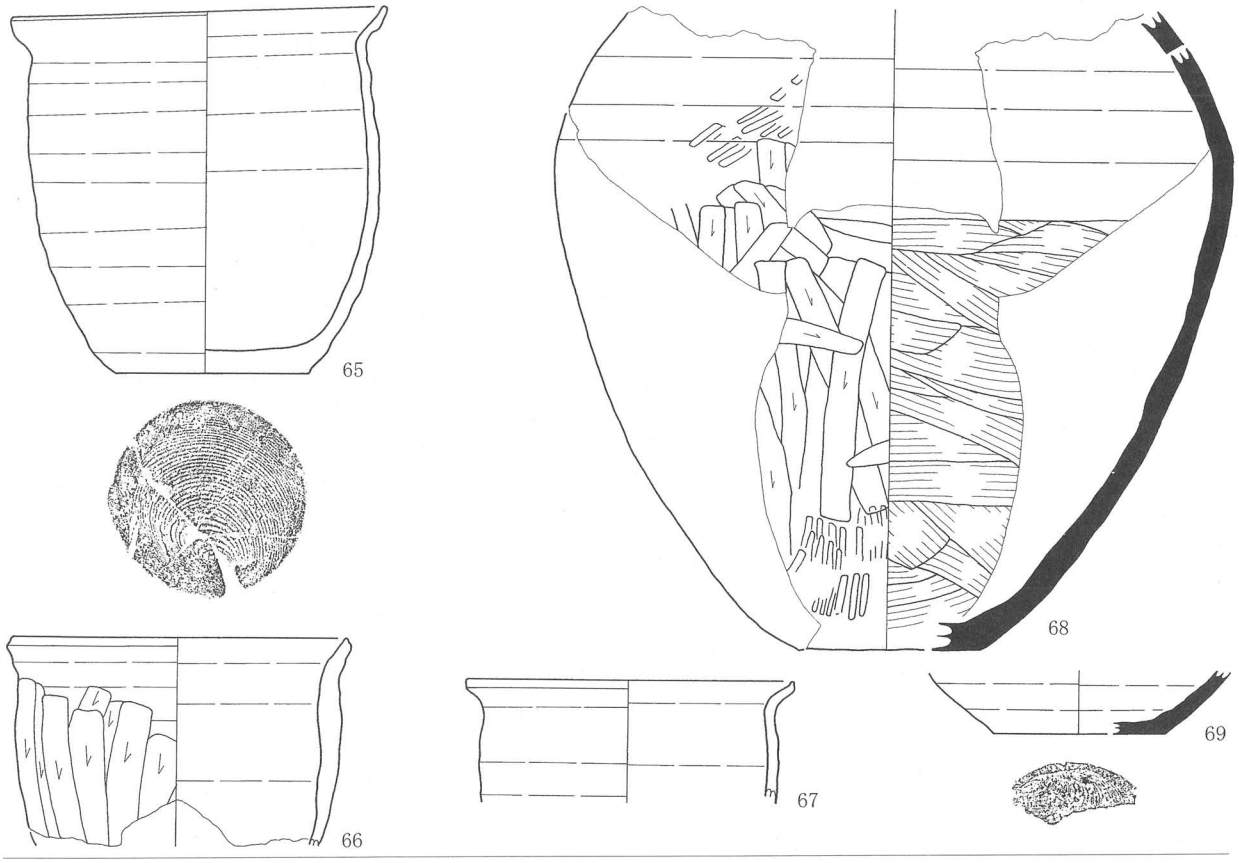
住居跡３



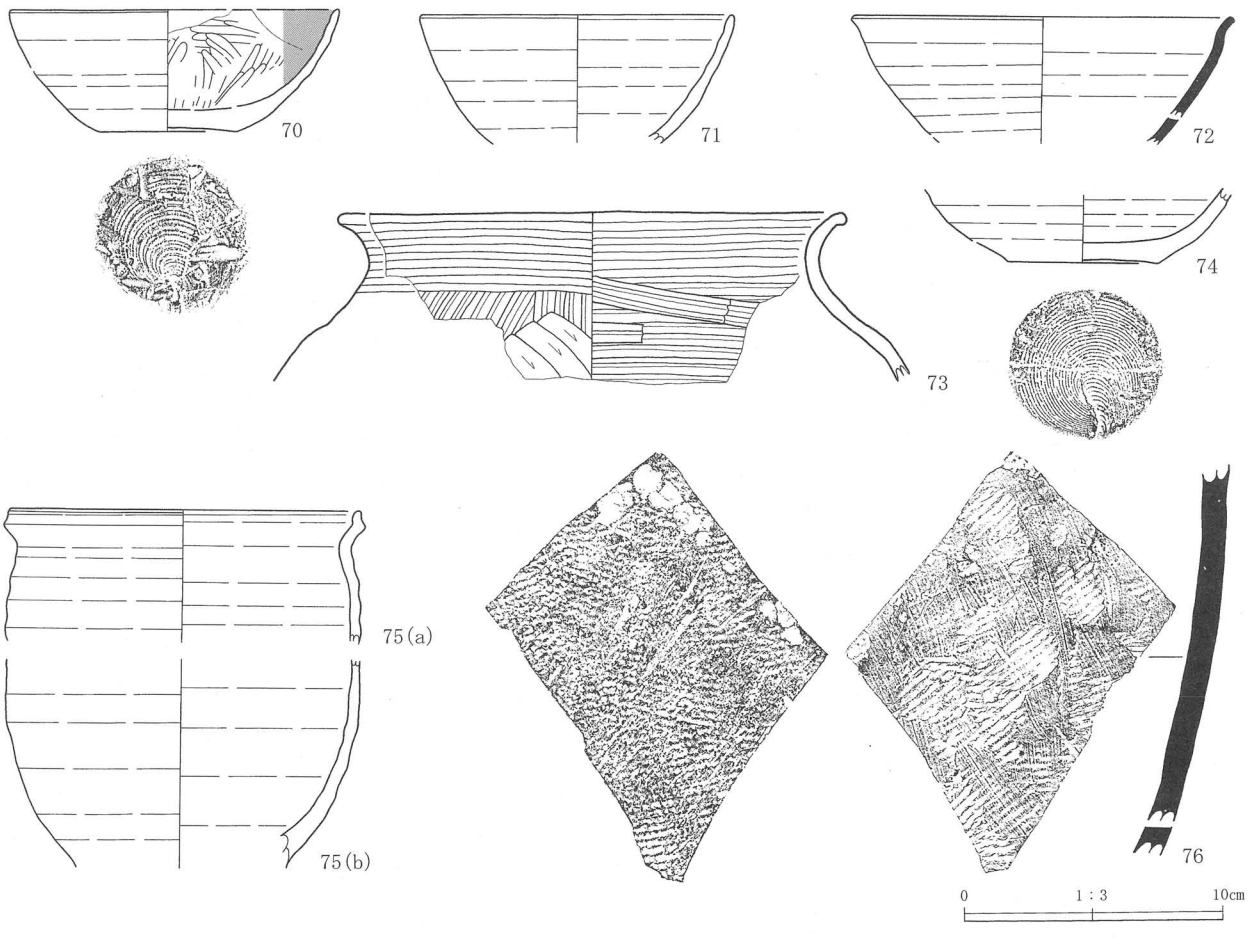
第48図　出土遺物（6）



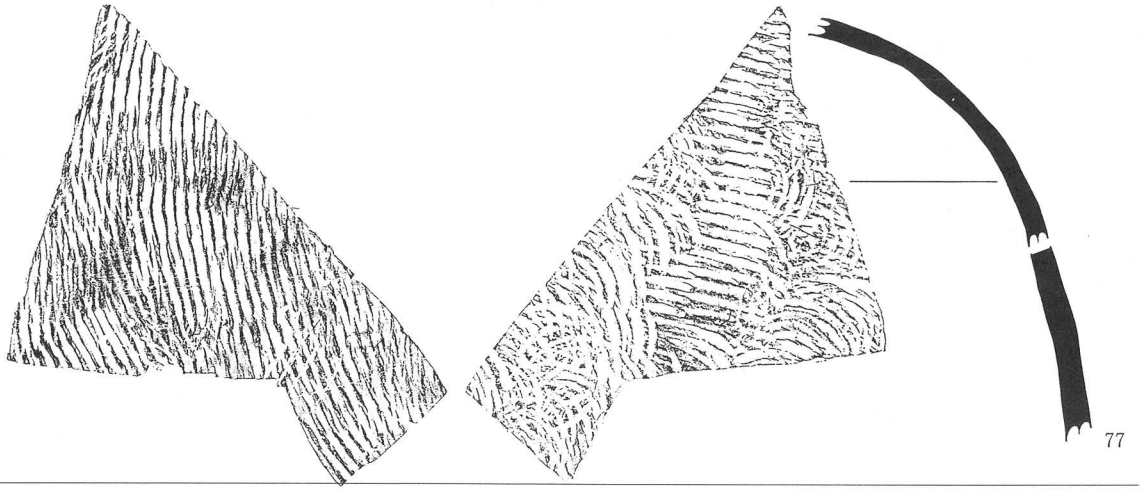
第49図　出土遺物（7）



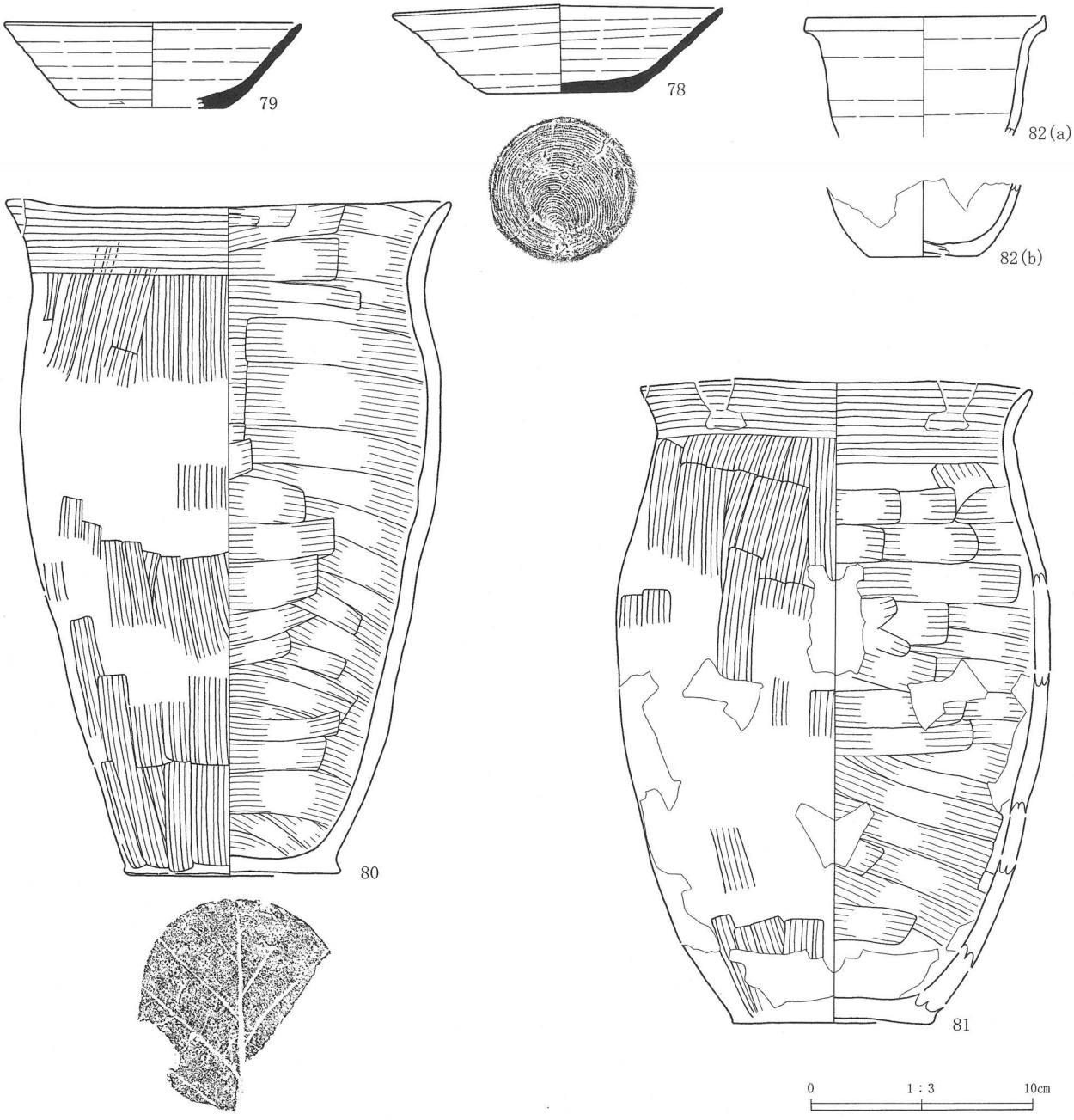
住居跡４



第50図　出土遺物（8）

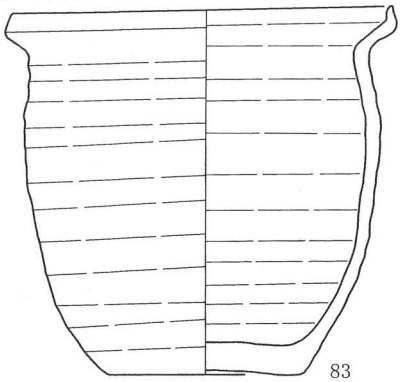


住居跡5



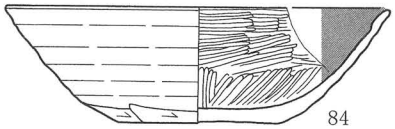
第51図　出土遺物（9）

住居跡５

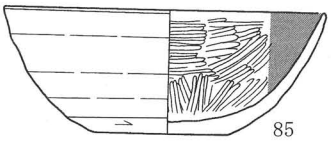


83

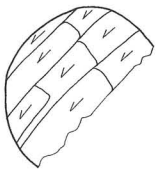
住居跡６

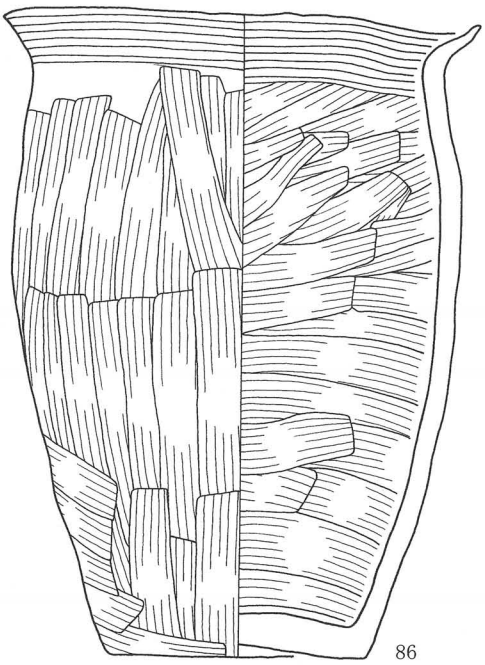


84

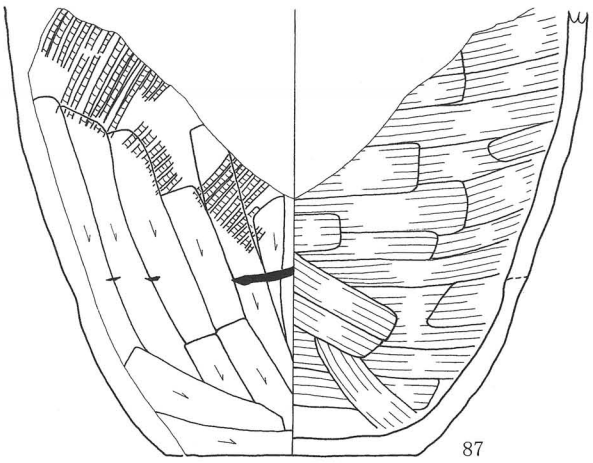


85

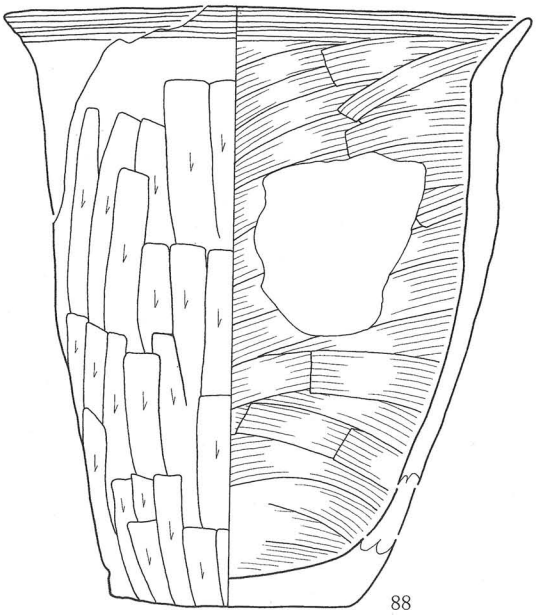




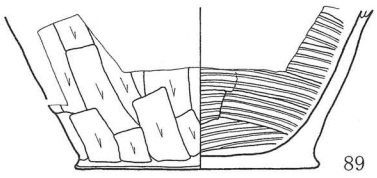
86



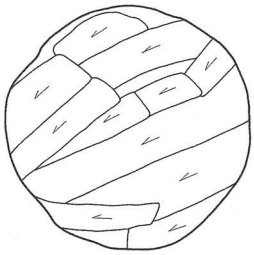
87

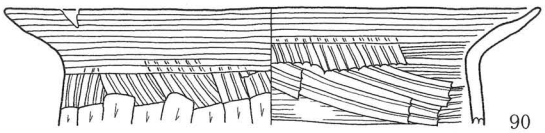


88

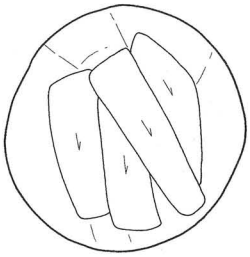


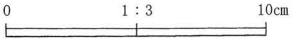
89



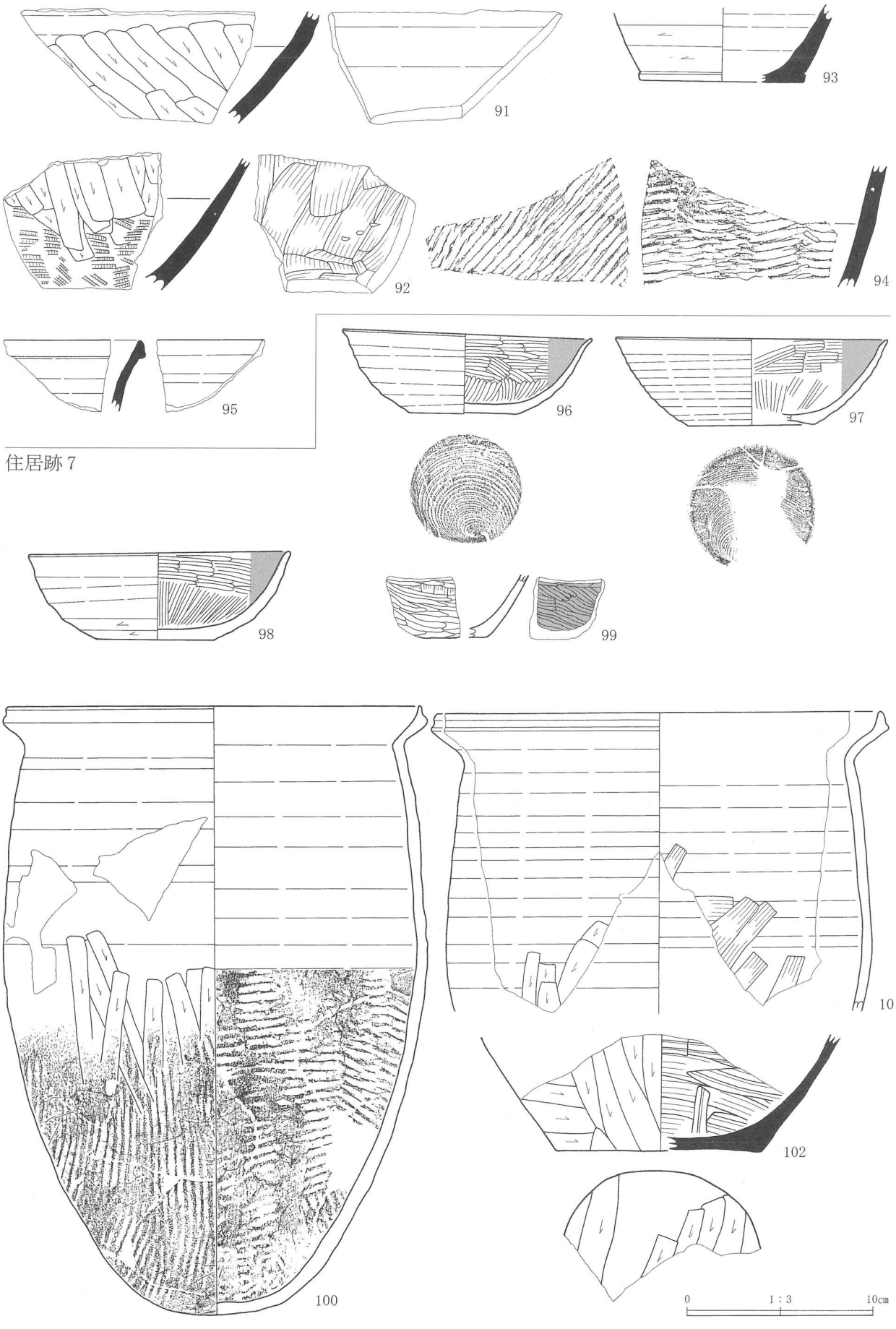


90

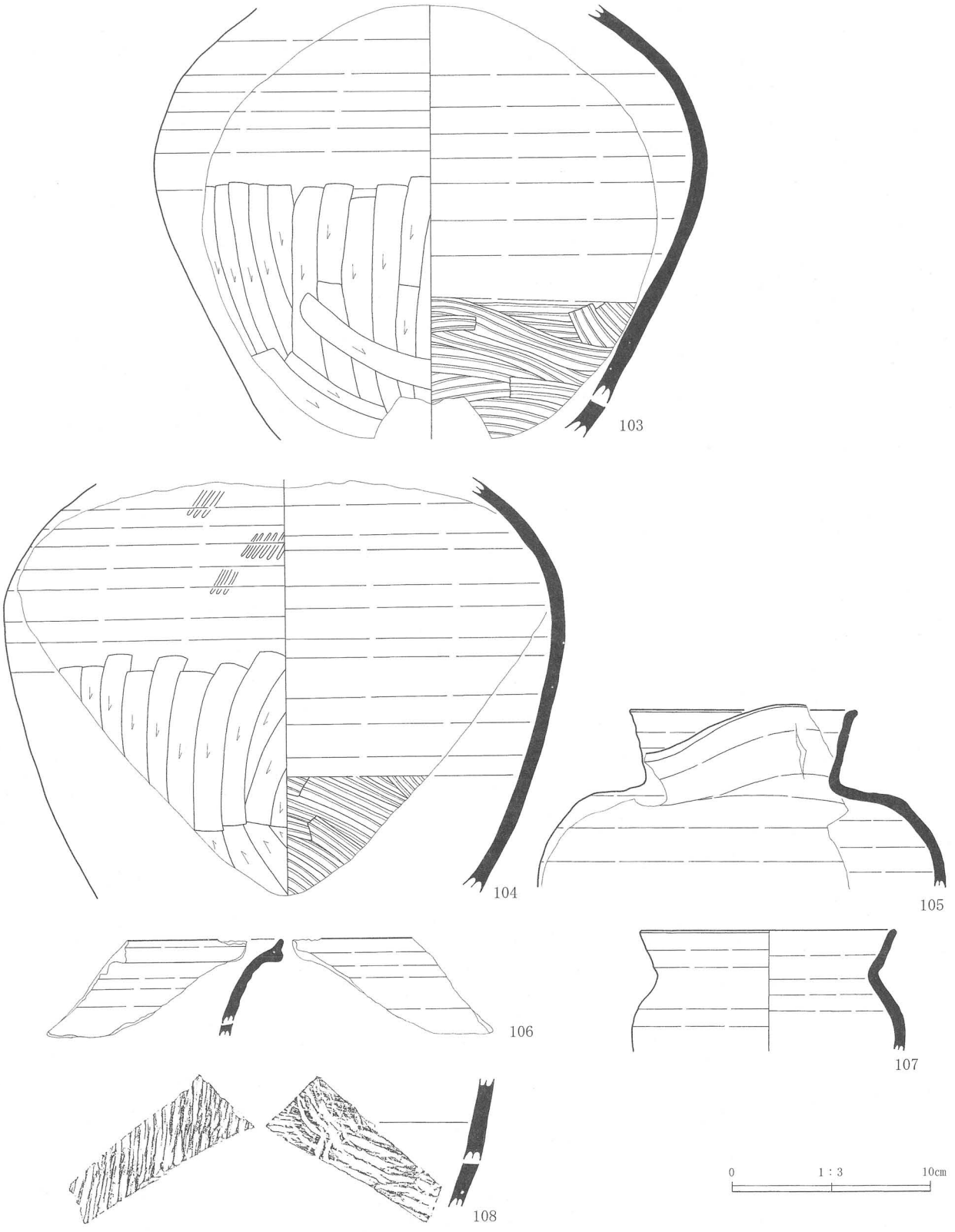




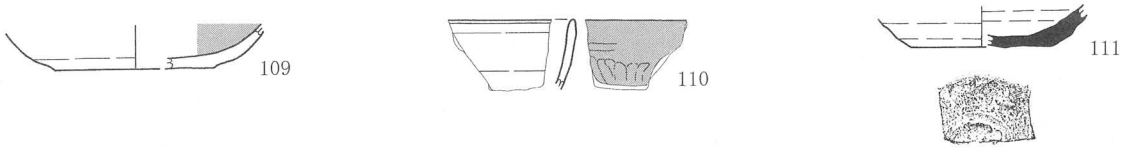
第52図　出土遺物（10）



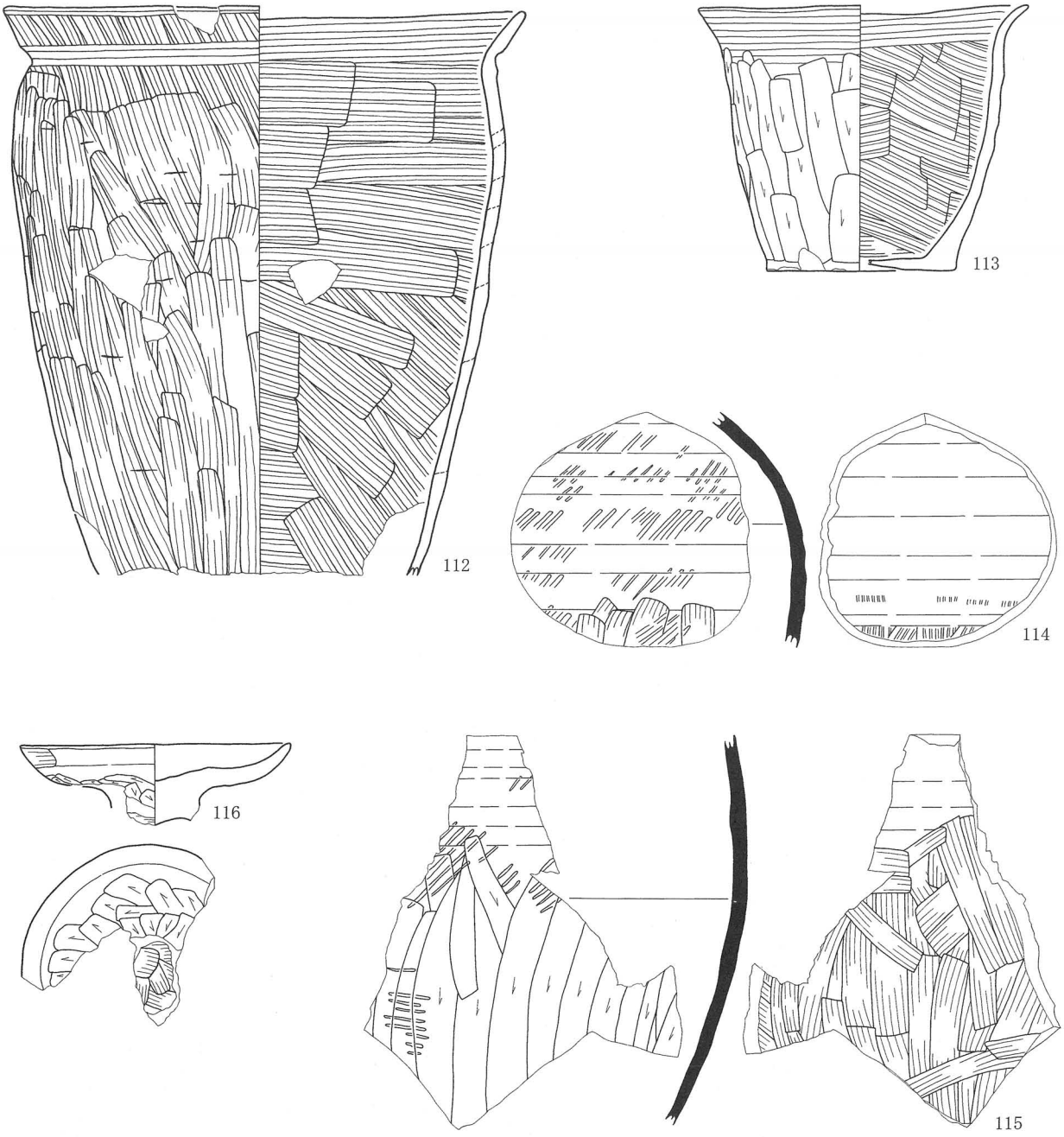
第53図　出土遺物（11）



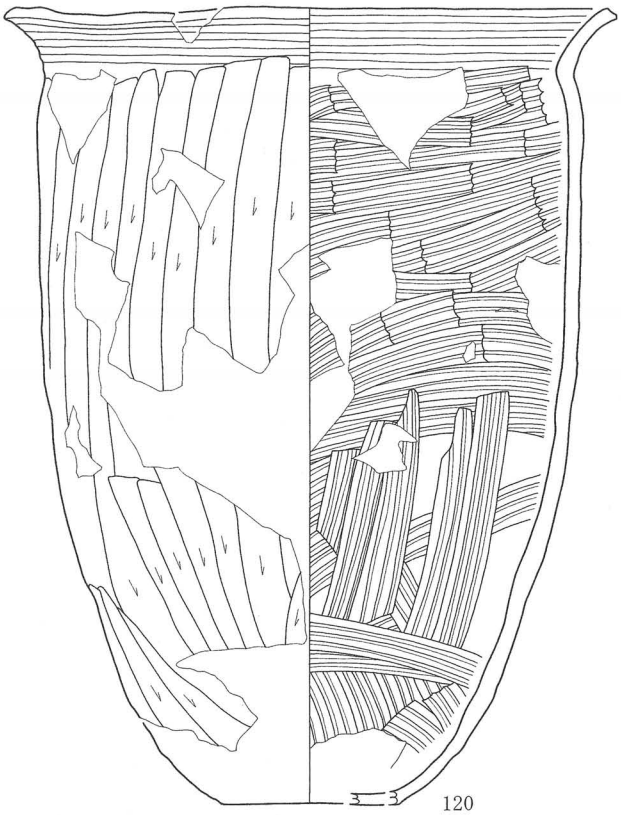
住居跡８



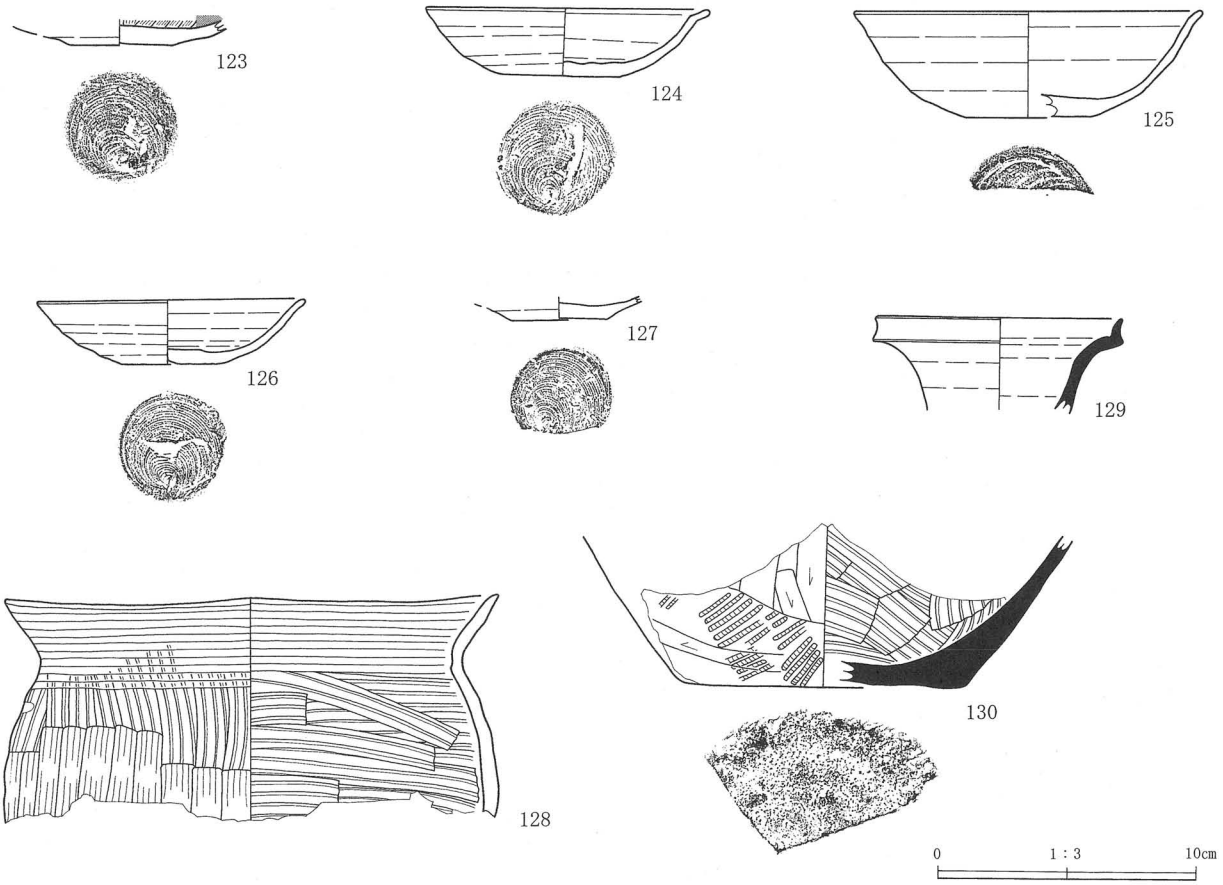
第54図　出土遺物（12）



第55図　出土遺物（13）

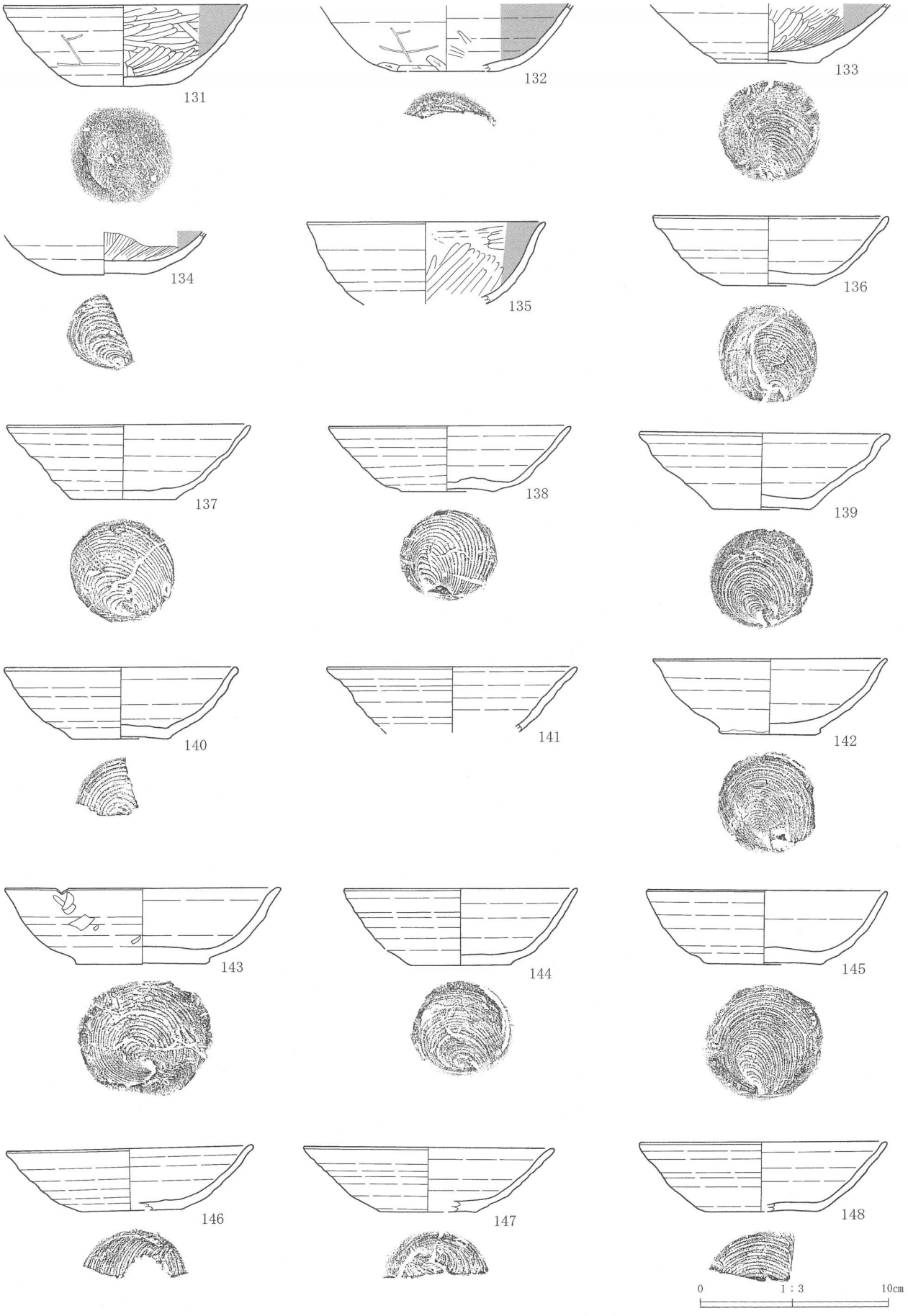


住居跡 10

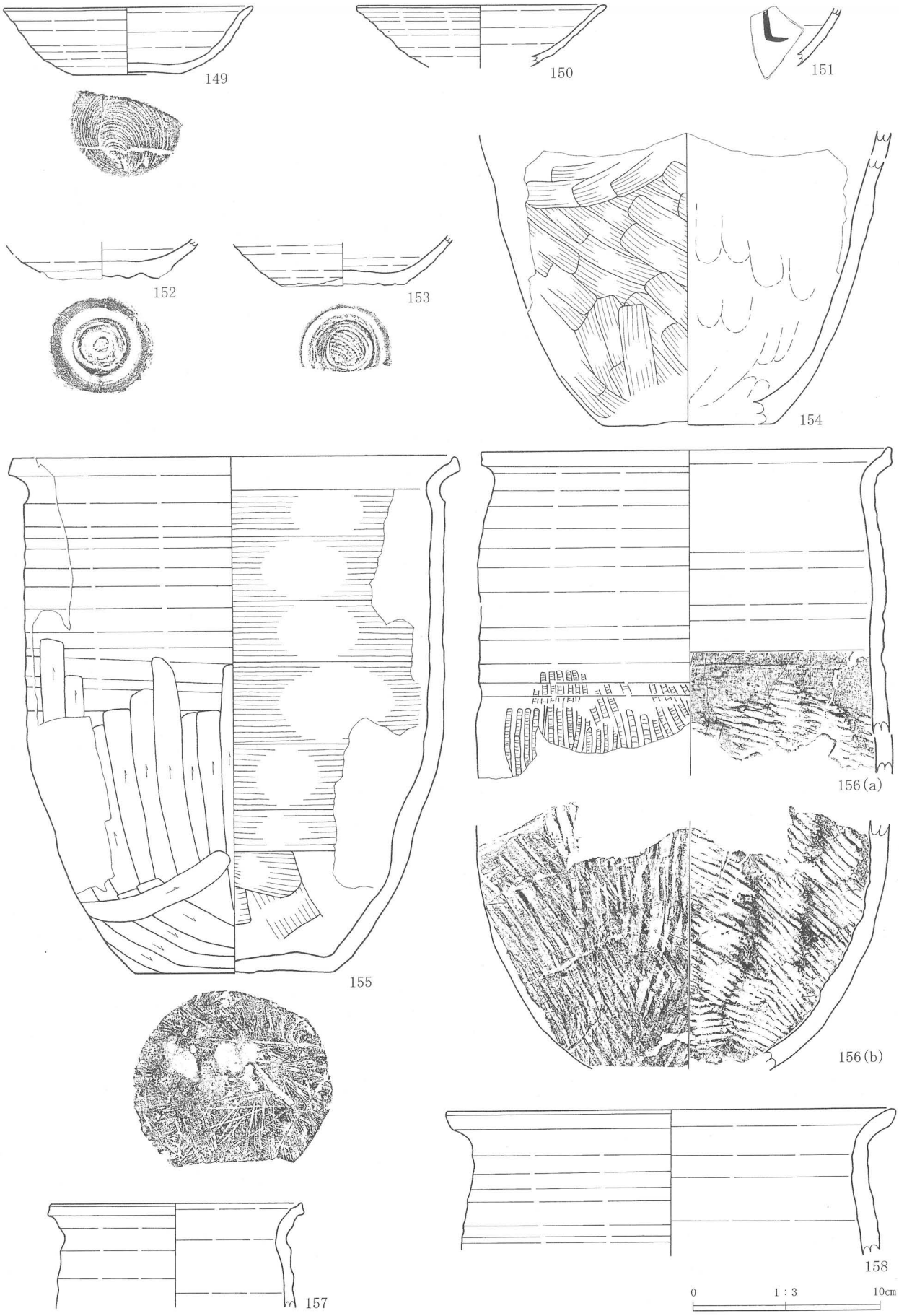


第56図　出土遺物（14）

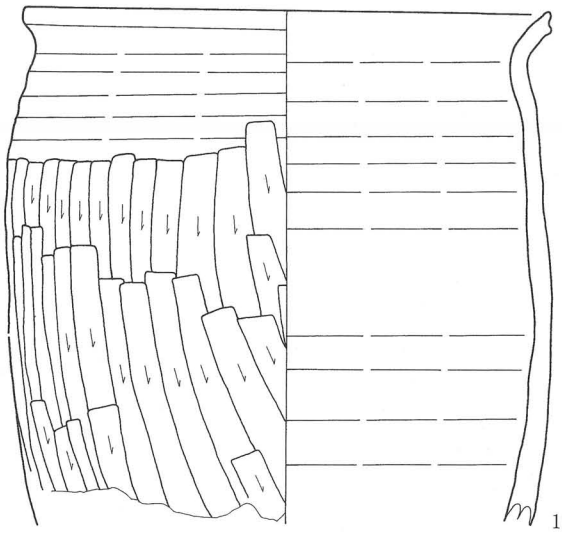
住居跡 11

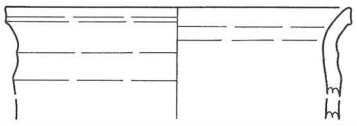


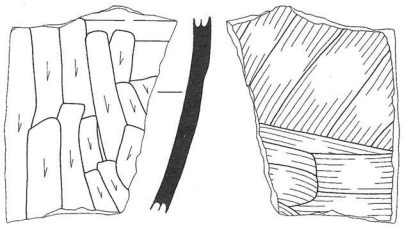
第57図　出土遺物（15）

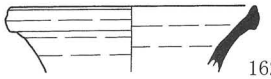


第58図　出土遺物（16）

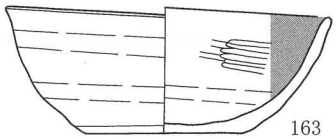

159

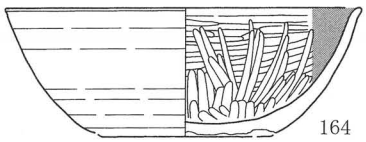

160

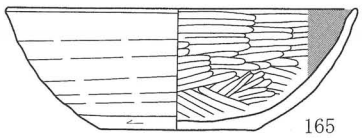

161

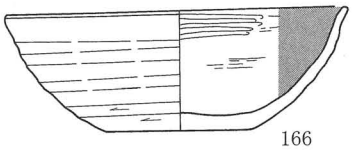

162

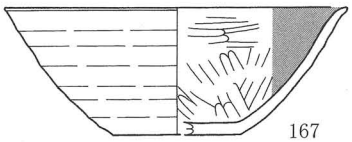
住居跡12

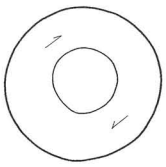

163

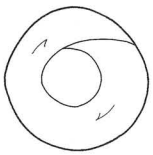

164

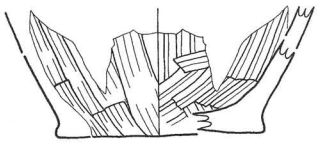

165

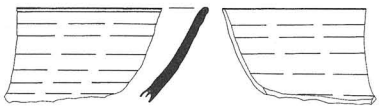

166

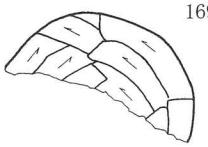

167

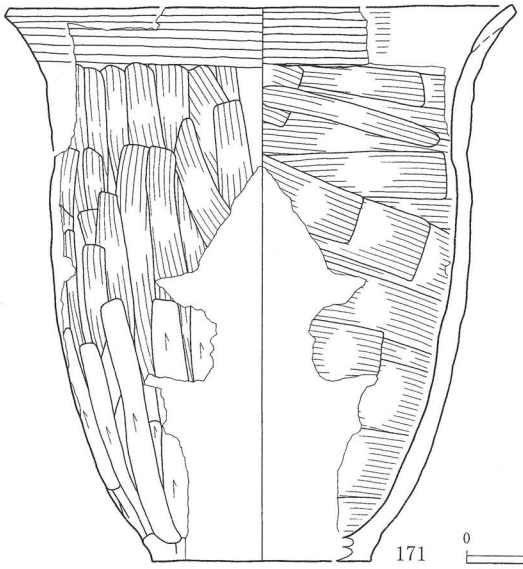


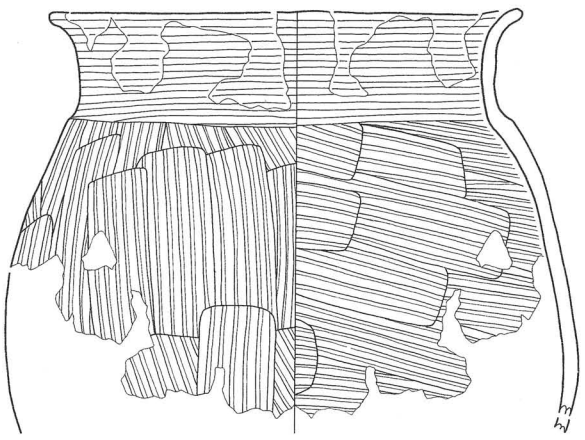


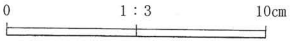

169


170

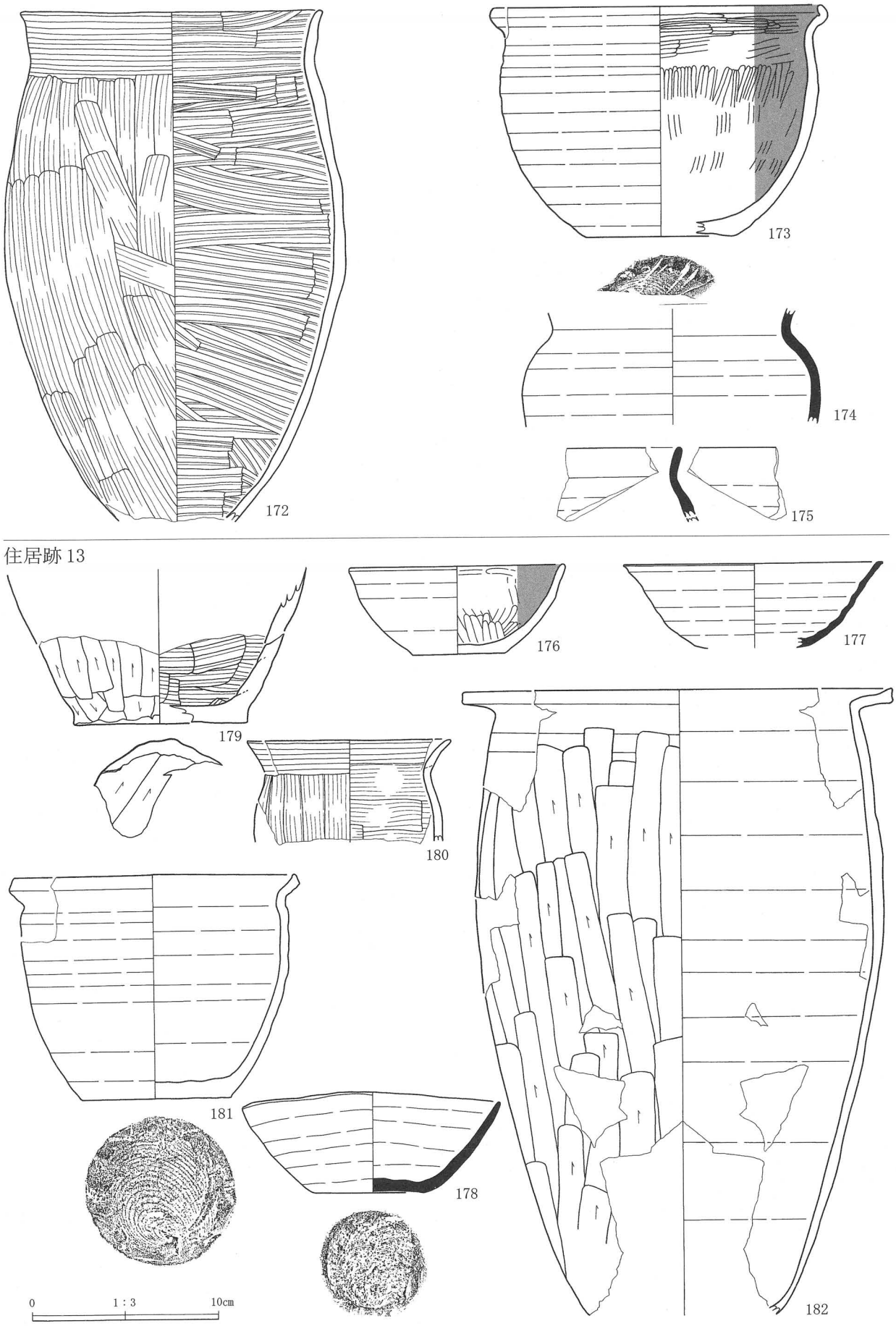



171

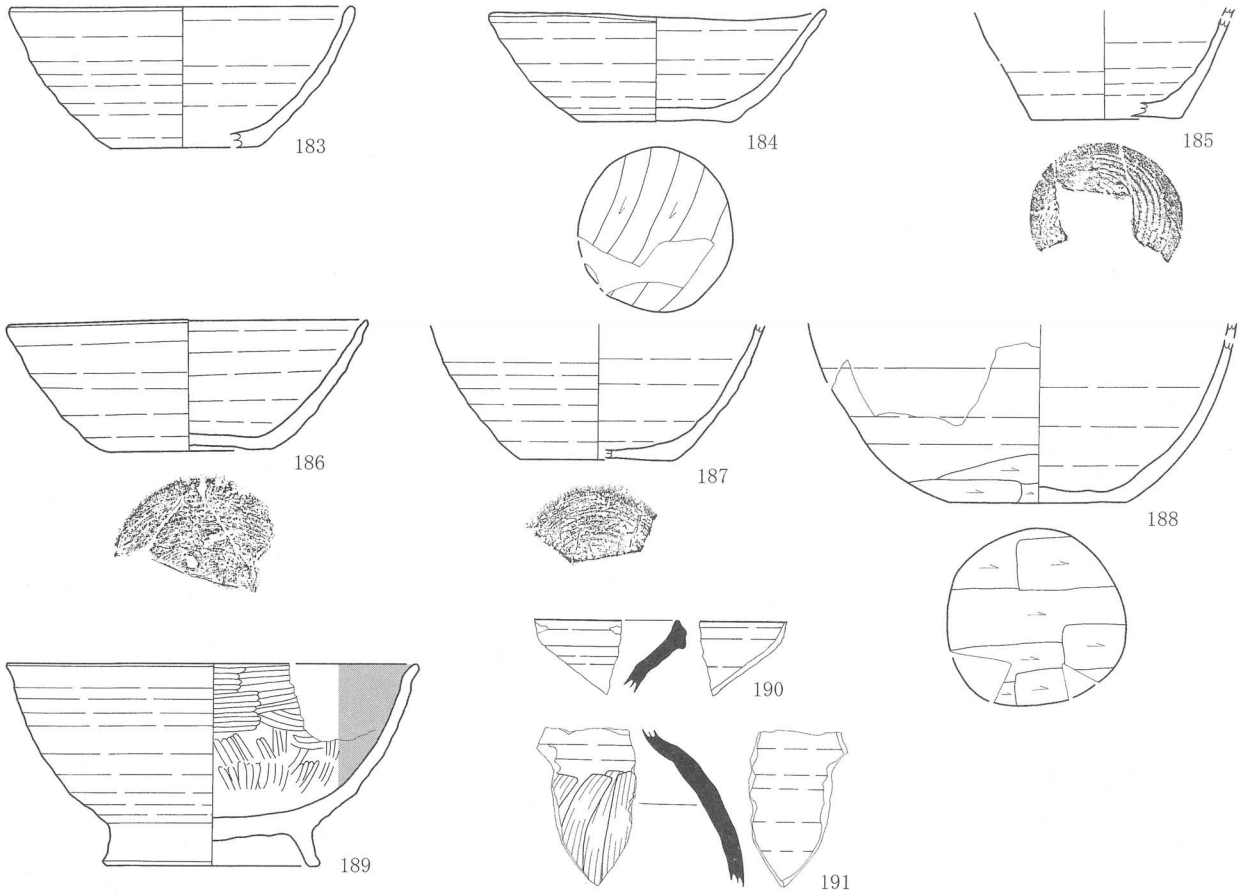

168



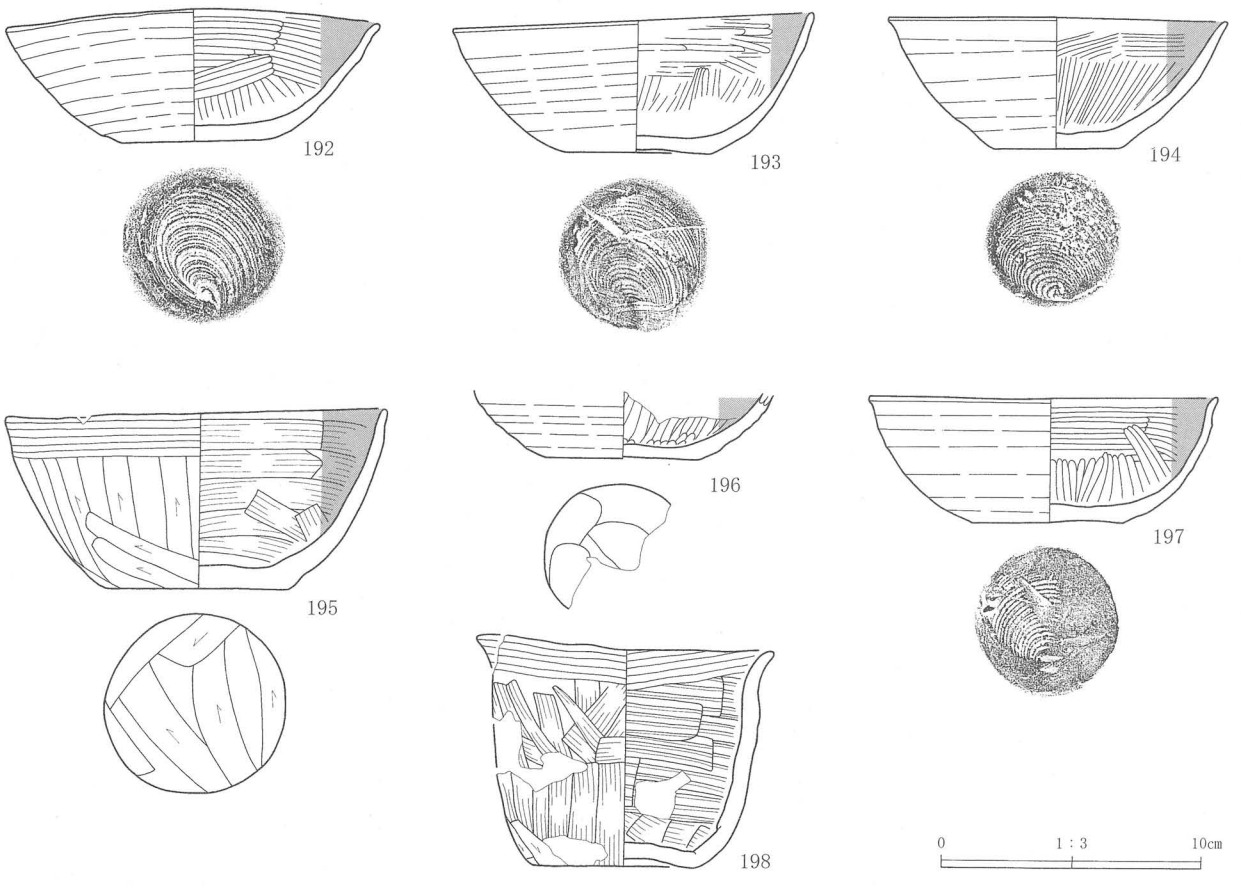
第59図　出土遺物（17）



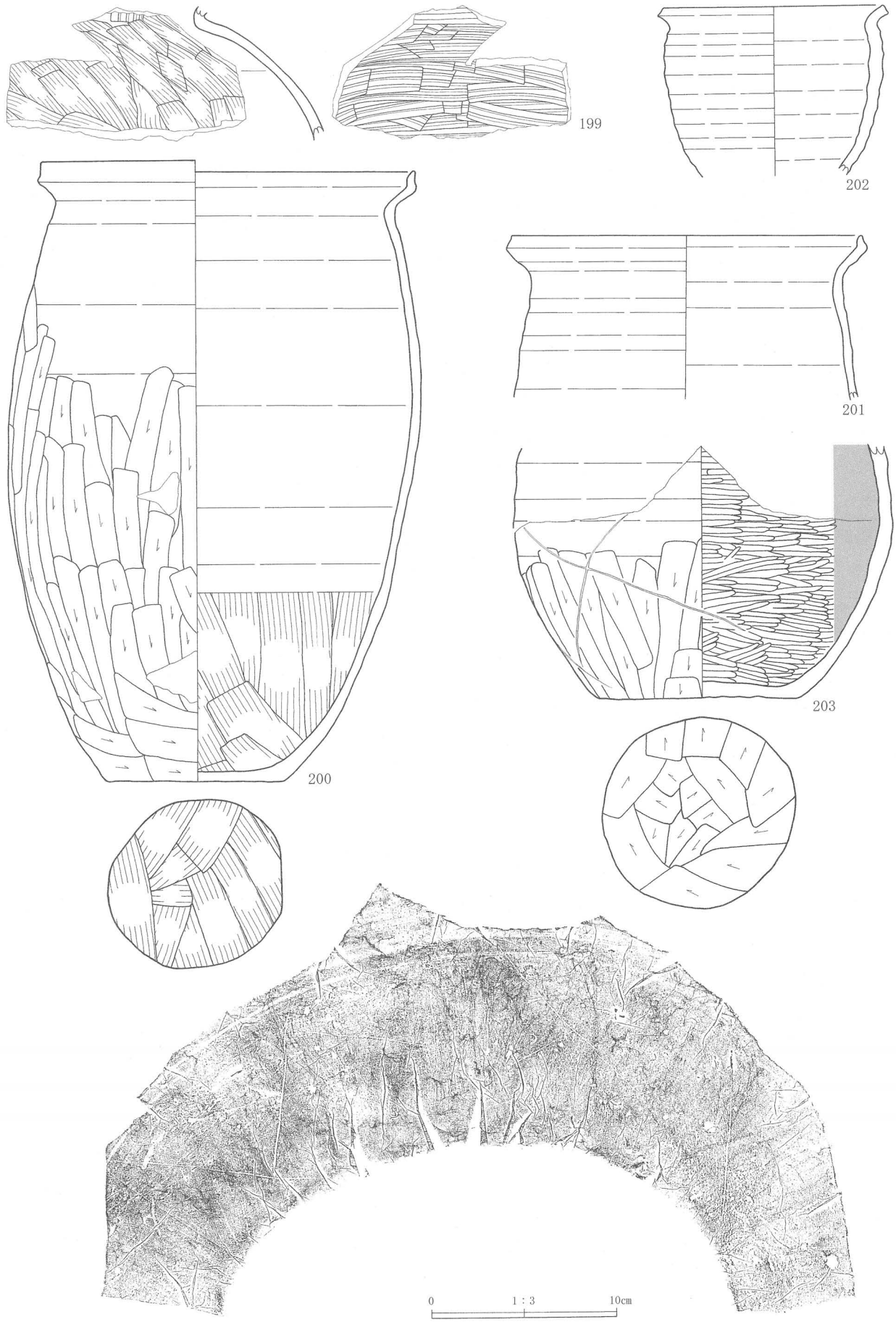
第60図　出土遺物（18）



住居跡 14

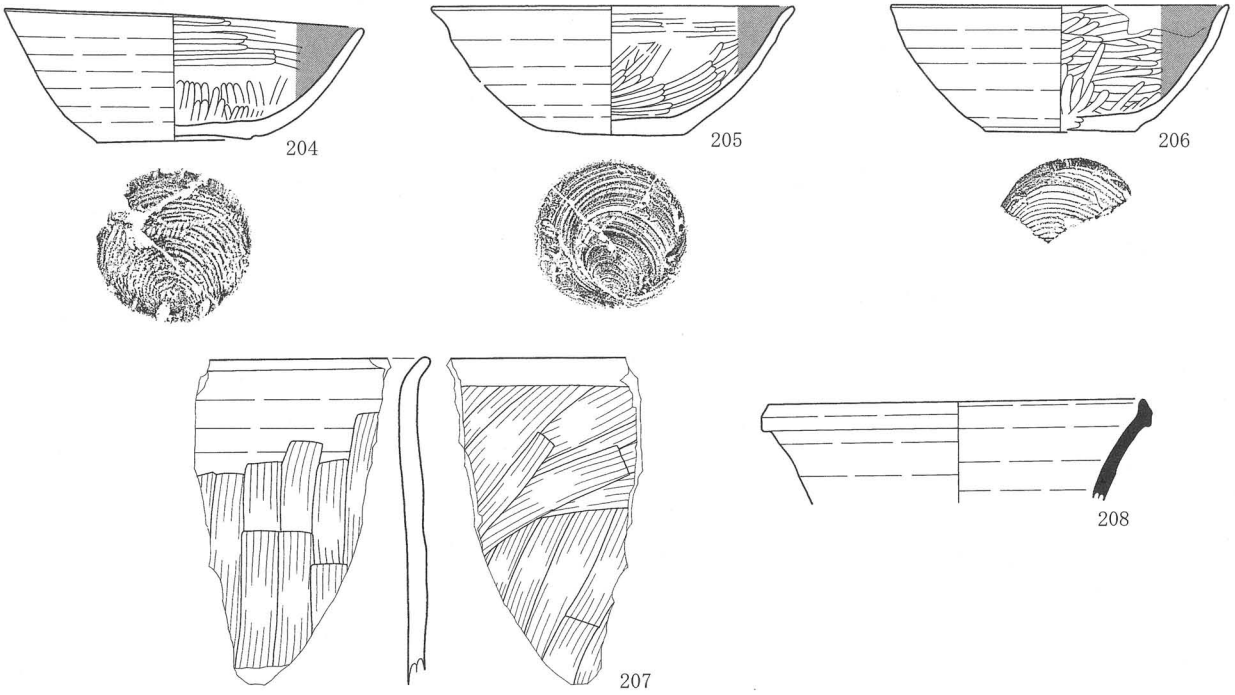


第61図　出土遺物（19）

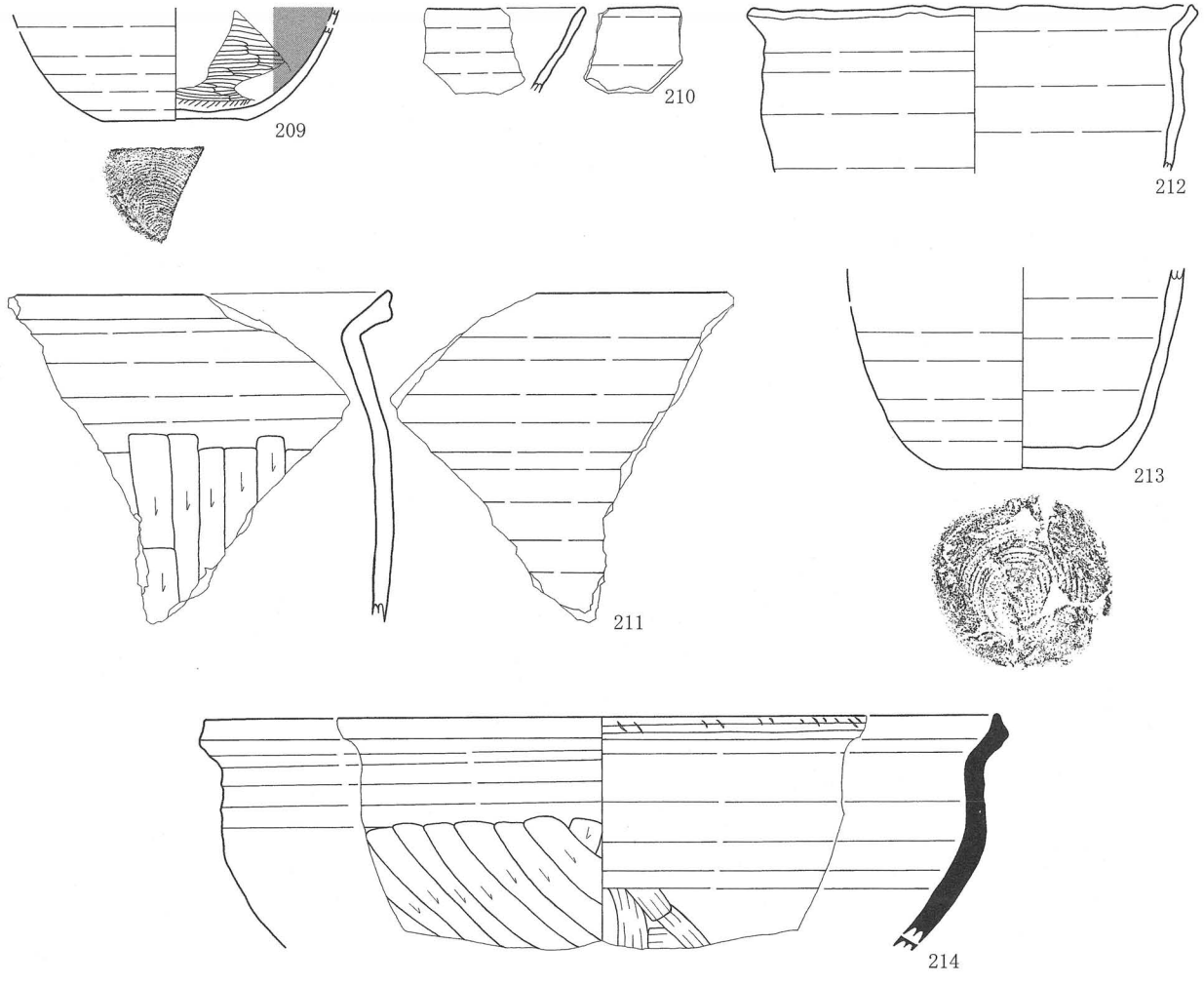


第62図　出土遺物（20）

住居跡 15

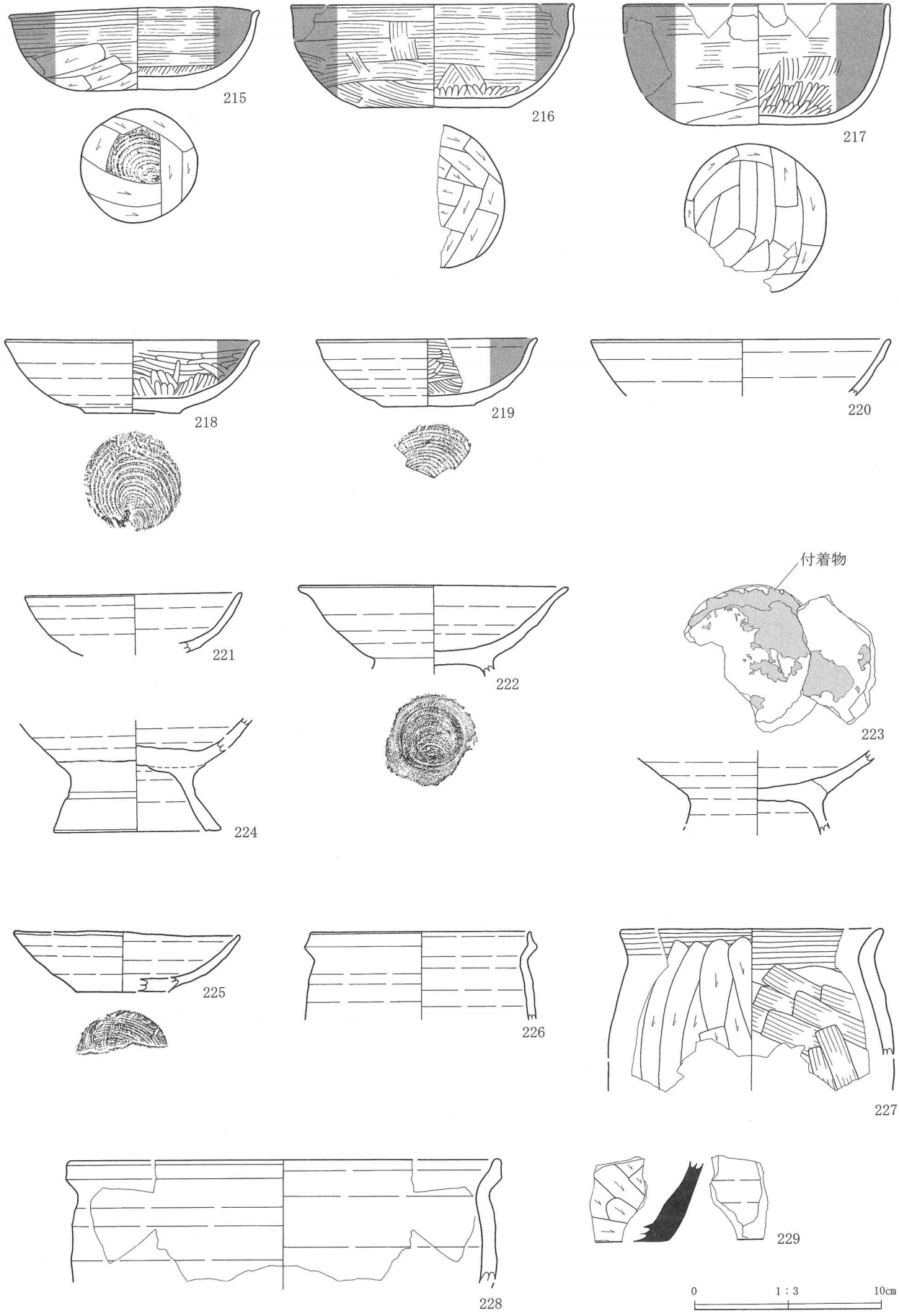


住居跡 16



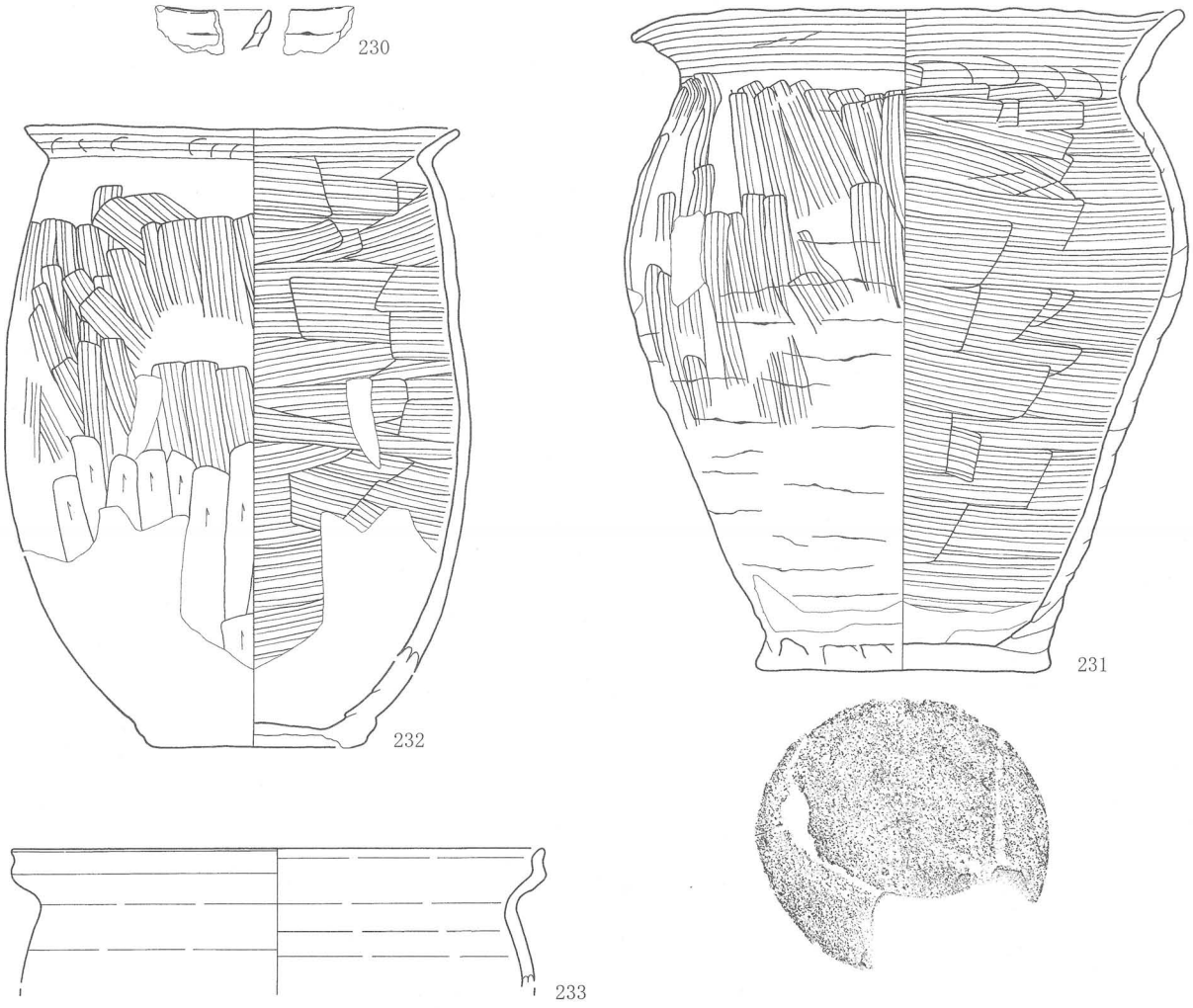
第63図　出土遺物（21）

住居跡17

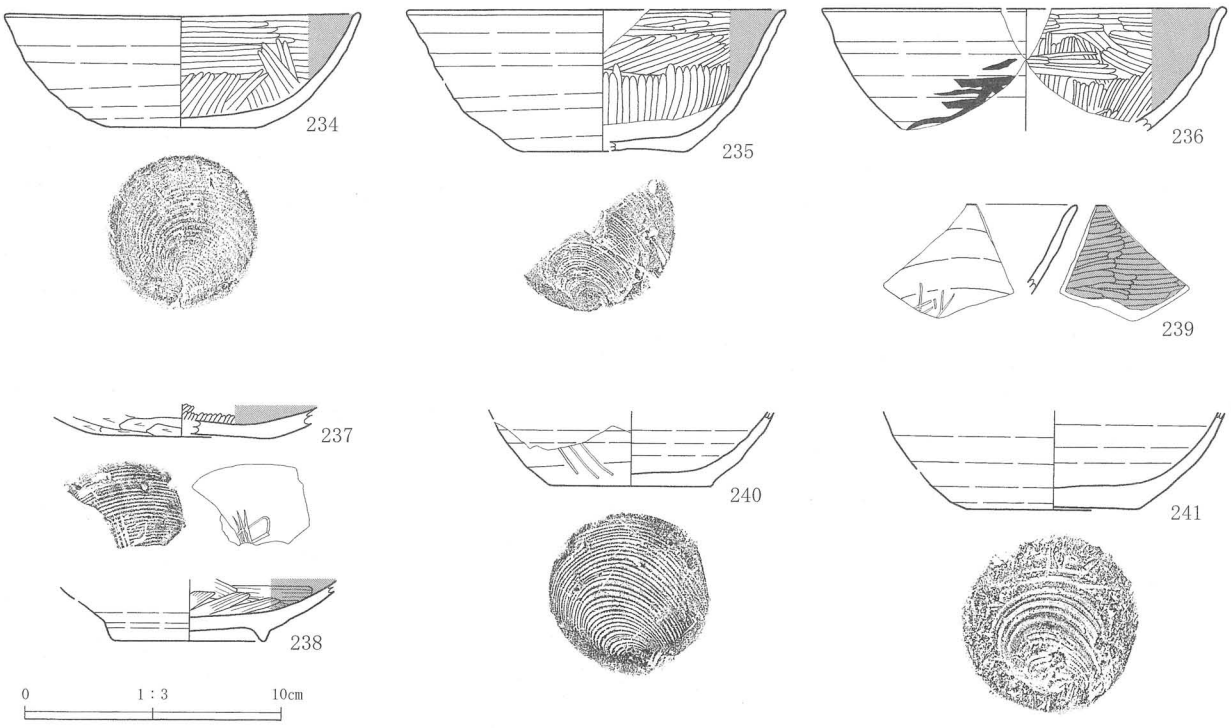


第64図　出土遺物（22）

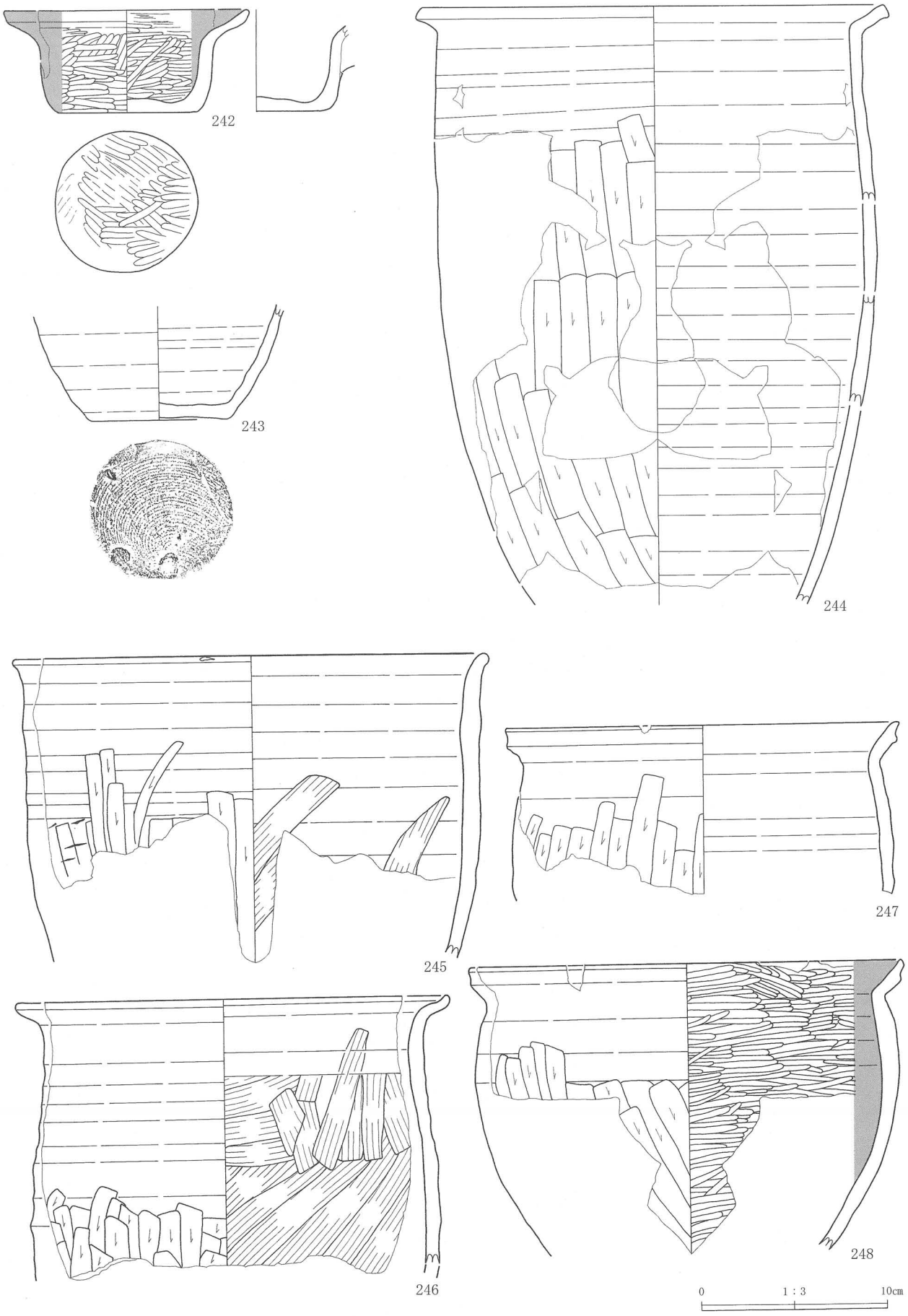
住居跡 18



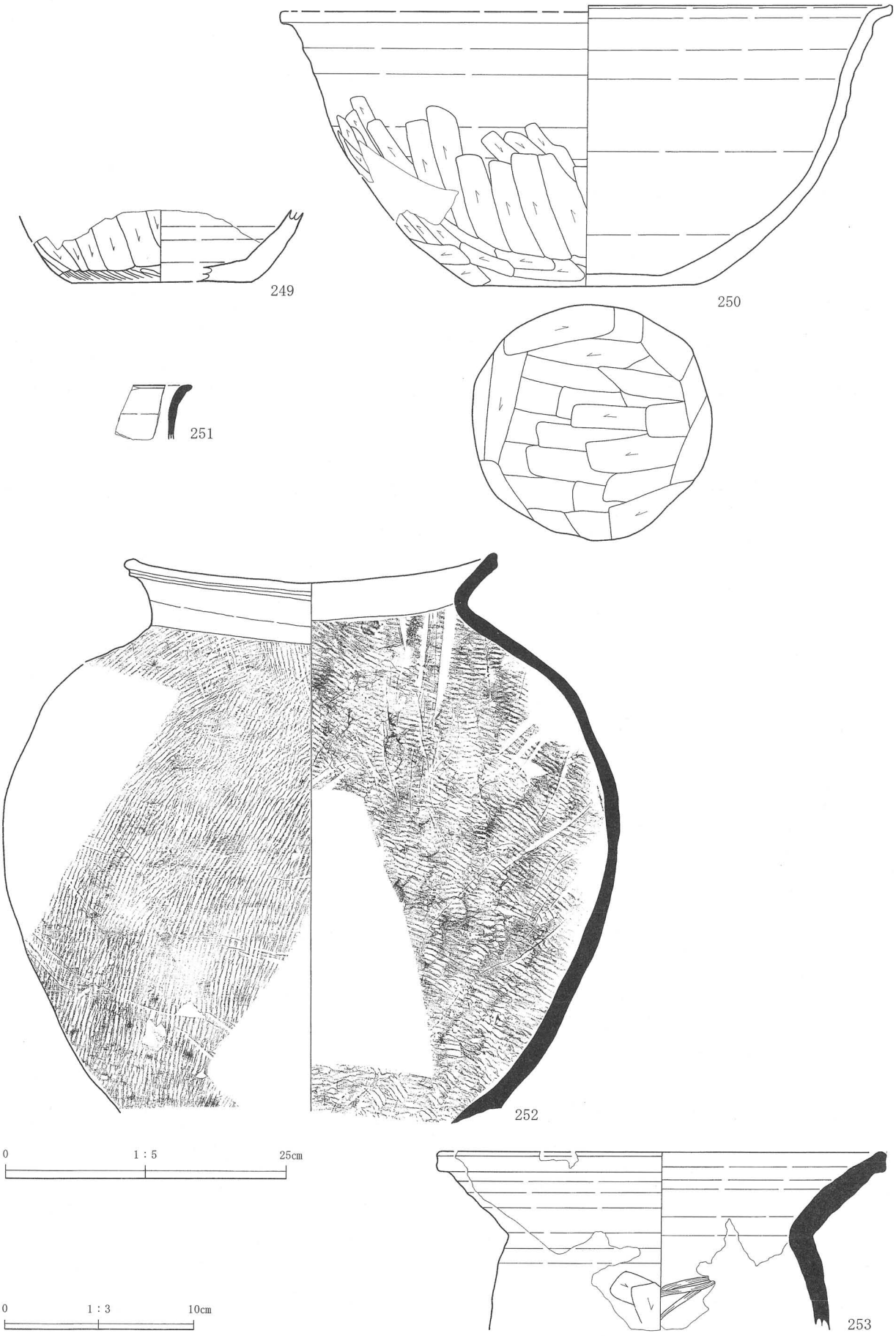
竪穴状遺構 1



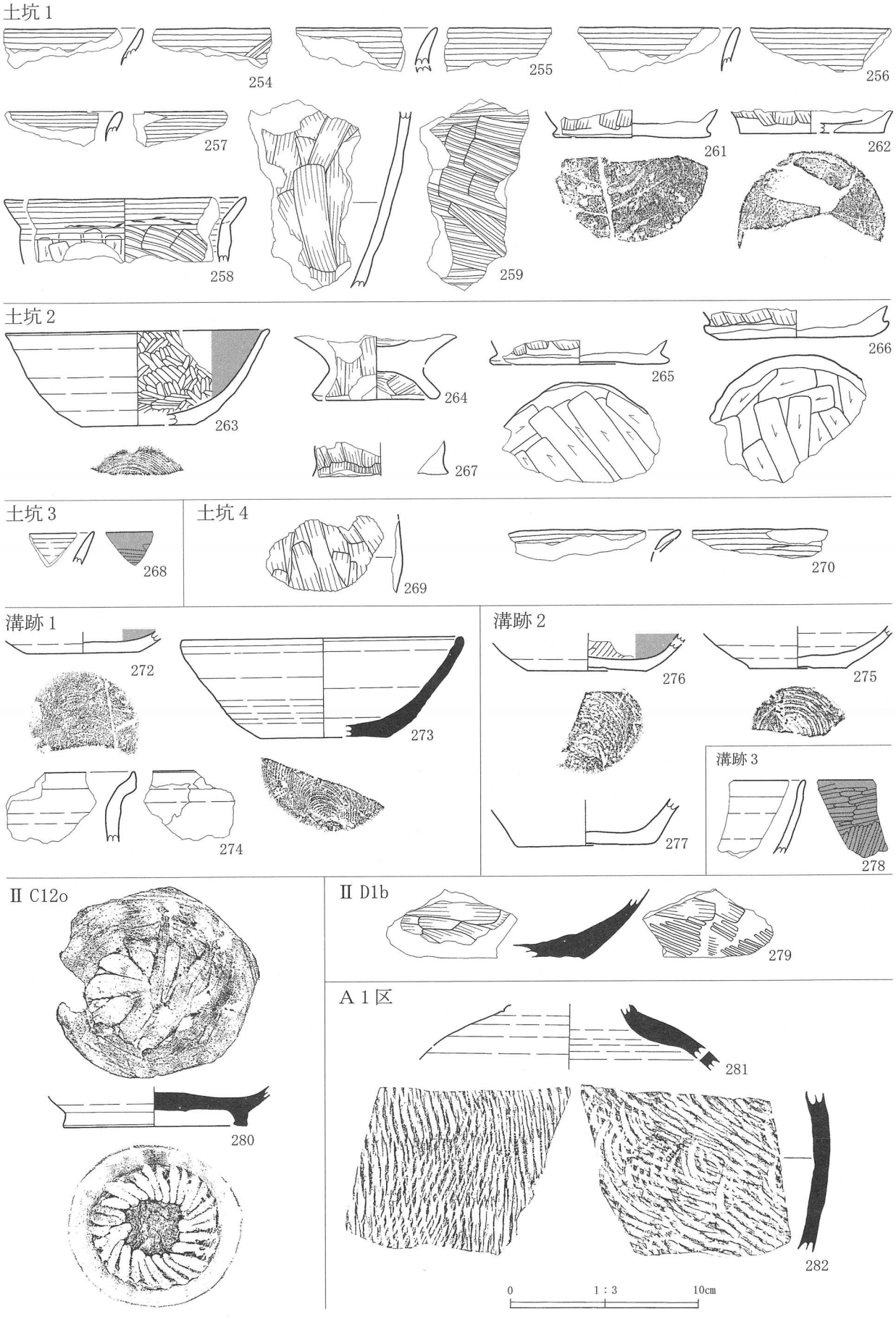
第65図　出土遺物（23）



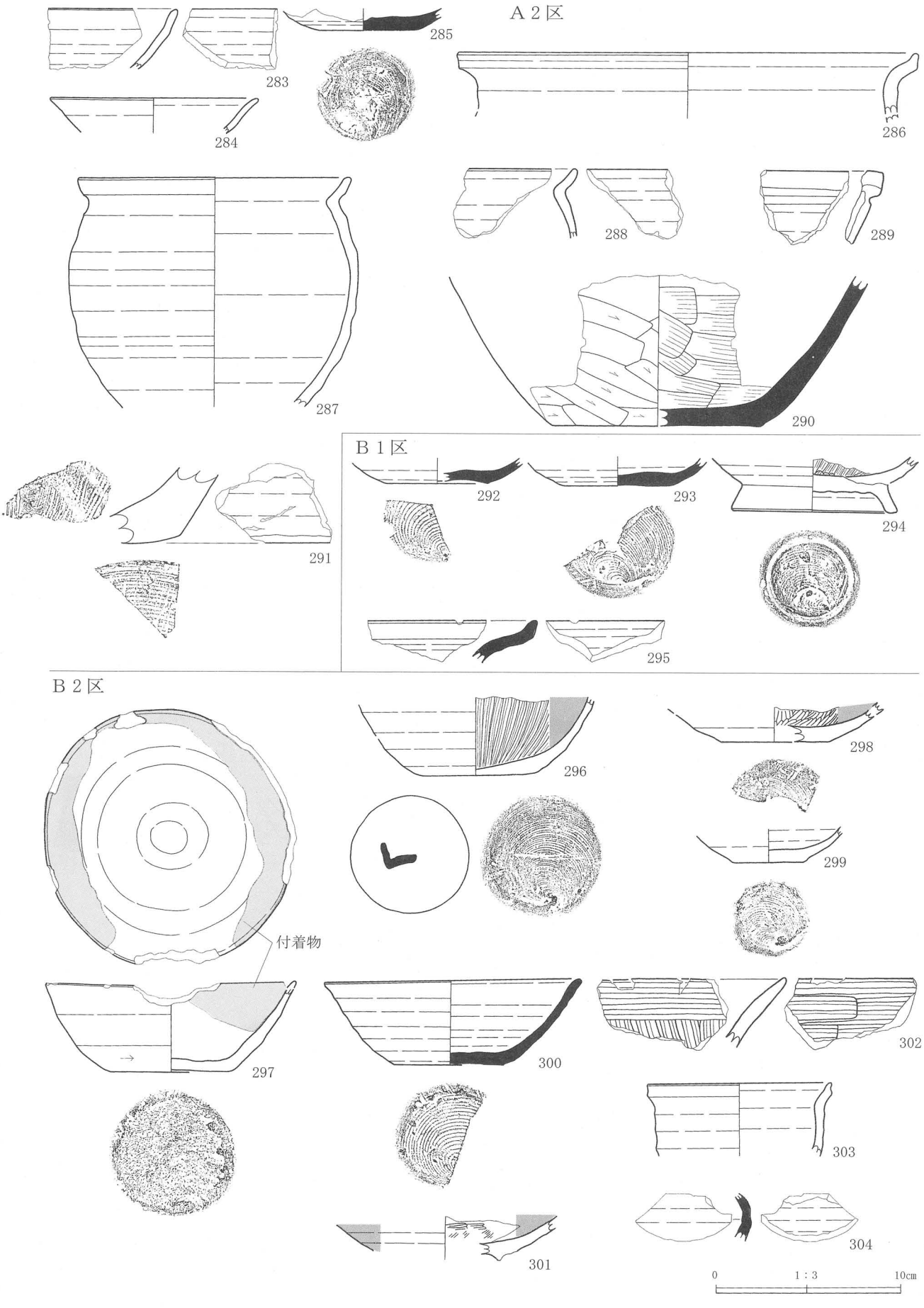
第66図　出土遺物（24）



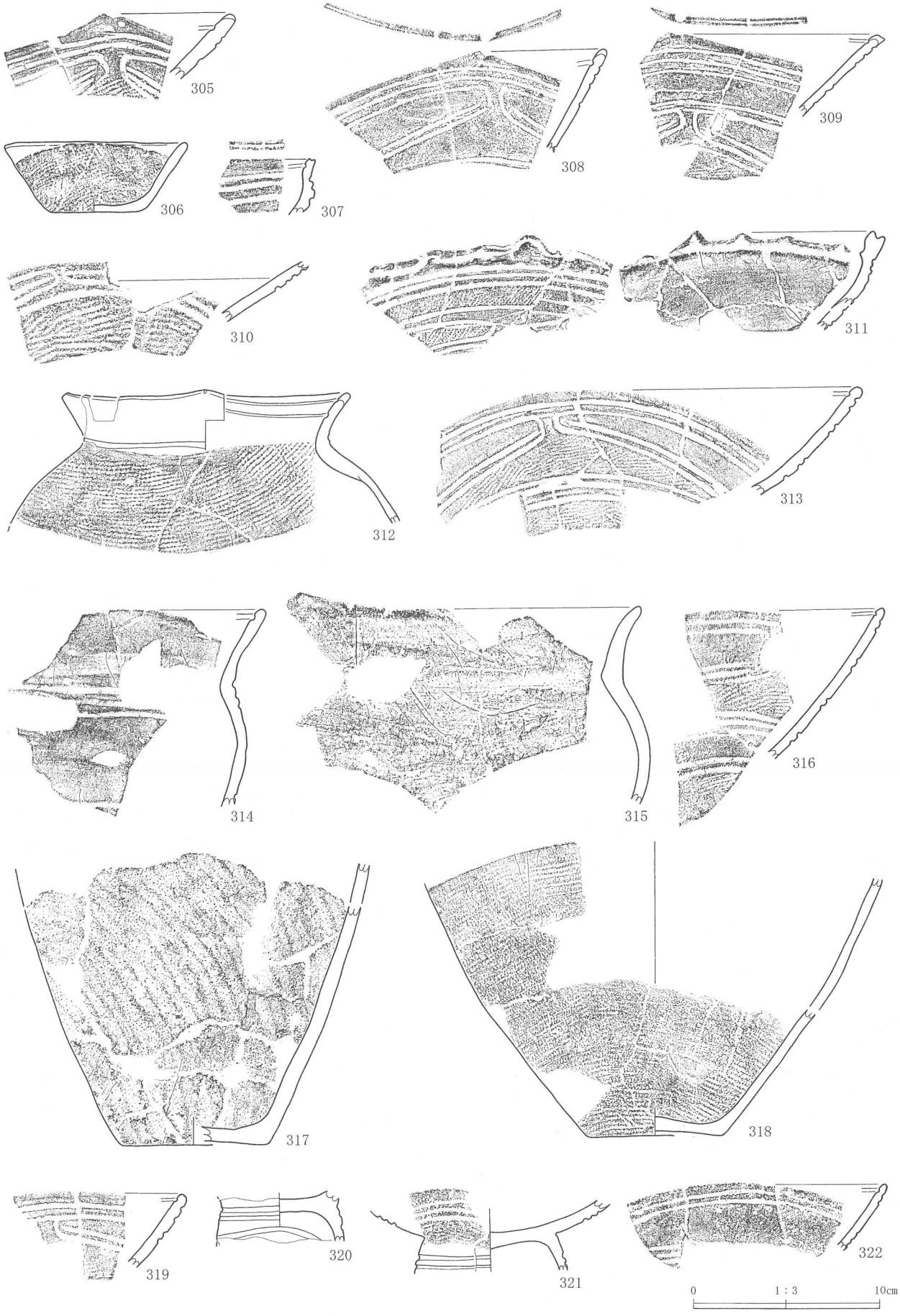
第67図　出土遺物（25）


土坑 1
254
255
256
257
258
259
261
262
土坑 2
263
264
265
266
267
土坑 3
268
土坑 4
269
270
溝跡 1
272
273
274
溝跡 2
275
276
277
溝跡 3
278
Ⅱ C12o
280
Ⅱ D1b
279
A 1 区
281
282
0
1 : 3
10cm

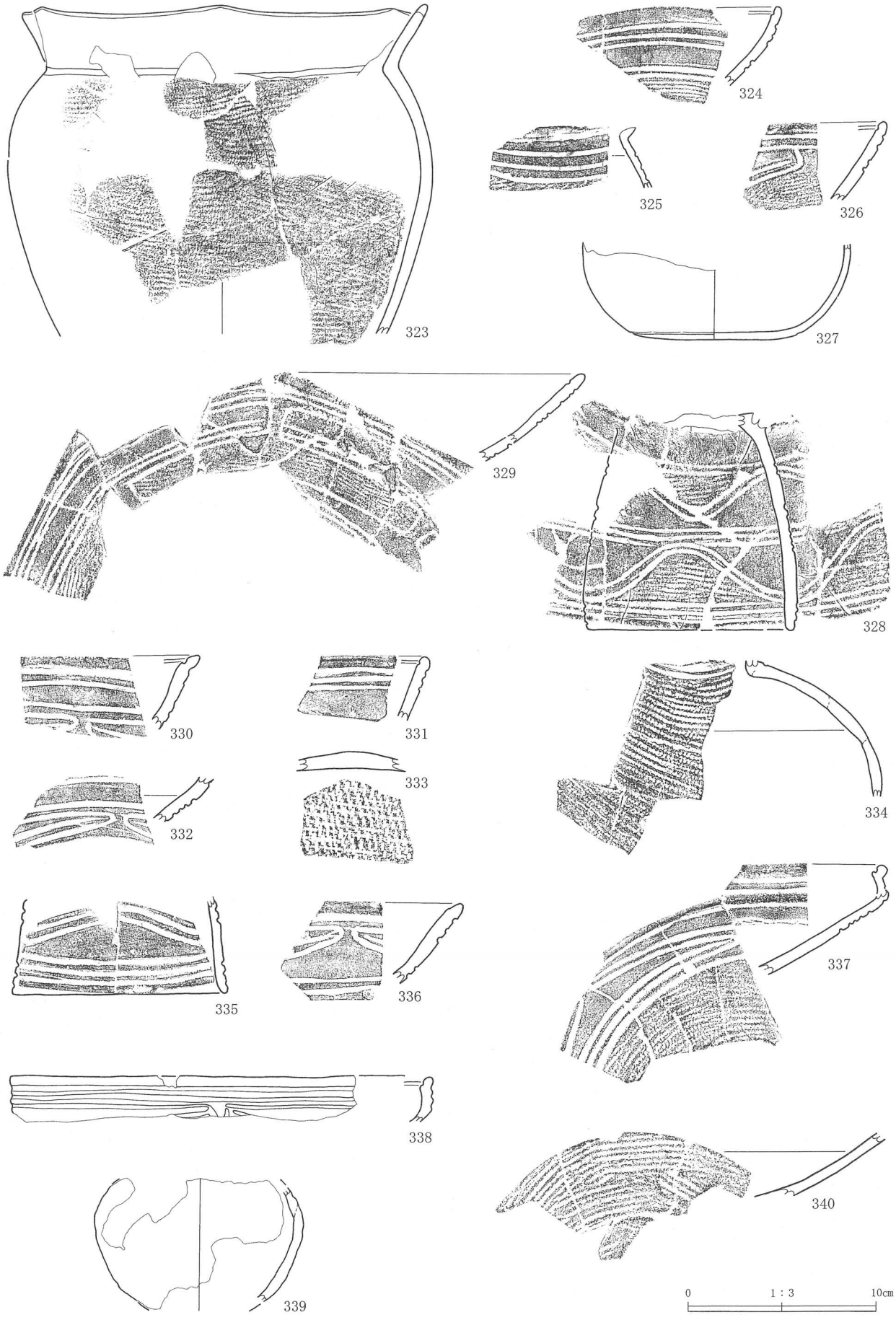
第68図　出土遺物（26）


A２区
B１区
B２区
283
284
285
286
287
288
289
290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
付着物
0
1：3
10cm

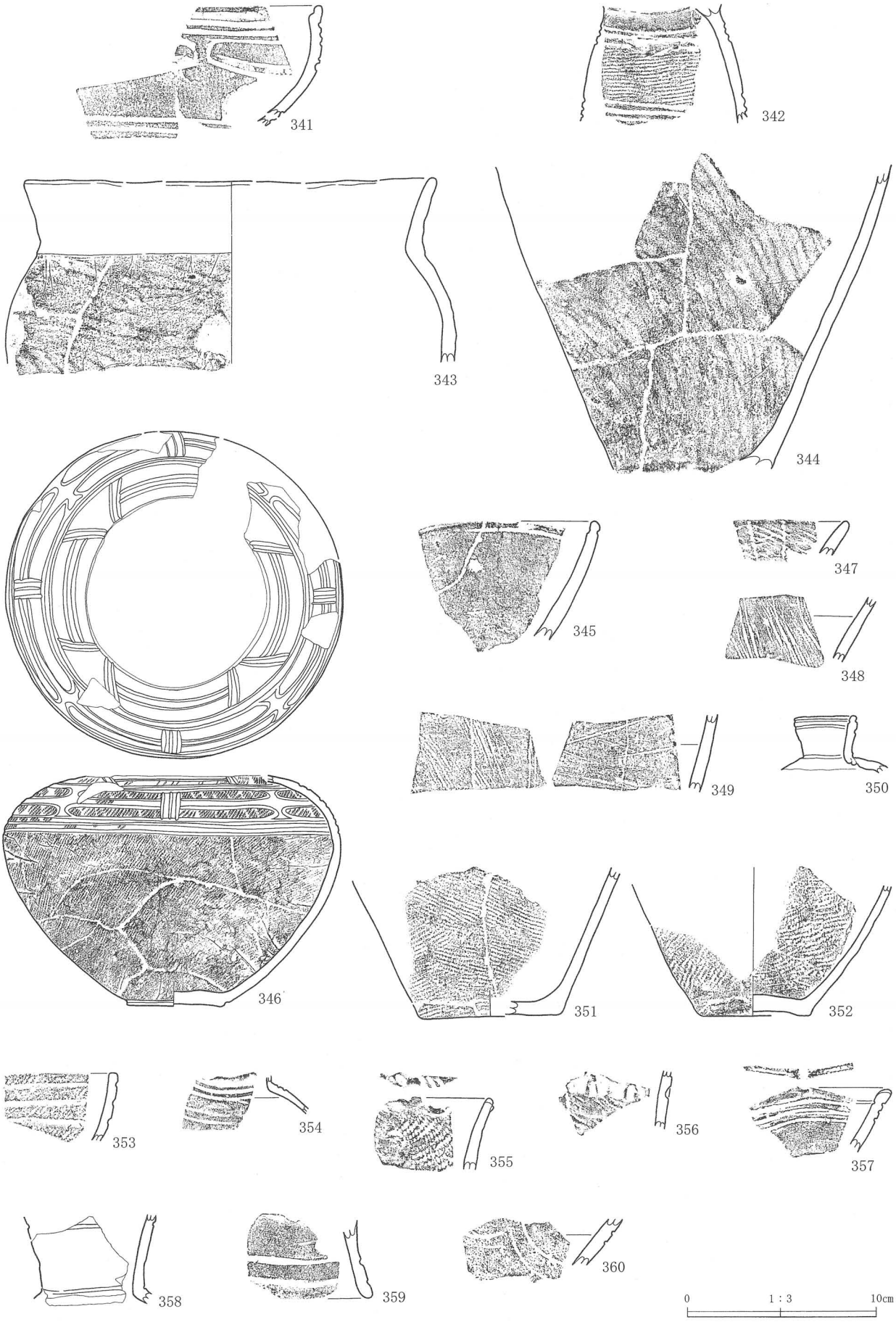
第69図　出土遺物（27）


305
306
307
308
309
310
311
312
313
314
315
316
317
318
319
320
321
322
0
1：3
10cm

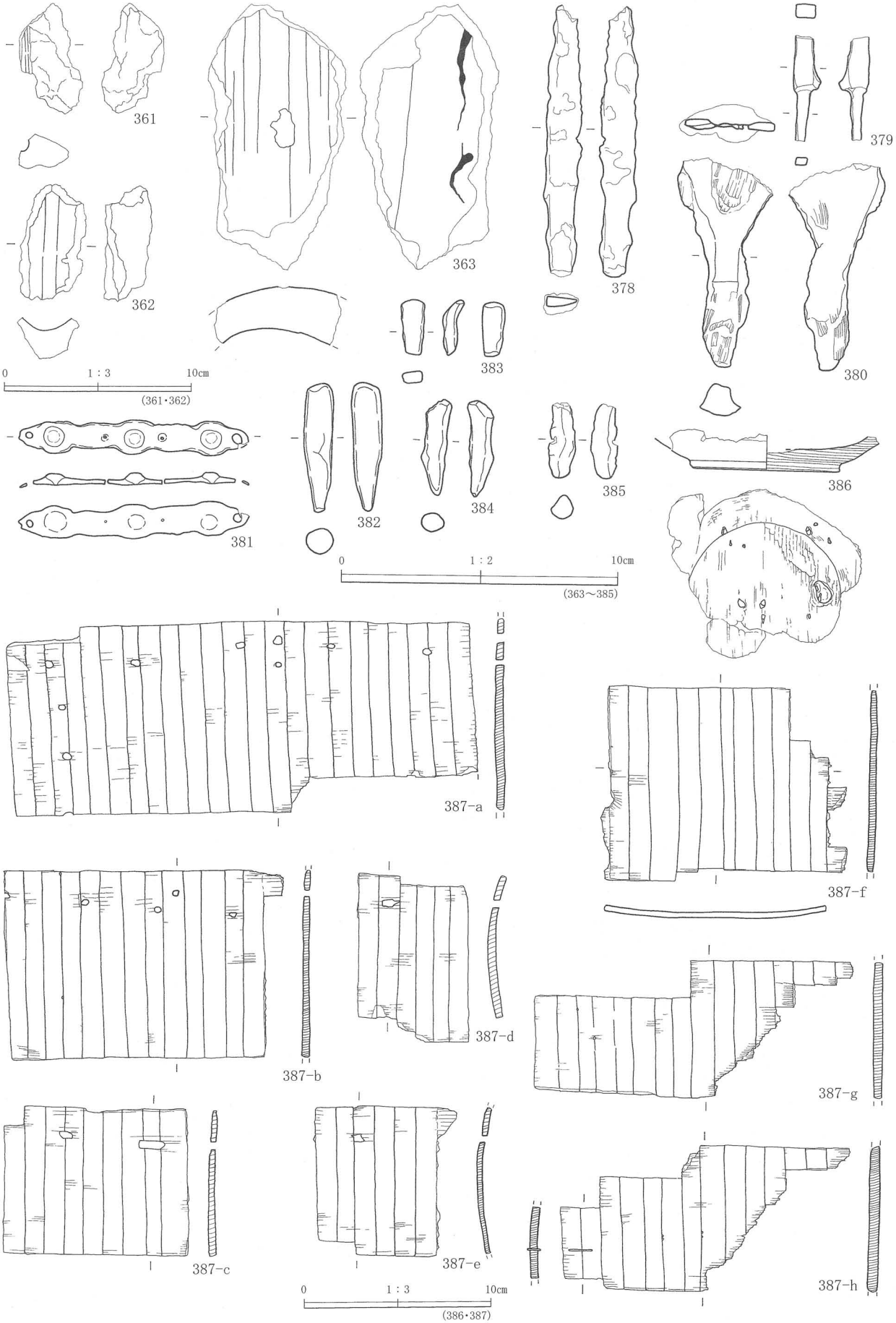
第70図　出土遺物（28）


323
324
325
326
327
329
328
330
331
333
332
334
335
336
337
338
340
339
0
1：3
10cm

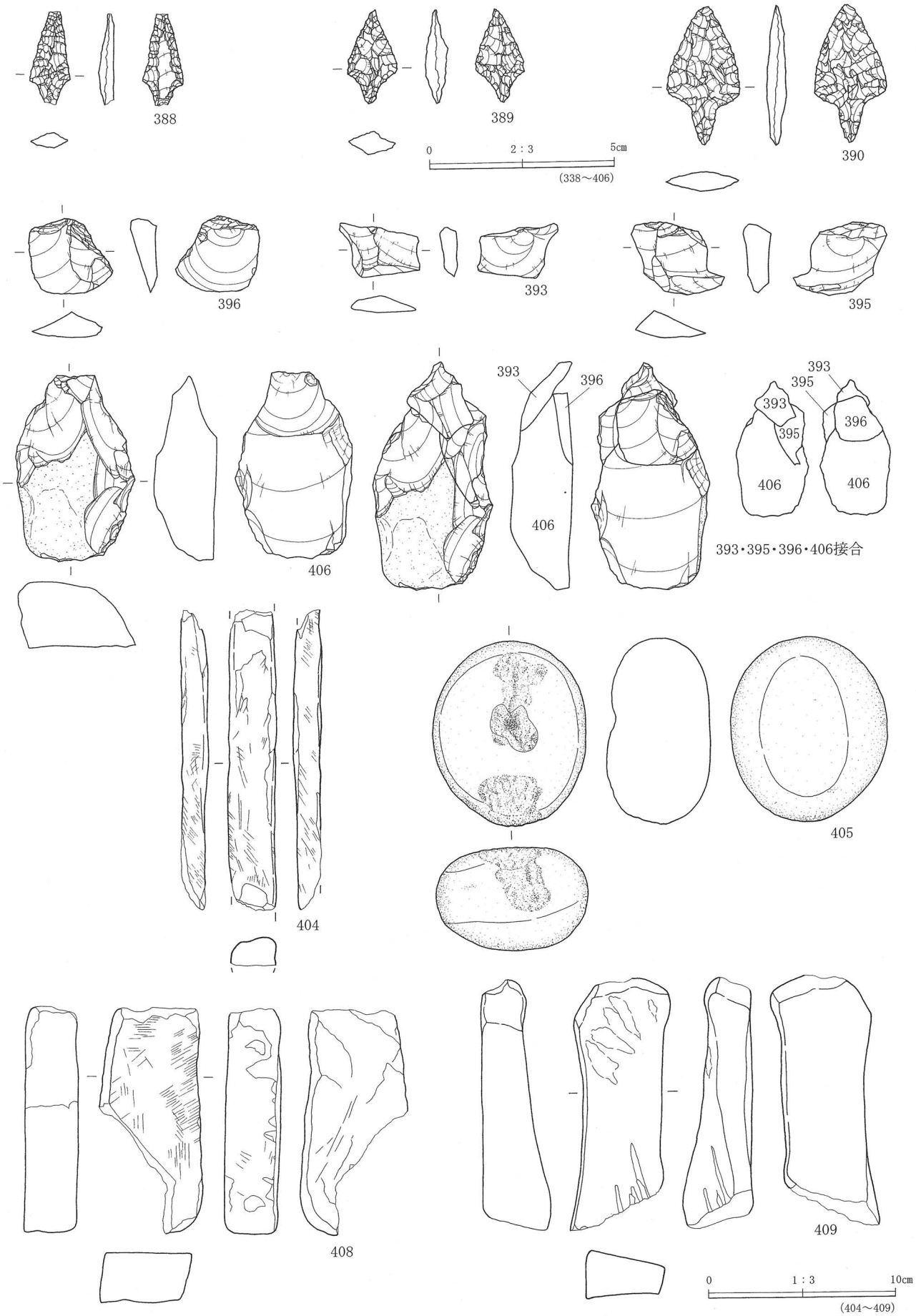
第71図　出土遺物（29）


341
342
343
344
345
347
348
349
350
346
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
0
1：3
10cm

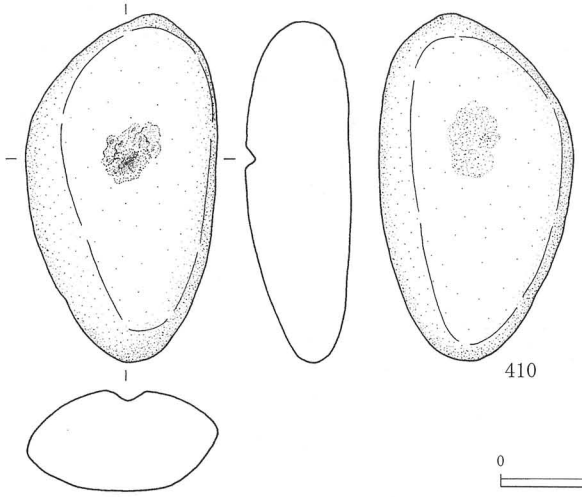
第72図　出土遺物（30）

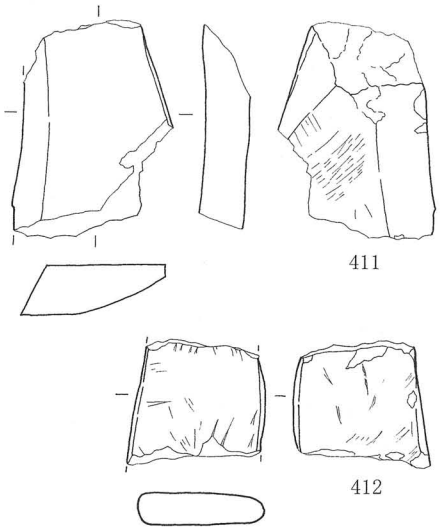

361
362
363
378
379
380
383
0　1：3　10cm
(361・362)
381
382
384
385
386
0　1：2　10cm
(363～385)
387-a
387-b
387-c
387-d
387-e
387-f
387-g
387-h
0　1：3　10cm
(386・387)

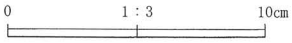
第73図　出土遺物（31）


388
389
390
0　2：3　5cm
(338～406)
396
393
395
406
393・395・396・406接合
404
405
408
409
0　1：3　10cm
(404～409)

第74図　出土遺物（32）







第75図　出土遺物（33）

第４表　出土遺物一覧（1）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
1	1	住居１	**上部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(13.6)	5.1	(6.4)	7.5YR5/3	にぶい褐	ロクロ	ケズリ	ナデ状ミガキ		43	31
2	3	住居１	カマド周辺 下部・**上部**	土師器	坏	口縁～底部	(14.0)	4.4	(5.0)	10YR7/3	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		43	31
3	2	住居１	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(13.3)	4.7	(6.8)	10YR5/4	にぶい黄褐	ナデ	ケズリ	ミガキ (はっきりしない)		43	31
4	7	住居１	ベルト	土師器	坏	胴部	－	(2.3)	－	7.5YR7/6	橙	ロクロ	－	ロクロ	刻書「｜｜」	43	31
5	4	住居１	**床**	土師器(内黒)	高台付皿	口縁～底部	(13.2)	(4.5)	(6.0)	5YR6/6	橙	ナデ→ヘラケズリ	ケズリ	ヨコナデ→ミガキ		43	31
6	6	住居１	下部	土師器(内黒)	高台付皿	胴～底部	－	(3.3)	(6.0)	10YR4/3	にぶい黄褐	ヘラケズリ	ケズリ	－		43	31
7	5	住居１	下部	土師器(内黒)	高台付皿	胴～底部	－	(3.5)	(6.2)	5YR5/6	明赤褐	ナデ	ケズリ	ミガキ		43	31
8	22	住居１	**床**	須恵器	坏	口縁～胴部	－	(3.0)	－	7.5Y6/1	褐灰	ロクロ	－	ロクロ		43	31
9	23	住居１	一括	須恵器	坏	口縁～胴部	－	(4.0)	－	7.5Y6/1	褐灰	ロクロ	－	ロクロ		43	31
10	8	住居１	**床**	土師器	甕	口縁～底部	20.5	31.5	9.8	7.5YR7/6	橙	ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ	ハケメ・ヨコナデ		43	31
11	9	住居１	**床**	土師器	甕	口縁～底部	23.2	32.3	9.0	10YR7/4	にぶい黄橙	ハケメ→ヘラケズリ・ヨコナデ	ヘラケズリ	ハケメ→ヨコナデ		43	31
12	11	住居１	**床**・下部	土師器	甕	口縁～底部	19.8	26.9	(8.0)	7.5YR7/6	橙	ヘラケズリ→ヘラナデ→ヨコナデ	ヘラケズリ	ハケメ→ヨコナデ		44	31
13	12	住居１	**床**	土師器	甕	胴～底部	－	(28.0)	(9.0)	7.5YR7/6	橙	ヘラナデ	ヘラケズリ	ハケメ		44	32
14	16	住居１	**床**	土師器	甕	口縁～底部	(15.2)	13.8	(6.8)	10YR7/6	明黄褐	ヘラケズリ→ヨコナデ	ヘラケズリ	ハケメ→ヨコナデ		44	32
15	17	住居１	**床**	土師器	甕	口縁～底部	(14.9)	15.0	(7.7)	7.5YR7/4	にぶい橙	ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	ケズリ	ハケメ→ヨコナデ		44	32
16	19	住居１	**床**	土師器	甕	口縁～胴部	－	(11.5)	－	10YR7/4	にぶい黄橙	ヨコナデ・ヘラケズリ→ナデ	－	ハケメ・ヨコナデ	球胴状	44	32
17	14	住居１	**カマド袖上面**	土師器	甕	口縁～胴部	(18.0)	(22.6)	－	5YR5/6	明赤褐	ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	－	ハケメ・ヨコナデ		45	32
18	15	住居１/ 住居５	**カマド袖上面**/ 一括	土師器	甕	口縁～胴部	(22.3)	(25.1)	－	5YR7/6	橙	ハケメ→ケズリ・ヨコナデ	－	ハケメ→ヨコナデ	球胴状	45	32
19	13	住居１	**煙道下部・上部**	土師器	甕	口縁～胴部	(20.3)	(20.5)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ヘラナデ→ヨコナデ	－	ハケメ・ヨコナデ		45	33
20	286	住居１	**上部**	土師器	甕	底部	－	(2.3)	(1.0)	7.5YR4/4	褐	ナデ	木葉痕	ナデ		45	33
21	10	住居１	**床**	土師器	甕	口縁～底部	23.5	30.8	6.5	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ→ヘラケズリ	ナデ	ロクロ		45	33
22	20	住居１	**床**	土師器(内黒)	鉢	口縁～底部	(23.6)	13.4	(8.8)	7.5YR7/4	にぶい橙	ヨコナデ・ヘラケズリ	ケズリ	ヨコナデ・ミガキ		45	33
23	21	住居１	**床**	土師器(内黒)	鉢	口縁～胴部	14～21.8	(12.0)	－	7.5YR6/6	橙	ヨコナデ・ヘラケズリ	－	ミガキ・ヨコナデ	磨滅する	45	33
24	18	住居１	ベルト	土師器(内黒)	鉢	口縁～底部	25.5	12.2	8.7	7.5YR7/4	にぶい橙	ヘラケズリ・口縁～頸部一部ミガキ	ケズリ	ミガキ		46	33
25	27	住居１	**床**	須恵器	瓶	胴部	－	(16.1)	－	N4/1	灰	タタキ・ロクロ→ヘラケズリ	－	ナデ→ロクロ		46	33
26	25	住居１	**上部**	須恵器	瓶	口縁	(17.6)	(6.4)	－	N4/	灰	ロクロ	－	ロクロ		46	33

※１　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（2）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
27	24	住居1	一括	須恵器	瓶	胴～底部	－	(5.5)	(9.6)	7.5Y6/1	褐灰	ロクロ→回転ケズリ→ヘラケズリ	－	ロクロ		46	33
28	26	住居1	一括	須恵器	瓶	頸部	－	(5.4)	－	N6/	灰	ロクロ	－	ロクロ		46	33
29	28	住居1	**床**	須恵器	大甕	胴部	－	(21.1)	－	N4/	灰	タタキ	－	タタキ		46	34
30	34	住居2	床面	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(13.8)	4.6	(6.4)	7.5YR5/4	にぶい褐	ロクロ→ヘラケズリ	回転糸切(右)	ミガキ	刻書「Ⅲ」	46	34
31	31	住居2/竪穴状1	**下部～床面/上部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	14.3	4.7～5.1	5.4	5YR7/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		46	34
32	30	住居2	貯蔵穴底面	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	14.4	5.5	6.7	7.5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ	墨書「？」	46	34
33	32	住居2	**貯蔵穴下部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.3	5.6	6.3	5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		47	34
34	35	住居2	**貯蔵穴下部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(14.2)	4.5	(6.2)	10YR6/3	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ→ナデ状ミガキ		47	34
35	38	住居2	**貯蔵穴下部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(13.7)	5.2	(5.4)	5YR6/6	橙	ロクロ→下端手持ちヘラケズリ	回転糸切(右)	ミガキ	刻書「Ⅲ」・黒色処理なし(とんだか？)	47	34
36	33	住居2	**上部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.3	5.3	6.0	2.5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		47	34
37	29	住居2	**上部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.5	5.0	6.2	5YR7/6	橙	ロクロ→回転ケズリ	回転糸切(右)	ミガキ	刻書「卅」	47	34
38	36	住居2	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～胴部	(15.3)	(4.9)	－	2.5YR3/1	暗褐灰	ロクロ(下端ケズリ？)	－	ミガキ		47	34
39	37	住居2	**壁際床面・貯蔵穴上部・埋土下部**	土師器	坏	口縁～底部	16.1	6.8	7.2	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		47	34
40	40	住居2	**貯蔵穴下部**	土師器	坏	口縁～胴部	(13.4)	(3.9)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ	刻書「Ⅲ」	47	34
41	39	住居2	**貯蔵穴底面**	土師器	坏	口縁～底部	13.7	4.55	6.2	7.5YR7/3	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		47	34
42	44	住居2	**床面**	土師器	甕	口縁～胴部	(13.4)	(7.2)	－	2.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		47	34
43	41	住居2/竪穴状1	**床/上部・下部**	土師器	甕	口縁～胴部	(21.0)	(32.4)	－	5YR4/3	にぶい赤褐	ロクロ→ヘラケズリ	－	ヨコナデ・ヘラナデ		47	34
44	42	住居2/竪穴状1	**床面・下部・上部/上部**	土師器	甕	口縁～底部	(19.6)	17.5	(9.0)	10YR7/6	明黄褐	タタキ・ロクロ→ヘラケズリ	不明	ミガキ		47	34
45	43A	住居2	**上部**	土師器	甕	a口縁～胴部 b胴～底部	a(13.0)	a(4.9) b(10.4)	b7.0	7.5YR7/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		48	35
46	47	住居2	**壁際床面**	須恵器	瓶	胴部	－	(10.9)	－	N7/	灰白	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ→ナデ		48	35
47	48	住居2	**下部**	須恵器	瓶？	胴部	－	(6.9)	－	N5/	灰	タタキ→一部ヘラケズリ？	－	ナデ		48	35
48	50	住居2	一括	須恵器	瓶	口縁	－	(2.3)	－	N5/	灰	タタキ？→ロクロ	－	ロクロ	外面絞り痕？あり	48	35
49	46	住居2	一括・表土	須恵器	瓶	口縁～胴部	－	(5.5)	－	7.5YR4/1	褐灰	ロクロ	－	ロクロ		48	35
50	49	住居2	一括	須恵器	瓶	胴部	－	(5.0)	－	10YR5/3	にぶい黄褐	ロクロ	－	ロクロ		48	35
51	51A	住居2/ⅡC13c	一括/暗褐色土	須恵器	瓶	a胴部・b底部	－	a(4.0) b(1.4)	b(8.8)	7.5YR4/1	褐灰	ロクロ	ケズリ？	ロクロ		48	35
52	45	住居2	一括	須恵器	瓶	胴部	－	(15.1)	－	N7/	灰白	ロクロ→回転ケズリ	－	ロクロ		48	35
53	248	住居3	PP2	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(14.0)	4.6	5.5	7.5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ	刻書？「ⅱ」	48	35

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

第４表　出土遺物一覧（3）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
54	52	住居３	**床面**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	14.0	5.5	6.7	5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		48	35
55	53	住居３	**下部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	16.4	6.2	6.4	7.5YR7/4	にぶい橙	ロクロ→下端手持ちヘラケズリ	ケズリ	ミガキ	刻書「Ⅲ」	48	35
56	55	住居３	**下部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	12.8	6.7	6.3	7.5YR7/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ	内面上部磨滅	48	35
57	54	住居３	**上部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(13.9)	5.1	6.2	10YR6/4	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		48	35
58	56	住居３	**カマド燃焼部下部**	土師器	坏	口縁～底部	(14.9)	4.7	(7.0)	5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		48	35
59	57	住居３	カマド袖	土師器	小形坏？	口縁～底部	(4.8)	1.9	(3.1)	2.5Y7/6	明黄褐	ナデ	ナデ	ナデ		49	35
60	62	住居３	床面	土師器	甕	口縁～胴部	(16.5)	(8.8)	－	5YR5/6	明赤褐	ロクロ	－	ロクロ		49	35
61	58	住居３	**カマド煙道中部・カマド燃焼部上部・床面**	土師器	甕	a 口縁～胴部 b 胴～底部	(22.0)	(12.8)	－	a7.5YR7/6 b10YR4/4	橙 褐	aロクロ bタタキ→ヘラケズリ	－	ロクロ・ヘラナデ		49	35
62	59	住居３	**カマド煙道中部・床面**	土師器	甕	口縁～胴部	(17.6)	(19.2)	－	10YR6/6	明黄褐	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ→ナデ		49	35
63	65	住居３	**カマド煙道中部・カマド燃焼部上部・床面**	土師器	甕	口縁～胴部	(17.6)	(14.0)	－	5YR5/4	にぶい赤褐	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ→ナデ		49	36
64	61	住居３	**床面・カマド燃焼部上部**	土師器	甕	a 口縁～胴部 b 胴～底部	a(27.8)	a(13.4) b(28.9)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ヘラケズリ・ロクロ	－	ロクロ・一部ナデ(タタキ痕跡なし)		49	36
65	60	住居３	カマド煙道中部・カマド燃焼部上部・貯蔵穴下部、底面	土師器	甕	口縁～底部	14.7	14.5	7.7	7.5YR5/6	明褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		50	36
66	63	住居３	カマド袖	土師器	甕	口縁～胴部	(13.5)	(8.3)	－	5YR5/6	明赤褐	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ		50	36
67	64	住居３	下部	土師器	甕	口縁～胴部	(12.2)	(4.8)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		50	36
68	66	住居３	カマド煙道中部・カマド燃焼部上部・貯蔵穴下部	須恵器	瓶	胴～底部	－	(25.3)	(6.9)	5YR6/3	にぶい橙	タタキ→ヘラケズリ・ロクロ	－	ナデ→ロクロ		50	36
69	67	住居３	一括	須恵器	瓶	底部	－	(2.5)	(6.5)	2.5YR5/2	灰赤	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		50	36
70	68	住居４	**貯蔵穴底面**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(12.9)	4.8	5.4	10YR6/3	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ	内外面にサビ付着(調整見えにくい)	50	36
71	69	住居４	**検出面**	土師器	坏	口縁～胴部	(12.3)	(5.1)	－	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		50	36
72	73	住居４	**貯蔵穴床面・埋土中**	須恵器	坏	口縁～胴部	(14.6)	(4.8)	－	10Y7/1	灰白	ロクロ	－	ロクロ		50	36
73	71	住居４	**埋土中**	土師器	甕	口縁～胴部	(19.8)	(6.7)	－	10YR6/6	明黄褐	ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	－	ハケメ→ヨコナデ		50	36
74	72	住居４	**床面・埋土中**	土師器	甕	底部	－	(2.7)	(6.0)	10YR8/3	浅黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		50	36
75	70	住居４	**貯蔵穴底面**	土師器	甕	a 口縁～胴部 b 胴部	a(14.1)	a(5.2) b(8.2)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		50	36
76	74	住居４	一括	須恵器	大甕	胴部	－	(16.0)	－	N5/	灰	タタキ	－	タタキ・一部ナデ		50	37
77	75	住居４	一括	須恵器	大甕	胴部	－	(16.2)	－	N4/	灰	タタキ	－	タタキ		51	37

※１　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（4）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
78	92	住居5	**床面**	須恵器	坏	口縁～底部	15.0	4.1	6.8	10YR7/1	灰白	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		51	37
79	93	住居5	**床面**	須恵器	坏	口縁～底部	(13.6)	3.9	(6.6)	7.5GY5/1	緑灰	ロクロ・下端回転ケズリ	ケズリ(手持ち？回転？不明)	ロクロ		51	37
80	88	住居5	**カマド袖**	土師器	甕	口縁～底部	(20.2)	31.1	9.4	5YR5/6	明赤褐	ハケメ→ヨコナデ	木葉痕	ヘラナデ		51	37
81	89	住居5	**2層中**	土師器	甕	口縁～底部	(17.8)	29.7	(9.0)	7.5YR4/3	褐	ハケメ→ヨコナデ	ナデ？	ヘラナデ→ヨコナデ	胴部中央磨滅	51	37
82	91	住居5	**床面**	土師器	甕	a口縁～胴部 b胴～底部	a(11.1)	a(5.9) b(3.6)	b(4.8)	5YR5/6	明赤褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ	磨滅する	51	37
83	90	住居5	**貯蔵穴底面・床面**	土師器	甕	口縁～底部	(14.9)	14.6	7.6	10YR8/3	浅黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		52	37
84	77	住居6	**床**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(15.0)	4.5	(6.2)	10YR6/4	にぶい黄橙	ロクロ→下端ヘラケズリ	ケズリ	ミガキ		52	38
85	76	住居6	**上部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(12.6)	5.0	(5.2)	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ→下端回転ケズリ	回転ケズリ	ミガキ		52	38
86	79	住居6	**カマド支脚**	土師器	甕	口縁～底部	18.6	25.7	10.0	5YR6/4	にぶい橙	ヨコナデ・ヘラナデ	ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ		52	38
87	82	住居6	**床面**	土師器	甕	胴～底部	－	(17.6)	(10.0)	10YR6/6	明黄褐	タタキ→ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ		52	38
88	78	住居6	**カマド上部・**埋土下部	土師器	甕	口縁～底部	(20.6)	23.6	(9.4)	7.5YR6/6	橙	ヘラケズリ・ヨコナデ	ケズリ・ナデ	ヘラナデ		52	38
89	81	住居6	**下部**	土師器	甕	胴～底部	－	(6.1)	(9.6)	7.5YR3/2	黒褐	ヘラケズリ	ケズリ	ハケメ		52	38
90	80	住居6	一括	土師器	甕	口縁～胴部	(20.6)	(4.6)	－	5YR5/6	明赤褐	ハケメ→ヘラケズリ→ヨコナデ	－	ハケメ→ヨコナデ		52	38
91	84	住居6	床面	須恵器	瓶	胴部	－	(6.1)	－	2.5YR5/1	赤灰	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ		53	38
92	85	住居6	上部	須恵器	瓶	胴部	－	(7.2)	－	2.5YR5/2	灰赤	タタキ→ヘラケズリ	－	ナデ		53	38
93	87	住居6	上部	須恵器	瓶	底部	－	(4.4)	(9.0)	5YR5/3	にぶい赤褐	ロクロ・ヘラケズリ	ナデ	ロクロ		53	38
94	86	住居6	上部	須恵器	大甕	胴部	－	(6.1)	－	N3/	暗灰	タタキ	－	タタキ		53	38
95	83	住居6	一括	須恵器	大甕	口縁	－	(3.8)	－	2.5YR4/1	黄灰	ロクロ	－	ロクロ		53	38
96	95	住居7	**床面**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.5	4.5	6.0	7.5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		53	38
97	96	住居7	**床面**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(14.8)	4.9	(6.6)	7.5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		53	38
98	94	住居7	**カマド煙道中部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	14.4~14.9	4.9	(6.4)	10YR5/3	にぶい黄褐	ロクロ・下端回転ケズリ	回転ケズリ	ミガキ		53	38
99	97	住居7	上部	土師器(内黒)	坏？	胴～底部	－	(3.4)	－	7.5YR6/6	橙	ナデ→ミガキ	ナデ？	ミガキ		53	38
100	249	住居7	**床面・下部**	土師器	甕	口縁～底部	(22.2)	(33.4)	－	10YR7/4	にぶい黄橙	タタキ→ロクロ→ヘラケズリ	タタキ	タタキ→ロクロ	丸底	53	39
101	98	住居7	**下部**	土師器	甕	口縁～胴部	(24.0)	(16.3)	－	10YR7/6	明黄褐	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ→ナデ		53	39
102	104	住居7	**床面**	須恵器	瓶	胴～底部	－	(6.4)	(10.5)	5PB6/1	青灰	ヘラケズリ	一部ケズリ・ナデ	ハケメ		53	39
103	102	住居7	**床面**	須恵器	瓶	胴部	－	(22.2)	－	N3/	暗灰	ロクロ→ヘラケズリ	－	ハケメ→ロクロ		54	39

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

第４表　出土遺物一覧（5）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
104	103	住居７	**床面・カマド上部**	須恵器	瓶	胴部	－	(21.3)	－	N3/	暗灰	タタキ→ロクロ→ヘラケズリ	－	ハケメ→ロクロ		54	39
105	99	住居７	**床面**・上部	須恵器	瓶	口縁～胴部	(11.6)	(9.1)	－	7.5YR5/1	灰	ロクロ	－	ロクロ	ゆがみ大きい	54	39
106	101	住居７	下部	須恵器	瓶	口縁～胴部	－	(4.9)	－	N4/	灰	ロクロ	－	ロクロ		54	39
107	100	住居７	上部	須恵器	瓶	口縁～胴部	(13.0)	(6.2)	－	7.5YR4/3	褐	ロクロ	－	ロクロ		54	39
108	105	住居７	一括	須恵器	大甕	胴部	－	(7.0)	－	5B5/1	青灰	タタキ	－	タタキ		54	39
109	107	住居８	カマド	土師器(内黒)	坏	底部	－	(1.7)	4.0～4.8	10YR7/3	にぶい黄橙	ロクロ	－	ミガキ	磨滅する・黒色処理部分的に残る	54	39
110	106	住居８	カマド	土師器(内黒)	坏	口縁～胴部	－	(2.8)	－	10YR7/3	にぶい黄橙	ロクロ	－	ミガキ		54	39
111	250	住居８	床面	須恵器	坏	胴～底部	－	(1.6)	(5.4)	N6/	灰	ロクロ	回転ヘラ切？ヘラケズリ再調整？	ロクロ		54	40
112	109	住居８	**床面**	土師器	甕	口縁～胴部	23.4	(26.1)	－	7.5YR6/6	橙	ハケメ→ヘラナデ	－	ハケメ→ヨコナデ		55	40
113	110	住居８	**床面**	土師器	甕	口縁～底部	14.4	12.1	8.6	5YR5/6	明赤褐	ヘラケズリ・ヨコナデ	ケズリ	ナデ→ハケメ→ヨコナデ		55	40
114	252	住居８	**上部**	須恵器	瓶	胴部	－	(10.7)	－	N6/	灰	タタキ→ロクロ	－	ロクロ		55	40
115	251	住居８/住居７	**下部**/一括	須恵器	瓶	胴部	－	(17.7)	－	10BG5/1	青灰	タタキ→ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ→ヘラナデ		55	40
116	108	住居８/住居１	カマド燃焼部	土師器	高台付皿	口縁～脚部	(12.2)	(3.7)	－	5YR5/4	にぶい赤褐	ヘラケズリ・ヘラナデ	ヘラナデ	ナデ		55	40
117	131	住居９	**検出面**	土師器	坏	口縁～底部	(14.9)	6.3～6.4	(7.0)	10YR6/2	灰黄褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		55	40
118	132	住居９	**検出面**	須恵器	坏	口縁～底部	(13.2)	4.2	5.1	2.5Y6/1	黄灰	ロクロ	ヘラナデ	ロクロ		55	40
119	133	住居９	検出面	須恵器	坏	口縁～胴部	(13.0)	(3.8)	－	2.5Y7/2	灰黄	ロクロ	－	ロクロ		55	40
120	134	住居９	**カマド・検出面**	土師器	甕	口縁～底部	(23.1)	31.5	(6.6)	10YR7/4	にぶい黄橙	ヨコナデ→ヘラケズリ	ヘラケズリ？	ヨコナデ・ハケメ		56	40
121	135	住居９	**検出面**	土師器	甕	胴～底部	－	(5.4)	(7.6)	5YR5/6	明赤褐	ナデ	ナデ	ヘラナデ		56	40
122	136	住居９	**検出面**	須恵器	瓶	胴部	－	(17.1)	－	N3/	暗灰	タタキ→ロクロ→ヘラケズリ→回転ケズリ	－	ロクロ		56	40
123	138	住居10	床面	土師器(内黒)	坏	底部	－	(1.0)	4.2	7.5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ナデ状ミガキ	黒色処理とんでいる	56	40
124	224	住居10	**貯蔵穴**	土師器	坏	口縁～底部	11.0～11.1	2.6～2.8	4.6	7.5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		56	40
125	137	住居10	カマド上部	土師器	坏	口縁～底部	(13.7)	4.2	(5.0)	5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		56	40
126	139	住居10・12重複部	**壁際**	土師器	坏	口縁～底部	10.5	2.6	4.0	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ	底部中心に亀裂(成形～焼成段階のものか?)	56	40
127	140	住居10・12重複部	一括	土師器	坏	底部	－	(0.9)	3.8	5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		56	40
128	186	住居10・12重複部	**カマド上面**	土師器	甕	口縁～胴部	(19.4)	(8.7)	－	2.5YR8/4	赤褐	ハケメ→ヨコナデ・ヘラナデ	－	ヨコナデ→ハケメ		56	40
129	183	住居10・12重複部	**下部**	須恵器	瓶	口縁	(9.6)	(3.7)	－	N4/	灰	ロクロ	－	ロクロ		56	41

※１　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（6）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
130	185	住居10・12重複部	**下部**	須恵器	瓶	胴～底部	－	(6.4)	(10.6)	N5/	灰	タタキ→ヘラケズリ	砂付着	ヘラナデ（ハケメに近い）		56	41
131	156	住居11	**貯蔵穴1 13層(断面記載)**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(13.3)	4.5	(5.4)	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ・下端ヘラケズリ？	回転糸切(右)	ミガキ	刻書「上？」	57	41
132	159	住居11	貯蔵穴(床面より上)	土師器(内黒)	坏	胴～底部	－	(3.7)	(5.8)	7.5YR5/6	明褐	ロクロ→ヘラケズリ	回転糸切(方向不明)	ロクロ→ミガキ(はっきりしない)	刻書「上」・部分的に黒色処理残る	57	41
133	157	住居11	**下部**	土師器(内黒)	坏	胴～底部	－	(3.3)	(5.6)	10YR7/4	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		57	41
134	160	住居11	**上部**	土師器(内黒)	坏	胴～底部	－	(2.4)	(4.6)	5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ナデ状ミガキ		57	41
135	158	住居11	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～胴部	(12.9)	(4.5)	－	10YR6/4	にぶい黄橙	ロクロ	－	ミガキ		57	41
136	143	住居11	床面～掘方	土師器	坏	口縁～底部	(12.8)	3.2	(5.2)	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
137	141	住居11	床面	土師器	坏	口縁～底部	13.0	4.5	5.6	5YR6/8	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
138	142	住居11	床面	土師器	坏	口縁～底部	13.2	3.6	5.0	5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
139	151	住居11	貯蔵穴1下部・13層、床面	土師器	坏	口縁～底部	12.8	4.6	5.4	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
140	150	住居11	貯蔵穴1　13・14層	土師器	坏	口縁～底部	(13.4)	4.0	(5.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ロクロ	胴部にキズあり	57	41
141	154	住居11	貯蔵穴1　2・12層	土師器	坏	口縁～胴部	(13.6)	(3.6)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ	口縁湾曲大きい	57	41
142	155	住居11	**貯蔵穴1　2層**	土師器	坏	口縁～底部	(12.8)	4.2	(5.1)	7.5YR5/3	にぶい褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ	歪み大きい	57	41
143	146	住居11	カマド、貯蔵穴周辺	土師器	坏	口縁～底部	(15.0)	4.2	7.2	5YR5/4	にぶい赤褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ	口縁切れ目、底部亀裂、胴部にもキズあり(形成～焼成段階のものか？)	57	41
144	152	住居11	貯蔵穴1・**上部**	土師器	坏	口縁～底部	(12.6)	4.2	(5.4)	7.5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
145	147	住居11	**下部**	土師器	坏	口縁～底部	(13.0)	4.1	(6.4)	7.5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
146	144	住居11	**上部**	土師器	坏	口縁～底部	(13.6)	3.4	(5.6)	5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
147	145	住居11	一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.4)	3.5	(5.4)	5YR5/6	明赤褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
148	148	住居11	一括	土師器	坏	口縁～底部	(13.2)	3.8	(6.0)	7.5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		57	41
149	149	住居11	一括	土師器	坏	口縁～底部	13.4	3.9	5.9	5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		58	41
150	153	住居11	一括	土師器	坏	口縁～胴部	(13.5)	(3.4)	－	5YR5/6	明赤褐	ロクロ	－	ロクロ		58	41
151	161	住居11	一括	土師器	坏	胴部	－	(3.1)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ	墨書「？」	58	41
152	162	住居11	**カマド2層**	土師器	高台付坏	胴部	－	(2.2)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切→ロクロ	ロクロ		58	41
153	163	住居11	下部	土師器	高台付坏	胴部	－	(2.4)	－	7.5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ロクロ		58	41
154	170	住居11	**貯蔵穴1　2層・**カマド燃焼部	土師器	甕	胴～底部	－	(15.6)	(10.0)	5YR6/4	にぶい橙	ヘラナデ	ナデ	ナデ		58	41
155	168	住居11	**床面・下部・**カマド周辺	土師器	甕	口縁～底部	(24.3)	28.4	(10.5～11.0)	5YR5/4	にぶい赤褐	ロクロ→ヘラケズリ	圧痕？	ロクロ		58	41

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（7）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
156	169	住居11	**床面・カマド周辺・貯蔵穴**	土師器	甕	a口縁～胴部 b胴部	a(22.1)	a(17.7) b(14.0)	－	7.5YR6/6	橙	タタキ→ロクロ	－	タタキ→ロクロ		58	41
157	165	住居11	貯蔵穴2	土師器	甕	口縁～胴部	(13.6)	(5.7)	－	7.5YR6/3	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		58	41
158	164	住居11	カマド煙道部	土師器	甕	口縁～胴部	(24.3)	(8.0)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		58	41
159	167	住居11	**カマド煙道部**	土師器	甕	口縁～胴部	20.6	(20.7)	－	7.5YR3/4	暗褐	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ		59	41
160	166	住居11	一括	土師器	甕	口縁～胴部	(13.5)	(4.4)	－	7.5YR6/3	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		59	41
161	172	住居11	**上部**	須恵器	瓶	胴部	－	(7.7)	－	10YR4/1	褐灰	ロクロ→ヘラケズリ	－	ヘラナデ		59	41
162	171	住居11	一括	須恵器	瓶	口縁	(10.0)	(2.8)	－	10YR2/1	黒	ロクロ	－	ロクロ		59	41
163	173	住居12	**柱穴内**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	12.8	5.1	6.0	5YR6/6	橙	ロクロ	回転ケズリ？	ミガキ	底部磨滅する	59	41
164	176	住居12	**貯蔵穴**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(14.0)	5.1	(6.6)	10YR6/3	にぶい黄橙	ロクロ→下端回転ケズリ	回転ケズリ	ミガキ		59	41
165	175	住居12	**貯蔵穴**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.7	4.8	6.0	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ→下端回転ケズリ	回転ケズリ	ミガキ		59	41
166	174	住居12	**柱穴内・貯蔵穴**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.4	4.9	5.6	5YR6/6	橙	ロクロ→下端回転ケズリ	回転ケズリ	ミガキ	内面磨滅する	59	41
167	177	住居12	カマド周辺	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(13.4)	5.0	(5.0)	10YR6/4	にぶい黄橙	ロクロ	回転ケズリ？	ミガキ(はっきりしない)	内面磨滅する	59	41
168	255	住居12	**貯蔵穴下部**	土師器	甕	口縁～胴部	18.5	(16.7)	－	7.5YR6/6	橙	ハケメ→ヨコナデ	－	ハケメ→ヨコナデ		59	41
169	180	住居12	貯蔵穴	土師器	甕	底部	－	(5.0)	(8.0)	5YR5/6	明赤褐	ヘラナデ	ヘラケズリ	ハケメ		59	41
170	181	住居12	貯蔵穴	須恵器	坏	口縁～胴部	－	(3.6)	－	5YR5/1	灰	ロクロ	－	ロクロ		59	41
171	178	住居12	**カマド煙道**	土師器	甕	口縁～底部	(20.0)	21.8	(8.5)	5YR5/6	明赤褐	ヘラナデ(ハケメに近い)→ヘラケズリ・ヨコナデ	ナデ？	ヘラナデ→ヨコナデ		59	41
172	256	住居12	カマド煙道	土師器	甕	口縁～胴部	(16.0)	(28.0)	－	5YR4/2	灰褐	一部ハケメ・ヘラナデ(ハケメに近い)→ヨコナデ	－	ハケメ		60	41
173	179	住居12	**カマド煙道下部**	土師器(内黒)	甕	口縁～底部	(17.5)	12.5	(8.0)	10YR6/4	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ→ミガキ		60	41
174	184	住居12	カマド周辺	須恵器	瓶	胴部	－	(16.0)	－	2.5YR5/2	灰赤	ロクロ	－	ロクロ		60	41
175	182	住居12	一括	須恵器	瓶	口縁～胴部	－	(3.9)	－	5YR4/1	褐灰	ロクロ	－	ロクロ		60	41
176	197	住居13	**上部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(11.7)	4.8	(4.9)	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	不明	ミガキ	外面下端から底部にかけ磨滅する。底部再調整ありか？	60	41
177	199	住居13/溝跡2	貯蔵穴/下部	須恵器	坏	口縁～胴部	(14.0)	(4.6)	－	10YR6/1	褐灰	ロクロ	－	ロクロ		60	41
178	187	住居13	**燃焼部床面**	須恵器	坏	口縁～底部	3.9~14.0	5.5	5.8	5YR5/6	明赤褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		60	41
179	194	住居13	**床面**	土師器	甕	胴～底部	－	(8.4)	(9.5)	7.5YR5/3	にぶい褐	ヘラケズリ	ケズリ	ハケメ	器面ハクラク多い	60	41
180	192	住居13	**上部**	土師器	甕	口縁～胴部	(11.0)	(5.4)	－	5Y4/1	灰	ヨコナデ	－	ヘラナデ→ヨコナデ	外面胴部磨滅する	60	41
181	191	住居13	**床面**	土師器	甕	口縁～底部	8.1	12.2	8.1	7.5YR6/3	にぶい褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		60	41

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（8）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
182	198	住居13/住居11	**煙道上部/下部**	土師器	甕	口縁～胴部	(23.0)	(34.2)	－	7.5YR6/6	橙	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ		60	43
183	190	住居13	カマド	土師器	坏	口縁～底部	(13.6)	5.3	(5.0)	10YR8/4	浅黄橙	ロクロ	不明	ロクロ		61	43
184	188	住居13	カマド付近	土師器	坏	口縁～底部	12.8	4.2~4.5	6.2	7.5YR8/1	灰白	ロクロ	ヘラケズリ	ロクロ		61	44
185	196	住居13	カマド	土師器	甕	胴～底部	－	(4.2)	(5.9)	10YR7/3	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		61	44
186	189	住居13	**上部**	土師器	坏	口縁～底部	(14.2)	5.2	(6.3)	5YR7/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		61	44
187	195	住居13	**下部**	土師器	甕	胴～底部	－	(5.3)	(6.0)	10YR7/1	灰白	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ロクロ		61	44
188	193	住居13	**下部**	土師器	甕	胴～底部	－	(6.3)	7.0	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ→ヘラケズリ	ケズリ？	ロクロ	底部磨滅する	61	44
189	202	住居13	一括	土師器(内黒)	高台付坏	口縁～底部	(16.2)	8.0	(8.5)	7.5YR7/8	黄橙	ロクロ	ナデ	ミガキ		61	44
190	200	住居13	一括	須恵器	瓶	口縁	－	(2.9)	－	N3/	暗灰	ロクロ	－	ロクロ		61	44
191	201	住居13	一括	須恵器	瓶	胴部	－	(6.1)	－	N3/	暗灰	ロクロ・ヘラナデ	－	ロクロ		61	44
192	204	住居14	**貯蔵穴**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	14.7~13.1	5.2	5.7	7.5YR7/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		61	44
193	205	住居14	**貯蔵穴**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	14.0	5.6	5.8	7.5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		61	44
194	207	住居14	**貯蔵穴**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.2	5.2	5.0	10YR6/4	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ナデ状ミガキ		61	44
195	203	住居14	**床面**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	15.0	6.9	7.0～7.2	7.5YR4/3	褐	ヘラケズリ・ヨコナデ	ケズリ	ヘラナデ	ロクロ使用か？	61	44
196	208	住居14	床面	土師器(内黒)	坏	胴～底部	－	(2.6)	(6.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ・下端ヘラケズリか？	回転ケズリ	ミガキ		61	44
197	206	住居14	**埋土中**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.5	4.9~5.0	5.7~5.8	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		61	44
198	212	住居14	**埋土中**	土師器	甕	口縁～底部	(11.7)	8.1	(6.5)	5YR7/6	橙	ヘラナデ(ヘラケズリに近い)→ヘラケズリ→ヨコナデ	ナデ？	ヘラナデ→ハケメ		61	44
199	213	住居14	**埋土中**	土師器	甕	胴部	－	(7.2)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ハケメ→ヘラナデ	－	ハケメ→ヨコナデ	球胴状	62	44
200	209	住居14	**床面**	土師器	甕	口縁～底部	20.0	33.9	9.4	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ→ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ→ロクロ		62	44
201	210	住居14	燃焼部	土師器	甕	口縁～胴部	(19.0)	(8.7)	－	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		62	44
202	211	住居14	一括	土師器	甕	口縁～胴部	(11.8)	(9.2)	－	5YR5/6	明赤褐	ロクロ	－	ロクロ		62	44
203	214	住居14	**貯蔵穴**	土師器(内黒)	甕	胴～底部	－	(13.9)	10.5	2.5YR6/6	橙	ロクロ→ヘラケズリ	ケズリ？(ヘラナデに近い)	ミガキ	刻書「メ」(4箇所？)	62	44
204	215	住居15	**下部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	14.0	5.3	6.0	10YR7/6	明黄褐	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		63	45
205	216	住居15	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(14.1)	5.1	5.7	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		63	45
206	217	住居15	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(13.2)	5.0	(5.8)	7.5YR6/3	にぶい褐	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ミガキ		63	45
207	218	住居15	一括	土師器	甕	口縁～胴部	－	(12.8)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ→ヘラナデ	－	ヘラナデ		63	45

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

第４表　出土遺物一覧（9）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
208	219	住居15	PP1	須恵器	瓶	口縁	(7.5)	3.9	－	N4/	灰	ロクロ	－	ロクロ		63	45
209	242	住居16	カマド周辺	土師器(内黒)	坏	胴～底部	－	(4.5)	(6.0)	5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ミガキ		63	45
210	241	住居16	カマド周辺	土師器	坏	口縁～胴部	－	(3.4)	－	10YR7/3	にぶい黄橙	ロクロ	－	ロクロ		63	45
211	243	住居16	カマド周辺	土師器	甕	口縁～胴部	－	(13.3)	－	10YR8/4	浅黄橙	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ		63	45
212	244	住居16	カマド周辺	土師器	甕	口縁～胴部	(17.8~18.0)	(6.6)	－	5YR5/3	にぶい赤褐	ロクロ	－	ロクロ	歪みあり	63	45
213	245	住居16	**支脚**	土師器	甕	胴～底部	－	(8.1)	(7.0~7.1)	5YR6/3	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		63	45
214	246	住居16/ⅡC19p	一括	須恵器	鉢？	口縁～胴部	(32.0)	(9.4)	－	5YR4/6	赤褐	ロクロ	－	ヘラナデ→ロクロ	口唇内側に爪痕(?)あり、焼成赤味あり	63	45
215	220	住居17	**床面**	土師器(内外黒)	坏	口縁～底部	13.6	4.5	6.2	10YR2/1	黒	ロクロ→ナデ状ミガキ→ヘラケズリ	回転糸切(方向不明)→ヘラケズリ	ロクロ→ナデ状ミガキ		64	45
216	221	住居17	**床面**	土師器(内外黒)	坏	口縁～底部	15.6	5.7	8.0	10YR3/1	黒褐	ロクロ→ナデ状ミガキ	ナデ状ミガキ	ロクロ→ナデ状ミガキ		64	45
217	223	住居17/SK02	**床面・下部**	土師器(内外黒)	坏	口縁～底部	(14.4)	6.7	(7.0)	N1.5/	黒	ロクロ→ナデ状ミガキ→ヘラケズリ	ヘラナデ→ヘラケズリ	ミガキ→ナデ状ミガキ		64	45
218	222	住居17	**下部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(12.8)	4.0	(5.2)	5YR6/3	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		64	45
219	225	住居17	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(11.8)	3.7	(5.0)	7.5YR5/3	にぶい褐	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ミガキ		64	45
220	227	住居17	**床面**	土師器	坏	口縁～胴部	(16.0~16.2)	(3.1)	－	7.5YR5/6	明褐	ロクロ	－	ロクロ		64	45
221	228	住居17	**下部**	土師器	坏	口縁～胴部	(11.8)	(3.3)	－	10YR6/2	灰黄褐	ロクロ	－	ロクロ		64	45
222	229	住居17	**床面**	土師器	高台付坏	口縁～底部	14.8~14.9	(4.9)	－	10YR2/1	黒	ロクロ	糸切(方向不明→回転ナデ	ロクロ		64	45
223	231	住居17	**床面・PP2**	土師器	高台付坏	胴～底部	－	(4.6)	－	10YR6/4	にぶい黄橙	ロクロ	回転ナデ	ロクロ	内面に黒色の付着物あり、割れ口断面にも付着	64	45
224	230	住居17	**床面**	土師器	高台付坏	胴部～底部	－	(6.0)	(4.5~4.6)	7.5YR8/2	灰白	ロクロ	回転ナデ	ロクロ		64	45
225	226	住居17	**下部**	土師器	坏	口縁～底部	(12.4)	3.3	(5.0)	10YR7/2	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		64	45
226	234	住居17	一括	土師器	甕	口縁～胴部	(12.2)	(5.8)	－	10YR4/2	灰黄褐	ロクロ	－	ロクロ		64	45
227	233	住居17	一括	土師器	甕	口縁～胴部	(14.0)	(8.9)	－	5YR6/6	橙	ヨコナデ→ヘラナデ	－	ヨコナデ→ケズリ		64	45
228	232	住居17	**床面**	土師器	甕	口縁～胴部	(23.4)	(6.6)	－	10YR7/4	にぶい黄橙	ロクロ	－	ロクロ		64	45
229	235	住居17	一括	須恵器	瓶	底部	－	(4.3)	－	N6/	灰	ヘラケズリ	ナデ？	ロクロ		64	45
230	239	住居18	一括	土師器	坏(？)	口縁	－	(2.1)	－	10YR6/3	にぶい黄橙	ナデ	－	ナデ		65	45
231	237	住居18	**床面**	土師器	甕	口縁～底部	(21.7)	26.6	(11.6)	10YR5/4	にぶい黄褐	ヨコナデ→ハケメ	砂付着	ヨコナデ→ハケメ	輪積み顕著	65	45
232	238	住居18	**カマド袖**	土師器	甕	口縁～底部	17.0	25.0	(8.0)	7.5YR6/4	にぶい橙	ハケメ→ヘラケズリ・ヨコナデ	不明	ハケメ→ヨコナデ	底部は暗く	65	46

※１　太字は遺構図版に出土地点あり

第４表　出土遺物一覧（10）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
233	236	住居18	**床面**	土師器	甕	口縁～胴部	(21.1)	(5.5)	－	7.5YR7/6	橙	ロクロ	－	ロクロ		65	46
234	111	竪穴状１	**下部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.9~14.0	4.4~4.55	5.9~6.0	10YR7/3	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		65	46
235	112	竪穴状１	**上部**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(14.9)	5.6	(6.5~6.6)	5YR7/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ミガキ		65	46
236	116	竪穴状１	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～胴部	(15.8)	(4.5)	－	2.5YR7/3	浅黄	ロクロ	－	ミガキ	墨書「？」	65	46
237	118	竪穴状１	一括	土師器(内黒)	坏	底部	－	(1.2)	(7.6)	10YR7/4	にぶい黄橙	ヘラケズリ	回転糸切(方向不明)	ミガキ	刻書「？」	65	46
238	113	竪穴状１	**底面**	土師器(内黒)	坏	胴～底部	－	(2.4)	(6.1)	7.5YR6/3	にぶい褐	ロクロ	回転糸切→ロクロ	ナデ状ミガキ		65	46
239	117	竪穴状１	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～胴部	－	(3.6)	－	7.5YR7/3	にぶい橙	ロクロ	－	ミガキ	刻書「III」	65	46
240	115	竪穴状１	**下部**	土師器	坏	胴～底部	－	(3.0)	(6.3~6.4)	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		65	46
241	114	竪穴状１	**上部**	土師器	坏	胴～底部	－	(3.9)	6.8	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		65	46
242	119	竪穴状１	一括	土師器(内外黒)	把手付き土器	口縁～底部	(13.3)	(5.6)	7.7	7.5YR5/6	明褐	ミガキ	ミガキ	ミガキ	把手部欠損・内外面黒色処理か？	66	46
243	127	竪穴状１	下部	土師器	甕	胴～底部	－	(6.2)	7.4	5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		66	46
244	120	竪穴状１	**上部**	土師器	甕	口縁～胴部	(25.0)	(33.0)	－	10YR6/6	明黄褐	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ		66	46
245	121	竪穴状１	**上部**	土師器	甕	口縁～胴部	(25.4~25.8)	(16.7)	－	5YR6/6	橙	ロクロ・ヘラケズリ(ヘラナデに近い)	－	ロクロ→ナデ		66	46
246	122	竪穴状１	**上部**	土師器	甕	口縁～胴部	(24.4)	(15.7)	－	5YR6/6	橙	ロクロ→ヘラケズリ(ヘラナデに近い)	－	ロクロ→ナデ		66	46
247	125	竪穴状１	**上部**	土師器	甕	口縁～胴部	(21.2)	(9.3)	－	7.5YR7/4	にぶい橙	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ		66	47
248	123	竪穴状１	**上部**	土師器(内黒)	甕	口縁～胴部	(23.4)	(15.9)	－	2.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ→ミガキ		66	47
249	128	竪穴状１	一括	土師器	甕	底部	－	(4.0)	(9.6)	5YR6/6	橙	タタキ→ヘラケズリ	ケズリ	ロクロ		67	47
250	129	竪穴状１	**下部・上部**	土師器	ナベ	口縁～底部	(32.6)	15.2	12.2	7.5YR6/6	橙	ロクロ→ヘラケズリ	ケズリ	ロクロ		67	47
251	130	竪穴状１	一括	須恵器	瓶	口縁	－	(2.9)	－	N5/	灰	ロクロ	－	ロクロ		67	47
252	253	竪穴状１/住居２	**下部/煙道**	須恵器	大甕	口縁～胴部	(33.0)	(51.5)	－	N3/	暗灰	タタキ	－	タタキ		67	47
253	124	竪穴状１	**上部**	須恵器	大甕	口縁～胴部	(24.0)	(9.6)	－	5YR4/6	赤褐	ロクロ→ヘラケズリ	－	ロクロ	歪み大きい、傾き・器形違う可能性あり	67	47
254	267	土坑１	底面	土師器	甕	口縁	－	(2.0)	－	7.5YR6/6	橙	ヨコナデ	－	ヨコナデ→ハケメ		68	47
255	264	土坑１	**埋土中**	土師器	甕	口縁	－	(2.4)	－	7.5YR7/4	にぶい橙	ヨコナデ	－	ヨコナデ		68	47
256	265	土坑１	**埋土中**	土師器	甕	口縁	－	(2.4)	－	7.5Y3/2	オリーブ黒	ヨコナデ	－	ヨコナデ		68	47
257	266	土坑１	**埋土中**	土師器	甕	口縁	－	(1.6)	－	7.5YR5/1	褐灰	ヨコナデ	－	ヨコナデ		68	47
258	268	土坑１	一括	土師器	甕	口縁～胴部	(13.0)	(3.5)	－	7.5YR7/4	にぶい橙	ヘラケズリ→ヨコナデ	－	ヨコナデ→ハケメ		68	47

※１　太字は遺構図版に出土地点あり

第４表　出土遺物一覧（11）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
259	269	土坑１	一括	土師器	甕	胴部	－	(10.4)	－	7.5YR7/4	にぶい橙	ヘラナデ	－	ハケメ	磨滅しておらず調整をはっきりする	68	47
260	272	土坑１	一括	土師器	土器剥片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	写真のみ	－	47
261	270	土坑１	一括	土師器	甕	底部	－	(1.5)	(8.4)	5YR6/6	橙	ヘラナデ	木葉痕→外周ヘラナデ	ヘラナデ		68	48
262	271	土坑１	一括	土師器	甕	底部	－	(1.3)	(7.8)	10YR7/4	にぶい黄橙	ヘラナデ	ヘラケズリ	ナデ		68	48
263	273	土坑２	**1層中**	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	(14.2)	5.2	(6.0)	10YR7/4	にぶい黄橙	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ミガキ		68	48
264	274	土坑２	**1層中**	土師器(内黒)	高台付皿	胴～底部	－	(3.5)	(6.4)	5YR6/6	橙	ヘラナデ	ヘラナデ	ミガキ	黒色処理とんでいる	68	48
265	277	土坑２	**1層中**	土師器	甕	底部	－	(1.3)	(9.4)	10YR3/1	黒褐	ヘラナデ	ヘラケズリ	ハクラク		68	48
266	278	土坑２	**1層中**	土師器	甕	底部	－	(1.6)	(8.4)	7.5YR7/4	にぶい橙	ヘラナデ	ヘラケズリ	ハクラク		68	48
267	276	土坑２	一括	土師器	甕	底部	－	(1.9)	－	5YR5/6	明赤褐	ヘラナデ	ハクラク	ハクラク		68	48
268	279	土坑３	一括	土師器(内黒)	坏	口縁	－	(1.7)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ミガキ		68	48
269	282	土坑４	**底面**	土師器	甕	胴部	－	(4.1)	－	7.5YR5/6	明褐	ヘラナデ	－	ハクラク		68	48
270	281	土坑４	**上部**	土師器	甕	口縁	－	(1.6)	－	7.5YR7/4	にぶい橙	ヨコナデ	－	ヨコナデ		68	48
271	283	土坑４	**底面**	土師器	甕	底部	－	－	－	－	－	－	木葉痕？	ハクラク	写真のみ	－	48
272	257	溝跡１	一括	土師器(内黒)	坏	底部	－	(1.2)	(6.0)	5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ミガキ？(単位はっきりしない)		68	48
273	259	溝跡１	下部	須恵器	坏	口縁～底部	(15.2)	5.4	(7.0)	2.5Y6/1	黄灰	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		68	48
274	261	溝跡１	一括	土師器	甕	口縁	－	(3.9)	(6.4)	5YR7/6	橙	ロクロ	－	ロクロ		68	48
275	260	溝跡２	ⅡD12d付近	土師器	坏	胴～底部	－	(2.3)	(5.2)	7.5YR7/4	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		68	48
276	258	溝跡２	ⅡD12d付近	土師器	坏	胴～底部	－	(1.7)	(6.4)	5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		68	48
277	262	溝跡２	ⅡD12d付近	土師器	甕	胴～底部	－	(2.5)	(7.4)	10YR7/6	明黄褐	ナデ？	ナデ？	ナデ？	磨滅する	68	48
278	263	溝跡３	一括	土師器(内黒)	坏	口縁～胴部	－	(4.0)	－	10YR7/4	にぶい黄橙	ロクロ	－	ミガキ		68	48
279	369	ⅡD14b	暗褐色	須恵器	瓶	底部	－	(3.7)	－	N3/	暗灰	タタキ→ヘラナデ	ナデ	ヘラナデ		68	48
280	370	ⅡC12o	湿地底面	須恵器	瓶	底部	－	(2.1)	(9.9)	N4/	灰	ロクロ	ナデ	ナデ		68	48
281	343	A1区	一括	須恵器	瓶	胴部	－	(3.7)	－	10Y5/1	灰	ロクロ	－	ロクロ		68	48
282	345	A1区	一括	須恵器	大甕	胴部	－	(8.7)	－	N4/	灰	タタキ	－	タタキ		68	48
283	347	A2区	暗褐色	土師器	坏	口縁～胴部	－	(3.3)	－	10YR7/3	にぶい黄橙	ロクロ	－	ロクロ		69	48
284	346	A2区	一括	土師器	坏	口縁～胴部	(11.4)	(1.9)	－	7.5YR6/4	にぶい橙	ロクロ	－	ロクロ		69	48

※１　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（12）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
285	348	A2区	暗褐色	須恵器	坏	底部	－	(1.2)	(5.2~5.3)	7.5YR7/3	にぶい橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		69	48
286	349	A2区	一括	土師器	甕	口縁	(25.2)	(3.8)	－	5YR6/6	橙	ロクロ	－	ロクロ		69	48
287	350	A2区	一括	土師器	甕	口縁～胴部	(15.0)	(12.7)	－	5YR4/3	にぶい赤褐	ロクロ	－	ロクロ		69	48
288	351	A2区	一括	土師器	甕	口縁～胴部	－	(3.9)	－	5Y8/1	灰白	ロクロ	－	ロクロ		69	48
289	354	A2区	一括	土師器	甕	口縁	－	(4.1)	－	7.5YR5/6	明褐	ロクロ	－	ハクラク		69	48
290	352	A2区	一括	須恵器	瓶	胴～底部	－	(8.4)	(11.6)	2.5YR5/1	赤灰	ヘラケズリ	ナデ	ヘラナデ		69	48
291	353	A2区	一括	近世？	すり鉢	底部	－	(4.4)	－	10YR4/1	褐灰	－	－	－		69	48
292	356	B1区	表土	須恵器	坏	胴～底部	－	(1.4)	(5.6)	10YR5/2	灰黄褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		69	48
293	365	B1区	表土	須恵器	坏	胴～底部	－	(1.6)	(6.0)	2.5YR8/4	赤褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		69	48
294	361	B1区	表土	土師器	高台付坏	胴～底部	－	(3.1)	(9.1)	5YR6/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ナデ状ミガキ		69	48
295	357	B1区	一括	須恵器	瓶	口縁	－	(2.2)	－	N5/0	灰	ロクロ	－	ロクロ		69	48
296	367	B2区	トレンチ湿地内	土師器(内黒)	坏	胴～底部	－	(4.1)	(6.3)	10YR5/2	灰黄褐	ロクロ	回転糸切(右)	ナデ状ミガキ	墨書「く？」	69	48
297	368	B2区	トレンチ湿地内	土師器(内黒)	坏	口縁～底部	13.7	5.1	6.4	7.5YR5/3	にぶい褐	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ	黒色の付着物あり	69	48
298	358	B2区	一括	土師器(内黒)	坏	胴～底部	－	(1.8)	(5.8)	5YR5/6	明赤褐	ロクロ	回転糸切(方向不明)	ミガキ		69	48
299	359	B2区	表土	土師器	坏	胴～底部	－	(1.8)	3.8	7.5YR7/6	橙	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		69	48
300	364	B2区	黒色土	須恵器	坏	口縁～底部	(14.2)	4.8	5.9	2.5Y5/1	黄灰	ロクロ	回転糸切(右)	ロクロ		69	48
301	362	B2区	表土	土師器(内外黒)	高台付坏	胴～底部	－	(2.4)	－	2.5YR2/1	赤黒	ロクロ	回転ナデ	ミガキ		69	48
302	360	B2区	表土	土師器	甕	口縁	－	(3.9)	－	7.5YR6/6	橙	ハケメ→ヨコナデ	－	ハケメ？		69	48
303	363	B2区	一括	土師器	甕	口縁～胴部	(9.8)	(4.1)	－	2.5YR5/4	にぶい赤褐	ロクロ	－	ロクロ		69	48
304	366	B2区	表土	須恵器	瓶	胴部	－	(2.6)	－	10G4/1	暗緑灰	ロクロ	－	ロクロ		69	48
305	298	ⅡC19s	風倒木痕？	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(3.5)	－	10YR5/1	褐灰	縄文LR・沈線文・口縁下(変形工字文)突起頂部刻目	－	沈線文(口唇内面)		70	49
306	299	ⅡC19s	風倒木痕？	縄文・弥生	小形鉢	口縁部～底部	9.9	4.9	5.0	7.5YR3/2	黒褐	縄文LR				70	49
307	300	ⅡD12b	Ⅲ層	縄文・弥生	鉢	口縁部	－	(3.1)	－	5YR6/8	橙	沈線文(口唇・口縁)	－	沈線文(口唇内面)		70	49
308	301	ⅡD13b・13c	一括	縄文・弥生	鉢	口縁部	－	(5.6)	－	10YR3/2	黒褐	沈線文(口唇・口縁)突起頂部刻目	－	沈線文(口唇内面)		70	49
309	327	ⅡD13b・13c、ⅡD14b	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(4.5)	－	10YR4/2	灰黄褐	縄文LR？・沈線文・突起頂部刻目	－	沈線文(口縁内面)		70	49

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（13）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
310	328	ⅡD13c・14b	一括	縄文・弥生	浅鉢	胴部	－	(3.1)	－	7.5YR6/6	橙	縄文LR・沈線文	－			70	49
311	332	ⅡD13c・14c	一括	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(5.3)	－	10YR4/2	灰黄褐	縄文LR・沈線文・突起	－			70	49
312	302	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	深鉢	口縁部～胴部	(15.7)	(7.6)	－	7.5YR5/4	にぶい褐	縄文LR・突起頂部刻目・突起6単位	－	沈線文（口縁内面）		70	49
313	303	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(5.8)	－	5YR4/2	灰褐	縄文LR・磨消縄文・沈線文	－	沈線文（口縁内面）		70	49
314	307	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	鉢？	口縁部～胴部	－	(15.8)	－	10YR4/3	にぶい黄橙	沈線文・口縁突起（欠損）	－	沈線文（口縁内面）		70	49
315	308	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	深鉢	口縁部～胴部	－	(10.8)	－	10YR4/3	にぶい黄橙	口縁突起	－		胎土砂粒多	70	49
316	309	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部～胴部	－	(18.2)	－	10YR6/4	にぶい黄橙	縄文LR・沈線文	－	沈線文（口縁内面）		70	49
317	319	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	深鉢	胴部～底部	－	(15.5)	(8.0)	5YR5/4	にぶい赤褐	指頭ナデが並列したような条痕	アジロ痕			70	49
318	306	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	深鉢	胴部～底部	－	(14.0)	(7.4~7.5)	7.5YR4/3	褐	縄文LR	上げ底	－		70	49
319	304	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(4.1)	－	5YR4/1	褐灰	縄文LR？・沈線文	－	沈線文（口縁内面）		70	49
320	311	ⅡD13d	Ⅲ層	縄文・弥生	台付鉢	底部～脚部	－	(2.4)	(6.5)	10YR7/4	にぶい黄橙	沈線文				70	49
321	312	ⅡD13d・13e	Ⅲ層	縄文・弥生	台付鉢	底部～脚部	－	(3.7)	(8.2)	7.5YR4/4	褐	縄文LR・沈線文				70	49
322	310	ⅡD13d・14c	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(3.7)	－	10YR6/4	にぶい黄橙	沈線文	－	沈線文（口縁内面）		70	49
323	305	ⅡD13e	Ⅲ層	縄文・弥生	深鉢	口縁部～胴部	(21.9)	(17.9)	－	5YR3/6	暗赤褐	縄文LR・口縁突起6単位				71	49
324	315	ⅡD13e	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部～胴部	－	(4.4)	－	5YR5/6	明赤褐	縄文LR・沈線文	－	沈線文（口縁内面）		71	49
325	316	ⅡD13e	Ⅲ層	縄文・弥生	壺	口縁部	－	(3.4)	－	7.5YR3/3	暗褐	沈線文	－			71	49
326	317	ⅡD13e	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(4.3)	－	7.5YR3/3	暗褐	縄文LR・沈線文	－	沈線文（口縁内面）		71	49
327	318	ⅡD13e	Ⅲ層	縄文・弥生	壺	胴部～底部	－	(5.3)	(6.5)	7.5YR6/4	にぶい橙	地文無文・胴部下端に沈線				71	49
328	313	ⅡD13e・14b	Ⅲ層	縄文・弥生	台付鉢(高杯)	底部～脚部	－	(11.8)	(11.0)	2.5YR5/6	明赤褐	縄文LR・沈線文				71	49
329	314	ⅡD13e・14d	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部～胴部	－	(4.8)	－	5YR3/1	黒褐	縄文LR・沈線文	－	沈線文（口縁内面）		71	50
330	322	ⅡD14b	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(4.0)	－	5YR4/6	赤褐	沈線文	－	沈線文（口縁内面）		71	50
331	323	ⅡD14b	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(3.5)	－	5YR6/6	橙	沈線文	－	沈線文（口縁内面）		71	50
332	324	ⅡD14b	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	胴部	－	(2.5)	－	5YR4/3	にぶい赤褐	沈線文	－			71	50
333	325	ⅡD14b	Ⅲ層	縄文・弥生	不明	底部	－	(1.1)	－	7.5YR4/1	褐灰		網代痕			71	50
334	326	ⅡD14b	Ⅲ層	縄文・弥生	壺？	胴部	－	(7.4)	－	5YR5/8	明赤褐	縄文LR	－			71	50
335	329	ⅡD14b・14c	一括	縄文・弥生	台付鉢(高杯)	脚部	－	(5.2)	(11.6)	7.5YR4/3	褐	沈線文				71	50

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（14）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	色調	色名	調整（外面）	調整（底部）	調整（内面）	備考	図版	写真図版
336	331	ⅡD14c	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(4.3)	－	5YR4/6	赤褐	沈線文	－	沈線文(口縁内面)		71	50
337	330	ⅡD14c・16d	一括	縄文・弥生	浅鉢	口縁部～胴部	－	(5.9)	－	5YR4/6	赤褐	縄文LR・沈線文	－	沈線文(口唇内面)		71	50
338	320	ⅡD14d	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	(23.0)	(2.5)	－	7.5YR5/6	明褐	沈線文				71	50
339	333	ⅡD14d	一括	縄文・弥生	壺	胴部	－	(7.1)	－	10YR6/4	にぶい黄橙				磨滅がひどい	71	50
340	321	ⅡD14d	Ⅲ層	縄文・弥生	浅鉢	胴部	－	(3.4)	－	10YR6/6	明黄褐	縄文LR				71	50
341	334	ⅡD14d・15b	Ⅲ層	縄文・弥生	鉢	口縁部～胴部	－	(6.9)	－	10YR3/1	黒褐	沈線文	－	沈線文(口縁内面)		72	50
342	335	ⅡD14d・15b	一括	縄文・弥生	台付鉢	脚部	－	(5.2)	－	10YR4/2	灰黄褐	縄文LR・沈線文	－			72	50
343	126B	ⅡD15b/竪穴状1	**下部**/一括	縄文・弥生		口縁～胴部	(22.0)	(9.9)	－	5YR6/6	橙	ナデ？	－	ナデ？		72	50
344	294	ⅡD15b/竪穴状1	**上部**/暗褐色土	縄文・弥生	深鉢	胴部	－	(16.5)	－	7.5YR5/4	にぶい褐	指頭ナデが並列したような条痕	－			72	50
345	336	ⅡD15c	Ⅲ層	縄文・弥生	不明	口縁部	－	(6.3)	－	5YR4/6	赤褐	地文無文・沈線文	－	沈線文(口縁内面)		72	50
346	247	ⅡD17a	一括	縄文・弥生	壺	胴部～底部	－	(12.7)	(5.0)	10YR4/1	褐灰	縄文LR・沈線文				72	50
347	337	ⅡD17a	一括	縄文・弥生	深鉢	口縁部	－	(1.9)	－	10YR7/4	にぶい黄橙	縄文RLor附加条文	－			72	50
348	338	ⅡD17b	一括	縄文・弥生	深鉢	胴部	－	(3.6)	－	10YR7/4	にぶい黄橙	縄文RLor附加条文	－			72	50
349	339	ⅡD17b	一括	縄文・弥生	深鉢	胴部	－	(4.3)	－	10YR7/4	にぶい黄橙	縄文RLor附加条文	－			72	50
350	340	ⅡD21d付近	一括	縄文・弥生	壺？	口縁部	(3.2)	(3.3～3.4)	－	2.5YR5/6	明赤褐	沈線文(口縁部)	－		内面の仕上げ雑	72	50
351	284	住居1	**床面**	縄文・弥生	深鉢	胴部～底部	－	(7.8)	(7.6)	5YR6/6	橙	縄文LR	－			72	50
352	285	住居1	**下部**	縄文・弥生	深鉢	胴部～底部	－	(7.0)	(6.0～6.1)	7.5YR4/4	褐	縄文LR	上げ底			72	50
353	287	住居1	一括	縄文・弥生	鉢	口縁部	－	(3.8)	－	5YR4/1	褐灰	縄文LR	－			72	50
354	288	住居2	一括	縄文・弥生	壺	胴部	－	(2.1)	－	5YR6/2	灰褐		－		原体不明　縄文？	72	50
355	290	住居6	下部	縄文・弥生	深鉢	口縁部	－	(3.9)	－	2.5Y3/1	黒褐	縄文LR	－		口唇刻目	72	50
356	292	住居8	下部	縄文・弥生	深鉢	胴部	－	(3.2)	－	2.5YR7/3	浅黄	附加条？縄文RL？	－		刺尖刻	72	50
357	295	住居10・12重複部	一括	縄文・弥生	浅鉢	口縁部	－	(3.5)	－	10YR5/3	にぶい黄褐	沈線文(口唇・口縁)突起頂部刻目	－	沈線文(口唇内面)		72	50
358	275	土坑2	一括	縄文・弥生	壺	頸部	－	(4.7)	－	7.5YR7/4	にぶい橙					72	50
359	341	A1区	表土	縄文・弥生	台付鉢	台部	－	(4.2)	－	5YR5/6	明赤褐	沈線文	－			72	50
360	342	A1区	表土	縄文・弥生	鉢	胴部	－	(2.6)	－	5YR7/4	にぶい橙	沈線文	－			72	50

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

第４表　出土遺物一覧（15）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調・石質	図版	写真図版
361	396	溝跡2	ⅡD12d上部	土製品	羽口	(6.1)	(3.1)	1.9	24.9	2.5YR6/6橙	73	51
362	397	溝跡2	ⅡS12e一括	土製品	羽口	(6.4)	(3.3)	2.2	34.0	7.5YR5/3にぶい褐	73	51
363	355	A2区	一括	土製品	羽口	(9.7)	(5.0)	1.7	90.9	7.5YR7/6橙	73	51
364	399	住居1	**カマド袖**	土製品	粘土塊	－	－	－	11.4	10YR5/4にぶい黄橙	－	－
365	398	住居1	上部	土製品	粘土塊	－	－	－	20.0	10YR5/4にぶい黄橙	－	－
366	400	住居2	貯蔵穴	土製品	粘土塊	－	－	－	13.6	2.5YR5/6明赤褐	－	－
367	401	住居2	壁際	土製品	粘土塊	－	－	－	19.4	7.5YR6/4にぶい橙	－	－
368	402	住居3	上部	土製品	粘土塊	－	－	－	3.0	10YR6/3にぶい黄橙	－	－
369	403	住居4	一括	土製品	粘土塊	－	－	－	17.3	7.5YR6/4にぶい橙	－	－
370	405	住居13	カマド	土製品	粘土塊	－	－	－	8.2	7.5YR7/3にぶい橙	－	－
371	404	住居13	カマド周辺	土製品	粘土塊	－	－	－	111.2	7.5YR6/4にぶい橙	－	51
372	406	住居13	貯蔵穴	土製品	粘土塊	－	－	－	23.4	10YR7/2にぶい黄橙	－	－
373	408	住居18	**カマド下部**	土製品	粘土塊	－	－	－	16.0	10YR6/2灰黄褐	－	－
374	409	土坑2	一括	土製品	粘土塊	－	－	－	6.7	2.5YR4/1黄灰	－	－
375	407	土坑5	一括	土製品	粘土塊	－	－	－	5.8	7.5YR6/4にぶい橙	－	－
376	410	ⅡD13e	Ⅱ層	土製品	粘土塊	－	－	－	2.3	10YR7/4にぶい黄橙	－	－
377	411	B2区	Ⅱ層	土製品	粘土塊	－	－	－	0.5	10YR5/3にぶい黄褐	－	－
378	412	住居2	一括	鉄製品	刀子	9.9	1.4	0.4	－	－	73	51
379	413	住居11	一括	鉄製品	鏃？	(3.9)	(1.1)	0.5	3.0	－	73	51
380	414	住居17	下部	鉄製品	雁又鏃？	(7.6)	(3.5)	1.1	－	－	73	51
381	415	住居17	一括	鉄製品	金具？	1.3	8.4	0.5	5.6	－	73	51
382	417	溝跡2	一括	鉄製品	不明	4.7	1.1	9.0	6.4	－	73	51
383	418	ⅡD12d	一括	鉄製品	不明	2.1	0.9	0.5	1.9	－	73	51
384	419	ⅡD13d	一括	鉄製品	不明	3.5	1.0	0.8	3.8	－	73	51
385	420	A2区	一括	鉄製品	不明	(2.8)	(1.0)	(0.9)	2.4	－	73	51
386	422	B2区	湿地内トレンチ	木製品	木椀	－	器高(7.80)	底径(2.1)	－	－	73	51
387a	421a	B2区	湿地内トレンチ	木製品	曲物	(10.5)	(25.5)	0.5	－	－	73	51
387b	421b	B2区	湿地内トレンチ	木製品	曲物	(10.5)	(15.2)	0.5	－	－	73	51
387c	421c	B2区	湿地内トレンチ	木製品	曲物	(8.0)	(10.1)	0.5	－	－	73	51
387d	421d	B2区	湿地内トレンチ	木製品	曲物	(9.2)	(6.1)	0.5	－	－	73	51

※１　太字は遺構図版に出土地点あり

第4表　出土遺物一覧（16）

掲載番号	仮No	遺構名	地点・層位 ※1	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	色調・石質	図版	写真図版
387e	421e	B2区	湿地内トレンチ	木製品	曲物	(8.2)	(7.7)	0.3	－	－	73	51
387f	421f	B2区	湿地内トレンチ	木製品	曲物	(10.7)	(13.4)	0.4	－	－	73	51
387g	421g	B2区	湿地内トレンチ	木製品	曲物	(7.5)	(17.2)	0.5	－	－	73	51
387h	421h	B2区	湿地内トレンチ	木製品	曲物	(8.1)	(15.6)	0.5	－	－	73	51
388	373	ⅡD13c	一括	石器	石鏃	2.6	1.1	0.4	1.0	頁岩・古生代・北上山地	74	52
389	371	住居2	一括	石器	石鏃	2.6	1.4	0.6	1.2	頁岩・古生代・北上山地	74	52
390	372	溝跡2	下部	石器	石鏃	3.9	2.0	0.6	2.8	頁岩・生代・北上山地	74	52
391	394	ⅡD13e	Ⅲ層	石器	不定形	－	－	－	10.5	頁岩・新生代第三紀・奥羽山脈	－	52
392	383	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	－	－	－	1.7	赤色頁岩・新生代新第三紀・奥羽山脈	－	52
393	384	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	3.0	4.3	1.0	11.6	ホルンフェルス・堆積古生代・変成中生代白亜紀・北上山地	74	52
394	385	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	－	－	－	2.8	赤色頁岩・新生代新第三紀・奥羽山脈	－	52
395	386	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	4.0	5.1	1.5	23.7	ホルンフェルス・堆積古生代・変成中生代白亜紀・北上山地	74	52
396	387	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	4.2	4.6	1.4	22.4	ホルンフェルス・堆積古生代・変成中生代白亜紀・北上山地	74	52
397	388	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	－	－	－	25.0	頁岩・新生代新第三紀・奥羽山脈	－	52
398	389	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	－	－	－	30.2	頁岩・新生代新第三紀・奥羽山脈	－	52
399	390	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	－	－	－	25.9	ホルンフェルス・堆積古生代・変成中生代白亜紀・北上山地	－	52
400	391	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	－	－	－	25.8	頁岩・新生代第三紀・奥羽山脈	－	52
401	392	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	－	－	－	72.9	ホルンフェルス・堆積古生代・変成中生代白亜紀・北上山地	－	52
402	393	ⅡD13d	Ⅲ層	石器	フレーク	－	－	－	147.0	ホルンフェルス・堆積古生代・変成中生代白亜紀・北上山地	－	52
403	395	ⅡD14e	検出面	石器	フレーク	－	－	－	36.2	頁岩・新生代第三紀・奥羽山脈	－	52
404	382	住居2	**埋土中**	石器	棒状石製品	(11.1)	(1.7)	(1.1)	35.0	粘板岩・古生代・北上山地	74	52
405	375	ⅡD13e	Ⅲ層	石器	凹石	10.2	8.4	5.6	726.2	花崗岩・中生代白亜紀・北上山地	74	52
406	376	ⅡD14b	Ⅲ層	石器	石核	10.2	6.4	3.5	281.1	ホルンフェルス・堆積古生代・変成中生代白亜紀・北上山地	74	52
407	377	住居7	一括	石器	砥石	－	－	－	165.3	凝灰岩・新生代第三紀・奥羽山脈	－	52
408	378	住居8	一括	石器	砥石	12.4	5.5	3.0	316.2	頁岩・新生代第三紀・奥羽山脈	74	52
409	380	住居9	**床面**	石器	砥石	13.8	5.7	3.8	139.9	安山岩・新生代第四紀・岩手山	74	52
410	374	住居13	一括	石器	凹石	13.8	7.5	4.1	607.2	デイサイト・新生代新第三紀・奥羽山脈	75	52
411	379	竪穴状1	上部	石器	砥石	8.7	6.1	2.0	125.2	凝灰岩・新生代第三紀・奥羽山脈	75	52
412	381	ⅡC12s	Ⅲ層	石器	砥石	5.0	5.4	1.3	52.4	凝灰岩・新生代第三紀・奥羽山脈	75	52

※1　太字は遺構図版に出土地点あり

Ⅴ　ま　と　め

1　竪穴住居跡について

遺構名	壁長(m)	カマドの向き	壁面での位置
住居跡 1	6.4	北	中央
住居跡 2	4.8	東	南寄り
住居跡 3	4.5	東	南寄り
住居跡 4	3.1	東	中央
住居跡 5	3.8	北	東寄り
住居跡 6	4.1	北	中央
住居跡 7	4.5	東	南寄り
住居跡 8	5.0	北	中央
住居跡 9	3.4	東	南寄り
住居跡10	4.7	北	東寄り
住居跡11	4.4	東	北
住居跡12	6.3	東	中央
住居跡13	4.7	東	南寄り
住居跡14	2.9	東	南寄り
住居跡15	3.3	東	南寄り
住居跡16	2.4	東	南寄り
住居跡17	5.4	東	北
住居跡18	2.8	東	中央

（1）形態からみた竪穴住居跡の分類（第76図左）

今回の調査では平安時代前期（9～10世紀）の竪穴住居跡が計18棟確認された。

右表はこれらの壁長（計測可能な壁のうち最長のもの）と、カマドの位置をまとめたものである。カマドの位置は北壁5棟、東壁13棟に大別され、壁長は3.0m前後、4.5m前後、6.5m弱にまとまりがみられる。

北壁中央にカマドを持つものを抜き出してみると、住居跡1・6・8の3棟が該当する。壁長にはばらつきがあるが、煙道の軸方向が座標北に対しやや西偏する点が共通する。ここでは仮に「A群」とする。

東壁の南寄りにカマドを持つグループを抽出してみると、住居跡2・3・4・7・9・13・14・15・16・18が該当する。これらはさらに、壁長が4.5m前後のもの（住居跡2・3・7・13）と、3.0m前後のもの（住居跡4・9・14・15・16）に分けることができる。前者を「B1群」、後者を「B2群」とする。

住居跡10は、平面形が長方形を呈する点や壁面の内湾、カマド煙道部が検出されない点など、形態的に他の住居群からは区別されよう。隣接する住居跡との切り合い関係や出土遺物から、住居群の中では最も新しい時期に帰属すると判断される。

（2）土器からみた竪穴住居跡の年代観（第76図右）

遺物の主体である土師器・須恵器の多くは竪穴住居跡に伴って出土したものであり、該期の器種組成に一般的な土師器坏・高台付坏・鉢・甕・須恵器坏・瓶類・大甕などからなる。これらは形態から9世紀～10世紀のものとみられ、とりわけ9世紀後半～10世紀初頭と比定されるものが多い。出土遺物の年代観はすなわち集落の存続期間を示唆しているといえる。

この一方で、出土した土器の中には、形態的にやや古い（と思われる）要素をもつものも散見される。体部下端～底面にかけて再調整された須恵器の坏（79・111・118）、いわゆる北陸型の甕（100）、胴部がやや大きくふくらんで球胴状を呈する土師器甕（18・73）等である。また非ロクロ成形の土師器甕も一定量存在する。

住居跡ごとに出土した土器を見てみると、主体となる9世紀後半～10世紀初頭の土器に古い要素をもった土器が混在する住居跡と、古い要素を持った土器が混じらない住居跡に大別できそうである。より古いと考えられる前者の群は住居跡1・4・5・6・7・8・9、後者は住居跡2・3・12・13・14・15・16及び竪穴状遺構1である。前者をグループα、後者をグループβとする。

このほか、住居跡11からは内面黒色処理されない器高の低い土師器坏がまとまって出土していることから、上の住居群より若干新しい可能性がある。この坏の形態変化は住居跡10出土の土師器により顕著に見られさらに一段階新しいものと考えられる。

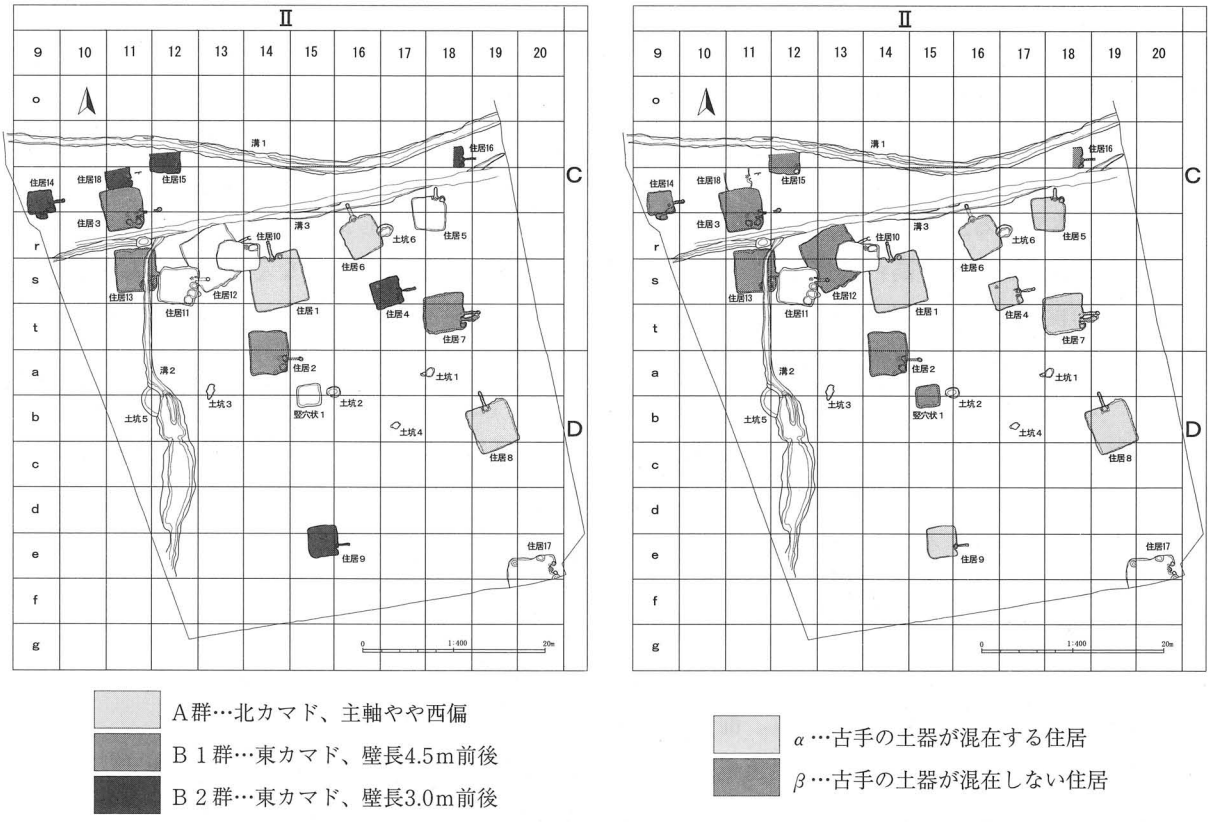
（3）住居跡分布状況の変遷

（1）の形態分類と、（2）の出土遺物による時期分類を併せて、集落内における住居跡の分布の変遷を考えてみたい。

（1）でA群とした住居跡1・6・8はすべて、古手の土器を伴うグループαに入っている。よって、北壁中央にカマドを持つ住居跡は、遺跡内において相対的に古い一群と考えて良さそうだ。カマドの位置が壁中央になく、主軸方向がA群とはわずかにずれる住居跡5も、出土遺物では同じくグループαに入っており、同群に極めて近い存在と考えらえる。

次にB群である。B1群は4棟中3棟（2・3・13）、B2群は5棟中3棟（14・15・16）が、グループβに入った。B1群とB2群は出土遺物からは時期差が見いだされず、相違点は住居の規模だけである。したがって両者は、北カマドのA群に後続し、ほぼ同時期に集落を構成した一群と考えられる。なおB群のうち、グループαに入った住居跡4・7・9は、A群の住居が分布する区域（A区南半中央～東部）に位置することから、出土した古手の土器には二次的な混入の可能性を考える必要がある。

以上から、集落内における住居群の分布状況は、概ねA群→B群→（住居跡11）→住居跡10のように変遷したものと考えられる。



（1）形態からみた住居跡の分類　　（2）土器からみた住居跡の年代観

第76図　住居跡の分類と分布の変遷

2　特殊形態の土器について

（1）高台付皿と住居跡1

本遺跡では該期の一般的な器種構成に加え、やや特異な形態を有する土器が出土している。そのうちの一つが、高台付皿である。非ロクロ成形で、外面にヘラナデまたはヘラケズリ、内面はミガキまたはナデ調整、内面には黒色処理が施される。古い住居群（上のA群）に属する住居跡1（5・6・7）と住居跡8（116）、そして土器焼成遺構の可能性が高い土坑2（264）から、計5点が出土している。

3点がまとまって出土した住居跡1は古い住居群（A群）において最大の住居である。住居跡1の土器をみてみると、高台付皿とともに出土したのは、非ロクロ成形の内面黒色処理された鉢（22～24）と非ロクロ成形の大小の甕であり、一般的なロクロ成形の土師器坏・甕の出土は極めて少ない。

住居の大きさと特異な器種構成からは、住居跡1のもつ特殊な性格が透けて見える。内面に黒色処理が施された非ロクロ成形の高台付皿や鉢には、供献具としての機能が想定されよう。とすれば、住居跡1は、何らかの儀礼の場とされた、あるいは儀礼に用いたこれらの土器を一括廃棄した場であったと解釈することができるかもしれない。

同じく高台付皿が出土している住居跡8の床面からは精製された粘土塊が出土し、付近に土坑2をはじめとする類土器焼成遺構が分布することをみれば、この時期に集落内で土器の製作が行われていた可能性は高い。供献具としての機能を期待されたかもしれない高台付皿等の特殊形態の土器は、一般使用の土器とはことなり、専ら集落内で製作されたのであろう。

（2）把手付き土器について

竪穴状遺構1から出土した242（第66図）は、非ロクロ成形で体部がほぼ垂直に立ち上がり、口縁が鍔状に水平に張り出す特異な器形を持つ。内外面ともに入念なミガキと黒色処理が施されている。体部の外面にはほぼ円形の剥落痕跡が認められることから、本来把手を有していた可能性が高い。

類例としては、花巻市上台Ⅰ遺跡3号竪穴住居跡出土土器（花巻市教育委員会調査・未報告）、花巻市似内遺跡8号竪穴住居跡出土土器（岩手県文化振興事業団報告書344集・2000年）、一関市花泉町中村城跡2号水田跡出土土器（岩手県文化振興事業団報告書560集・2010年）などがある。いずれも全体形状を残していないが、器形や調整は共通している。これらの類例から、本遺跡出土資料に残存しない把手部は、先端部に向かってやや先細りする角状のものであったと推測される。

一般的な器種構成には含まれない形態であり、本来異なる素材で作られた何らかの祭器等を模したものかもしれない。さらなる類例の増加を待ちたい。

第77図　把手付き土器の類例

附編　自然科学分析

1　花巻市羽黒田遺跡出土炭化材の樹種

高　橋　利　彦（木工舎「ゆい」）

1　試　　料

試料は15点（No.1,2,5～17）で、平安時代（9～10世紀）のものとされる4棟の竪穴住居跡（住居1・6・8・17）から検出されたものである（表1）。

遺跡は猿ヶ石川右岸に形成された沖積地の微高地（標高約100m）上に立地する。炭化材を検出した4棟のほかに14棟の竪穴住居跡、1棟の竪穴状遺構、土器を焼成したとみられる土坑4基と土師器・須恵器などの遺物が確認されている。

2　方　　法

調査担当者によって採取され送付されてきた試料を室内で自然乾燥させたのち、任意の1片を選び同定試料とした。試料の横断・放射・接線3断面を実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（加速電圧15kV）で観察し同定した。併せて各分類群1点の電子顕微鏡写真図版を作成した（図版1・2）。なお、残った炭化材は木工舎「ゆい」に保管されている。

3　結　　果

試料は以下の4分類群に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名とその配列は「日本の野生植物　木本Ⅰ」（佐竹ほか 1989）にしたがい、県内での自然分布については「岩手県植物誌」（岩手植物の会 1970）を参照した。また、一般的性質については「木の事典　第1・4・7・16巻」（平井 1979, 1980, 1982）も参考にした。

・アスナロ（Thujopsis dolabrata）ヒノキ科 No.16

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔は小型のヒノキ型～スギ型で分野あたり1－6個。放射組織は単列、1－15細胞高であるが5細胞高程度の低いものが多い。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ）（T. dolabrata var. hondai）がある。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・ヤナギ属（Salix sp.）ヤナギ科 No.10

散孔材で、管孔は単独および2－3個が複合、横断面では楕円形～やや角張った楕円形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性、単列、1－15細胞高。柔組織は随伴散在状、ターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

ヤナギ属は国内に約35種が知られ、種間雑種も多く分類の困難な群である。属としては全国に分布し、時に植栽される落葉低木または高木である。県内にはヤマネコヤナギ（Salix bakko）やキツ

ネヤナギ（S. vulpina）など10種ほどが自生する。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく耐朽性は低い。大径木が少ないため小細工物にする程度で、とくに重要な用途は知られていない。

・クリ（Castanea crenata）ブナ科 No. 1, 2, 7, 8, 9, 11, 12, 13, 14, 15, 17

環孔材で孔圏部は1～多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形～円形、小道管は単独および2－3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1－15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。県内でも各地に普通である。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椙木などに用いられる。

・モクレン属（Magnolia sp.）モクレン科 No. 6

散孔材で横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2－4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性、1－2細胞幅、1－40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界はやや明瞭。

モクレン属は国内に6種あるが、県内にはホオノキ（Magnolia obovata）・コブシ（M. praecocissima）・タムシバ（M. salicifolia）が自生する。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工はきわめて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途も知られている。コブシの材はホオノキに似るがやや硬く、ホオノキに準じた使われ方をする。

No. 5は維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ草本である。ススキなどイネ科の可能性もあるため、北方ファイトリス研究所の佐瀬 隆氏に植物珪酸体による同定を依頼し、以下のようなコメントをいただいた。

佐瀬氏コメント：表皮と思われる破片を乾式灰化し検鏡したが、珪酸体を含む組織は確認できなかった

したがって、その種類までは特定できなかった。

以上の同定結果を検出遺構などとともに一覧表で示す（表1）。

表1　羽黒田遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構・番号	分類群
1	住居1 C3	クリ
2	住居1 C5	クリ
5	住居6 C6	草本
6	住居8 C1	モクレン属
7	住居8 C2	クリ
8	住居8 C3	クリ
9	住居8 C4	クリ
10	住居8 C5	ヤナギ属
11	住居8 C8	クリ
12	住居8 C10	クリ
13	住居8 C14	クリ
14	住居17 C3	クリ
15	住居17 C7	クリ
16	住居17 C8	アスナロ
17	住居17 C17	クリ

4　考　　察

住居６を除く３棟の竪穴住居跡から検出された14点の炭化材からは上記の４分類群が確認されたが、クリが11点を占めている。クリの耐朽性の高さは国産材の中では随一といえ、掘立柱や杭、土の上に直置きする用途などには最適の樹種といえる。試料の用途が明らかにされているわけではないが、柱など主要な構造材として用いたのかもしれない。

筆者の知る範囲では本遺跡の近隣地に類例はないようである。北上川を隔ててはいるが、南西方向約13kmに位置する北上市藤沢遺跡では奈良～平安時代（８～10世紀）とされる12基の住居跡から検出された57点の炭化材が検討され*1、そのうちのSI449試料*2７点からはクリ３点が、SI570試料*3５点の中にはモクレン属１点が認められている（高橋　2001）。一方、南方約23kmに位置する江刺市（現奥州市）久田遺跡では平安時代（10世紀初頭）とされるＢ３住居跡検出材６点の中にヤナギ属２点が認められている*4（高橋　2003）。

＜注＞

*１：クヌギ節が最多の25点を占め，コナラ節(11)・トネリコ属(6)・ケヤキ(4)・クリ(3)・ハンノキ属類似種(2)・キハダ(2)・モクレン属・カエデ属類似種・エゴノキ属類似種の計10分類群と非木材のタケ亜科も認められている．

*２：残る４点はコナラ節(2)・トネリコ属とタケ亜科に同定されている．

*３：４点はクヌギ節(2)・ハンノキ属類似種・トネリコ属に同定されている．

*４：他の４点はニレ属(3)とトネリコ属に同定されている．

引用文献

平井信二　1979　「木の事典　第１巻」　かなえ書房

平井信二　1980　「木の事典　第４巻・第７巻」　かなえ書房

平井信二　1982　「木の事典　第16巻」　かなえ書房

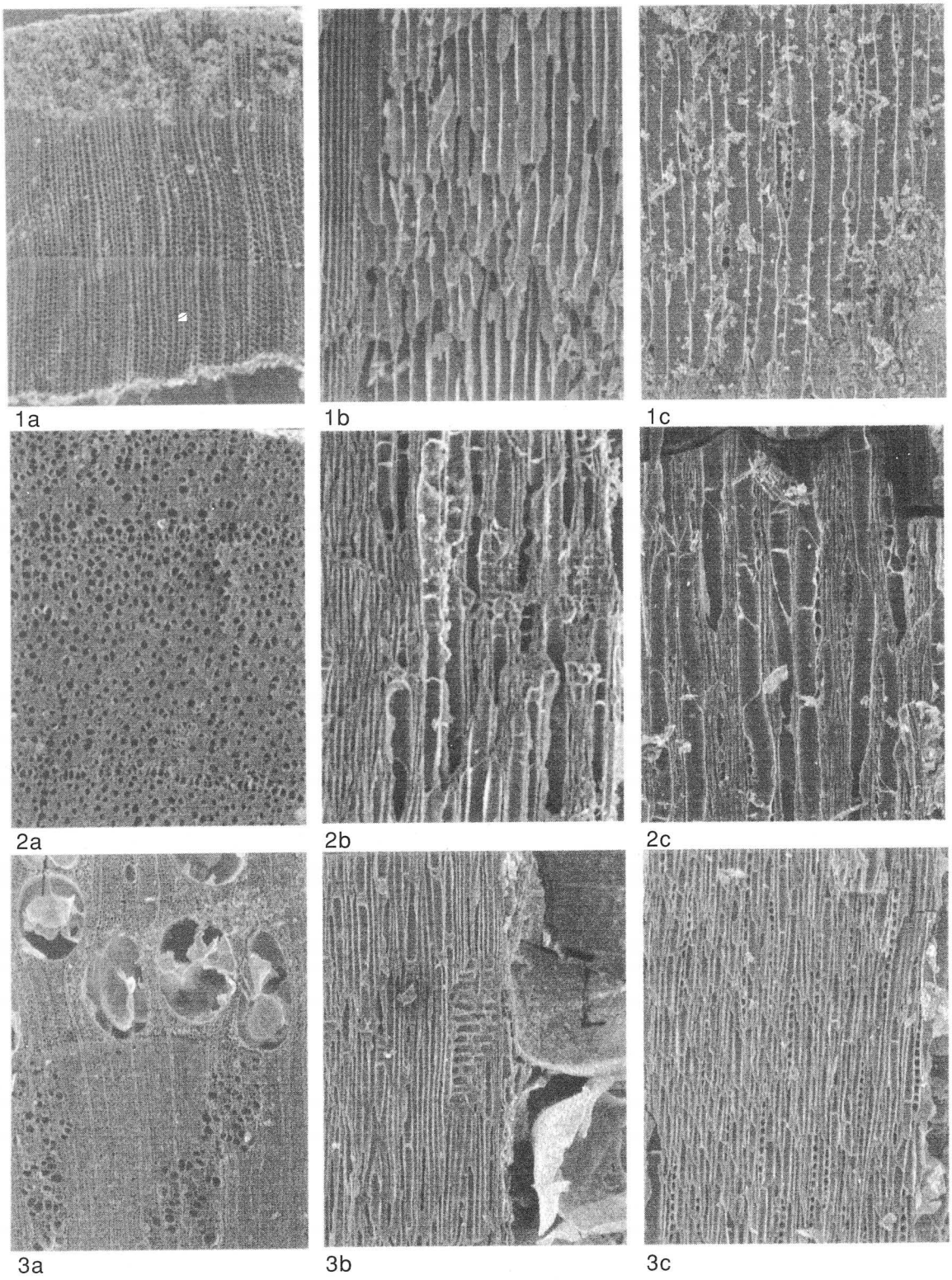
岩手植物の会　1970　「岩手県植物誌」

佐竹義輔・原　寛・亘理俊次・富成忠夫(編)　1989　「日本の野生植物　木本Ⅰ」　平凡社

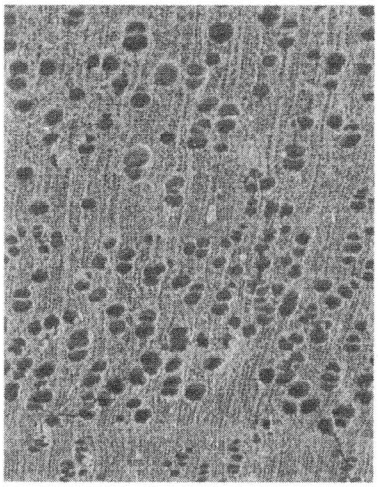
高橋利彦　2001　藤沢遺跡出土炭化材の樹種　「北上市埋蔵文化財年報（1999年度）」21－31　北上市立埋蔵文化財センター

高橋利彦　2003　江刺市久田遺跡出土炭化材の樹種　「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第406集　久田遺跡発掘調査報告書　土地改良総合基盤整備事業伊手西部地区関連遺跡発掘調査」191－196　岩手県水沢地方振興局水沢農村整備事務所・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター．

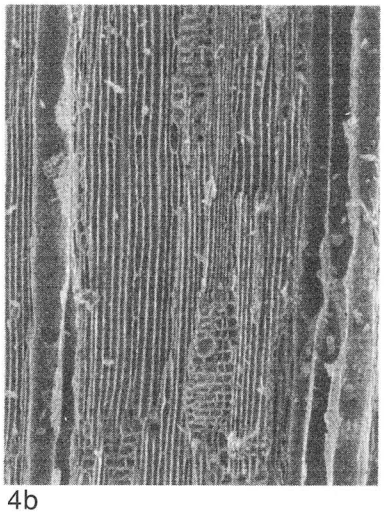
図版 1



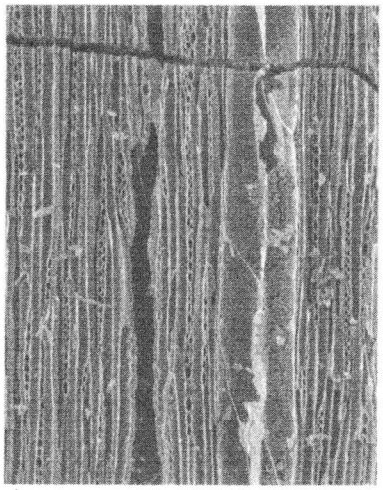
図版 2



4a



4b



4c

図版 1　1：アスナロ No.16　2：ヤナギ属 No.10　3：クリ No.15
図版 2　4：モクレン属 No.6
a：横断面 x40　b：放射断面 x100　c：接線断面 x100

2　羽黒田遺跡出土布片の自然科学的調査結果

岩手県立博物館　　赤　沼　英　男

1　は　じ　め　に

羽黒田遺跡は岩手県花巻市に所在する。東北横断自動車道釜石秋田線の道路建設に伴う緊急発掘調査によって平安時代に比定される住居跡群が検出され、そこから布片が出土した[1)]。以下に出土した布片の自然科学的調査結果を報告する。

2　調査資料および調査方法

調査資料は平安時代に比定される竪穴状遺構１から出土した布片である。出土時、表面は土砂で覆われていたため、蒸留水に浸し、超音波洗浄機を使って土砂の除去を繰り返し実施した。表面に付着する土砂が除去され、灰褐色を呈する資料が露出した段階で、布片の一部を採取した。採取した試料を３分し、そのうちの一つは繊維側面の観察ができるよう、両面テープで試料台に固定した。もう一方は繊維断面の観察が可能となるようエポキシ樹脂に埋め込み、エメリー紙およびダイヤモンドペーストを使って研磨した。このようにして得られた２試料をカーボン蒸着し、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）で分析した。採取した残りの試料はメノー乳鉢で粉砕し、KBr錠剤にした後、赤外分光分析に供した。

3　調　査　結　果

図１a_1は布表面のEPMAによる反射電子組成像（BEI）である。たて糸とよこ糸が１本ずつ交互に編みこまれた平織りの布で、糸の太さは概ね450～500μmである。a_1領域（Reg.１）内部を拡大したものがa_2、a_2領域（Reg.１）内部を拡大したものがa_3である。繊維はまっすぐ伸びていて、表面には亀裂や剥離がみられる。b_1に示す繊維断面は楕円形を呈し、長軸は概ね40～50μm、短軸は20～40μmで、上記観察結果とほぼ整合する。図１c_1は繊維の赤外分光分析結果である。3700－3400Cm^{-1}にブロードなO－H伸縮振動、2928.4Cm^{-1}および2856.1Cm^{-1}にメチルまたはメチレン基によるC－H伸縮振動、1442.5Cm^{-1}にはCH_2変角振動、1060Cm^{-1}にはC－O伸縮振動と推定されるピークが観察される。これらのピークはセルロースのピークとほぼ合致する（長野　1979）[2)]。繊維の外観形状および赤外分光分析結果から、布は麻を素材としていた可能性が高い。

注

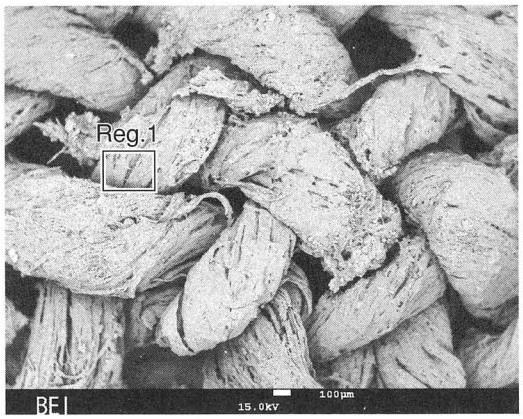
1）財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター・中村絵美氏からのご教授による。

2）図１c_1には1629.6Cm^{-1}にもブロードなピークがみられる。吸着水の影響と考えられるが、1442.5Cm^{-1}よりもピーク強度が強く、別の物質混在の可能性もある。この点については類例の蓄積を重ね、検討する必要がある。

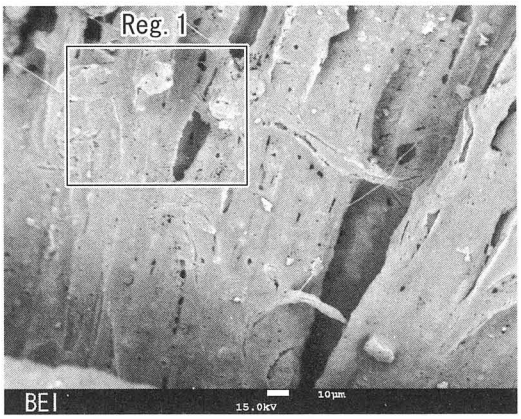
引用文献

長野正満　1979　「古代織物を構成する繊維の鑑別法とその応用」古文化財之科学、24、pp.31－43

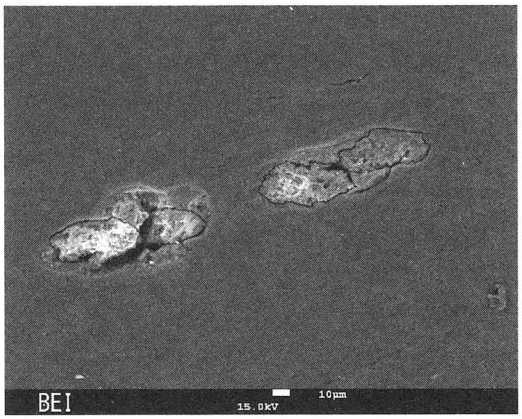
a1



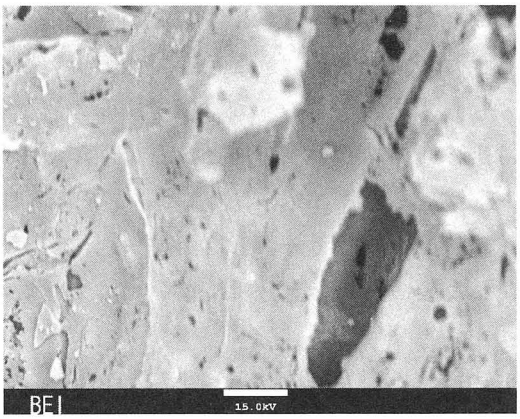
a2



b1



a3



c1

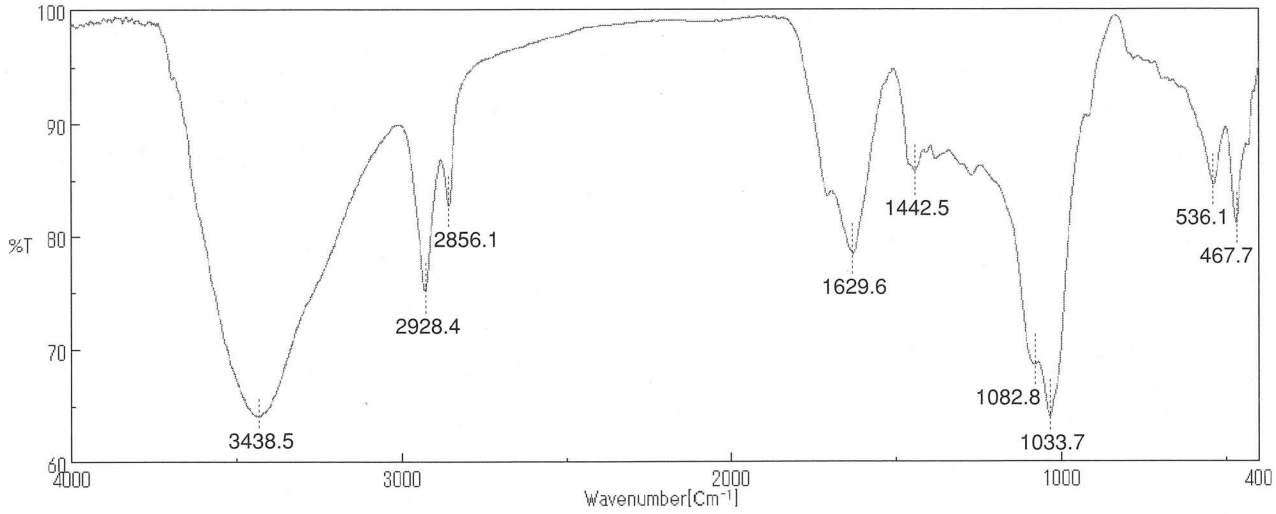


図1　羽黒田遺跡出土布片の調査結果

a1：布表面のEPMAによる反射電子組成像（BEI）。

a2：a1の領域（Reg.1）内部の反射電子組成像。a3：a2枠内部の拡大。

b1：繊維の断面の反射電子組成像。

C1：繊維の赤外分光分析結果。

写 真 図 版

遺跡遠景（南西から）

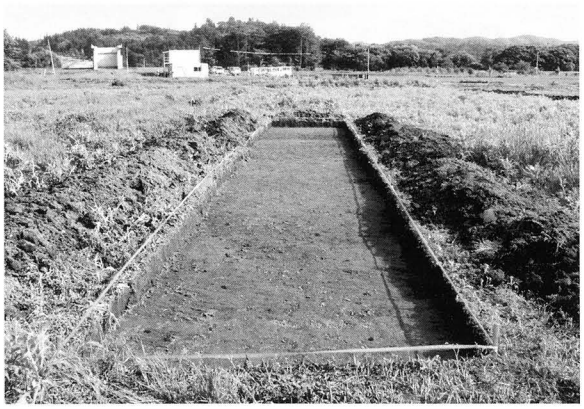
調査区全景（上が西）

写真図版１　空中写真

A１区・B１区（南から）

B２区（南西から）

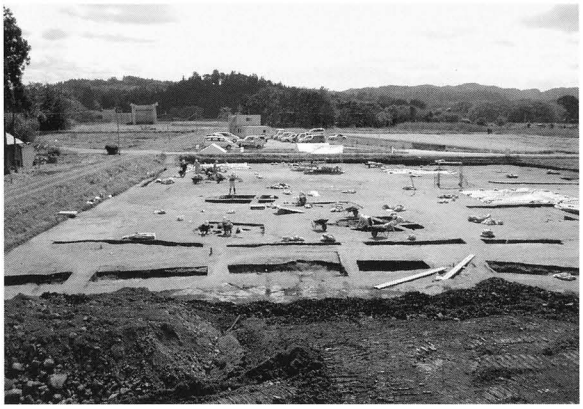
写真図版２　調査開始時の状況



A１区トレンチ（北から）

A１区トレンチ（南から）

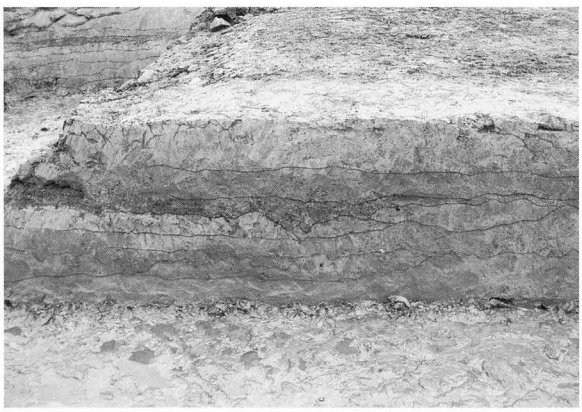
A１区精査（東から）



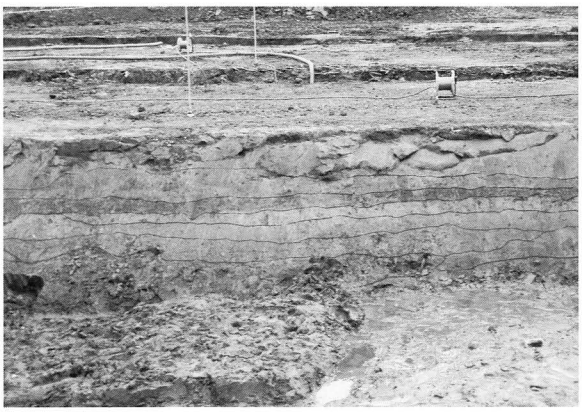
A１区精査（北から）

A１区湿地トレンチ（南から）

A１区湿地トレンチ（南西から）

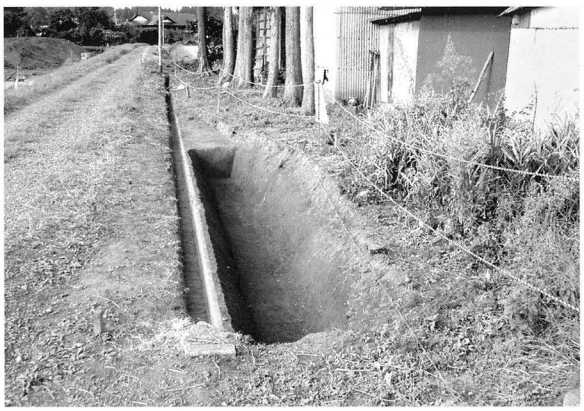


A１区湿地基本層序（西から）



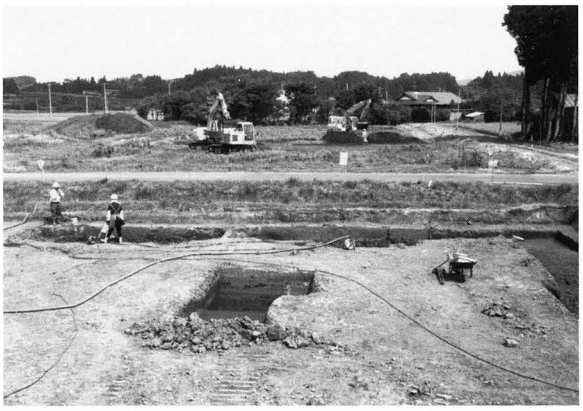
A１区湿地基本層序（西から）

写真図版３　各区の基本層序（1）

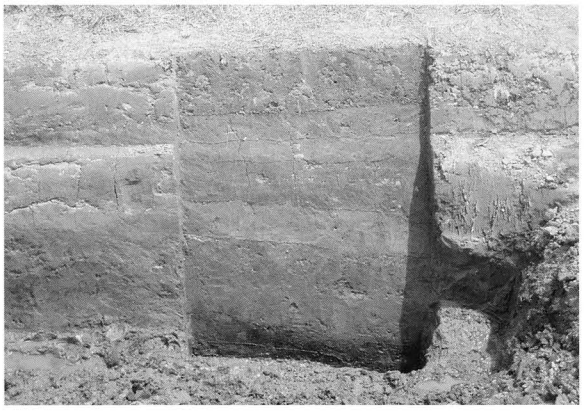


A２区トレンチ（南から）

A２区基本層序（南から）



B１区トレンチ（南から）



B１区基本層序（西から）

B２区トレンチ（北西から）

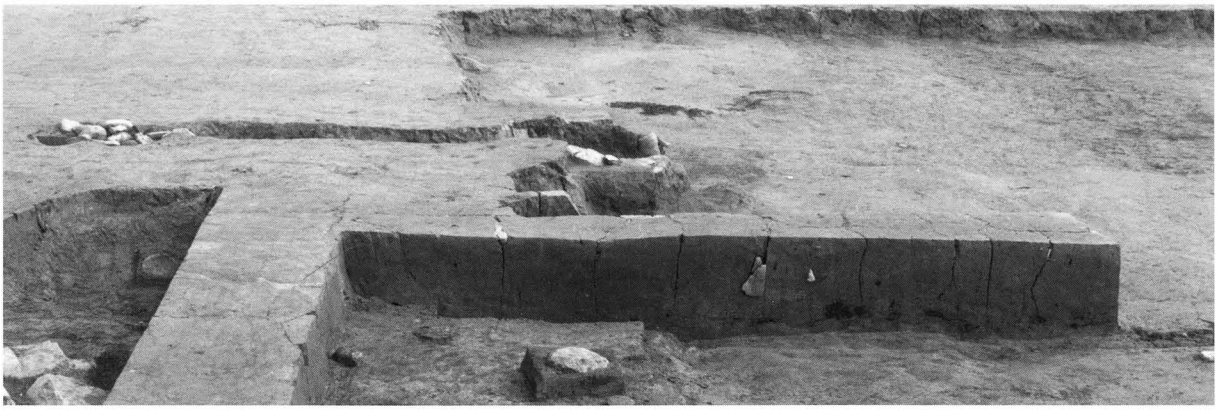
B２区トレンチ（南から）

B２区湿地遺物出土状況（南から）

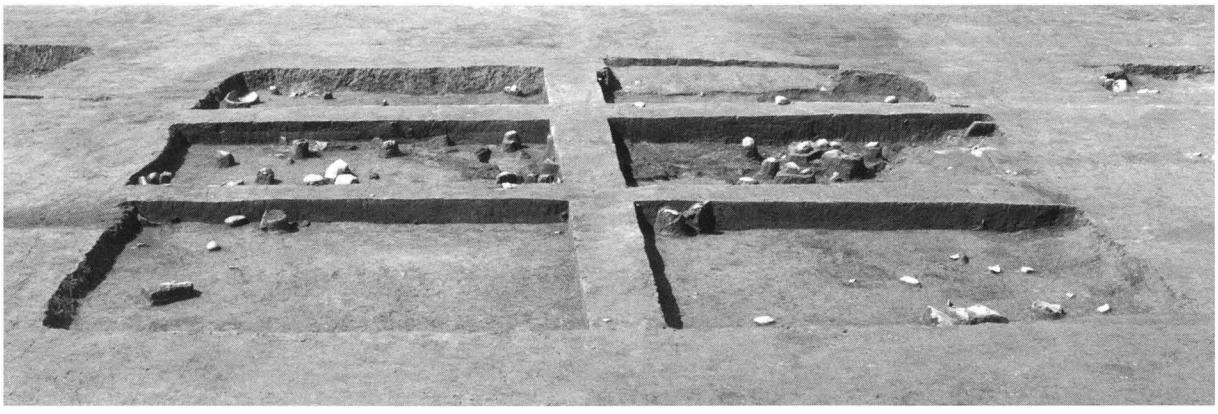
B２区基本層序（南から）

写真図版４　各区の基本層序（2）

全景（南から）



断面（住居跡 10 重複部、西から）

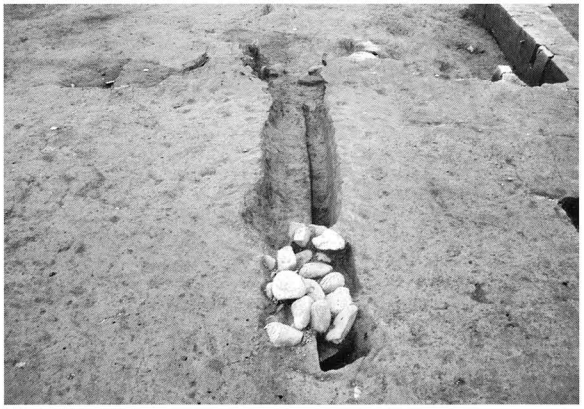


断面（東から）

写真図版５　住居跡１（1）

全景（遺物出土状況）（南から）

カマド全景（南東から）

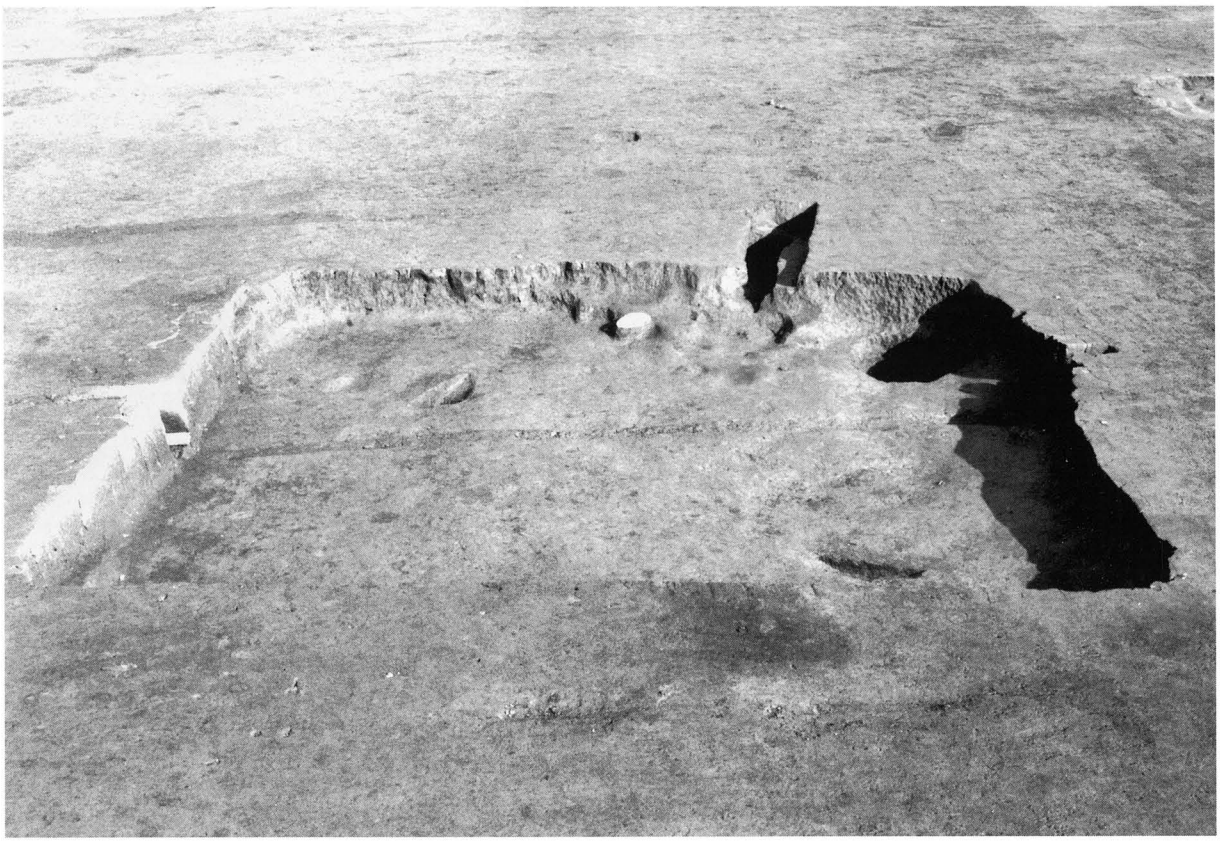


カマド煙道部（北から）

カマド断面（南西から）

貯蔵穴断面（東から）

写真図版６　住居跡１（2）



全景（西から）

断面（西から）

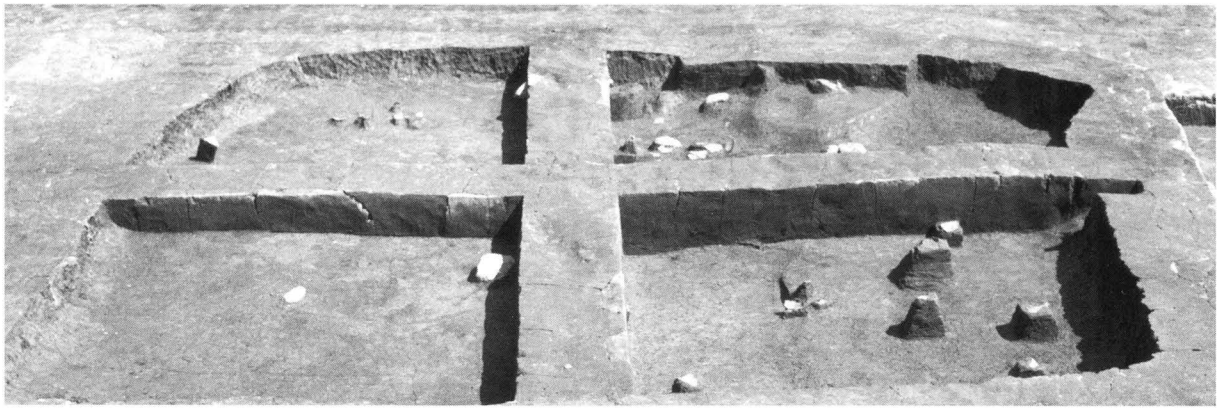
貯蔵穴遺物出土状況（西から）

カマド全景（西から）

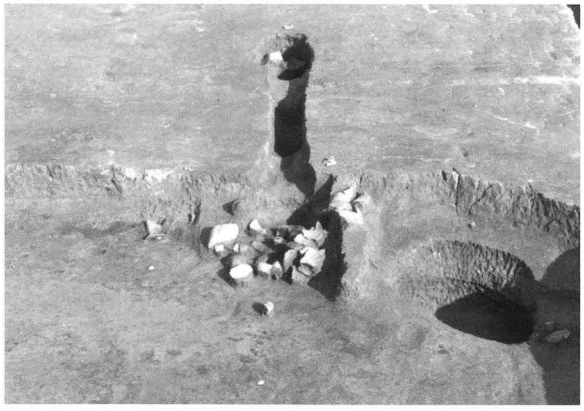
カマド断面（南西から）

写真図版７　住居跡２

全景（西から）



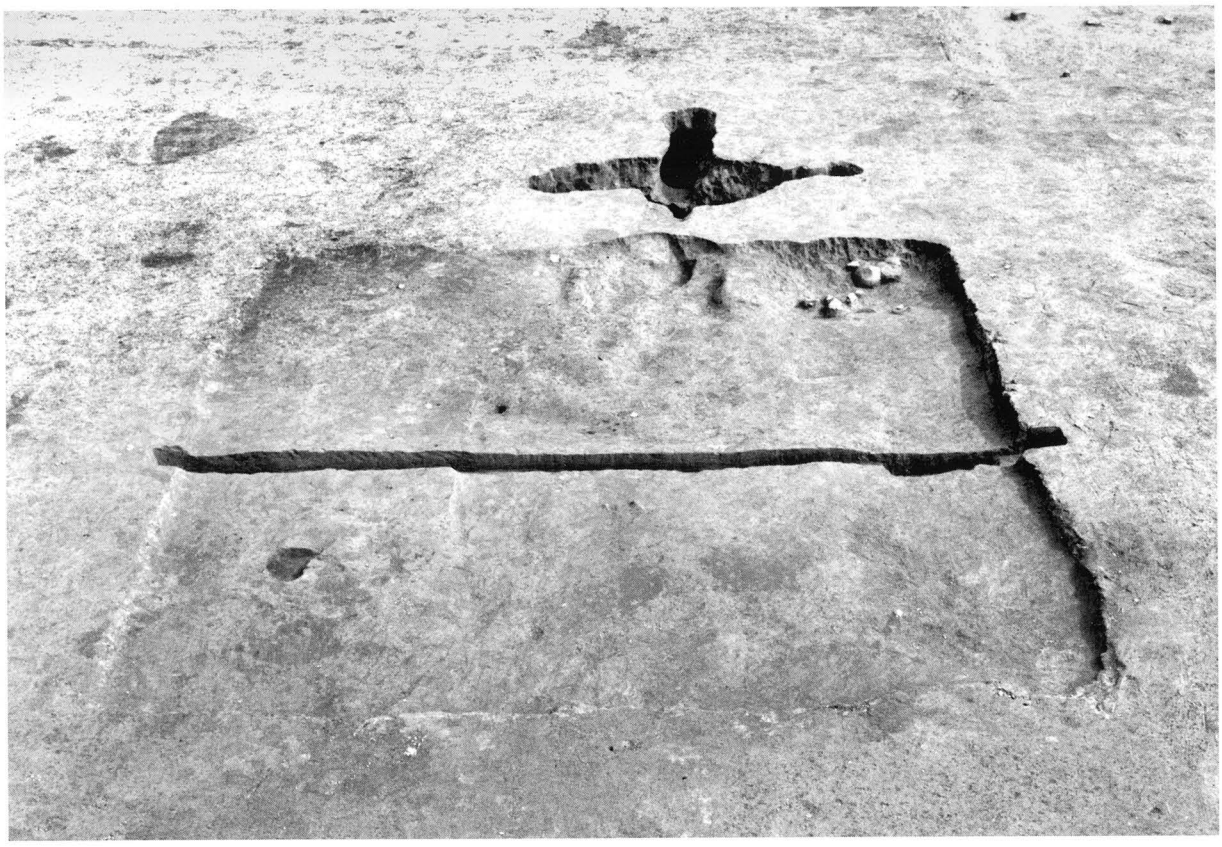
断面（西から）



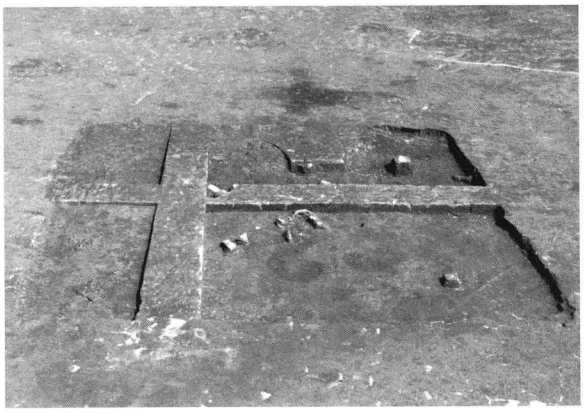
カマド全景（西から）

カマド断面（南西から）

写真図版８　住居跡３



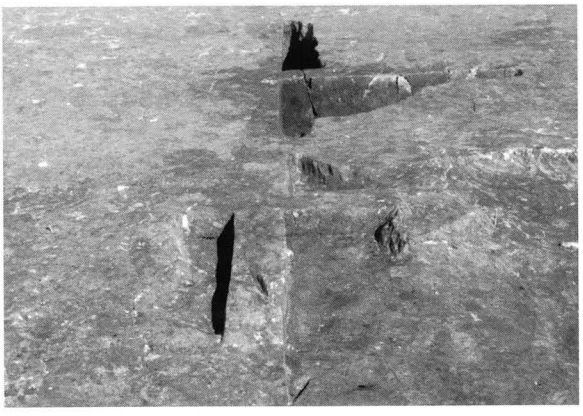
全景（西から）



断面（西から）

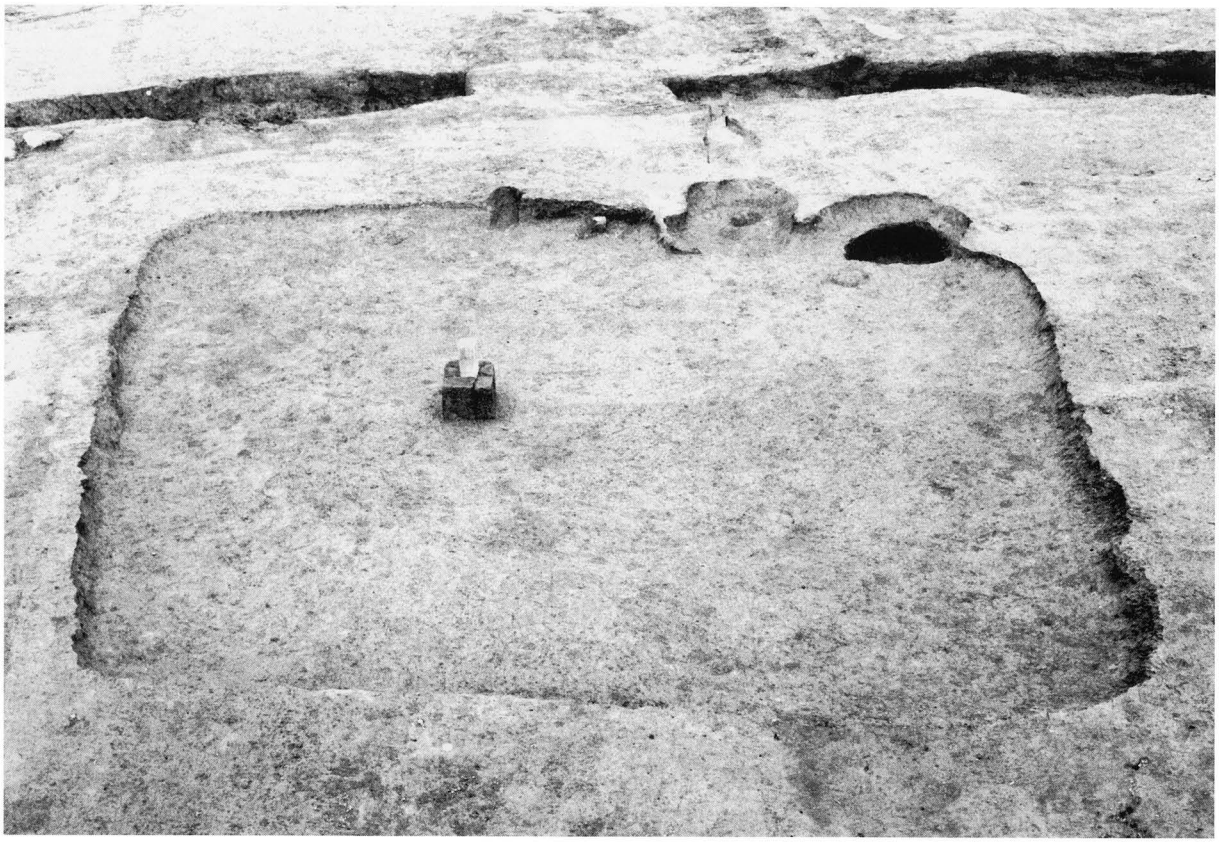
貯蔵穴遺物出土状況（西から）

カマド全景（西から）



カマド断面（西から）

写真図版９　住居跡４



全景（南から）

断面（南から）

貯蔵穴断面（南から）

カマド全景（南から）

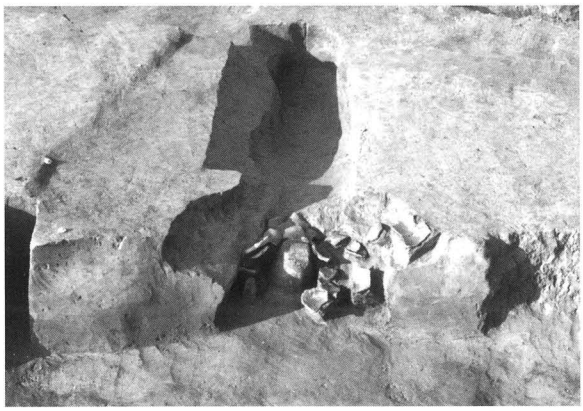
カマド断面（南西から）

写真図版10　住居跡5

全景（南から）

断面（南から）

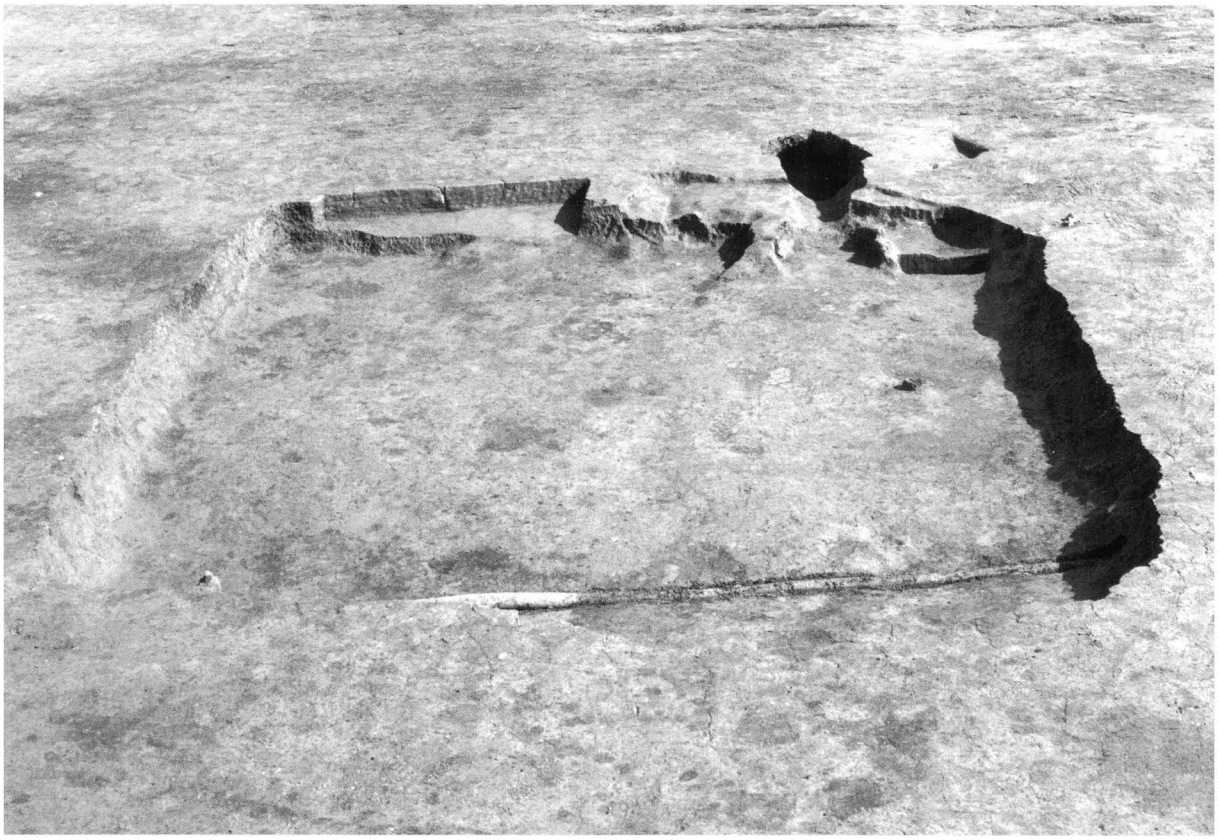
全景（遺物出土状況）（南から）



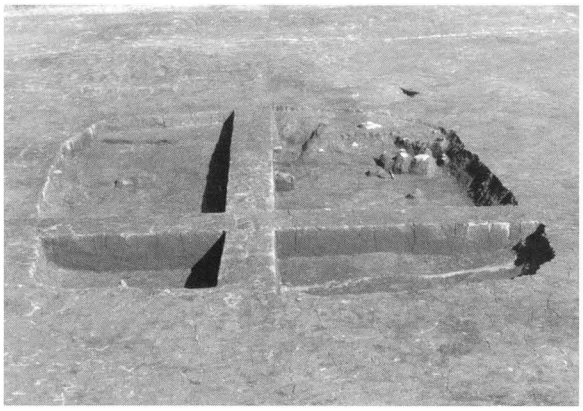
カマド遺物出土状況（南から）

カマド断面（南から）

写真図版11　住居跡６

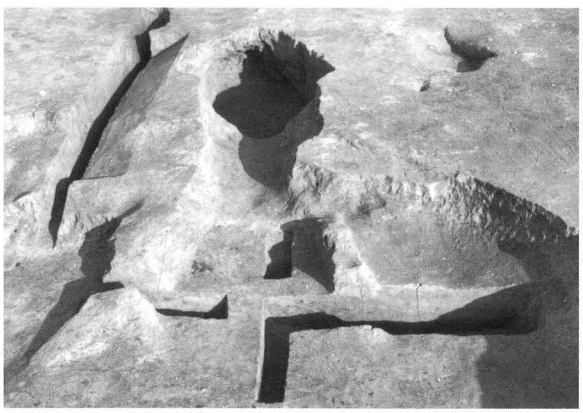


全景（西から）

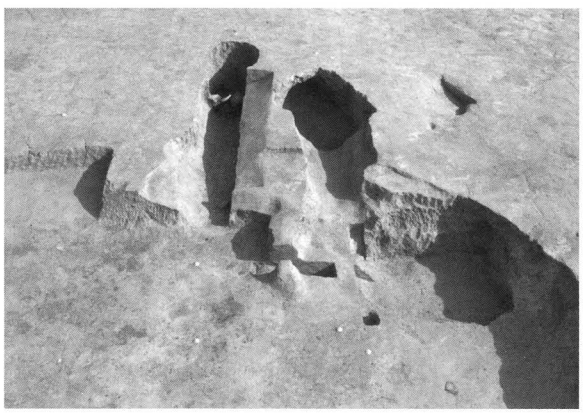


断面（西から）

遺物出土状況（近景）（西から）

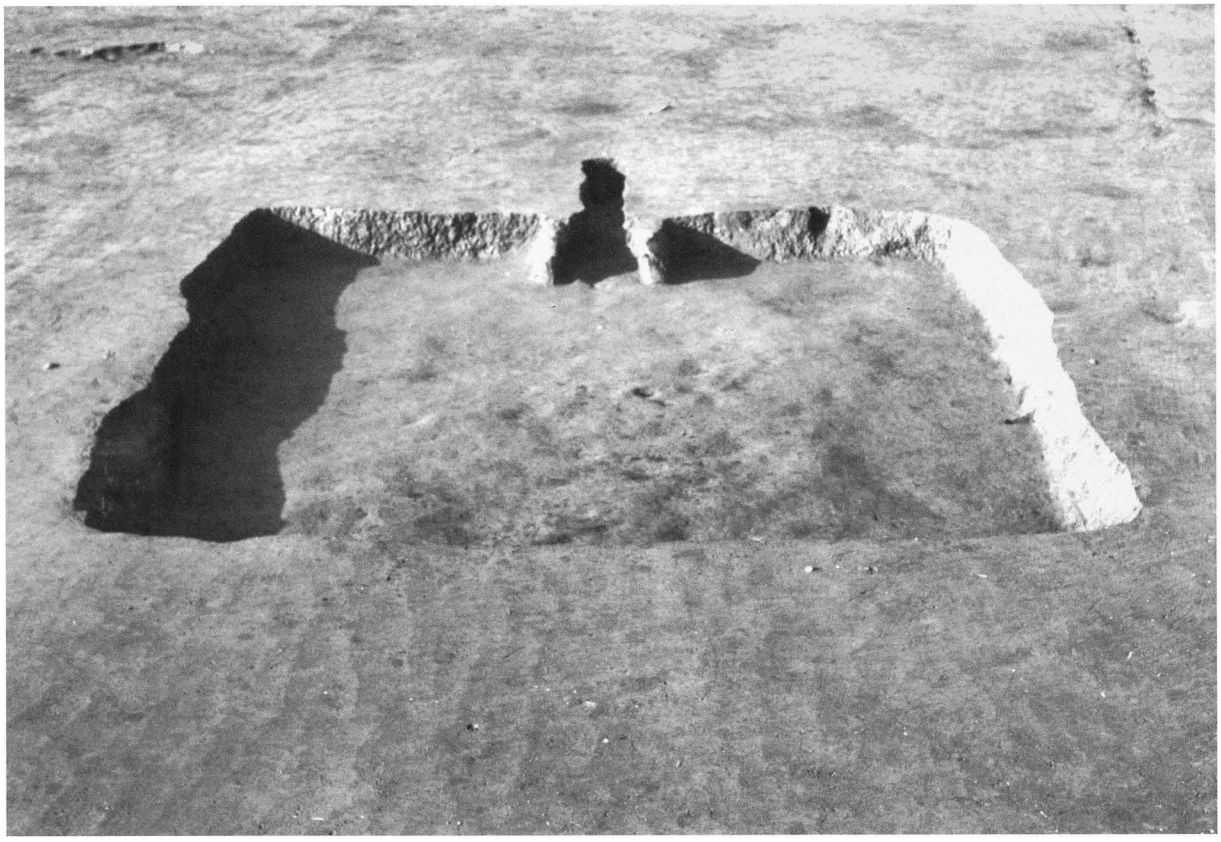


カマド貯蔵穴断面（西から）



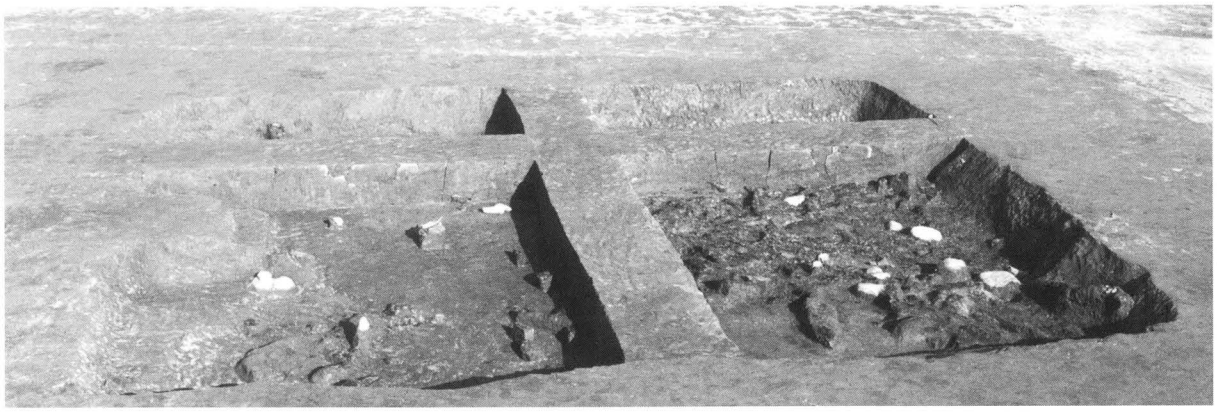
カマド全景（西から）

写真図版12　住居跡７



全景（南から）

断面（南から）



断面（西から）

写真図版13　住居跡８（1）

炭化材出土状況（南から）

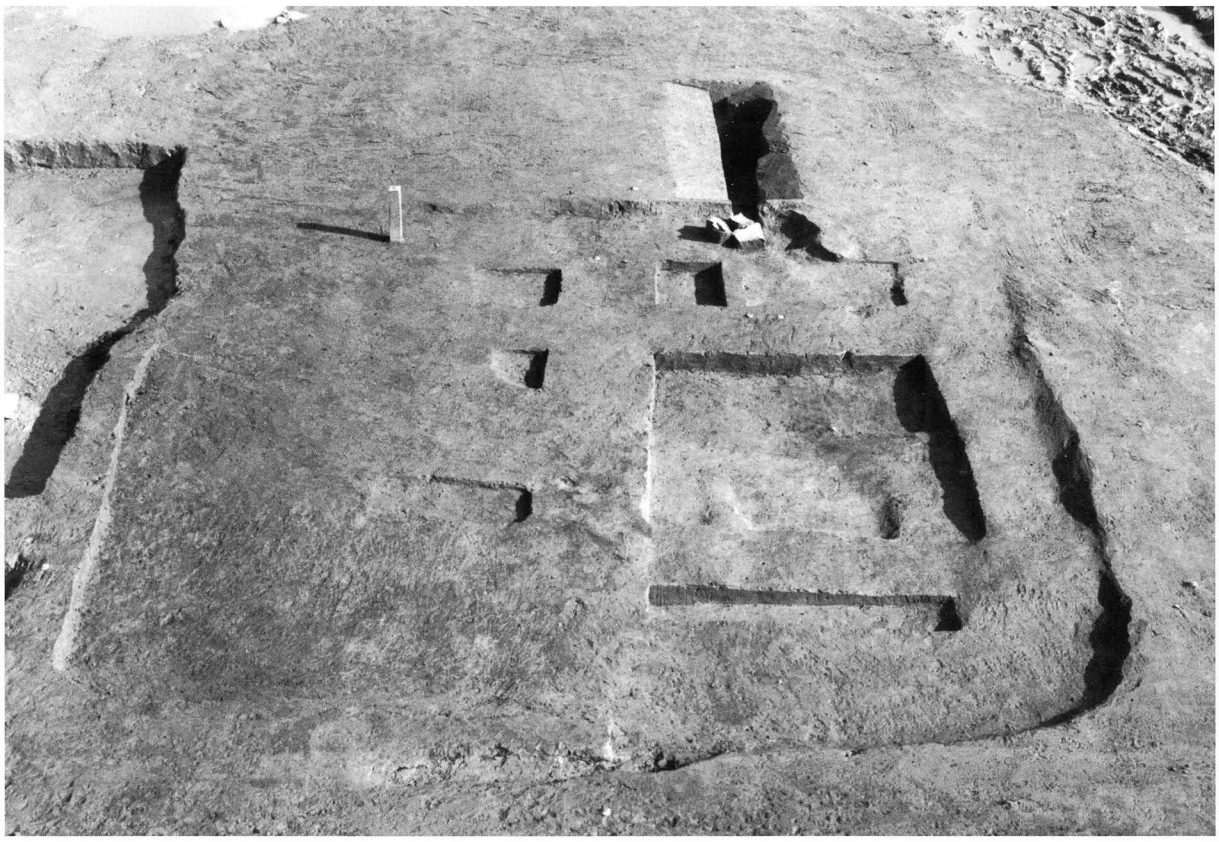
炭化材出土状況（東から）

カマド全景（南から）

カマド断面（南から）

カマド断面（南から）

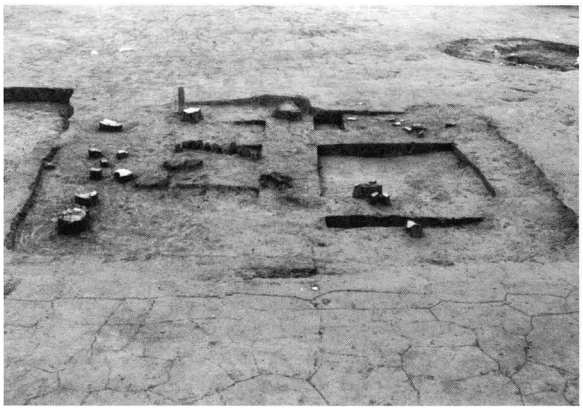
写真図版14　住居跡８（2）



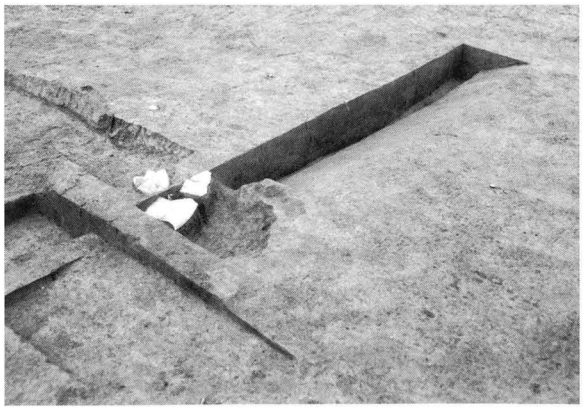
全景（西から）

断面（西から）

遺物出土状況（南西から）

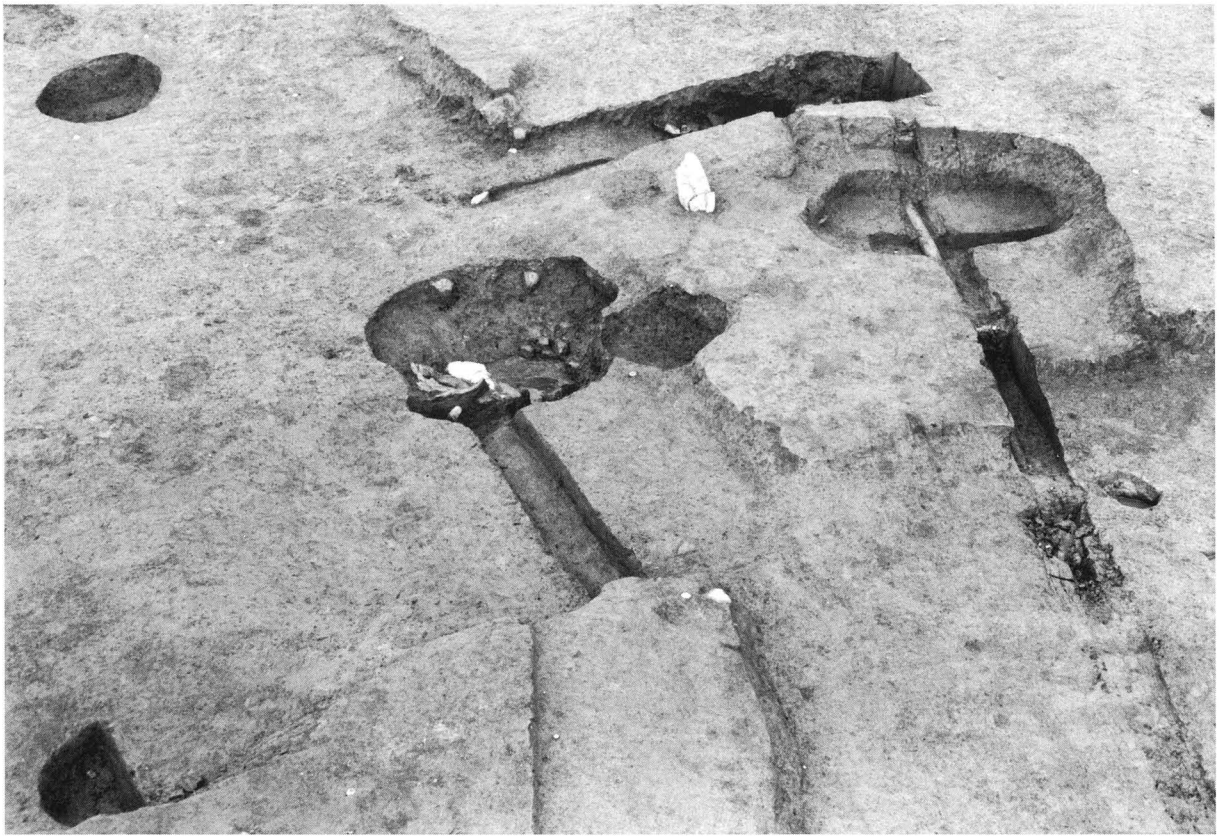


遺物出土状況（遠景）（西から）



カマド断面（南西から）

写真図版15　住居跡９

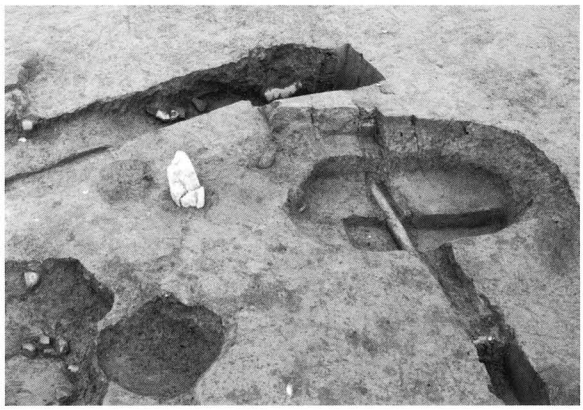


全景（南から）

断面（南から）

断面（住居１との重複部）（西から）

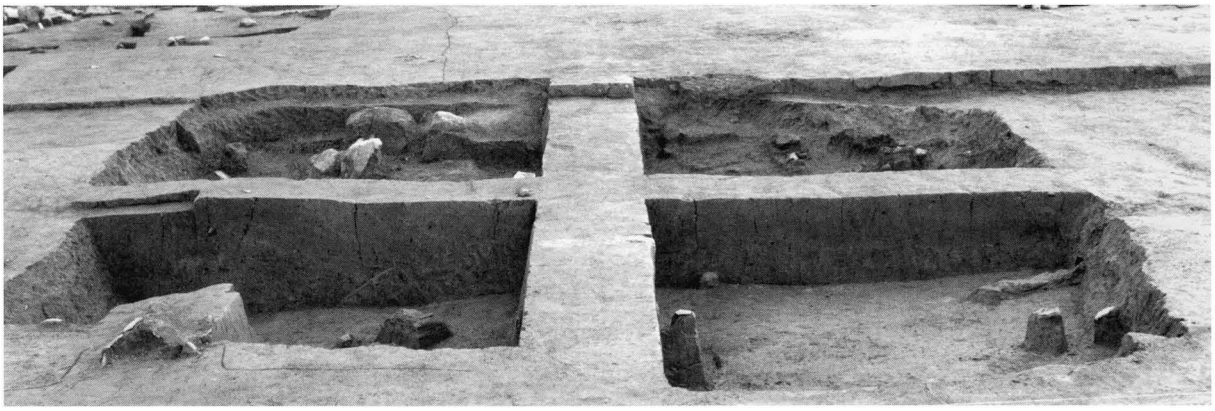
遺物出土状況（南から）



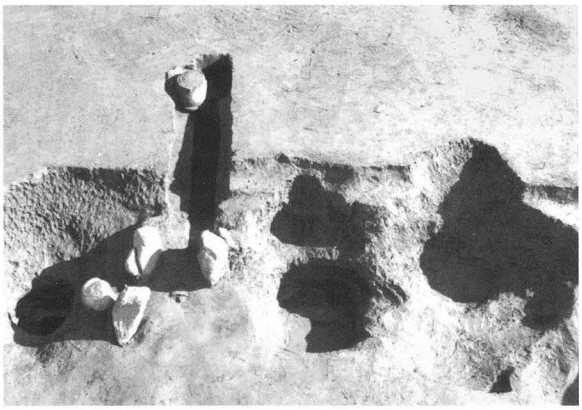
カマド・貯蔵穴全景（南から）

写真図版16　住居跡10

全景（西から）



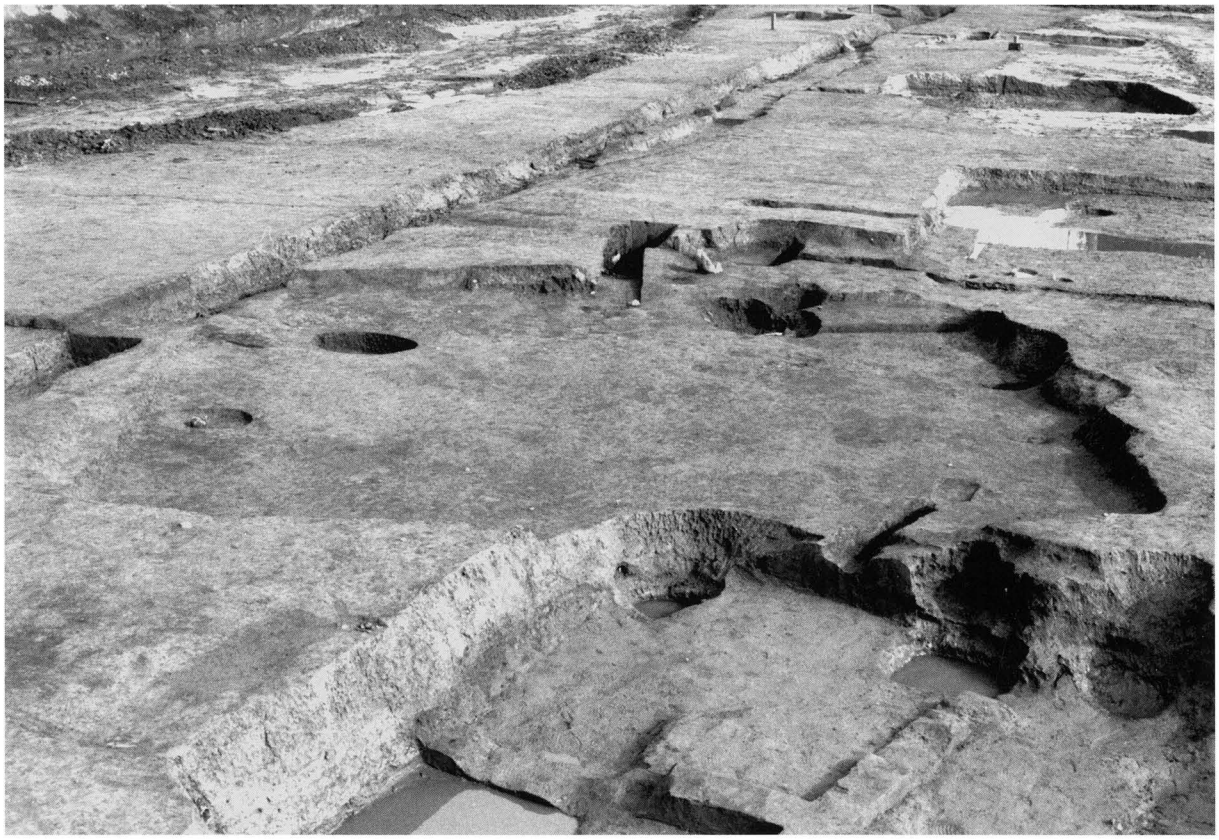
断面（西から）



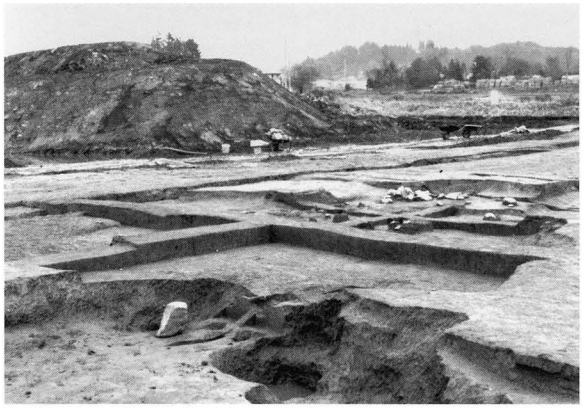
カマ全景（西から）

カマド断面（南西から）

写真図版17　住居跡11



全景（西から）



断面（南西から）

カマド煙道断面（南東から）

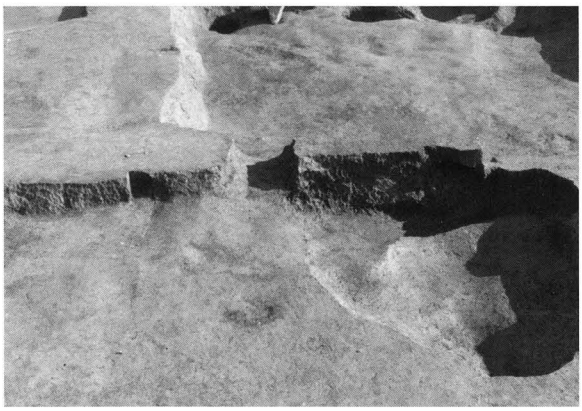
カマド全景（西から）

貯蔵穴断面（西から）

写真図版18　住居跡12

全景（西から）

断面（西から）



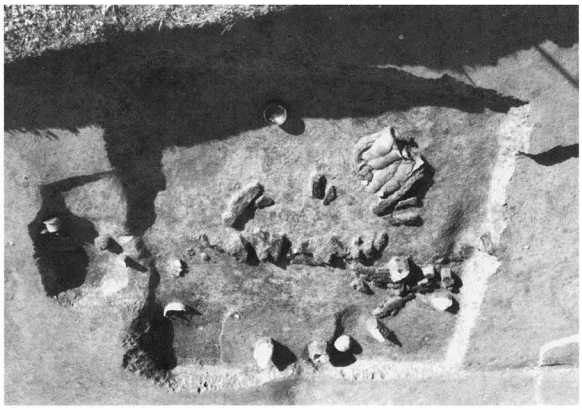
カマド全景（西から）

カマド断面（南西から）

写真図版19　住居跡13

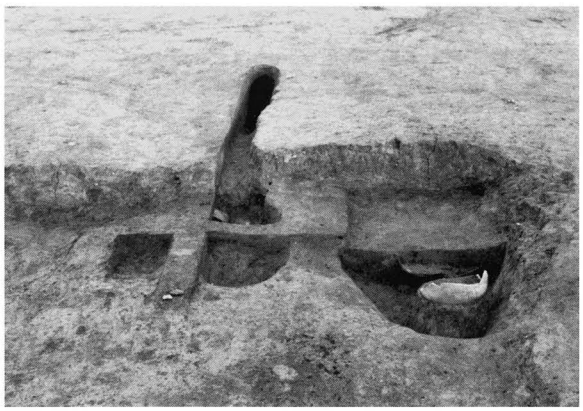
全景（西から）

断面（西から）



遺物出土状況（東から）

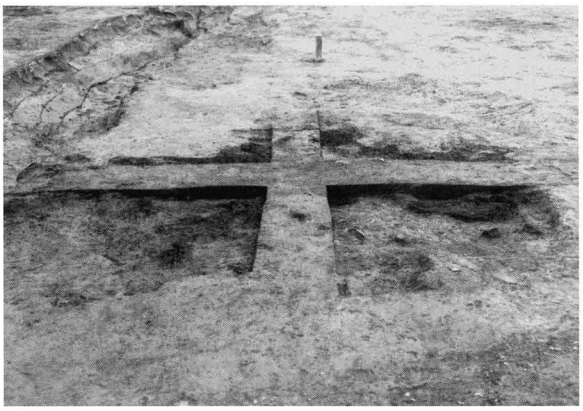
カマド全景・貯蔵穴遺物出土状況（西から）



カマド貯蔵穴断面（西から）

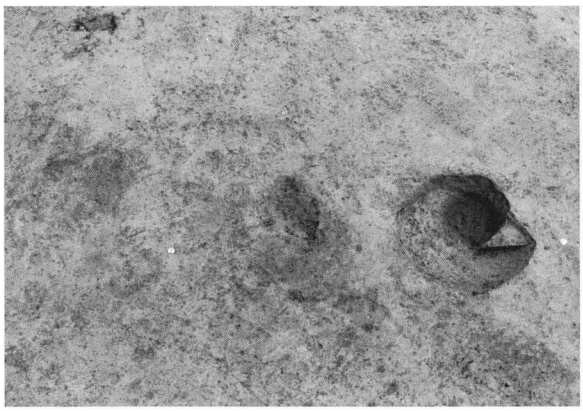
写真図版20　住居跡14

全景（西から）

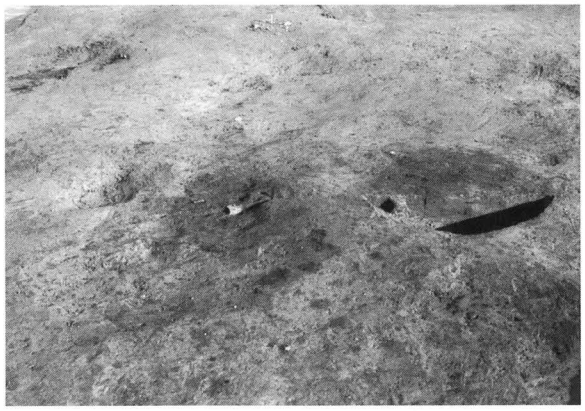


断面（西から）

遺物出土状況（西から）



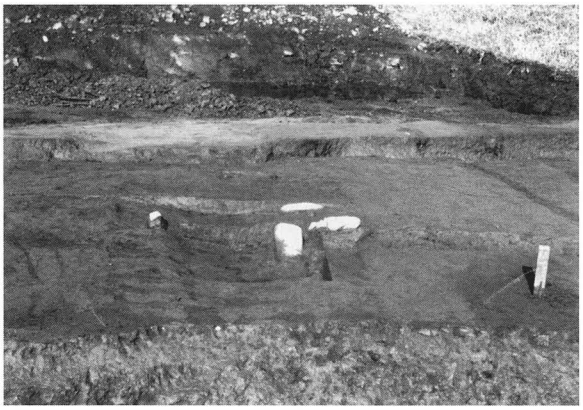
カマド全景（西から）



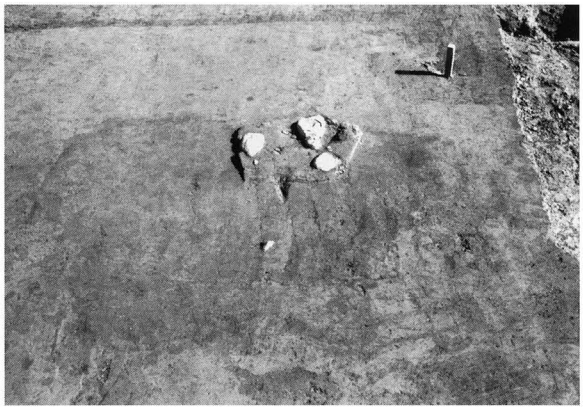
カマド断面（西から）

写真図版21　住居跡15

全景（西から）

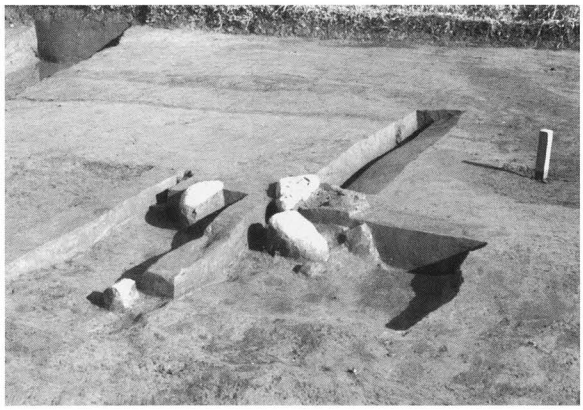


断面（南から）



検出状況（西から）

カマド断面（西から）



カマド断面（南西から）

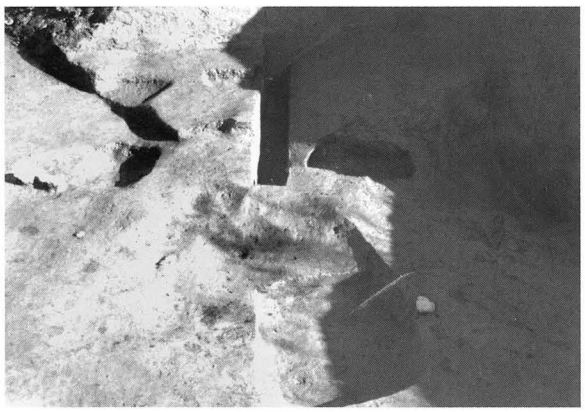
写真図版22　住居跡16

全景（西から）

断面（西から）

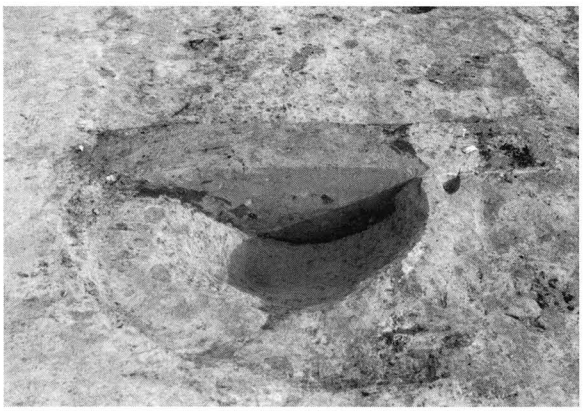
写真図版23　住居跡17（1）

断面（北から）

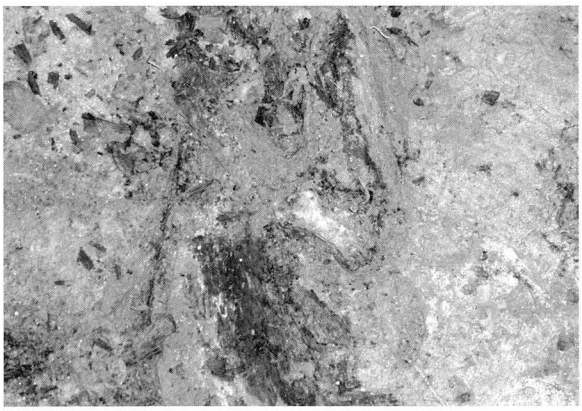


カマド全景（西から）

カマド断面（西から）

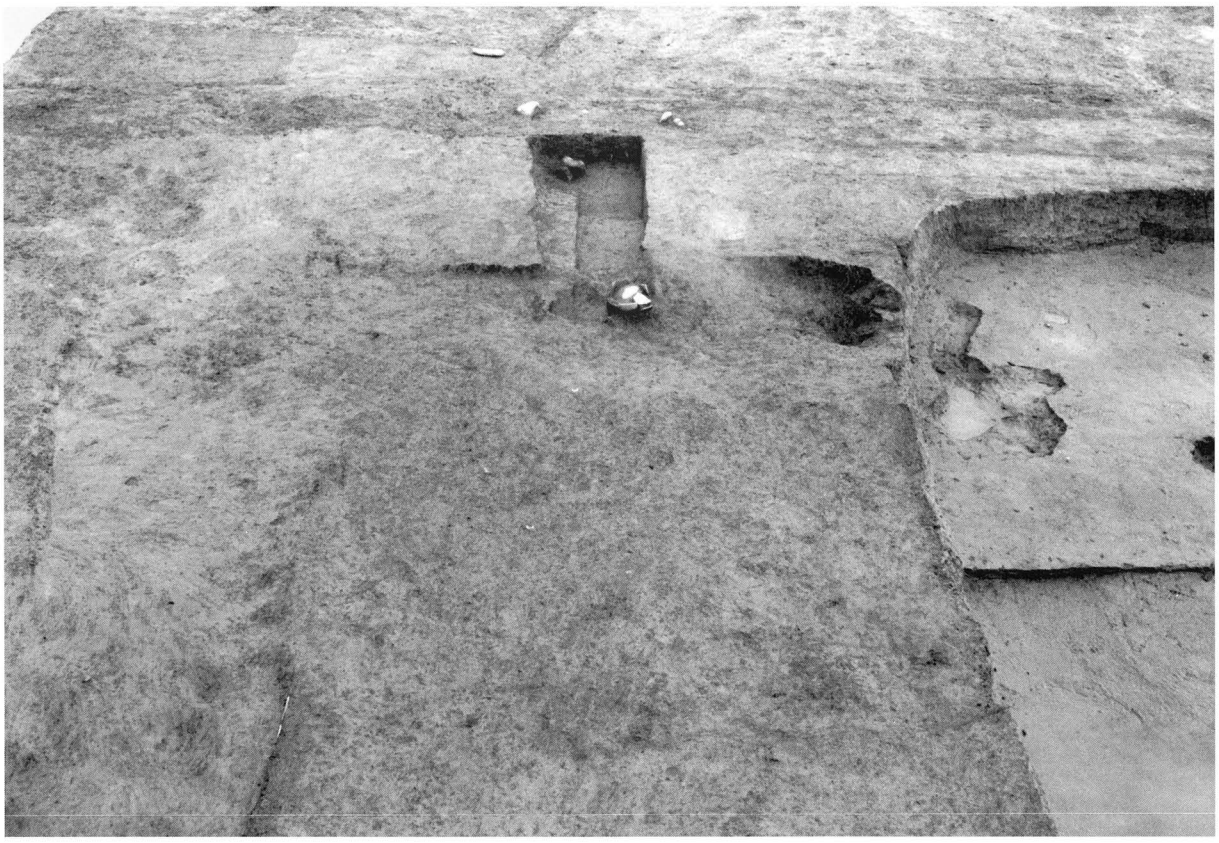


PP1 断面（西から）

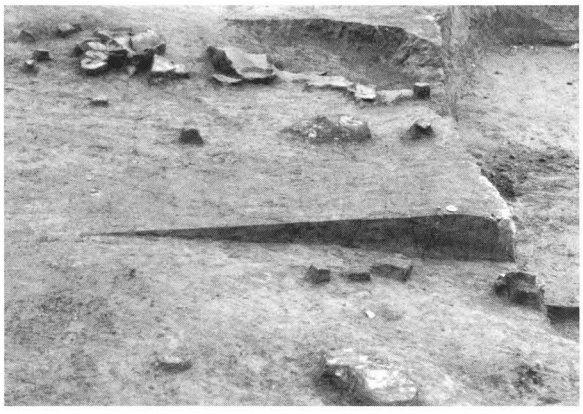


鉄製品出土状況（西から）

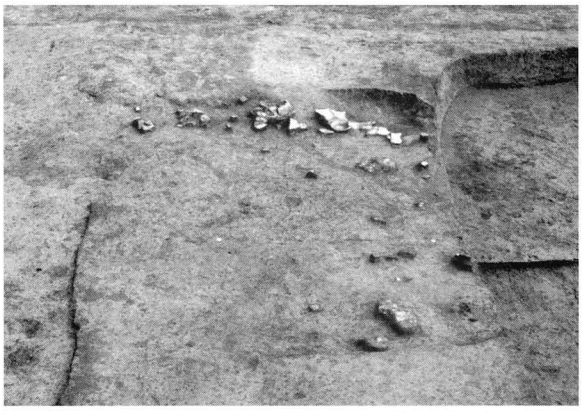
写真図版24　住居跡17（2）



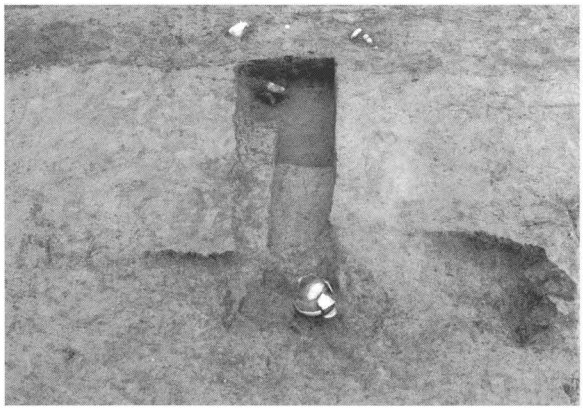
全景（西から）



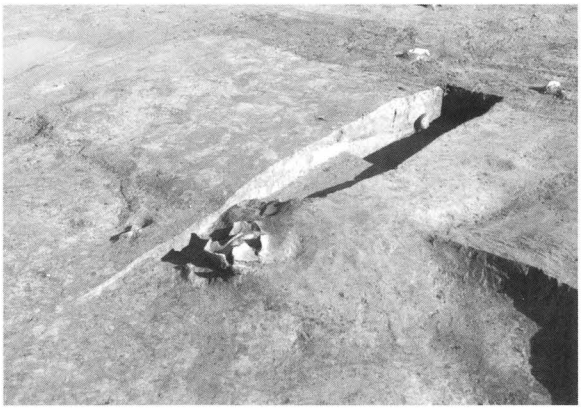
断面（西から）



遺物出土状況（西から）



カマド全景（西から）



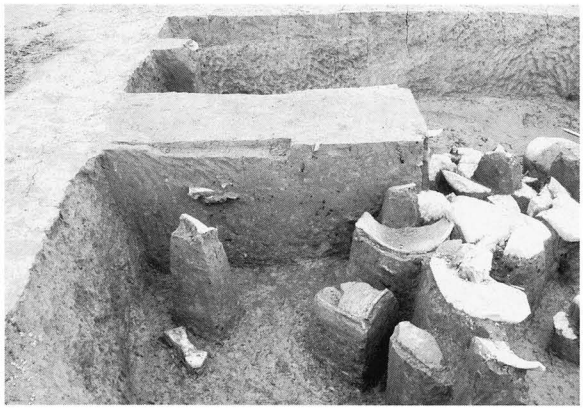
カマド断面（南西から）

写真図版25　住居跡18

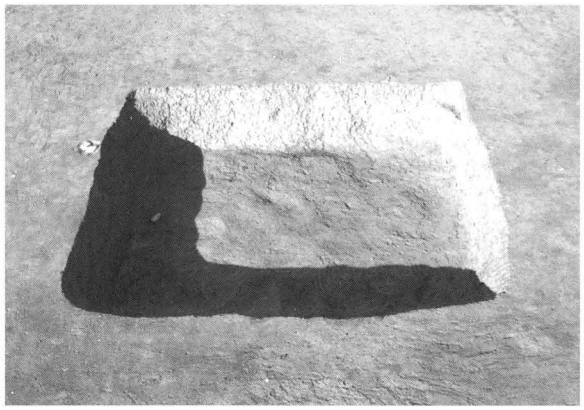
全景（遺物出土状況）（南から）

断面（南から）

布出土状況（南から）

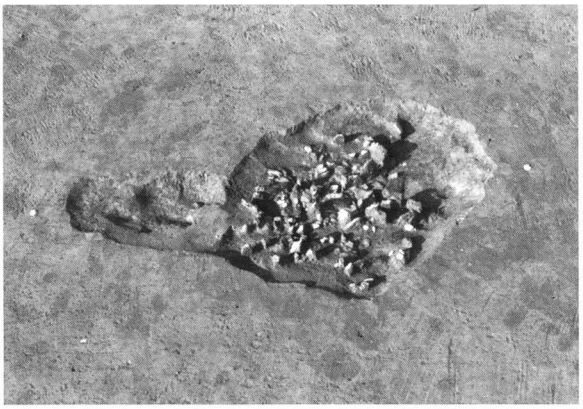


断面（西から）

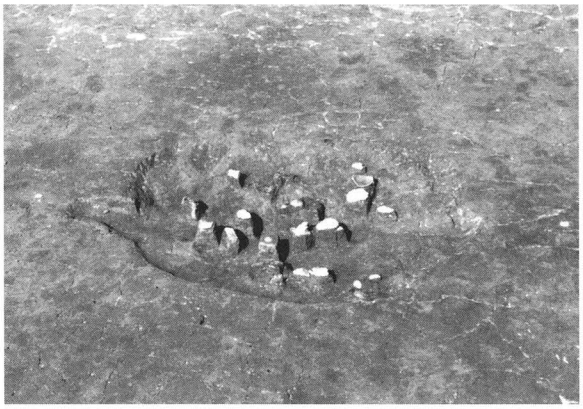


全景（南から）

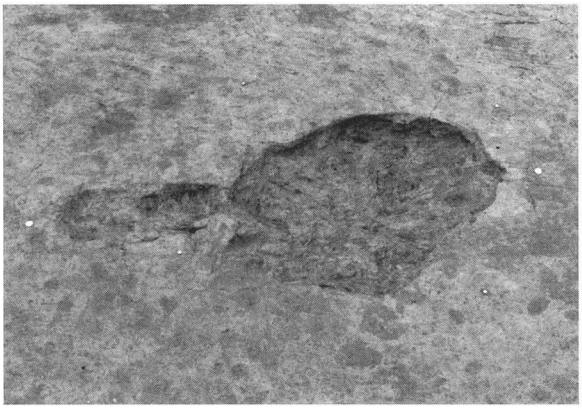
写真図版26　竪穴状遺構１



土坑１遺物出土状況（南から）



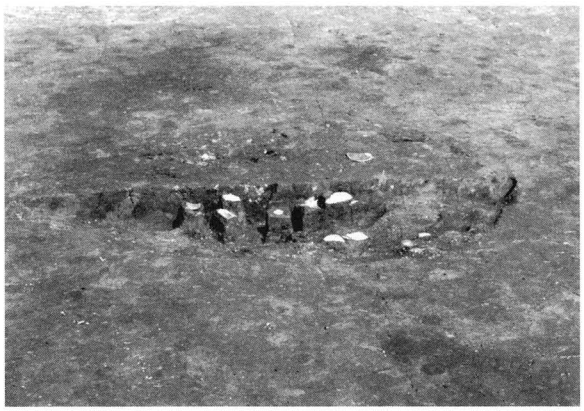
土坑２遺物出土状況（南から）



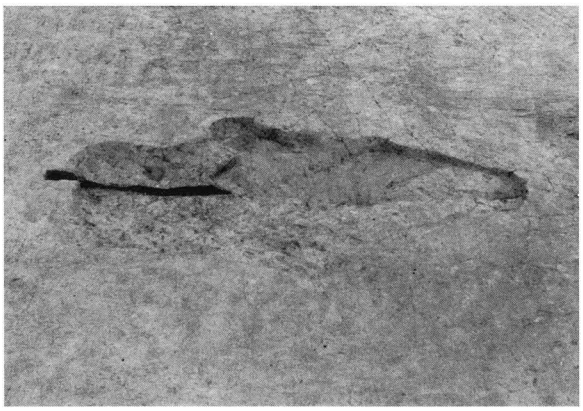
土坑１全景（南から）

土坑２全景（南から）

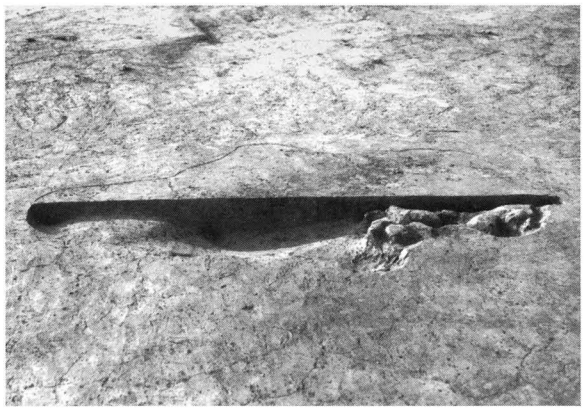
土坑１断面（南から）



土坑２断面（南から）

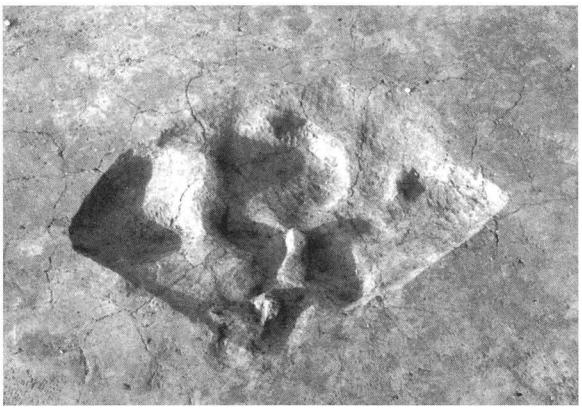


土坑３全景（西から）

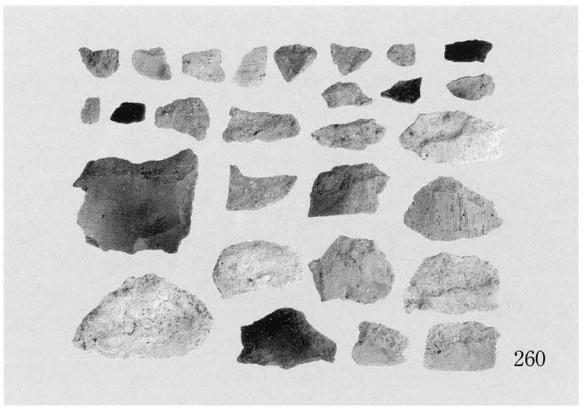


土坑３断面（東から）

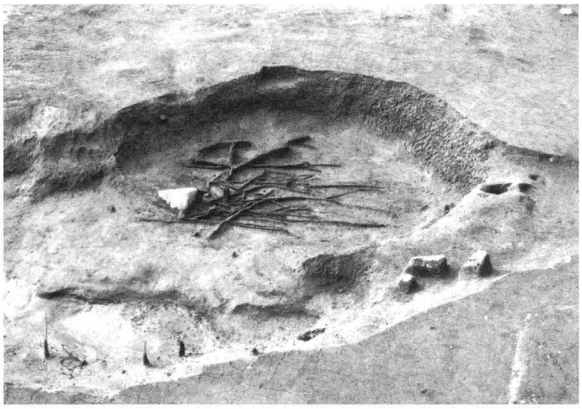
写真図版27　土坑（1）



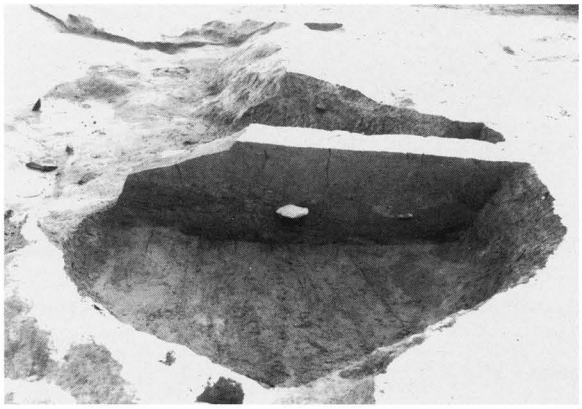
土坑４全景（南から）



土坑１出土土器片

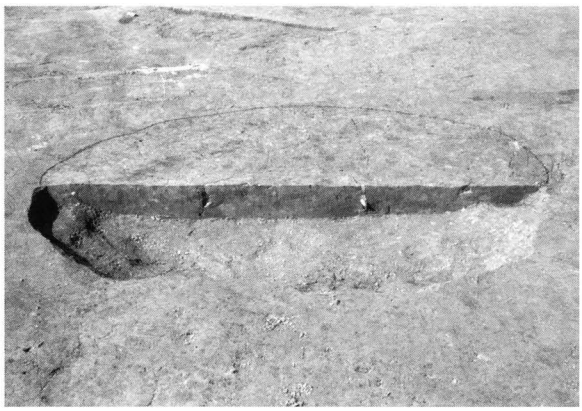


土坑５全景（東から）



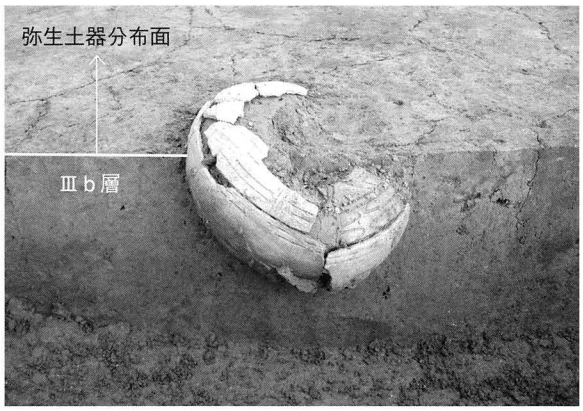
土坑５断面（北から）

土坑６全景（南から）



土坑６断面（南から）

縄文～弥生時代遺物出土状況（Ａ１区南西部、北東から）

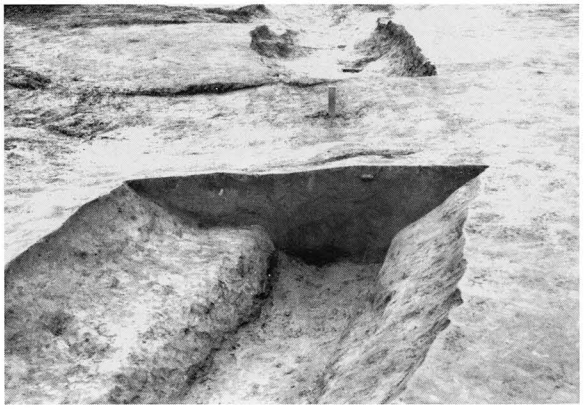


縄文時代晩期土器（346）の出土状況

写真図版28　土坑（2）、包含層

溝跡１全景（東から）

同左全景（西から）



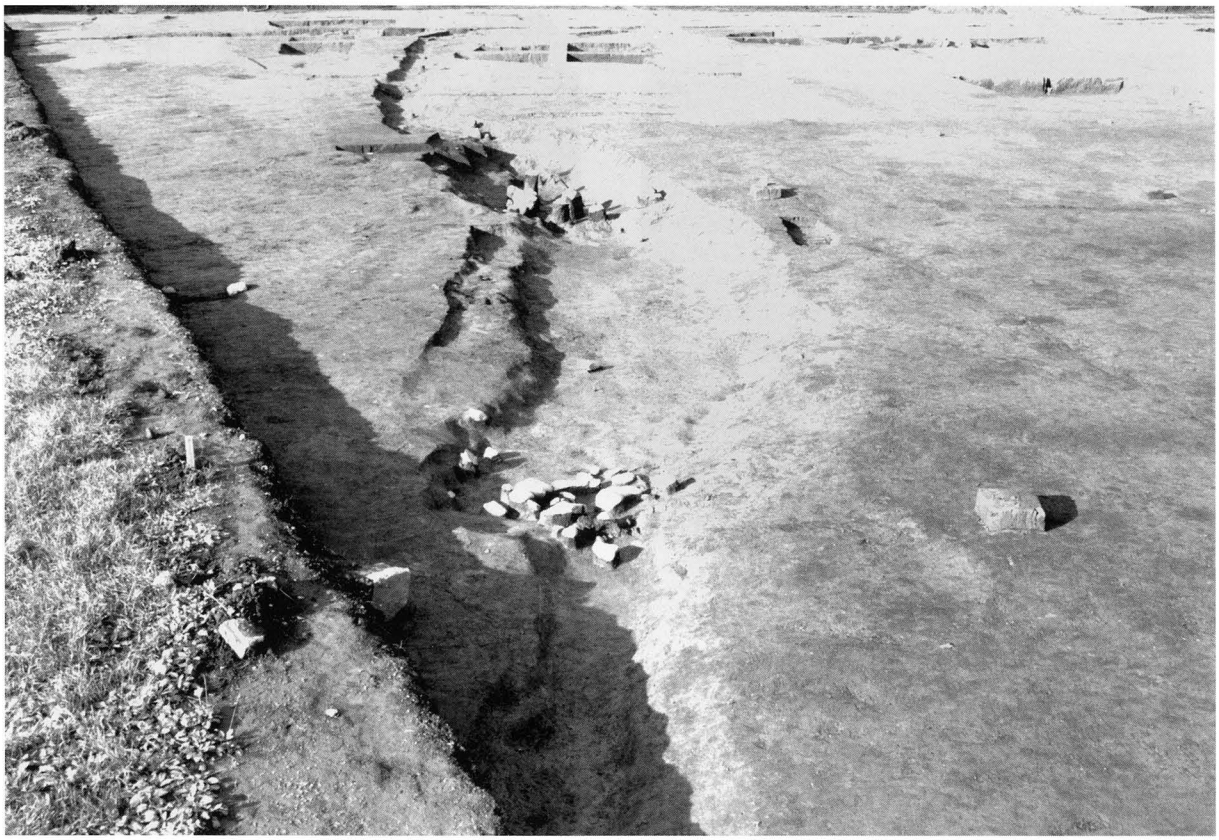
同左断面（西から）

溝跡３全景（西から）

同左東側（西から）

同左断面（西から）

写真図版29　溝跡１・３



全景（南から）

北側（南から）

断面（南から）

南側・遺物・礫出土状況（北東から）

断面（南から）

写真図版30　溝跡２

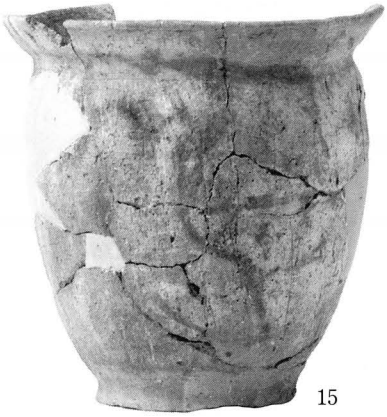
写真図版31　出土遺物（1）

13

16

17

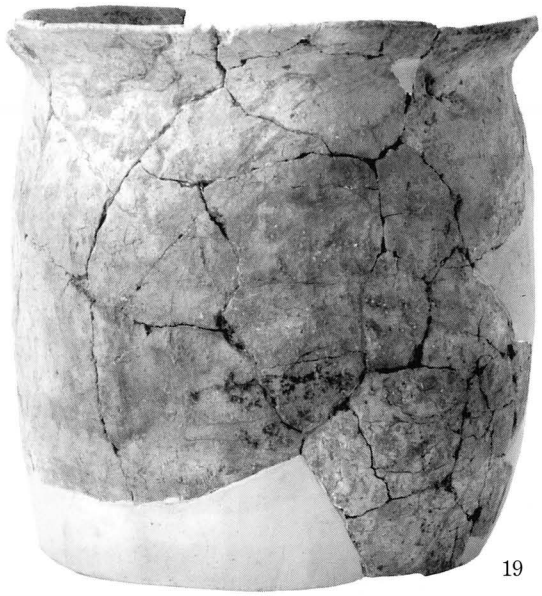
14



15

18

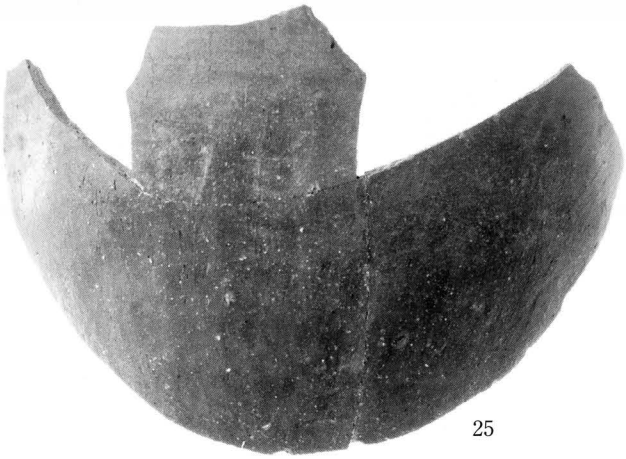
写真図版32　出土遺物（2）


19

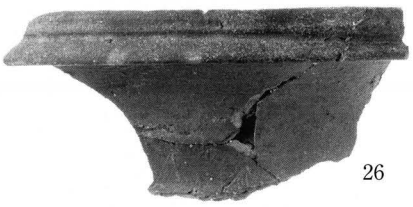
20

21

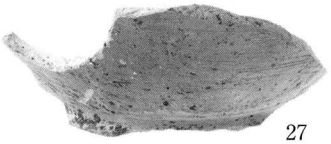
22

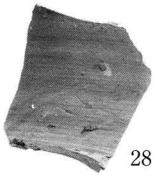

25

23


26

24


27


28

写真図版33　出土遺物（3）

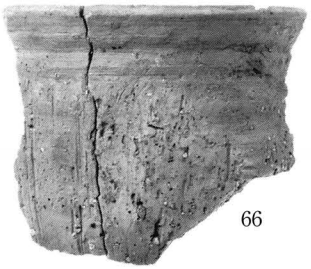
写真図版34　出土遺物（4）

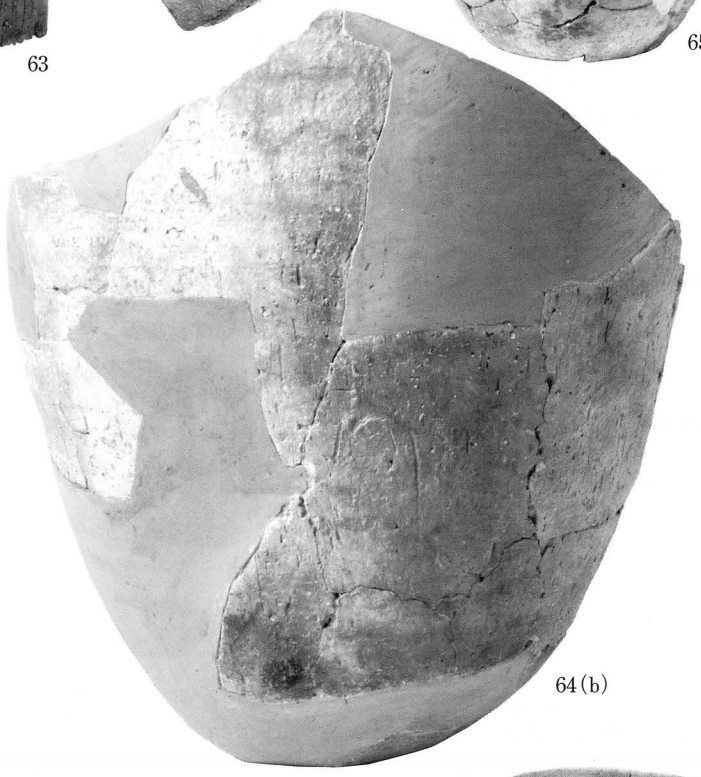
写真図版35　出土遺物（5）

63

64(a)

65

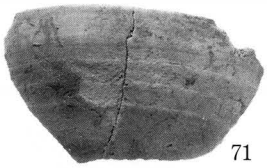

66


64(b)

67

68

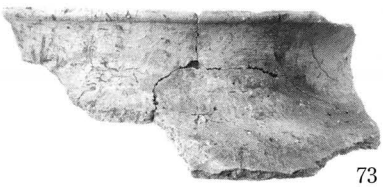
70


71

72

74

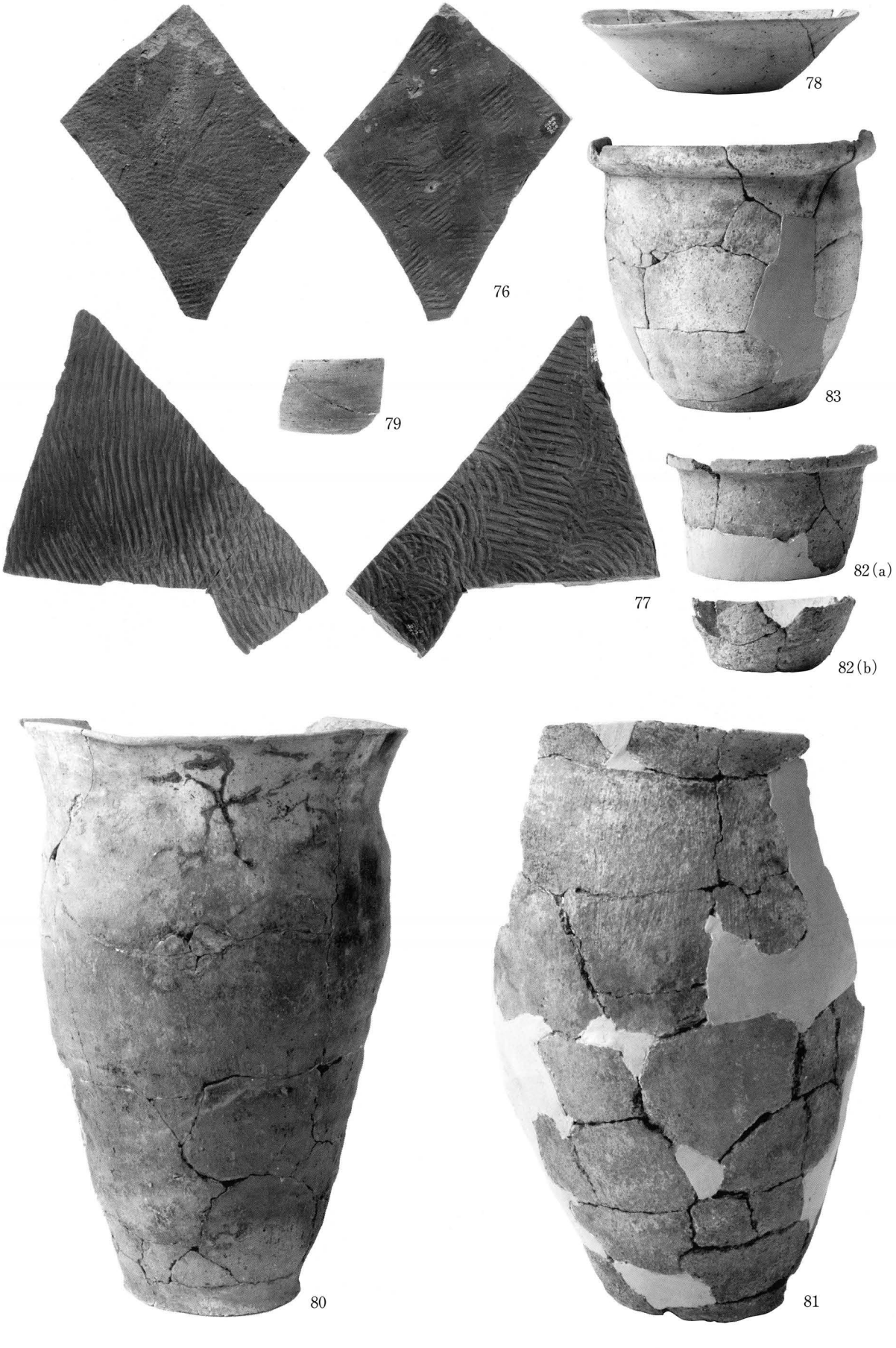
75(a)


73

69

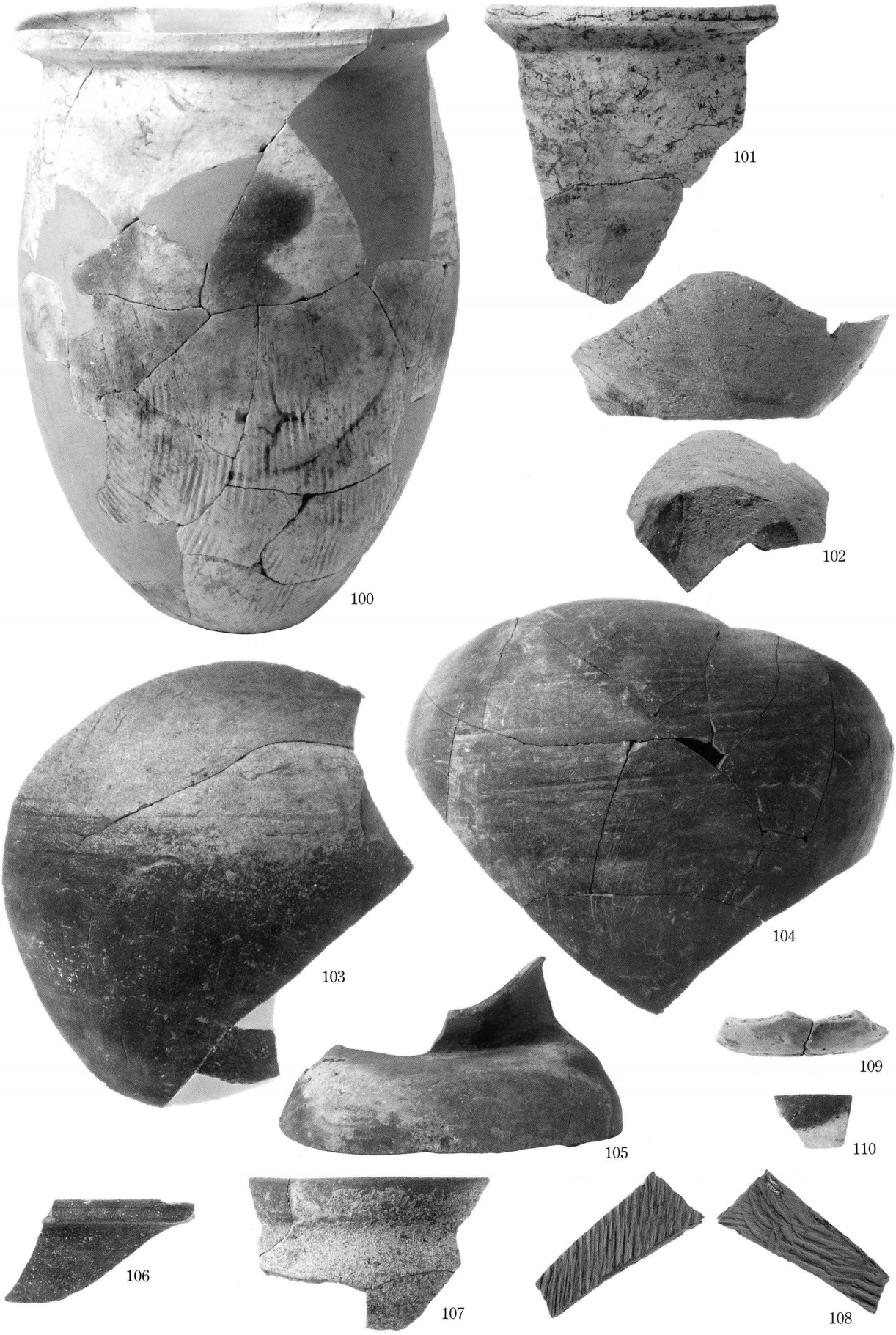
75(b)

写真図版36　出土遺物（6）

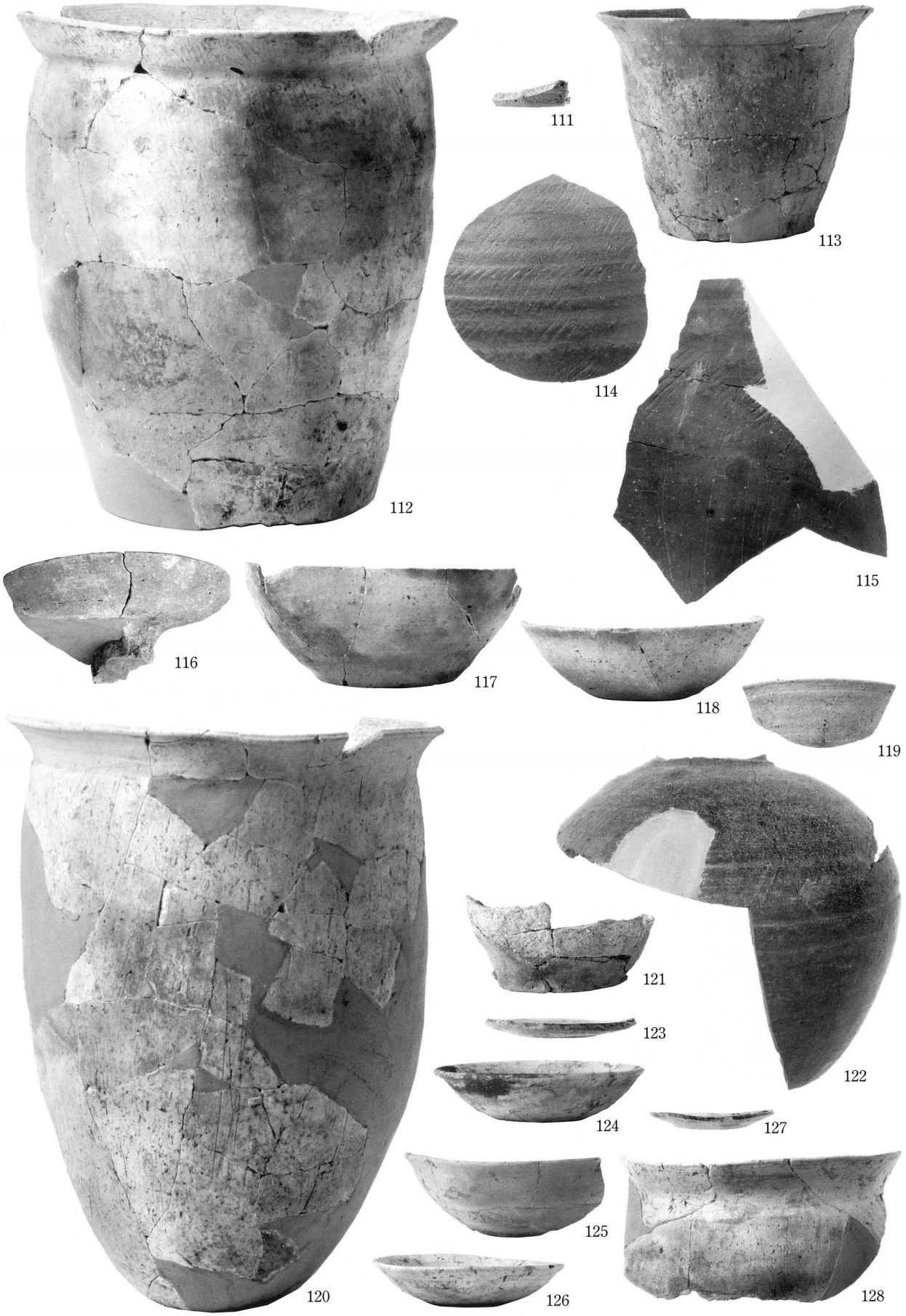


写真図版37　出土遺物（7）

写真図版38　出土遺物（8）

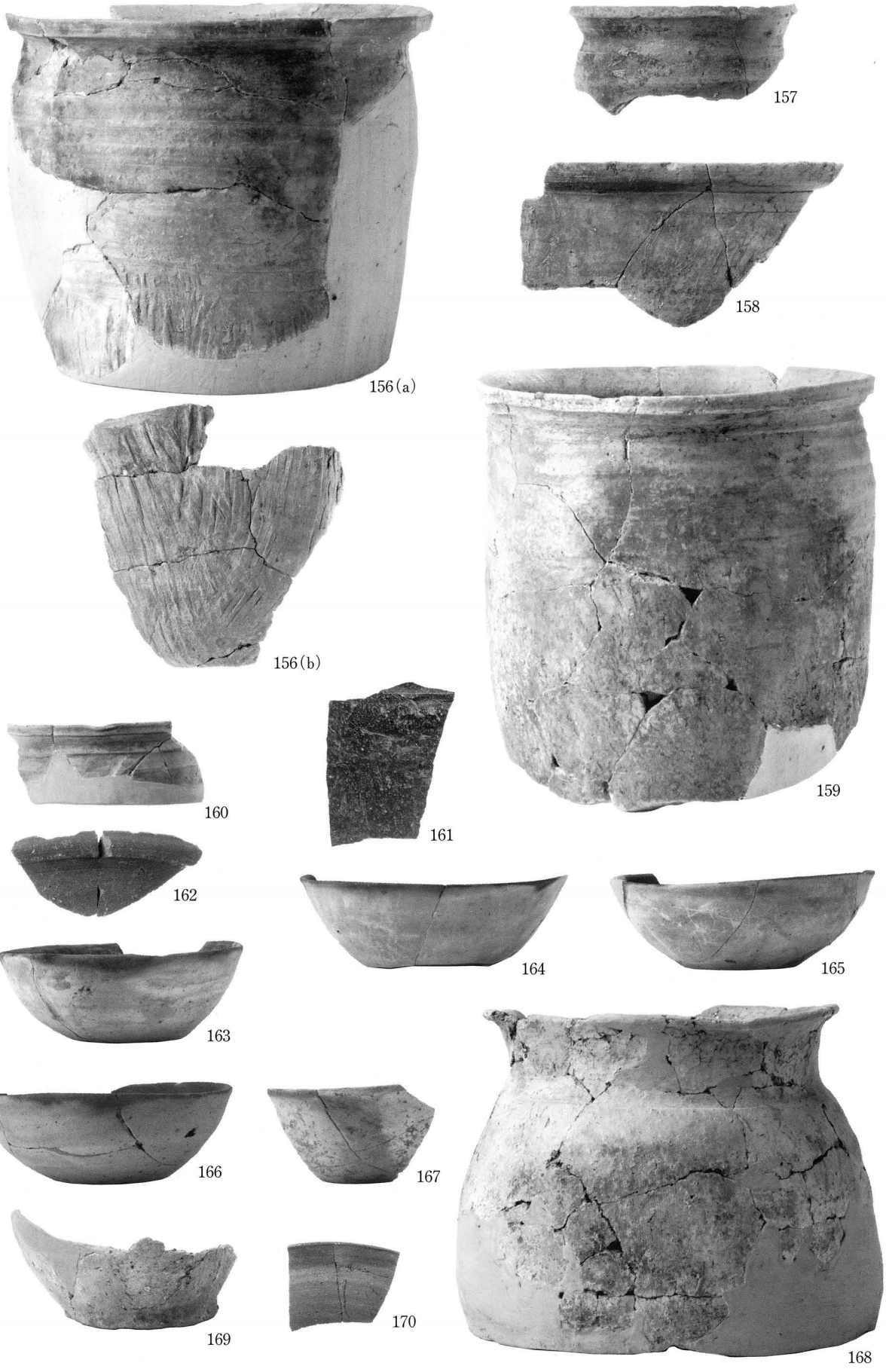


写真図版39　出土遺物（9）

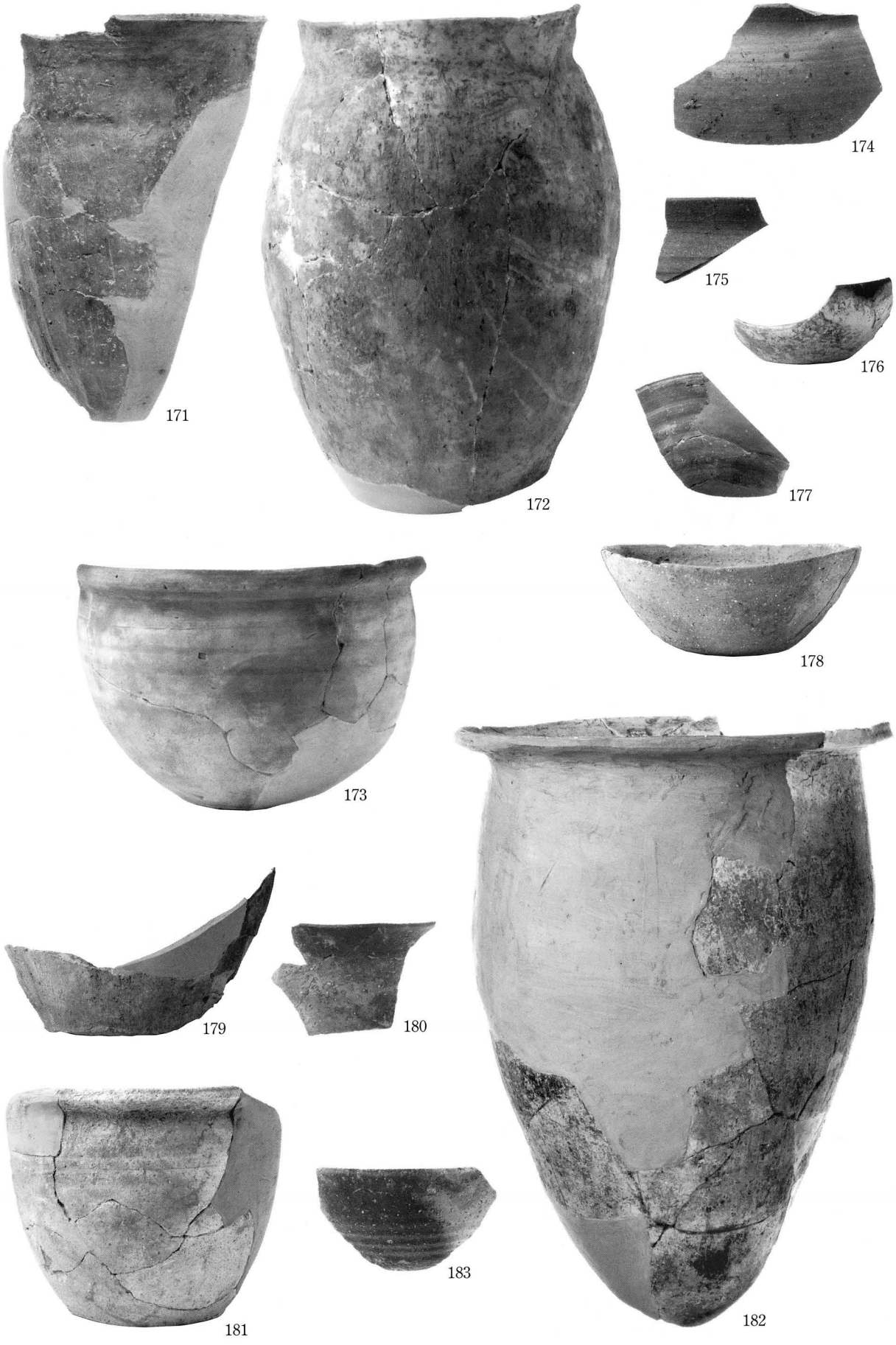


写真図版40　出土遺物（10）

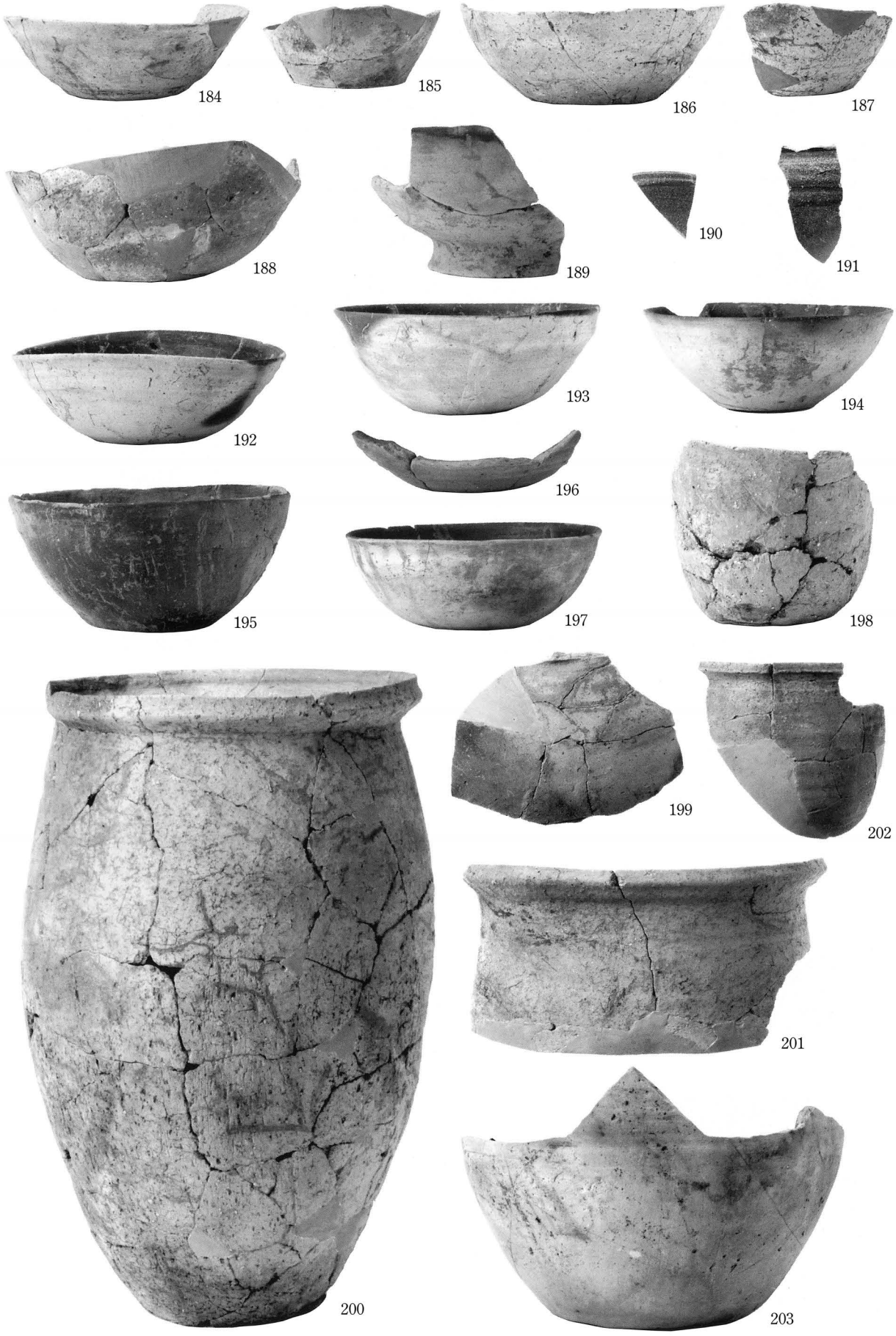
写真図版41　出土遺物（11）



写真図版42　出土遺物（12）

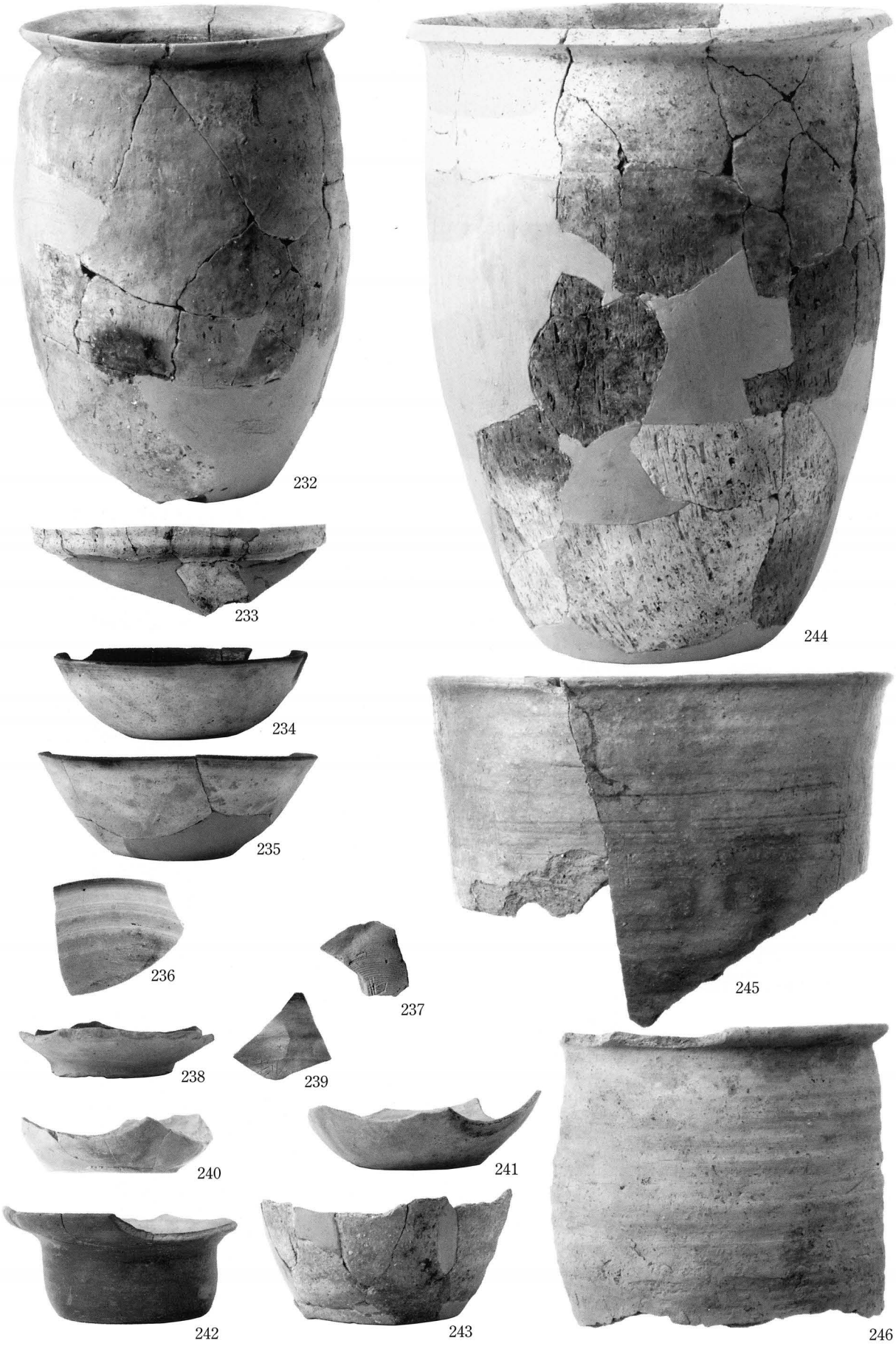


写真図版43　出土遺物（13）



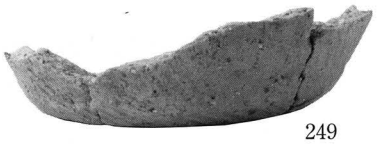
写真図版44　出土遺物（14）

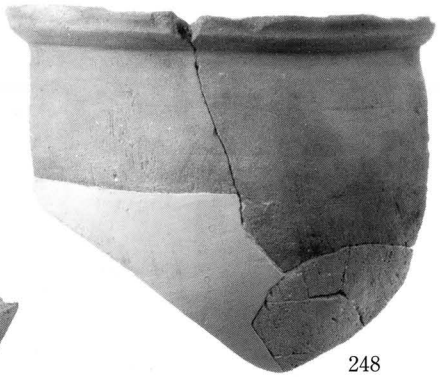
写真図版45　出土遺物（15）



写真図版46　出土遺物（16）

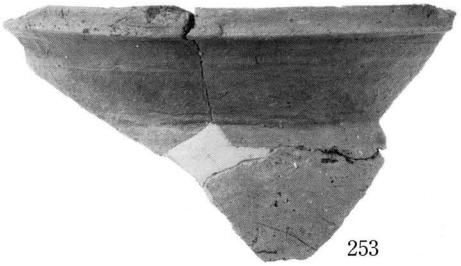
247


249


248

250

251


253

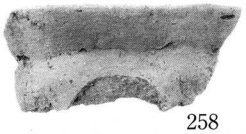
252

254

255

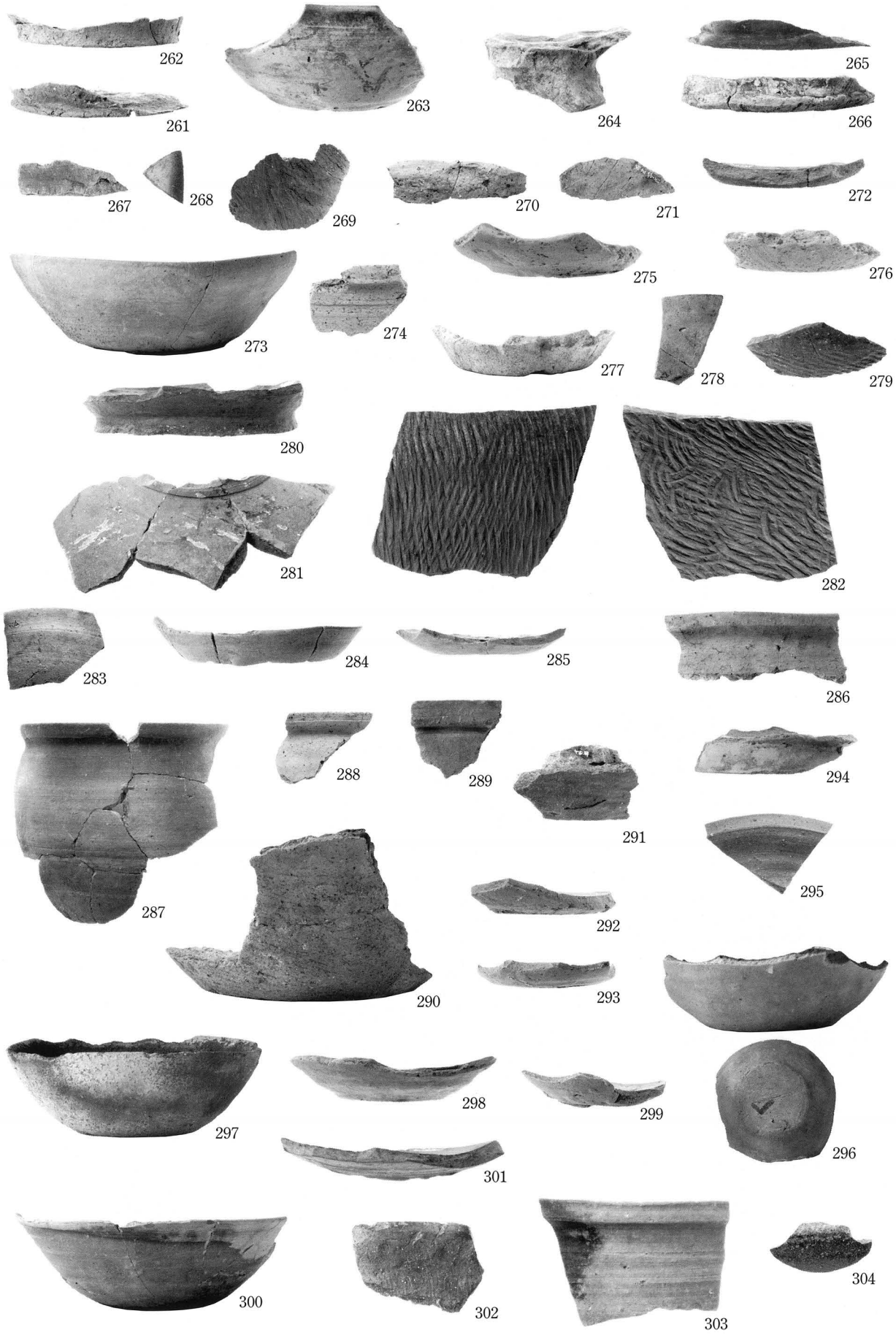
256

257


258

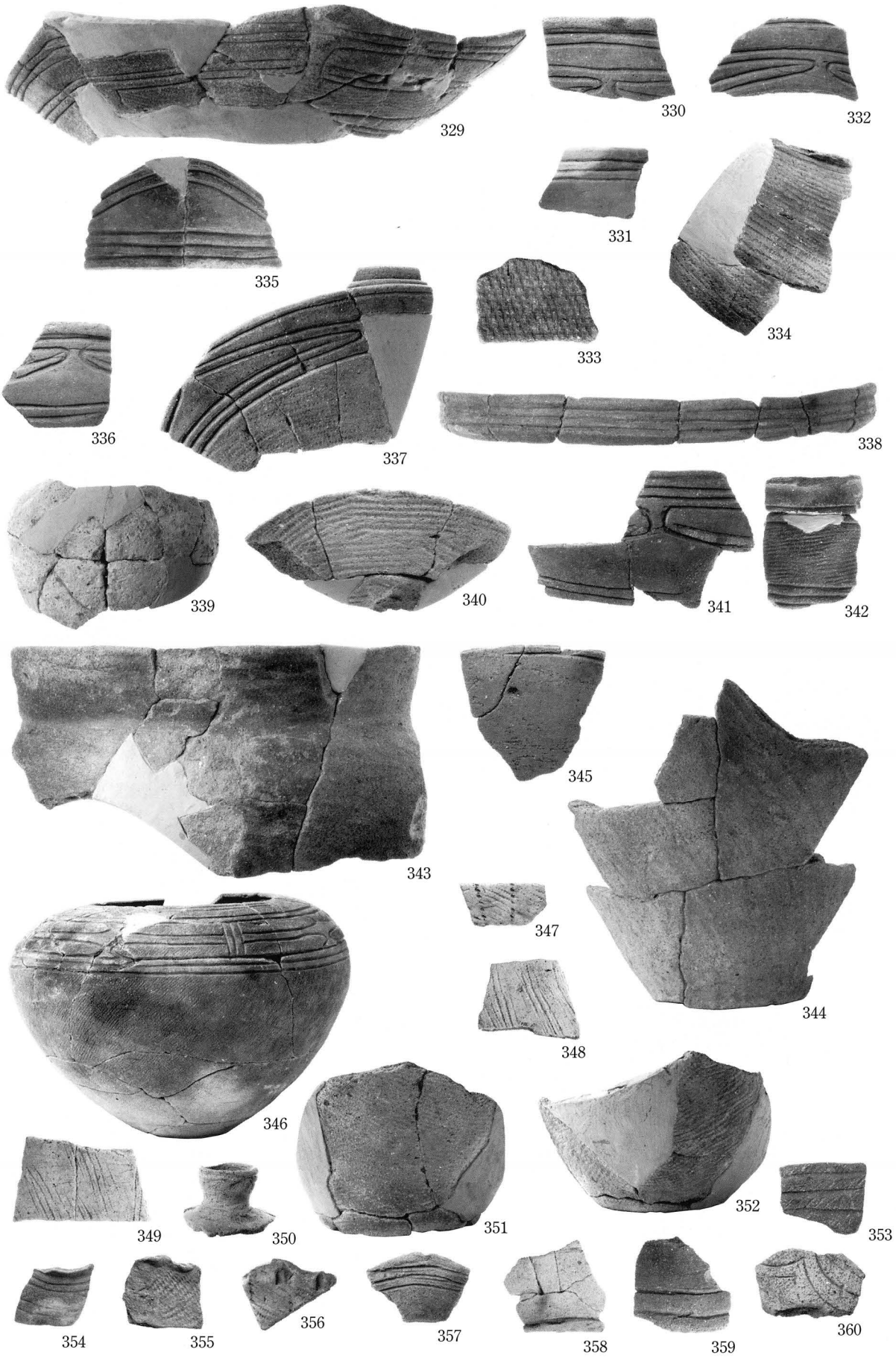
259

写真図版47　出土遺物（17）

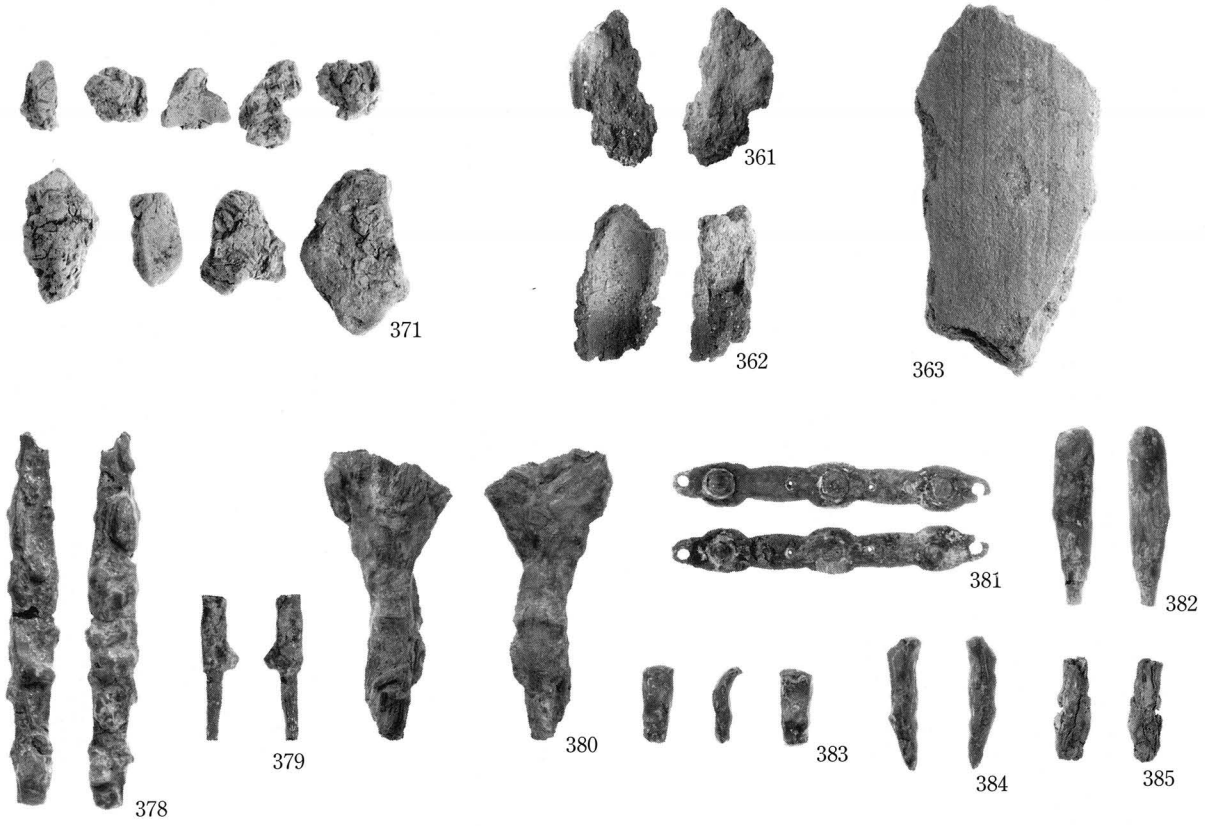


写真図版48　出土遺物（18）

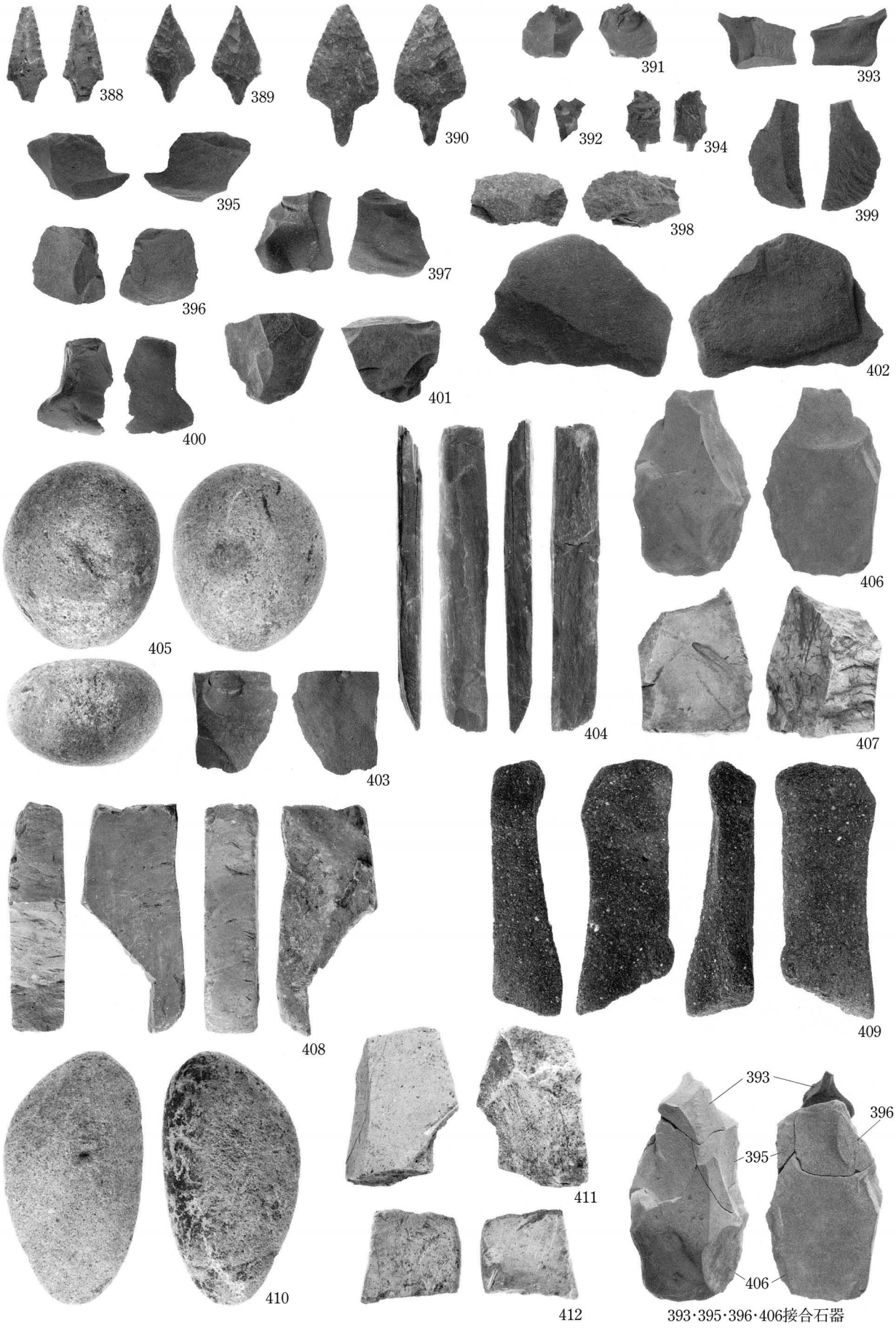
写真図版49　出土遺物（19）



写真図版50　出土遺物（20）



写真図版51　出土遺物（21）



写真図版52　出土遺物（22）

報告書抄録

ふりがな	はぐろたいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	羽黒田遺跡発掘調査報告書
副書名	東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業関連遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第548集
編著者名	村上　拓・中村絵美
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地　TEL（019）638－9001
発行年月日	2010年2月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
羽黒田遺跡	岩手県花巻市東和町安俵11区189－1ほか	03205	ME38-0210	39度 22分 39秒	141度 13分 19秒	2008.07.14 ～ 2008.12.05	8,062㎡	東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
羽黒田遺跡	集落跡	平安時代 （9～10世紀）	竪穴住居跡18棟 竪穴状遺構１基 土坑６基 （うち４基は土器焼成関連か） 溝跡３条	土師器（坏・甕） 須恵器 木製品 鉄製品 布	把手付き等、特殊器形の土器出土。 土器焼成関連とみられる土坑を複数検出。 竪穴状遺構から布片出土。

要約	９～10世紀の集落跡である。大半が焼失住居。把手付き土器等、特殊器形の土器が出土。居住域の一角から土器焼成関連とみられる土坑を複数検出。また竪穴状遺構から麻布片が出土した。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第548集

羽黒田遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道釜石秋田線（遠野～東和間）新直轄事業関連遺跡発掘調査

印　刷　平成22年２月22日
発　行　平成22年２月25日

編　集　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電　話　(019)638－9001

発　行　国道交通省東北地方整備局岩手河川国道事務所
〒020-0066　岩手県盛岡市上田四丁目2-2
電　話　(019)624－3131

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023　岩手県盛岡市内丸13番1号
電　話　(019)654－2235

印　刷　株式会社　阿部印刷
〒020-0873　岩手県盛岡市松尾町2-2
電　話　(019)624－2242

©(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2010